埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第151集

深谷市

前（まえ）・居立（いだて）

一般国道17号上武道路関係埋蔵文化財発掘調査報告

－Ⅲ－

（第２分冊）

１９９５

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

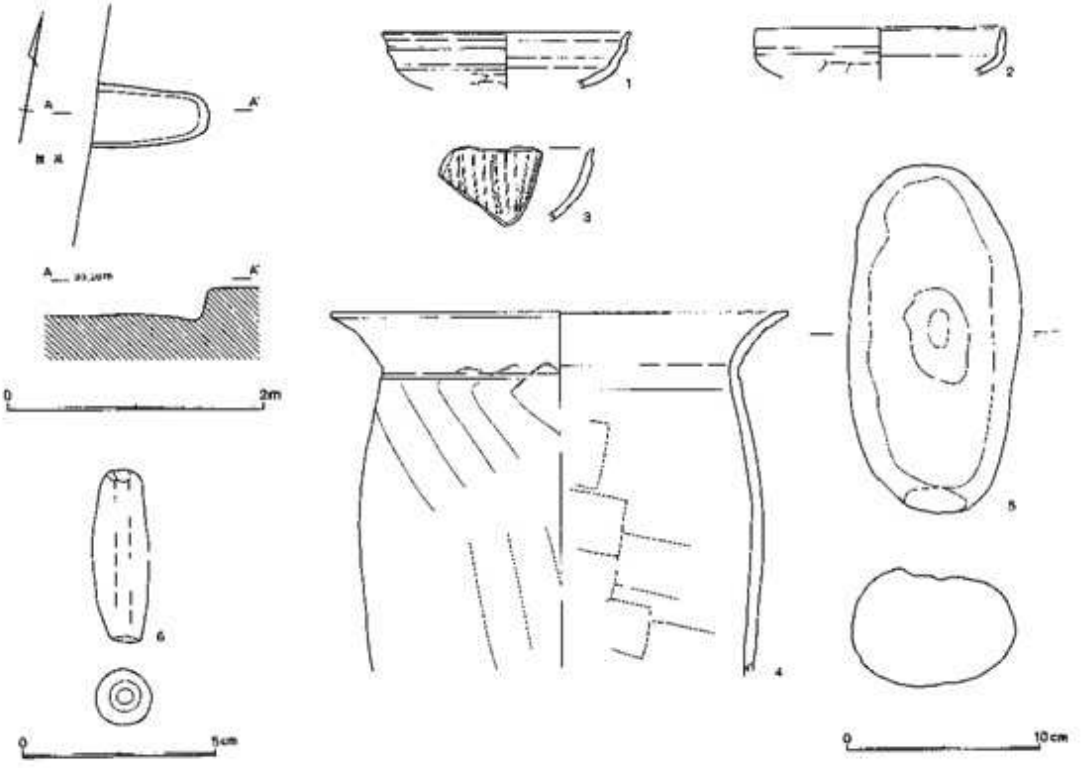
目　　次

序
例言
凡例
Ⅰ　発掘調査の概要……1
1　調査に至るまでの経過……1
2　発掘調査の組織……2
3　調査の経過……3
Ⅱ　遺跡の立地と環境……5
1　立地と周辺遺跡……5
2　居立遺跡の噴砂について……9
Ⅲ　前遺跡の調査……11
1　遺跡の概要……11
2　検出された遺構と遺物……14
Ⅳ　居立遺跡の調査……75
1　遺跡の概要……75
2　検出された遺構と遺物……80
Ⅴ　調査のまとめ……429
附篇……455

第78号住居跡（第269図）

す－4－20グリッドを中心に位置する。カマド煙道部の先端と思われる部分を検出しただけで、他は攪乱によって壊されている。従って形態、規模は不明とせざるを得ない。カマドはその方向から東壁に設置されていたのだろう。覆土は焼土粒子を含む暗褐色土であった。

出土遺物は、検出部がごく僅かであるにしては比較的多く、図示したもの以外にも土師器坏・甕・支脚片と思われる土製品、須恵器の甕片などが見られる。



第269図　第78号住居跡・出土遺物

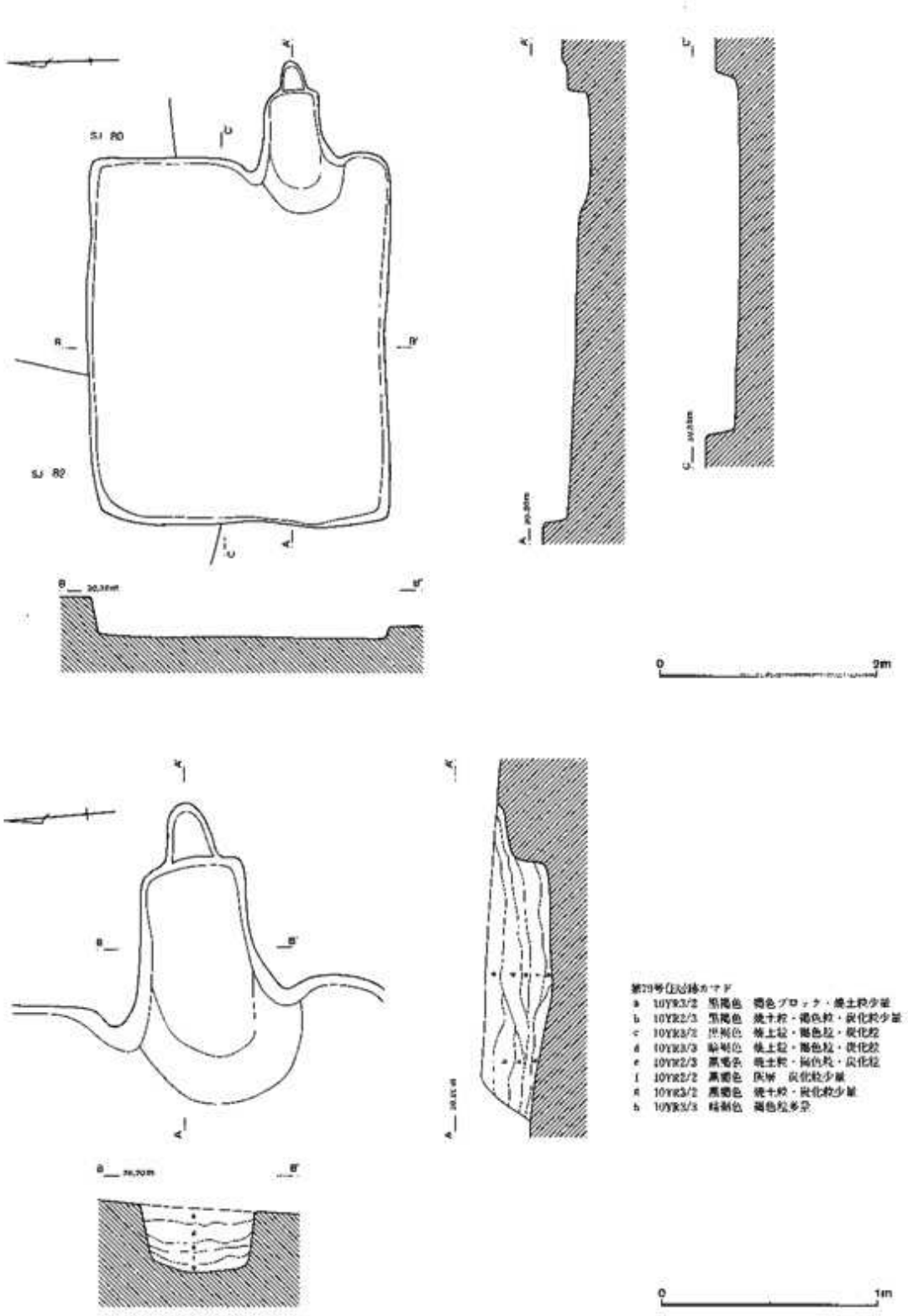
第78号住居跡出土遺物観察表（第269図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.8)	2.9		W'B'W	B	黄い黄橙	10%	覆土 内外面磨耗著しい
2	坏	(13.0)	2.5		B'W'W	B	灰黄褐	10%	覆土
3	坏				W'B'W	B	明赤褐		覆土 放射状暗文
4	甕	(23.8)	18.4		B'WW'R	B	灰黄褐	45%	覆土 SJ85と接合
5	凹み石状石製品		覆土	長さ17.9cm 幅9.0cm 厚さ6.1cm 重量575g 角閃石安山岩製					
6	土錘		覆土		BB'W'W		明黄褐	100%	長4.5cm 径1.5cm 孔0.4cm 重8.82g

第79号住居跡（第270図）

す－4－18グリッドを中心に位置する。第80・82号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。形態は東西に長い長方形で、規模は長軸3.36m、短軸2.76m、深さ0.26～0.34mである。主軸方位はS－89°－Eを指す。

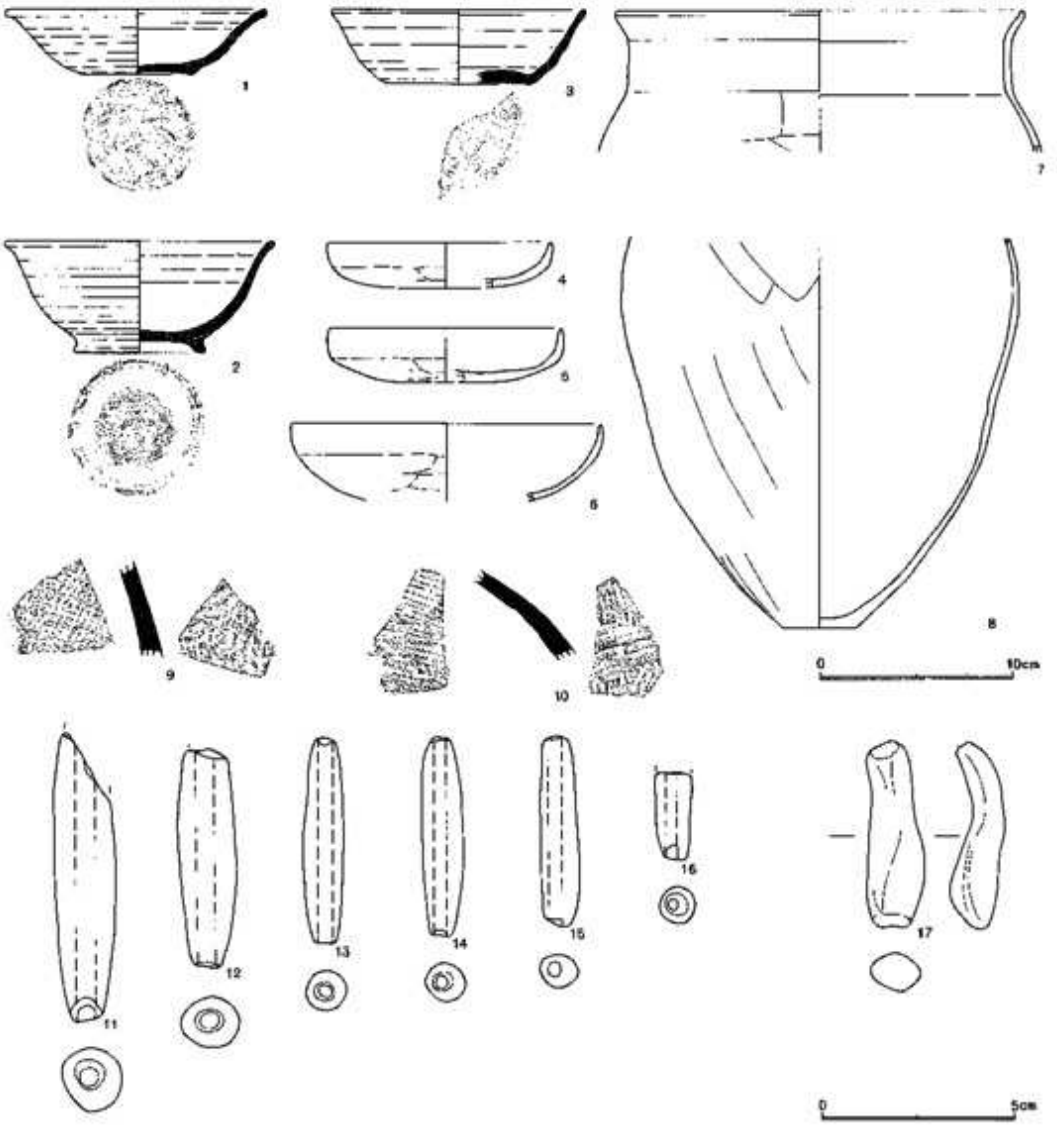
床面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土の状態は不明である。



第270図　第79号住居跡

カマドは東壁の南寄りに設置される。燃焼部は床面を12cm程掘り込み、下層近くに灰層が厚く堆積していた。燃焼部奥壁は垂直に立ち上がり、短い煙道へ続く。両袖は地山を残して構築されているが、あまり明瞭ではない。貯蔵穴、ピット、壁溝は検出されていない。

出土遺物はやや多めに見られるが、他の遺構からの混入が多く接合率は極めて悪い。



第271図　第79号住居跡出土遺物

第79号住居跡出土遺物観察表（第271図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	13.2	3.4	5.8	SW	C	灰	70%	覆土 底部回転糸切り 末野産か
2	高台坏	(13.5)	5.8	6.8	SWB	A	灰	40%	覆土 底部回転糸切り 末野産か
3	坏	(13.0)	3.9	(7.5)	W	A	灰	30%	覆土 南比企産 底部回転糸切り
4	坏	(11.6)	2.3		W'WB'	B	浅黄橙	25%	覆土 内外面磨耗著しい
5	坏	(12.0)	2.9		W'BB'W	B	鈍い橙	20%	覆土 内外面磨耗著しい

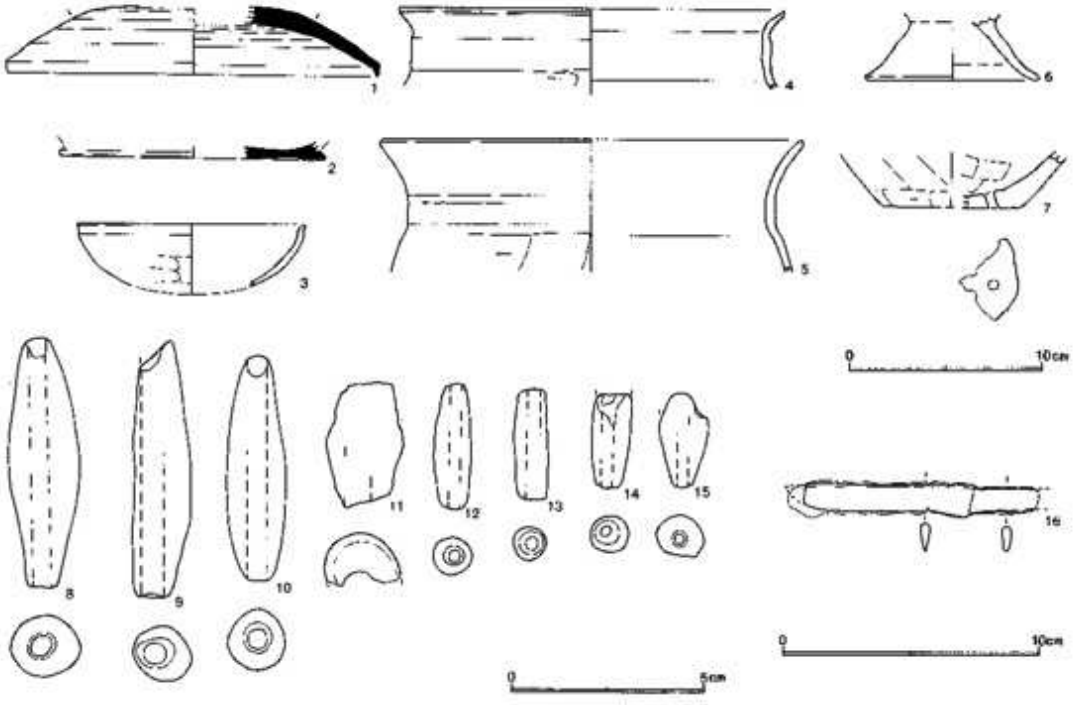
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
6	坏	(16.0)	4.0		B'BW'W	B	橙	15%	覆土 内外面磨耗著しい
7	甕	(21.0)	7.2		W'BWR		淺黄橙	10%	覆土 内外面磨耗著しい
8	甕		22.0	(3.7)	W'RW	C	鈍い橙	20%	覆土
9	甕				WB	A	灰		覆土
10	甕				BW	A	灰白		覆土
11	土錘		覆土		BW'W		褐灰		残7.5cm 径1.6cm 孔0.5cm 重17.48g
12	土錘		覆土		SW'		鈍い赤褐		残5.7cm 径1.5cm 孔0.5cm 重10.35g
13	土錘		覆土		BB'WW'		淺黄橙	100%	長5.3cm 径1.1cm 孔0.4cm 重5.38g
14	土錘		覆土		BW'W		鈍い黄橙	100%	長5.2cm 径1.1cm 孔0.4cm 重5.38g
15	土錘		覆土		SBW'B'		鈍い褐		長5.0cm 径1.1cm 孔0.4cm 重4.82g
16	土錘		覆土		B'B		鈍い黄橙		残2.3cm 径1.0cm 孔0.3cm 重2.04g
17	棒状土製品		覆土		WBW'		鈍い橙		長さ4.8cm 幅0.9cm 重量6.90g

第80号住居跡（第273図）

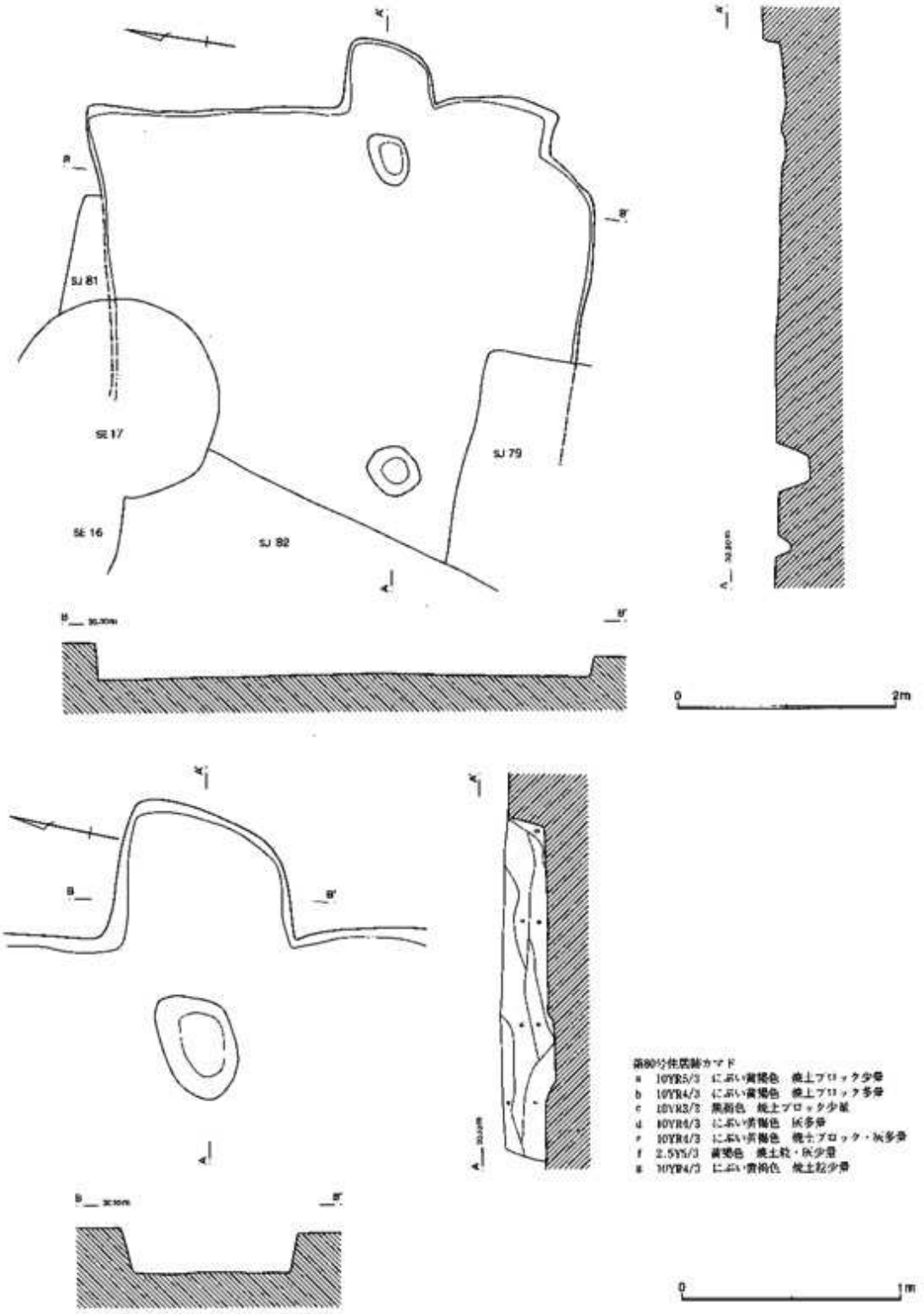
す－4－23グリッドを中心に位置する。第82号住居跡を切り、第79・81号住居跡、第16・17号井戸跡に切られる。西壁は第82号住居跡と同時に調査したため確認できなかった。形態は長方形となるものと思われ、残存規模は東西4.50m、南北4.18m、深さ0.12～0.32mである。主軸方位はN－80°－Eを指す。

床面は緩やかな起伏を持ち、壁は垂直に立ち上がる。覆土の状態は不明である。南東コーナーは一度屈曲した後更に南に広がる形となっている。

カマドは東壁の南寄りに設置されるが、遺存状態は悪い。燃焼部と思われる付近に34cm×44cm、深さ6cm程のピットが検出されている。袖は認められなかった。ピットは1本検出されが、柱穴か



第272図　第80号住居跡出土遺物



第273図　第80号住居跡

どうかの判断はできなかった。

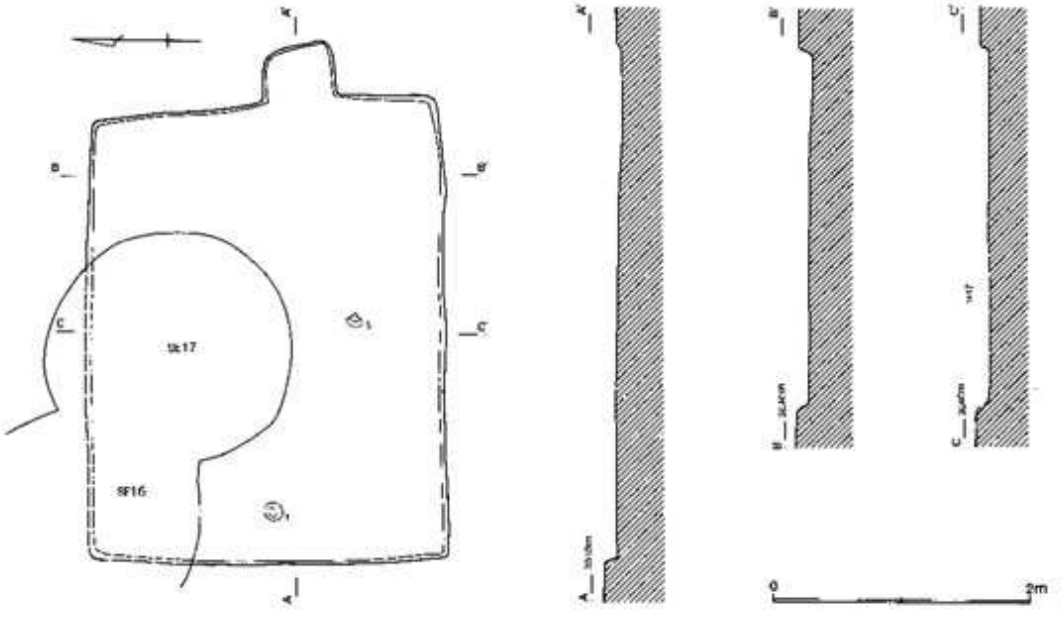
遺物は全て覆土からの出土で、やや多めだが、接合率は悪い。16は鉄製の刀子である。両端は欠損しており、両関、背は丸みを帯び鈍い作りである。

第80号住居跡出土遺物観察表（第272図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(19.2)	3.5		WW'B	A	灰白	15%	覆土
2	壺か		0.9	(13.5)	WW'	A	灰白	20%	覆土 内外面磨耗著しい
3	坏	(11.6)	3.2		WW'B'BR	B	橙	10%	覆土 内外面磨耗著しい
4	甕	(19.9)	4.2		W'WB'R	B	鈍い橙	10%	覆土 口縁端部やや磨耗
5	甕	(21.7)	6.8		WW'B'R	B	橙	20%	カマド
6	台付甕		3.4	(8.8)	B'W'WR	A	橙	40%	覆土
7	甑		2.9	(7.0)	B'W'WRB	A	鈍い橙	20%	覆土
8	土錘	覆土			WW'		橙	100%	長6.6cm 径1.8cm 孔0.5cm 重15.57g
9	土錘	覆土			RBWW'		明赤褐		残6.7cm 径1.5cm 孔0.6cm 重11.99g
10	土錘	覆土			WBRW'		鈍い黄橙	100%	長5.8cm 径1.6cm 孔0.6cm 重13.60g
11	土錘	覆土			WW'		黒		残3.3cm 径2.0cm 重7.40g
12	土錘	覆土			RW'W		橙	100%	長3.2cm 径1.0cm 孔0.3cm 重3.14g
13	土錘	覆土			WW'		鈍い黄橙	100%	長2.9cm 径0.9cm 孔0.4cm 重2.45g
14	土錘	覆土			WW'		褐灰		残2.5cm 径1.0cm 孔0.3cm 重2.31g
15	土錘	覆土			WB'		浅黄橙		長2.5cm 径1.3cm 孔0.3cm 重1.84g
16	刀子	覆土	残長9.7cm 重量14.14g 両端欠損 両関						

第81号住居跡（第274図）

す－4－23グリッドを中心に位置する。第80・82号住居跡を切り、第16・17号井戸跡に切られる。形態は東西に長い長方形で、規模は長軸3.62m、短軸2.78mで、深さは0.04～0.10mと浅い。主軸方位はN－89°－Eを指す。

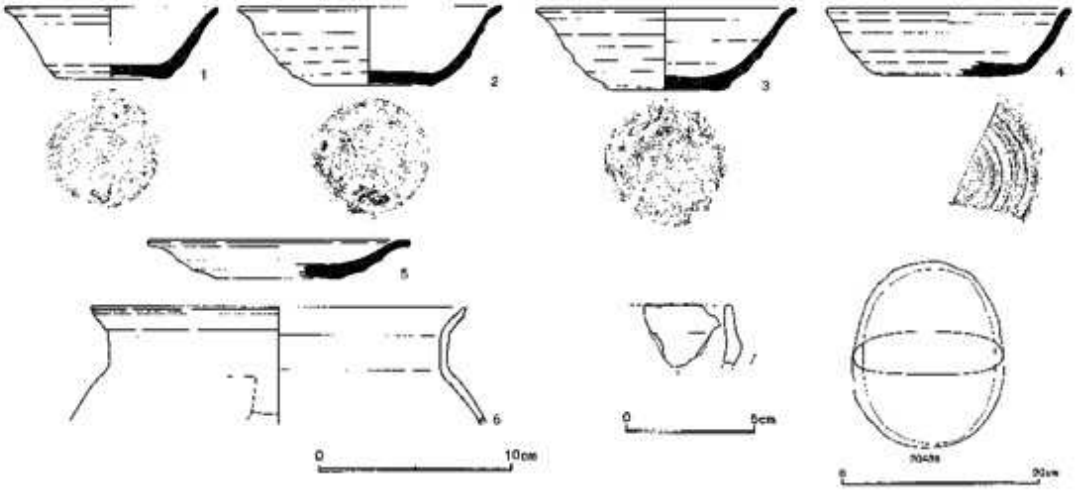


第274図　第81号住居跡

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ち上がる。深度が浅いため覆土の状態は不明である。

カマドは東壁中央より南寄りに設置される。燃焼部の掘り込みは見られず、壁外に出る。袖は検出されておらず、覆土の観察もできなかった。貯蔵穴、ピット、壁溝は検出されなかった。

出土遺物はあまり多くなく、図示できなかったもののなかに灰釉陶器の細片が2片見られる。7は板状の鉄製品で、使途は不明である。丸い偏平な石は北東コーナー付近から出土している。



第275図　第81号住居跡出土遺物

第81号住居跡出土遺物観察表（第275図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	10.8	3.7	5.8	B'W'W	B	浅黄橙	100%	No1 覆土(+6.8cm) 酸化焔焼成
2	坏	13.6	4.1	6.1	SW'W	B	灰白	60%	覆土 一部にぶい橙色 末野産か
3	坏	13.0	4.2	6.4	SWW'B'	A	灰白	65%	No2 覆土(+3.0cm) 末野産か
4	坏	(12.4)	3.5	6.8	WSW'B'	A	灰	15%	覆土 外面口縁部周辺自然釉混入か
5	皿	(13.6)	2.0	6.0	WW'S	B	灰	20%	覆土 末野産か
6	甕	(19.4)	6.0		W'WB'	B	灰褐	15%	カマド
7	板状鉄製品		覆土	重量9.29g					

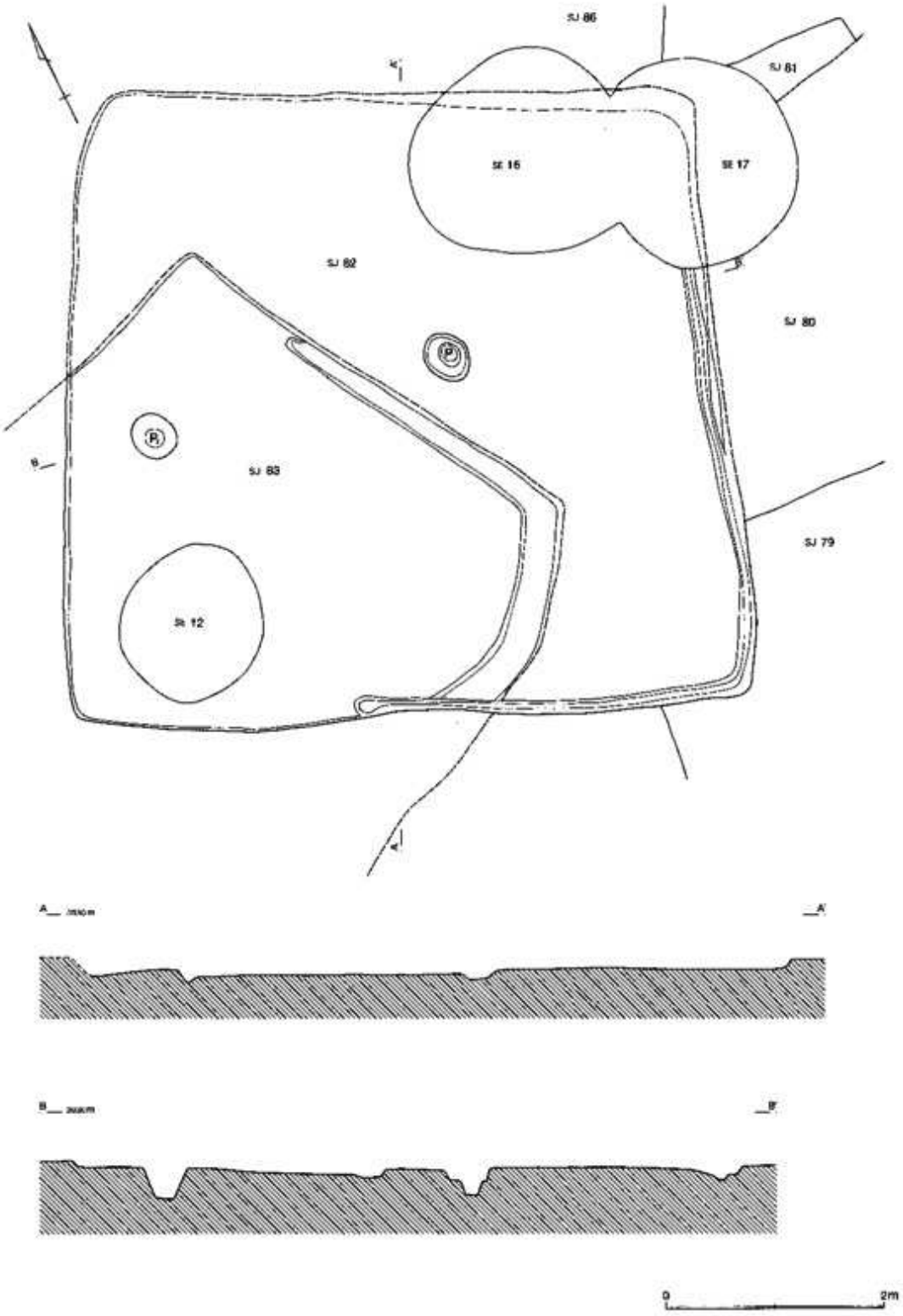
第82号住居跡（第276図）

す－4－24グリッドを中心に位置する。他の遺構との重複が激しく、第79～81・83～86号住居跡、第12・16・17号井戸跡と重複し、本住居跡が最も旧いと思われる。形態は方形で、規模は長軸6.36m、短軸5.62m、深さ0.24～0.32mである。主軸方位はN－22°－Eを指す。

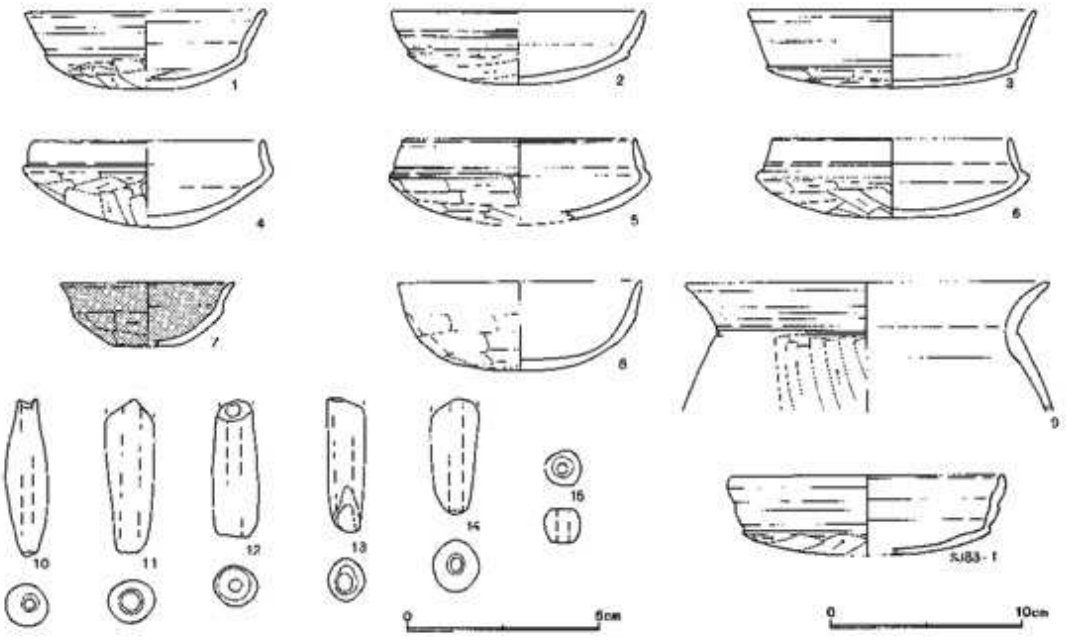
床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ち上がる。覆土の状態は不明である。

カマドは検出されていない。ピットは2本検出されているが、P1が本住居跡に伴うものであろう。壁溝は東壁から南壁にかけて検出され、幅12～24cm、深さ3～6cmを測る。

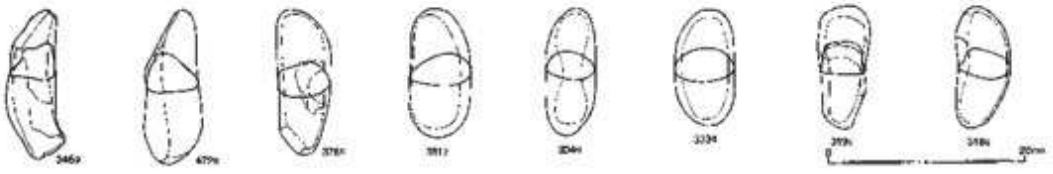
出土遺物はあまり多くないが、他遺構との重複が激しいことからも混入があると思われる。出土土器は大半が土師器で、坏・甕が見られる。須恵器は甕の胴部と思われる小片が1片あるだけである。図示できなかったもののなかに放射状暗文のついた小片が1片見られる。



第276図　第82・83号住居跡



第277図　第82・83号住居跡出土遺物



第278図　第82号住居跡出土遺物

第82号住居跡出土遺物観察表（第277図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.4)	4.0		B'W'WRB	A	橙	50%	覆土
2	坏	13.0	3.8		B'BWW'R	B	橙	90%	覆土 内面磨耗著しい
3	坏	(14.7)	4.0		W'B'WR	C	鈍い橙	50%	覆土
4	坏	11.8	4.4		B'W'RWB	A	橙	100%	覆土
5	坏	(12.1)	4.2		B'RWW'B	C	鈍い橙	70%	覆土 内面体部やや磨耗
6	坏	(12.2)	4.1		B'W'WRB	C	鈍い黄橙	55%	覆土 内面やや磨耗
7	小形鉢	(9.0)	3.3		BB'SWW'R	B	浅黄橙	25%	PNo1 内外面の一部に赤彩残る
8	坏	12.5	4.6		WW'BB'	B	橙	100%	覆土 内外面磨耗著しい
9	甕	(18.6)	6.7		WW'BB'R	B	橙	20%	覆土
10	土錘	覆土			B'S		浅黄橙	100%	長4.1cm 径1.1cm 孔0.3cm 重3.90g
11	土錘	覆土			B3B'W		明黄褐		残4.0cm 径1.2cm 孔0.5cm 重5.00g
12	土錘	覆土			WW'B		橙		残3.6cm 径1.2cm 孔0.4cm 重4.99g
13	土錘	覆土			WW'B		灰褐		残3.5cm 径1.0cm 孔0.5cm 重2.82g
14	土錘	覆土			BW'		鈍い黄橙		残3.0cm 径1.4cm 孔0.4cm 重3.95g
15	丸玉	覆土		直径9.0mm 厚さ9.0mm 重量0.96g 滑石製 両端（孔の周囲）に平坦面					

第83号住居跡（第276図）

す－4－24グリッドを中心に位置する。第82号住居跡を切り、第12号井戸跡に切られる。西に向うに従って深度がなくなり、壁が不明瞭になる。この部分に第85号住居跡が乗っている。残存規模

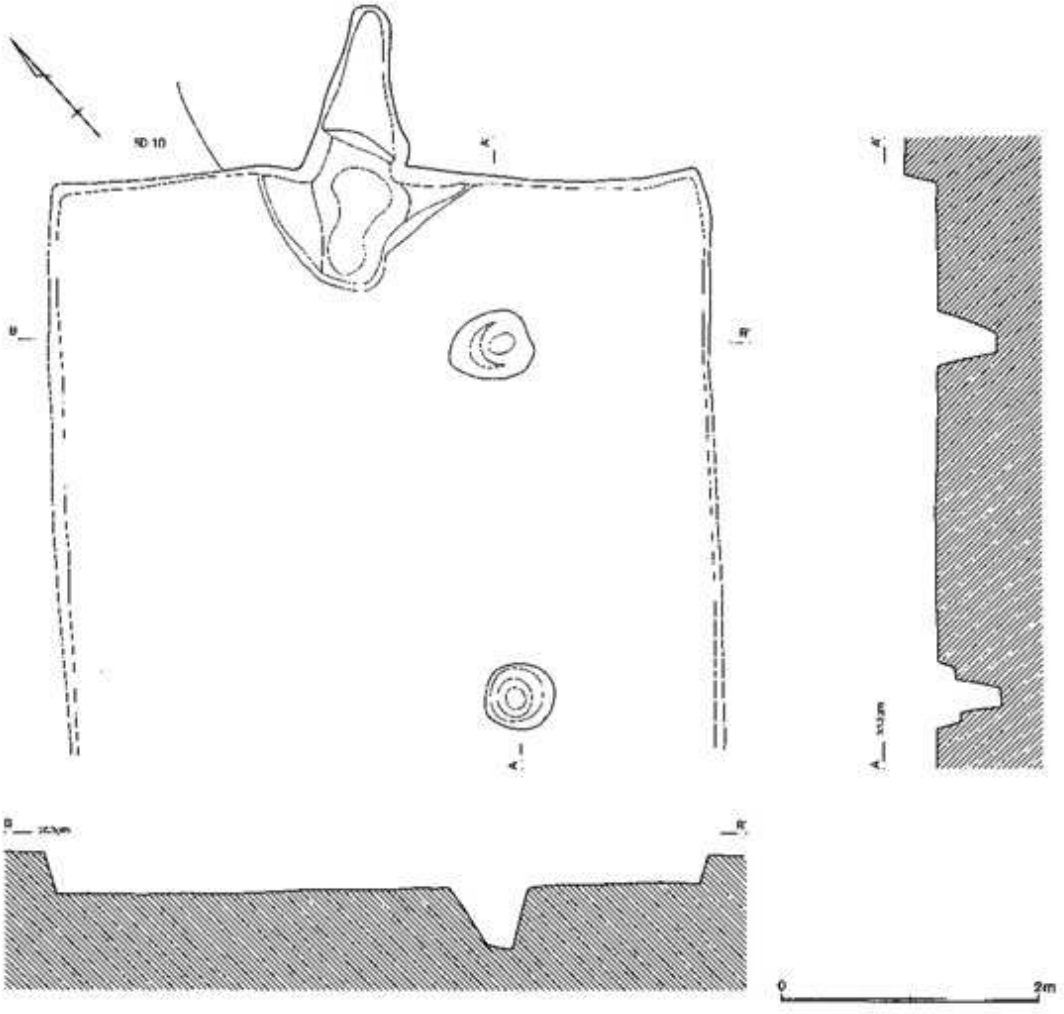
は東壁が4.18m、南壁が2.12mで、深さは0.10～0.26mである。主軸方位は東壁を基準とするとN－32°－Wとなる。

床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ち上がる。カマド、貯蔵穴は検出されていない。ピットはP2が本住居跡に伴うものだろう。壁溝の幅は18～38cmと広めだが、深さは2～4cmと浅い。

遺物は少なく、図示できたのは土師器坏1個のみである。推定口径14.1cm、にぶい黄橙を示し、55%の残存で、焼成はやや悪い。この他にはS字状口縁を持つと思われる台付甕の脚部片や、放射状暗文が施された細片・須恵器甕片等、時期的にも様々な土器が出土している。周辺の遺構の影響が大きいと考えられる。

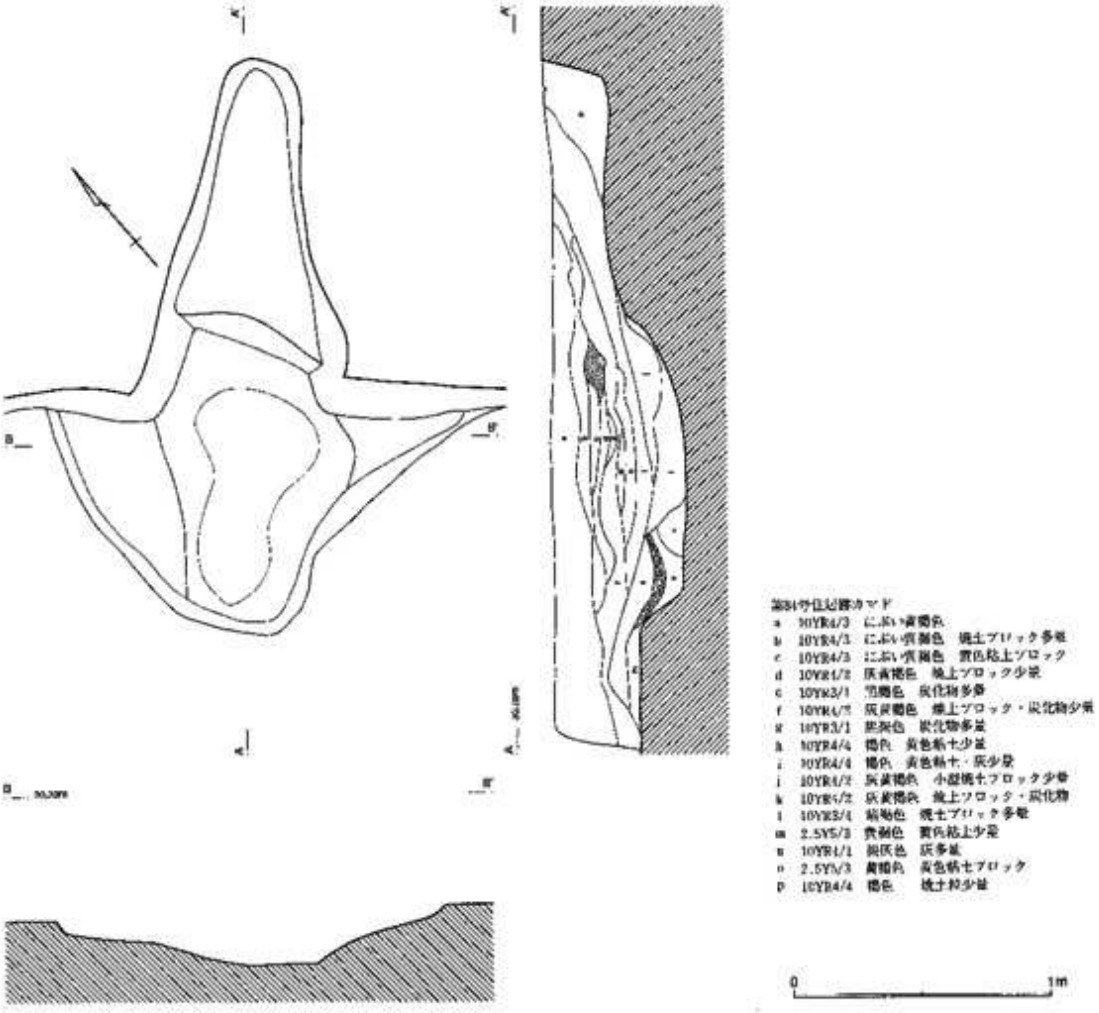
第84号住居跡（第279・280図）

せ－4－4グリッドを中心に位置する。第82・86号住居跡を切り、第10号溝跡に切られる。南西側は深度が浅くなり、立ち上がりは見られなくなっている。形態は方形になると思われ、残存規模は北東側の壁が5.16m、北西側が4.48m、深さ0～0.34mで、主軸方位はN－41°－Eを指す。



第279図　第84号住居跡

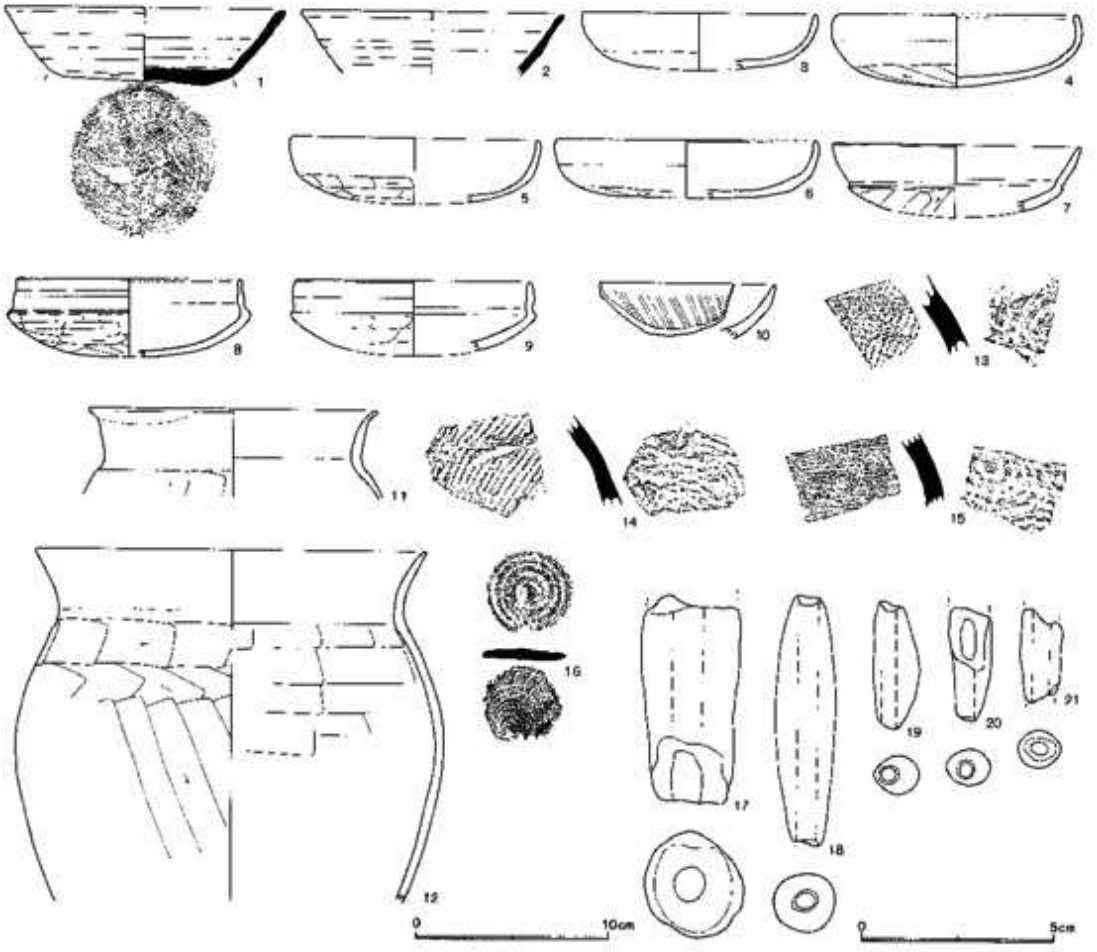
床面は平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。カマドは北東側の壁中央に設置される。燃焼部は床面を20cm程度掘り込み、緩やかに立ち上がって煙道へ続く。本来袖があるところも5～10cm掘り込まれている。粘土で構築された袖が流れ出てしまった跡か。貯蔵穴は検出されていない。ピットは2本検出され、共に柱穴と考えられる。出土遺物はやや多めに見られるが、接合率が悪い。図示できなかったが、貝巣穴痕泥岩が3個出土している。



第280図　第84号住居跡カマド

第84号住居跡出土遺物観察表（第281図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	14.4	4.0	7.3	WB	B	オリーブ黒	65%	覆土 底部に「一」 南比企産
2	坏	(13.5)	3.2		WW'BR	A	灰	25%	覆土
3	坏	(12.0)	3.1		B'WW'	A	鈍い橙	20%	カマド 内外面磨耗著しい
4	坏	(12.4)	3.9		B'W'W	A	橙	70%	覆土 内外面磨耗著しい
5	坏	(12.6)	3.2		B'W'W	B	鈍い橙	35%	PNo1 内面やや磨耗
6	坏	(13.6)	2.6		B'W'W	A	橙	40%	覆土 内外面やや磨耗
7	坏	(12.8)	3.4		B'W'WR	A	橙	25%	覆土 内面口縁端部やや磨耗
8	坏	(11.5)	4.0		B'W'WR	B	橙	80%	覆土 SJ95と接合



第281図　第84号住居跡出土遺物

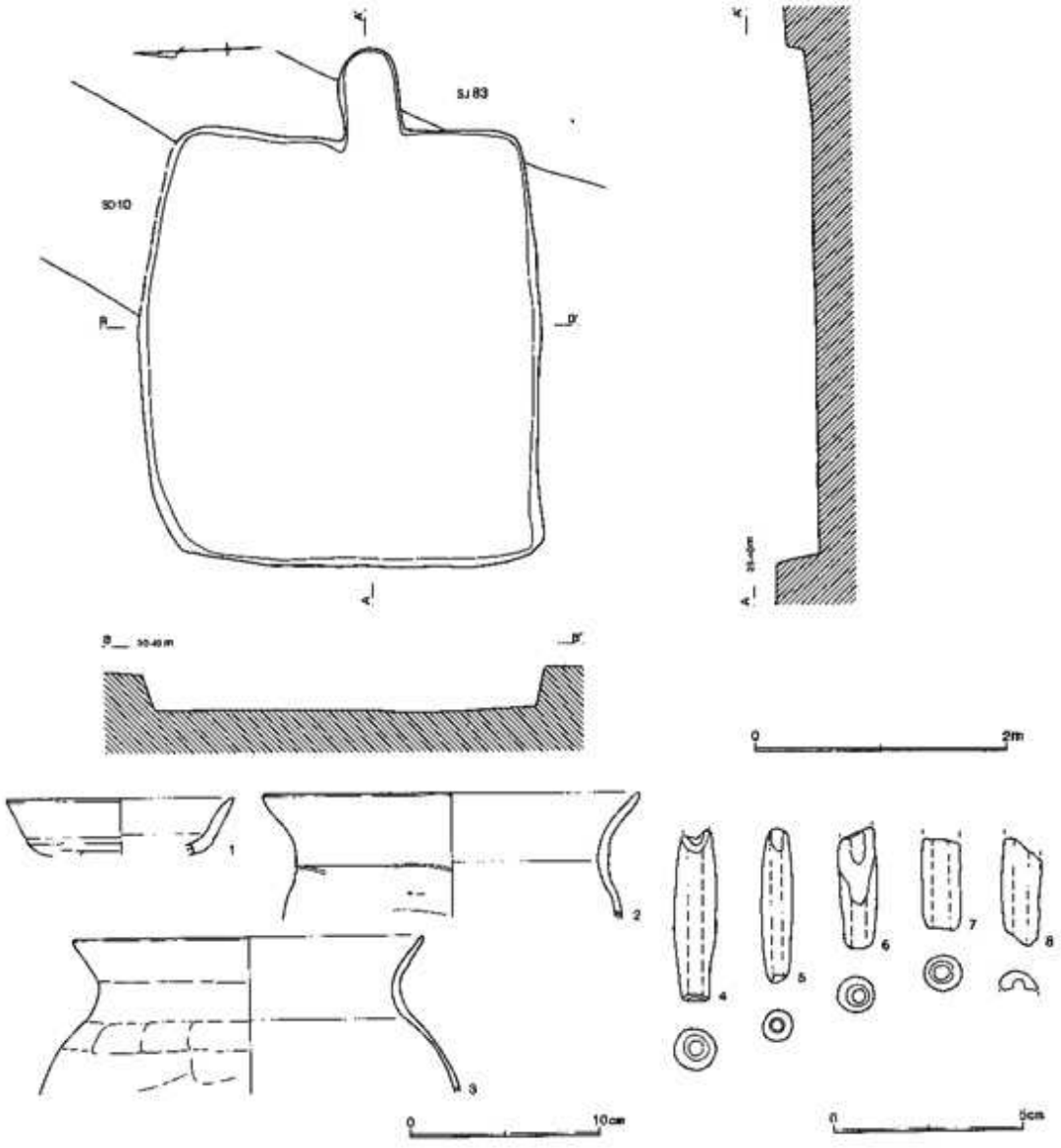
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
9	坏	(12.1)	3.6		B'RWW'	B	橙	15%	覆土 内外面磨耗著しい
10	坏				B'W'WR	A	橙		覆土 放射状暗文
11	甕	(14.9)	4.5		WW'B'B	B	橙	20%	覆土 内面磨耗著しい
12	甕	(20.3)	18.1		WBW'B'R	B	橙	30%	カマド 覆土
13	甕				WW'	A	灰		覆土 外面叩き目 内面青海波文
14	甕				WW'BB'	A	灰黄		覆土 外面叩き目 内面青海波文
15	甕				W	A	灰		覆土
16	坏				B'WW'R	B	黄い橙		覆土 底部回転糸切り 酸化焔焼成
17	土錘	覆土			WW'		橙		残5.4cm 径2.7cm 孔0.8cm 重33.14g
18	土錘	覆土			BWW'		灰黄褐	100%	長6.5cm 径1.6cm 孔0.5cm 重14.01g
19	土錘	覆土			RWW'		明赤褐		長3.4cm 径1.2cm 孔0.4cm 重3.56g
20	土錘	覆土			BW'		灰黄褐		残3.0cm 径1.1cm 孔0.4cm 重2.30g
21	土錘	覆土			BS		浅黄橙		残2.4cm 径1.1cm 孔0.5cm 重2.16g

第85号住居跡（第282図）

す－4－25グリッドを中心に位置する。第82・83号住居跡を切り、第10号溝跡に切られる。形態はやや東西に長い長方形で、規模は長軸3.42m、短軸3.12m、深さ0.19～0.35mである。主軸方位

はS－89°－Eを指す。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土の観察はできなかった。



第282図　第85号住居跡・出土遺物

第85号住居跡出土遺物観察表（第282図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	11.9	3.0		B'W'W	B	橙	15%	覆土 内外面磨耗著しい 内面色調褐灰
2	甕	(19.8)	6.6		W'WB	B	橙	15%	覆土 内外面磨耗著しい
3	甕	(18.3)	8.2		WW'B'	B	鈍い橙	20%	覆土 内外面やや磨耗 胎土緻密
4	土錘	覆土			WW'B		鈍い赤褐		残4.5cm 径1.1cm 孔0.4cm 重5.08g
5	土錘	覆土			BW'B'		浅黄橙		長4.1cm 径0.8cm 孔0.3cm 重2.51g
6	土錘	覆土			WB		褐		残3.2cm 径1.0cm 孔0.4cm 重2.80g
7	土錘	覆土			BB'W'		明黄褐		残2.5cm 径1.0cm 孔0.5cm 重2.21g
8	土錘	覆土			WW'		黒褐		残2.9cm 径1.1cm 重1.30g

カマドは東壁中央よりやや南に設置される。燃焼部の掘り込みは見られず、袖も検出されていない。貯蔵穴、ピット、壁溝は見られなかった。

出土遺物は他の遺構からの混入もあり、やや多く見られるが、接合率は極めて悪い。土師器坏・甕・須恵器高台坏・甕等の他、土錘5・貝巣穴痕泥岩1が認められる。

第86号住居跡（第284図）

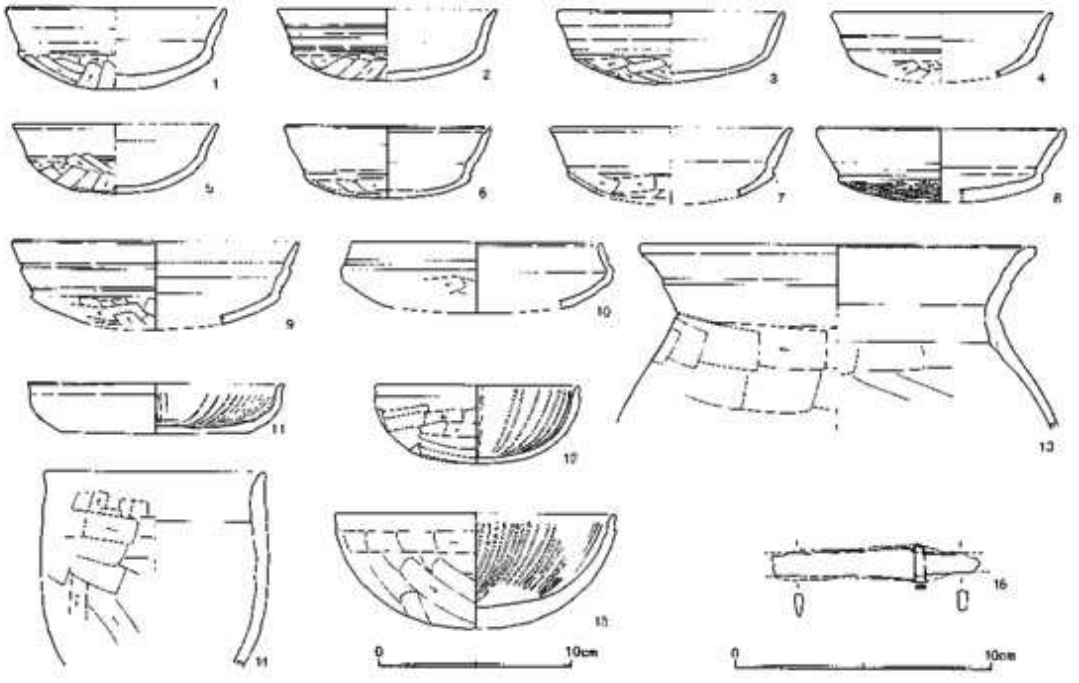
せ－4－3グリッドを中心に位置する。他の遺構との重複が激しく、第82号住居跡を切り、第84・87号住居跡、第10号溝跡、第16・17・24号井戸跡、第11号土壙に切られる。形態は方形であろうか。残存規模は北東側4.52m、南西側5.18mで、遺構確認面からの深さは0.26～0.30mとなっている。主軸方位はN－30°－Eを指す。

床面にはやや起伏が見られ、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は6層に分けられるが、周辺を他の遺構に切られており堆積状況は不明な点が多い。カマド前面に小さな噴砂が走る。

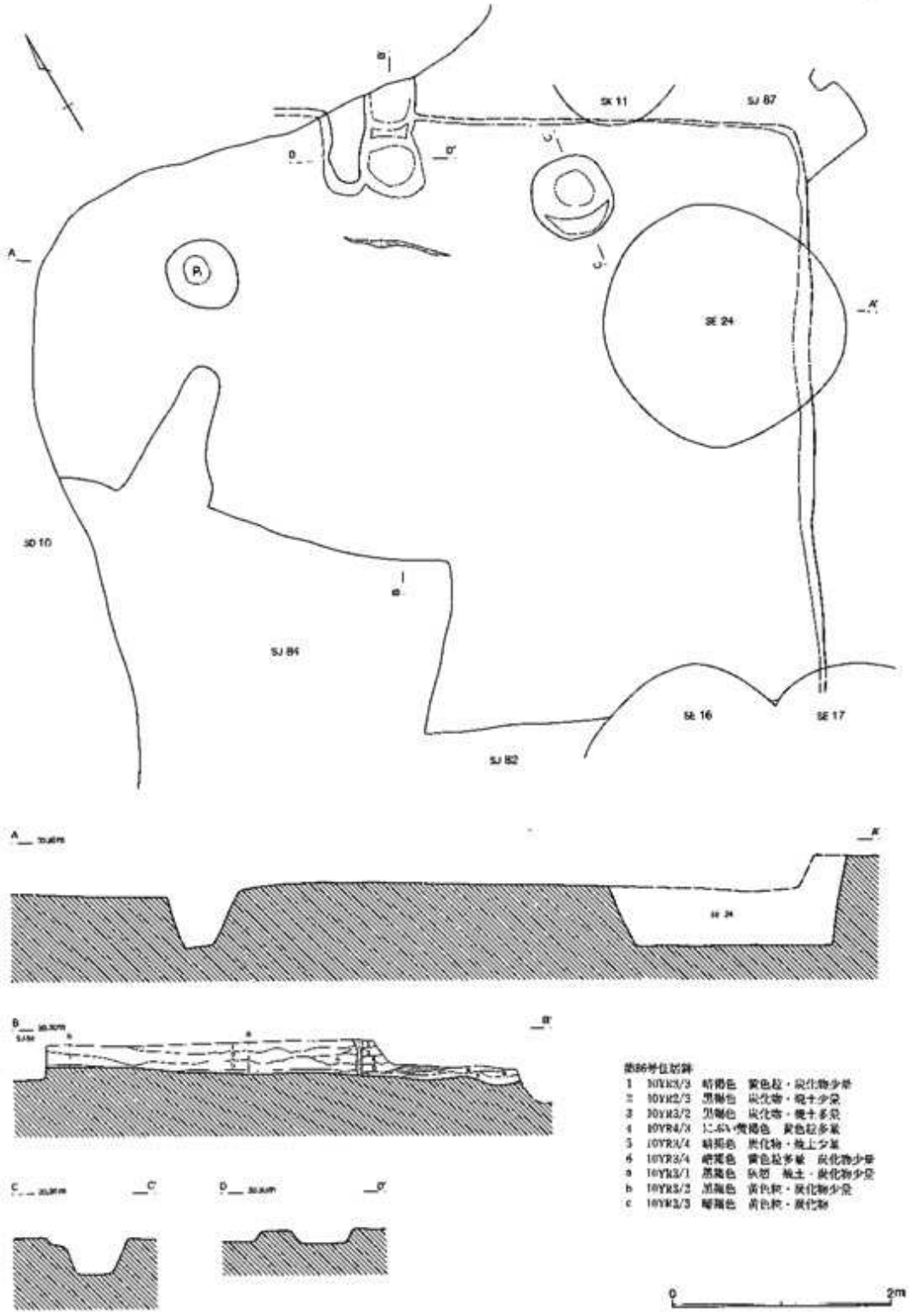
カマドは北東側の壁に設置される。煙道先端を第10号溝跡に切られている。燃焼部は8cm程掘り窪められ皿状になっている。右袖は不明瞭だが床面自体が高くなっている。

貯蔵穴はカマド右側に位置し、直径約74cmの円形で、深さは35cmを測る。ピットは1本検出され、柱穴とも考えられる。

遺物は全て覆土からの出土で、須恵器は坏の小片が1片見られたのみで大半が土師器である。量的にはやや多めだが、他の遺構からの混入もあり、接合率は極めて悪い。出土土器は坏・甕・椀・壺等が認められ、近世陶器類も混入していた。16は鉄製の刀子で、両端を欠損している。



第283図　第86号住居跡出土遺物



第284図　第86号住居跡

第86号住居跡出土遺物観察表（第283図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.2)	4.2		B'W'WR	A	橙	40%	覆土 内面磨耗著しい
2	坏	11.2	3.7		B'WW'	B	橙	85%	覆土
3	坏	11.6	3.7		W'B'RW	B	黄橙	100%	覆土
4	坏	(11.9)	3.3		B'W'W	B	黄灰	20%	覆土 内外面磨耗著しい
5	坏	(10.4)	3.6		WW'B'	B	橙	60%	覆土
6	坏	(10.7)	3.7		B'WW'RB	C	鈍い黄橙	40%	覆土 外面やや磨耗
7	坏	(12.4)	3.6		B'W'W	B	鈍い橙	45%	覆土
8	坏	(12.7)	3.8		WW'B'	A	黄灰	20%	覆土 ヘラケズリ後ミガキ
9	坏	(14.7)	4.3		B'W'WR	C	橙	15%	覆土 内面磨耗著しい
10	坏	(12.8)	3.4		W'B'W	A	橙	20%	覆土 内外面磨耗著しく調整不明瞭
11	坏	(13.1)	2.6		WW'B'RB	B	橙	35%	覆土 内外面磨耗著しい放射状暗文
12	坏	(10.5)	4.1		B'W'W	B	橙	60%	覆土 放射状暗文
13	壺	20.2	9.4		B'WW'RB	B	橙	60%	覆土 SJ87と接合 内外面磨耗著しい
14	壺	(11.1)	10.0		B'W'WBSR	C	鈍い黄橙	25%	覆土
15	椀	(14.4)	5.9		B'W'SWR	B	橙	35%	覆土 ヘラケズリ 放射状暗文不明瞭
16	刀子	覆土	残長 8.0cm 重量12.91g 両端欠失						

第87号住居跡（第285図）

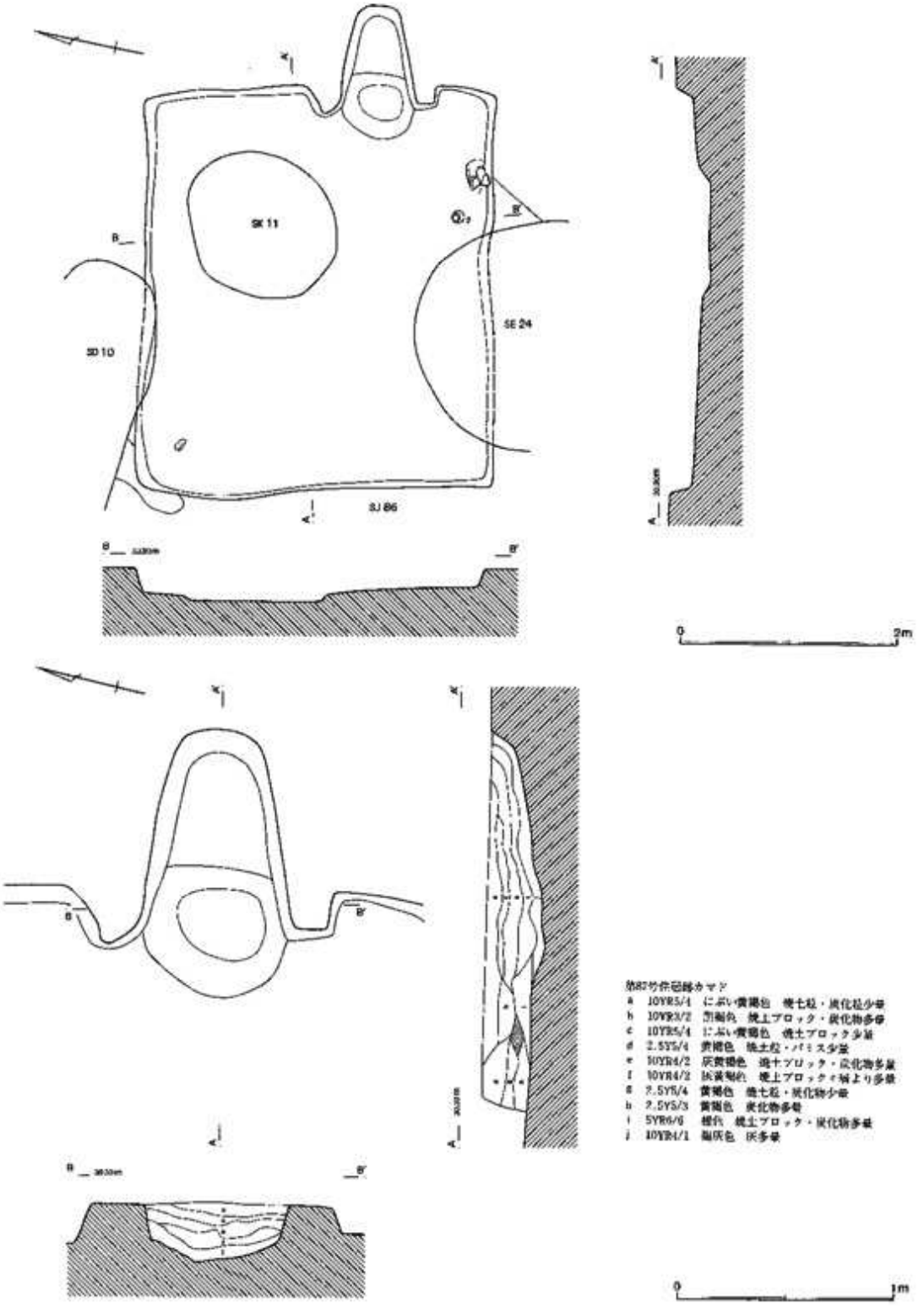
せ－4－3グリッドを中心に位置する。第86号住居跡を切り、第10号溝跡、第24号井戸跡、第11号土壙に切られる。形態は東西にやや長い長方形で、規模は長軸3.70m、短軸3.22m、深さ0.16～0.26mである。主軸方位はN－71°－Eを指す。

床面は起伏は見られないが、中央に向かって低くなる。壁は開き気味に立ち上がる。覆土の観察は出来なかった。カマドは東壁中央より南側に設置される。燃焼部は床面を7cm程掘り込み、緩やかに立上がりながら煙道へ移行する。覆土には焼土ブロックを含む層が目立つ。貯蔵穴、ピットは検出されていない。

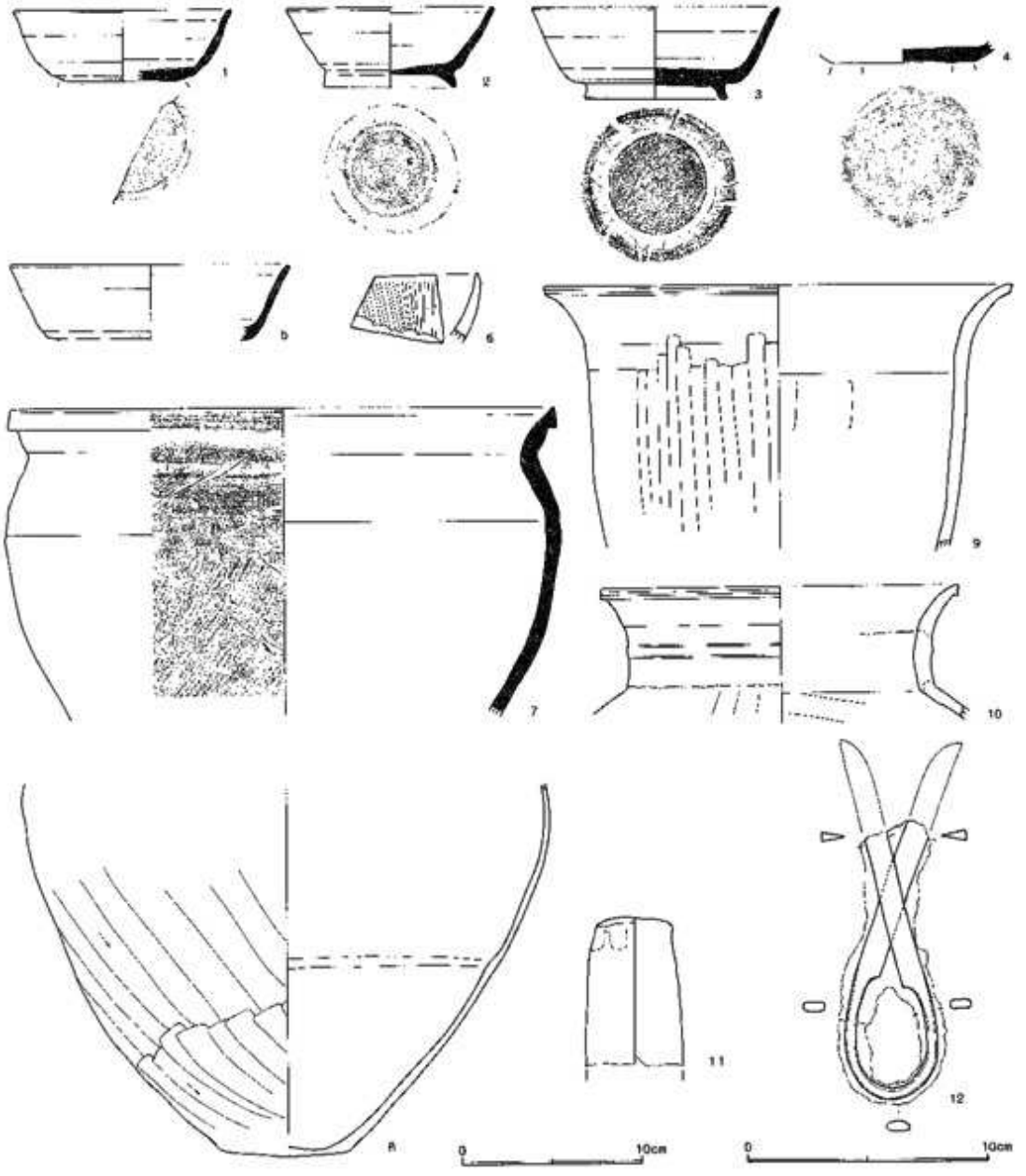
出土遺物はやや多めに見られるものの接合率は悪い。12は鉄製の鋏である。錆が激しく、X線を通して判明した。

第87号住居跡出土遺物観察表（第286図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.7)	3.9	(6.0)	針W'B'	B	オリーブ灰	25%	カマド 南比企産 底部回転糸切り
2	高台坏	11.3	4.5	7.1	WW'B	A	灰	100%	No2 覆土床面 群馬産か
3	高台坏	(13.5)	5.1	7.6	WW'	A	灰	40%	覆土 産地不明
4	坏		0.7	7.6	W'WR	B	灰	95%	カマド 末野産 半分は酸化焔化
5	坏	(15.3)	3.1		WW'	A	灰	20%	覆土 末野産か
6	坏				WW'B'	A	橙		覆土 放射状暗文
7	鉢	(29.9)	17.2		WB'W'	B	灰白	35%	No1 覆土床面
8	甕		20.7	7.1	WW'B'RS	C	橙	80%	覆土 内外面やや磨耗
9	甑	(25.7)	14.7		SWW'BB'R	A	橙	20%	覆土 内外面やや磨耗
10	壺	(19.6)	7.5		RB'SWW'	B	橙	25%	覆土 内外面磨耗 剥落著しい
11	支脚	覆土			WW'BB'		明赤褐	80%	上端径(4.2)cm 残高8.2cm 下半欠損
12	鋏	覆土 重量67.17g サビ著しい							



第285図　第87号住居跡



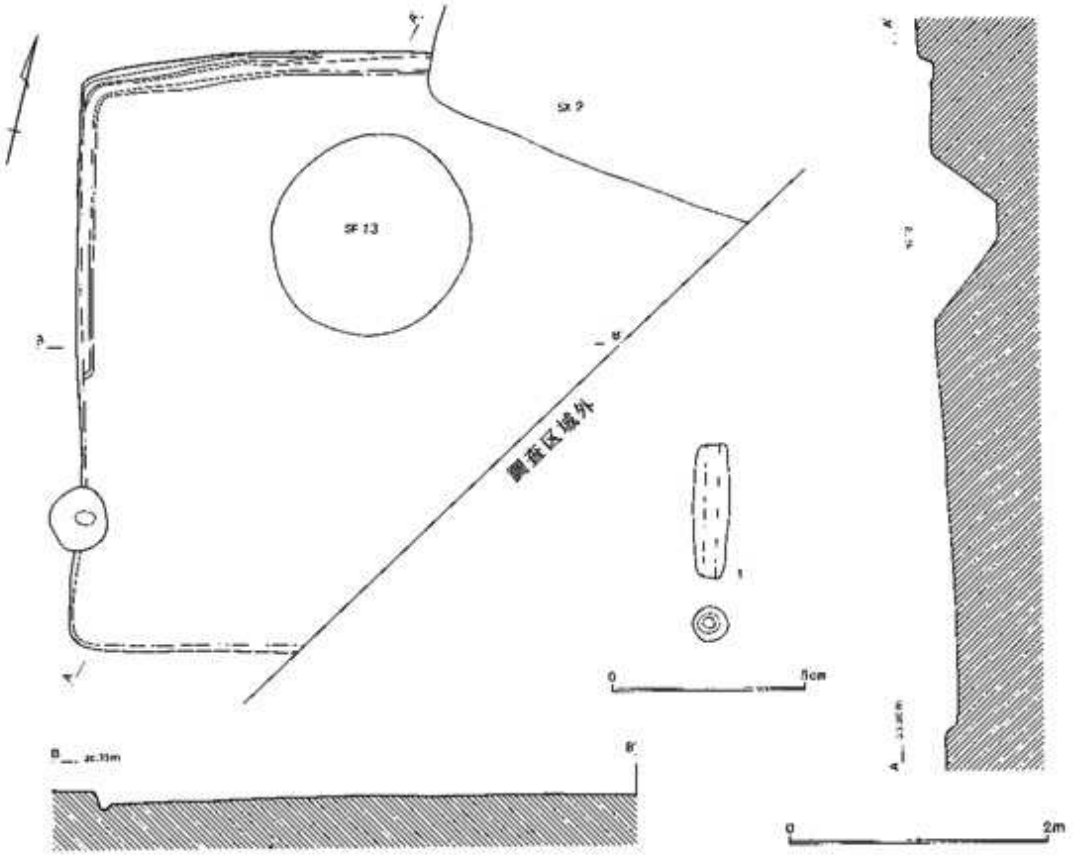
第286図　第87号住居跡出土遺物

第88号住居跡（第287図）

す－４－22グリッドを中心に位置する。第２号周溝状遺構（ＳＸ２）、第13号井戸跡に切られる。東半は調査区域外にある。残存規模は西壁4.34ｍ、北壁2.72ｍで、深さは0.04～0.12ｍとなっている。主軸方位は北壁を基準とするとＮ－74°－Ｅとなる。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。深度が浅いため覆土の状態は不明である。

カマドは検出されていない。調査区域外に設置されているのであろうか。ピットは西壁に１本検出されているが、本住居跡に伴うか疑問である。壁溝は北西コーナー付近で検出され、幅12～22cm、



第287図　第88号住居跡・出土遺物

深さ3～9cmを測る。

出土遺物は土師器の細片が少量で、坏・甕が認められる。図示した土錘は完形で、全長3.5cm、最大径0.9cm、孔径0.3cm、重さ3.17ｇで、にぶい橙色をしている。

第89号住居跡（第288図）

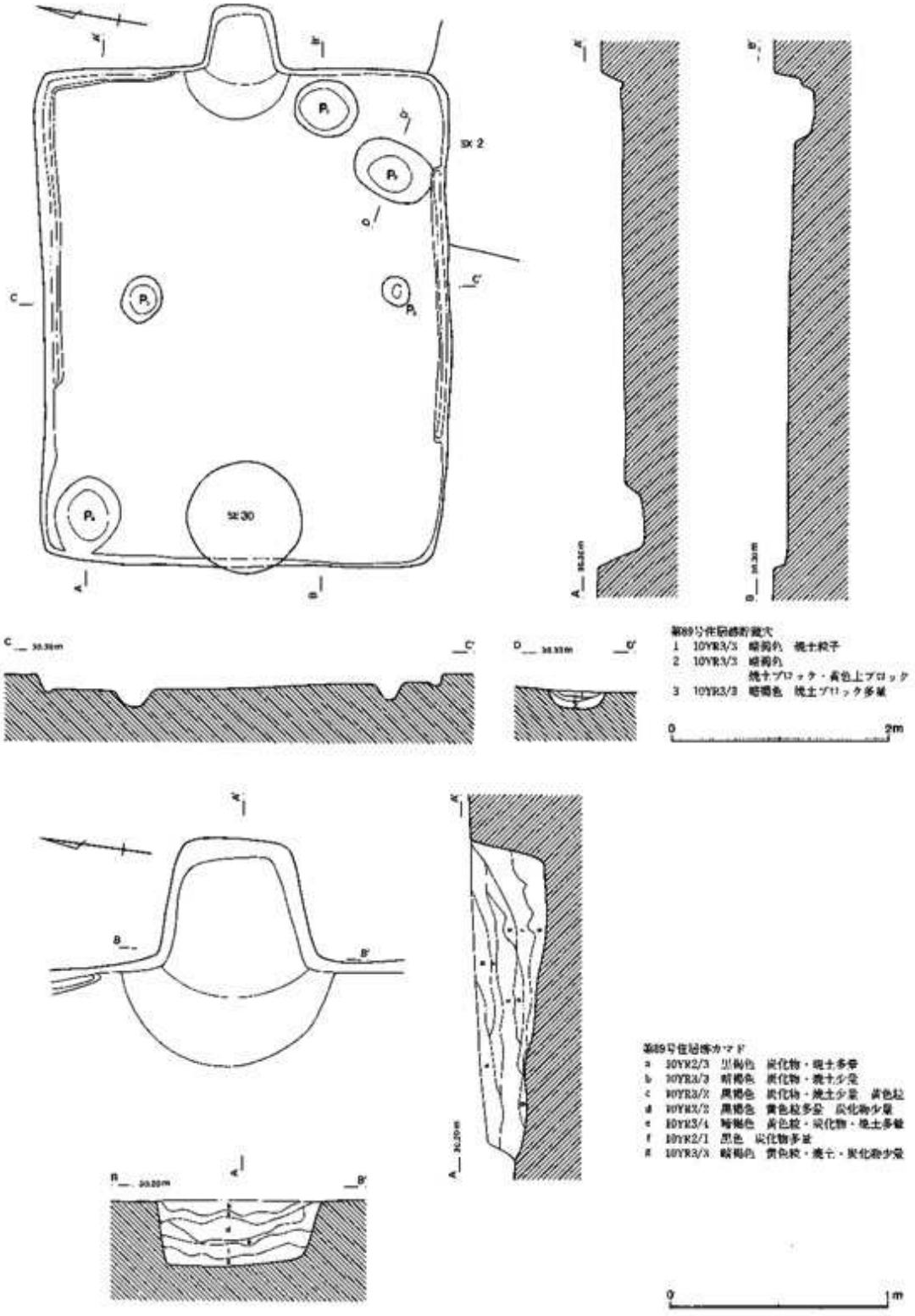
せ－４－２グリッドを中心に位置する。第２号周溝状遺構（ＳＸ２）を切り、第30号井戸跡に切られる。形態は東西に長い長方形で、規模は長軸4.52m、短軸3.72m、深さ0.08～0.20mである。主軸方位はＮ－79°－Ｅを指す。

床面はほぼ平坦だが、南西コーナー付近が高くなる傾向が見られる。壁は開きながら立ち上がる。覆土の観察は出来なかった。

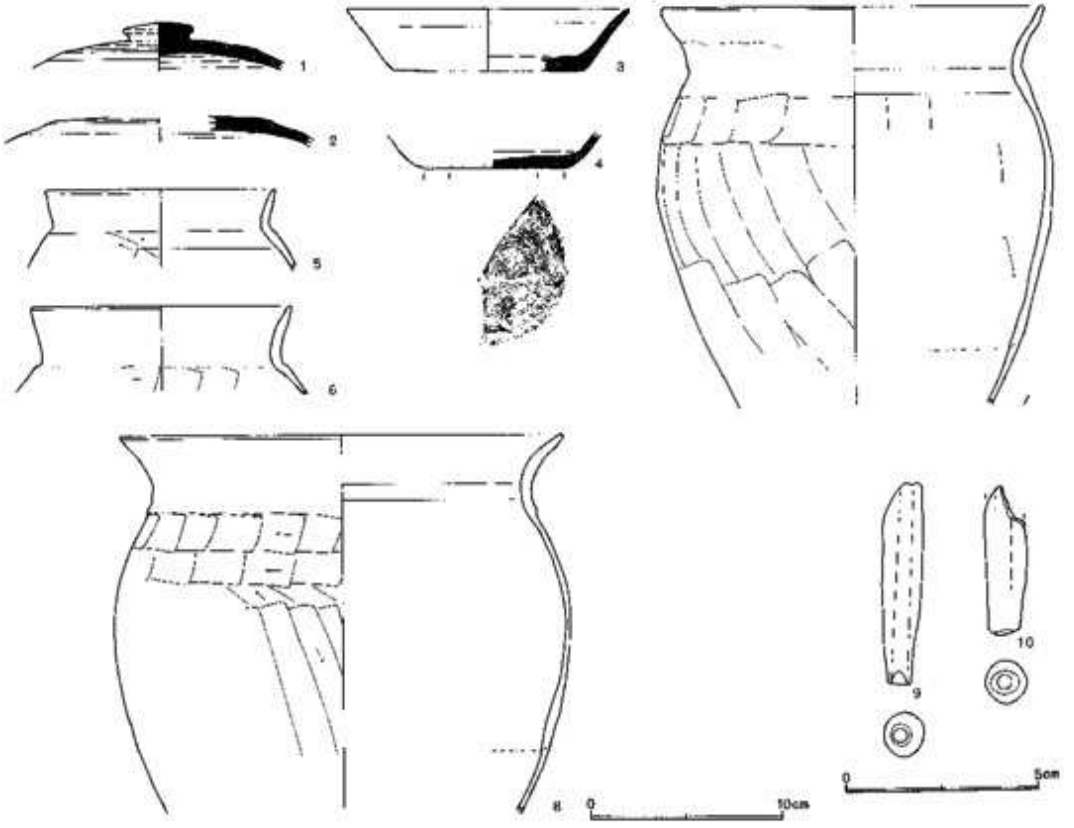
カマドは東壁中央に設置される。燃焼部は壁外にあり、やや起伏を持って緩やかに下がり、奥壁で急激に立ち上がる。

ピットは５本検出された。Ｐ１は直径約54cmの円形で、深さ13cm。Ｐ２は74cm×52cmの楕円形で、深さは21cm。Ｐ４は直径約60cmの円形で、深さ26cmを測る。何れかが貯蔵穴になると思われる。Ｐ３とＰ５は柱穴と考えられる。壁溝は西壁以外で検出され、幅12～14cm、深さ1～6cmとなっている。

出土遺物は覆土からで、やや多めに見られるが、接合率が悪い。



第288図　第89号住居跡



第289図　第90号住居跡・出土遺物

第89号住居跡出土遺物観察表（第289図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋		2.2		W'WB	B	灰白	20%	覆土 産地不明
2	蓋		1.3		WW'B'	A	灰白	20%	覆土 産地不明
3	坏	(14.5)	3.2	(9.8)	WW'BS	A	灰白	15%	覆土 群馬産か 底部回転ヘラ
4	坏		1.7	(7.2)	WS	B	暗青灰	30%	覆土 末野産か 回転糸切り 周辺ヘラ
5	甕	(11.8)	4.0		WW'BB'	B	橙	20%	カマド
6	甕	(13.5)	4.4		BWW'B'R	C	橙	25%	覆土
7	甕	19.6	20.8		WW'RBB'	B	橙	80%	カマド 外面粘土付着 内外面磨耗著しい
8	甕	(22.8)	19.6		B'WBW'R	B	橙	20%	カマド 覆土 外面胴部に粘土付着
9	土錘	覆土			BW'WB'		黄橙		長5.3cm 径1.2cm 孔0.4cm 重5.46g
10	土錘	覆土			W		黒褐		残4.9cm 径1.1cm 孔0.4cm 重4.04g

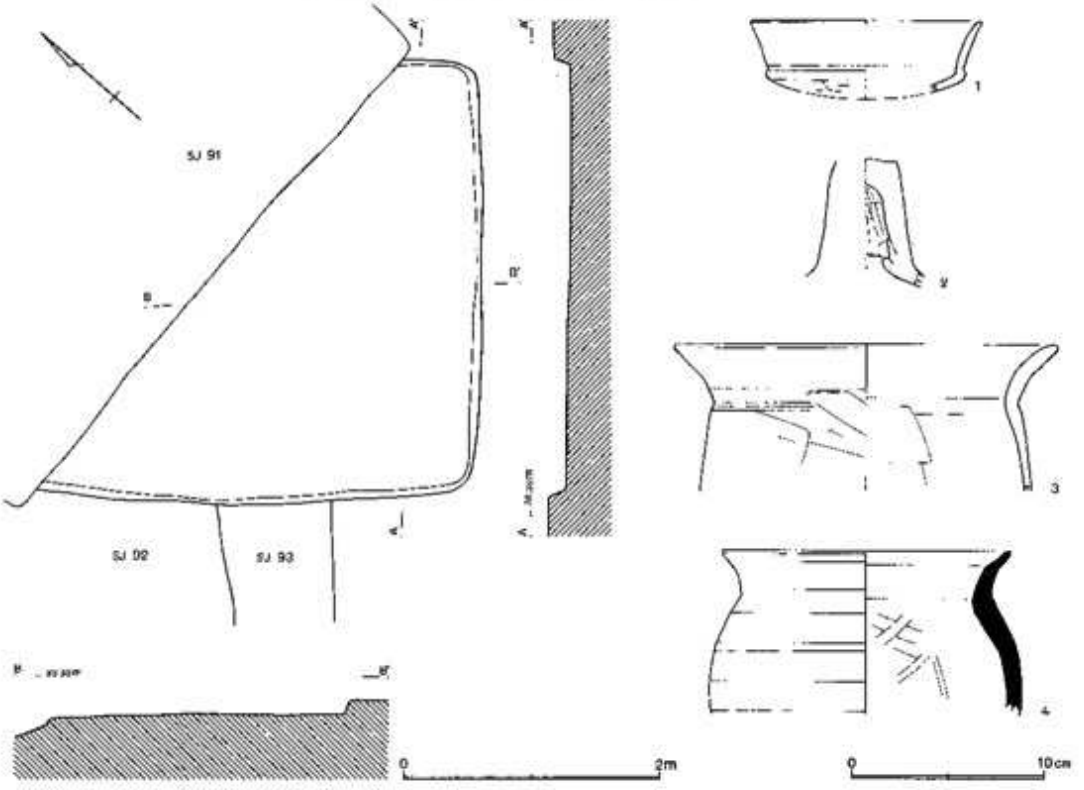
第90号住居跡（第290図）

せ－4－7グリッドを中心に位置する。第92・93号住居跡を切り、北西側を第91号住居跡に切られる。形態は長方形となるものと思われ、残存規模は南東壁3.30m、南西壁3.40mで、深さは0.10～0.14mとなっている。主軸方位は南東壁を基準とするとN－50°－Eとなる。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土の状態は不明である。

カマドは検出されていない。第91号住居跡に壊された壁に設置されていたものと思われる。貯蔵穴、ピットは見られなかった。

出土遺物は多くなく、接合率が悪い上に他の遺構からの混入もあると思われる。土師器では坏・高坏・甕・鉢等が認められ、須恵器は図示した壺だけである。



第290図　第90号住居跡・出土遺物

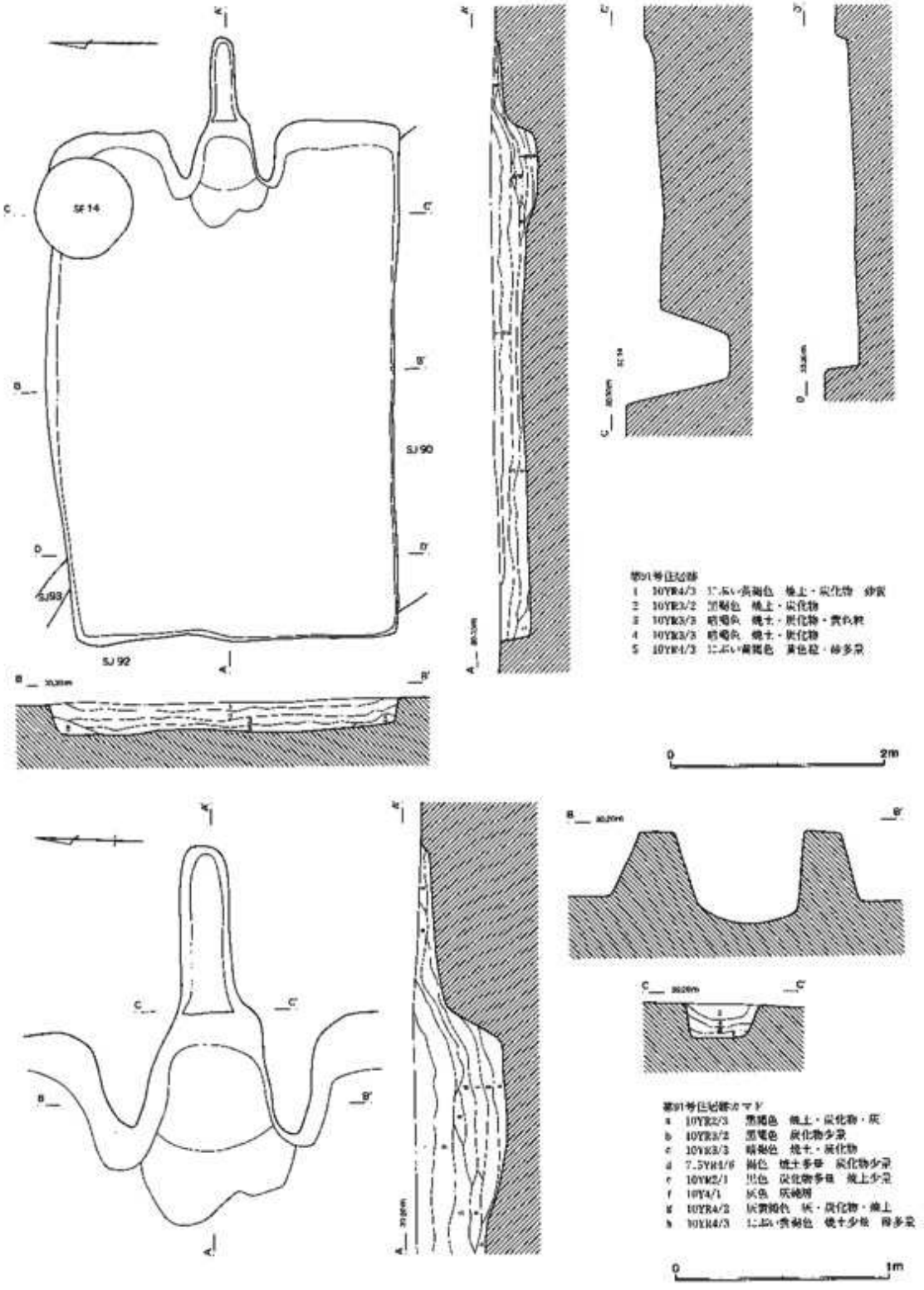
第90号住居跡出土遺物観察表（第290図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.8)	3.7		B'WW'	B	橙	10%	覆土 内面やや磨耗
2	高坏		6.6		W'WB'R	B	橙	80%	覆土 胎土緻密 外面ナデか
3	甕	(19.8)	7.5		B'WW'RB	B	鈍い橙	20%	覆土
4	壺	(13.2)	8.2		WW'	A	灰	20%	覆土 内面に不定方向の細かいナデ

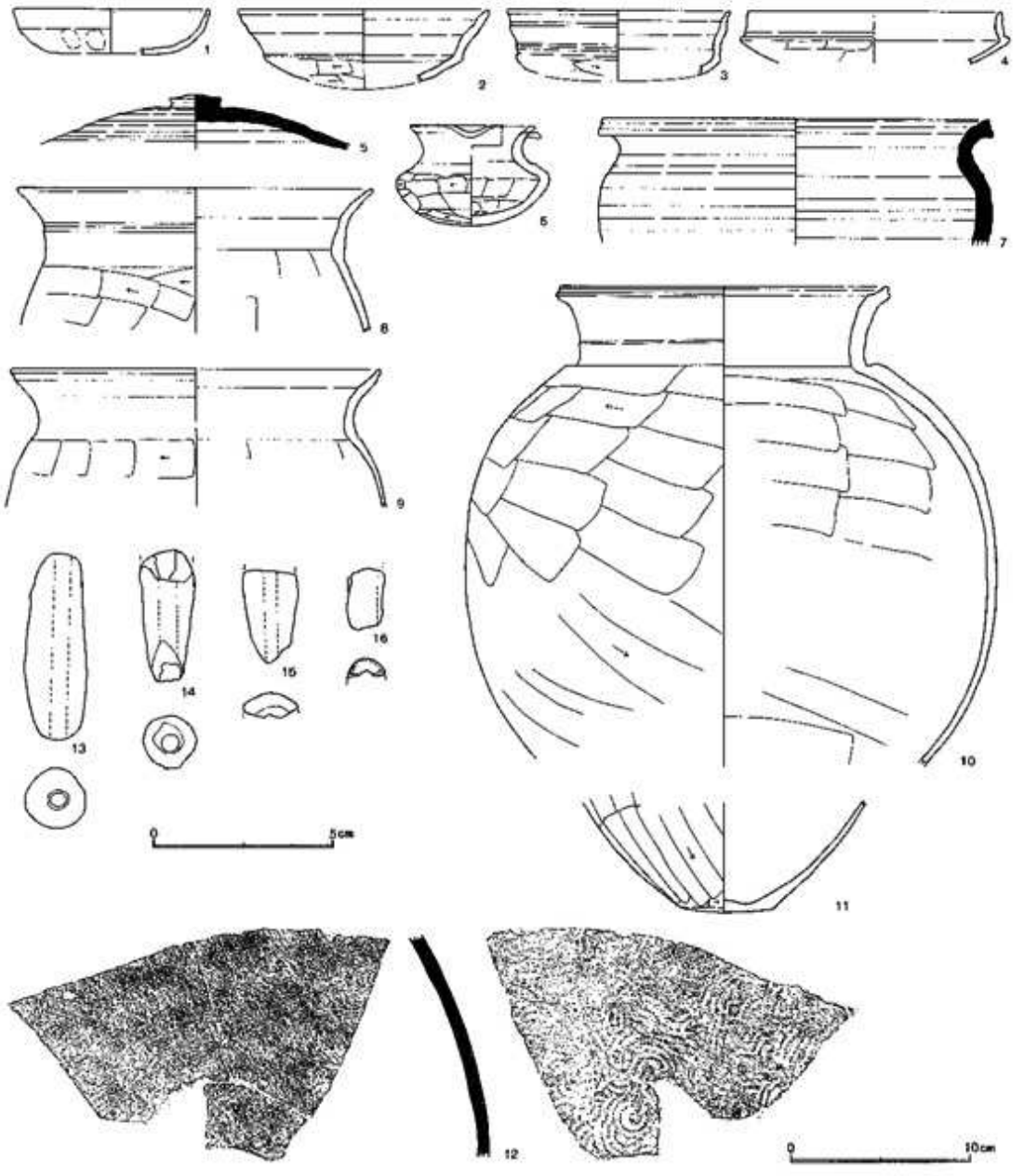
第91号住居跡（第291図）

せ－4－7グリッドを中心に位置する。第90・92・93号住居跡を切り、第14号井戸跡に切られる。形態は東西に長い長方形で、規模は長軸4.80m、短軸3.24m、深さ0.26～0.34mである。主軸方位はN－90°－Eを指す。

床面は緩やかな起伏がある。壁は概ね開き気味に立ち上がるが、カマドの両側はより緩やかに立上がる。南壁は直線的に延び、壁の立ち上がりは急である。覆土は5層に分かれ、概ね自然堆積と考えられる。カマドは東壁中央に設置される。燃焼部は床面を10cm程掘り下げ、奥壁は急激に立ち上がり煙道へ続く。覆土中層に灰層（f層）が残存する。貯蔵穴、ピットは検出されなかった。出土遺物は、他の遺構からの混入も含めてやや多めに見られるが、接合率が悪く図示できたものは少ない。土師器坏・甕・壺、須恵器蓋・坏・甕・鉢等が認められ、灰釉陶器片が1片出土している。



第291図　第91号住居跡



第292図　第91号住居跡出土遺物

第91号住居跡出土遺物観察表（第292図）

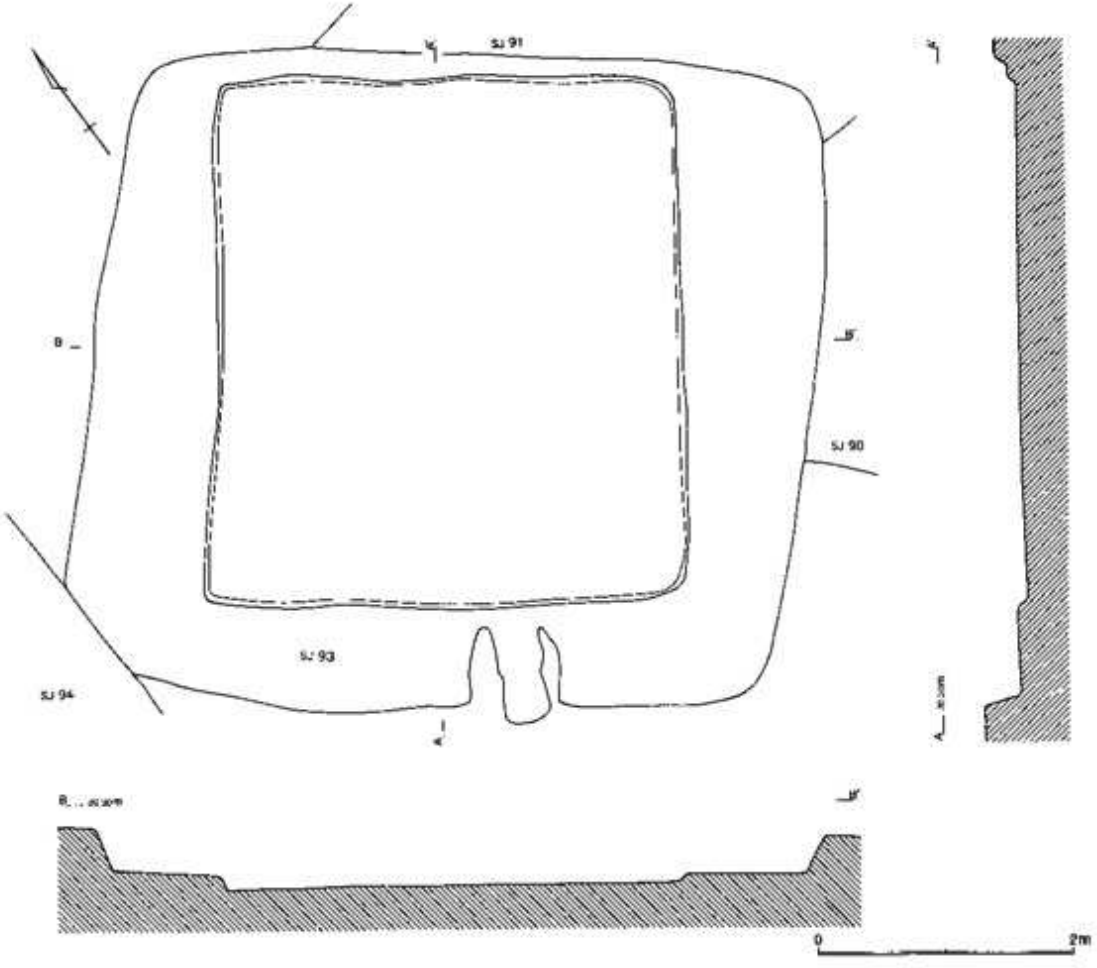
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.6)	2.5		W'B'B	A	橙	15%	覆土 胎土緻密 外面指おさえ
2	坏	(14.0)	4.0		B'W'R	B	鈍い黄橙	25%	覆土
3	坏	(12.2)	3.6		B'W'WBR	B	鈍い黄橙	15%	覆土
4	坏	(14.0)	2.9		WW'BB'RS	B	鈍い褐	20%	覆土 内外面磨耗著しい
5	蓋		3.0		WW'	B	灰	30%	覆土 南比企産
6	片口壺	6.4	5.6		B'RWW'	A	橙	85%	覆土 小形 内外面やや磨耗
7	鉢	(21.3)	7.1		WB	A	灰	5%	覆土 末野産か
8	甕	(19.5)	8.0		WW'BSRB'	B	鈍い橙	20%	覆土 内面やや磨耗

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
9	甕	(20.6)	7.7		B'RWW'	B	橙	20%	覆土 内外面磨耗著しい
10	壺	18.1	26.6		WBB'R	B	灰白	50%	覆土
11	甕		6.2	5.2	SB'W'WR	C	橙	70%	覆土 内面磨耗著しい
12	甕				WW'	B	灰		覆土
13	土錘	覆土			BWSW'		浅黄橙	100%	長5.2cm 径1.7cm 孔0.5cm 重15.53g
14	土錘	覆土			SB		鈍い黄橙		残3.7cm 径1.5cm 孔0.5cm 重6.30g
15	土錘	覆土			SW		鈍い赤褐		残2.6cm 径1.6cm 重2.44g
16	土錘	覆土			BWW'		鈍い黄橙		残1.7cm 径1.1cm 重0.80g

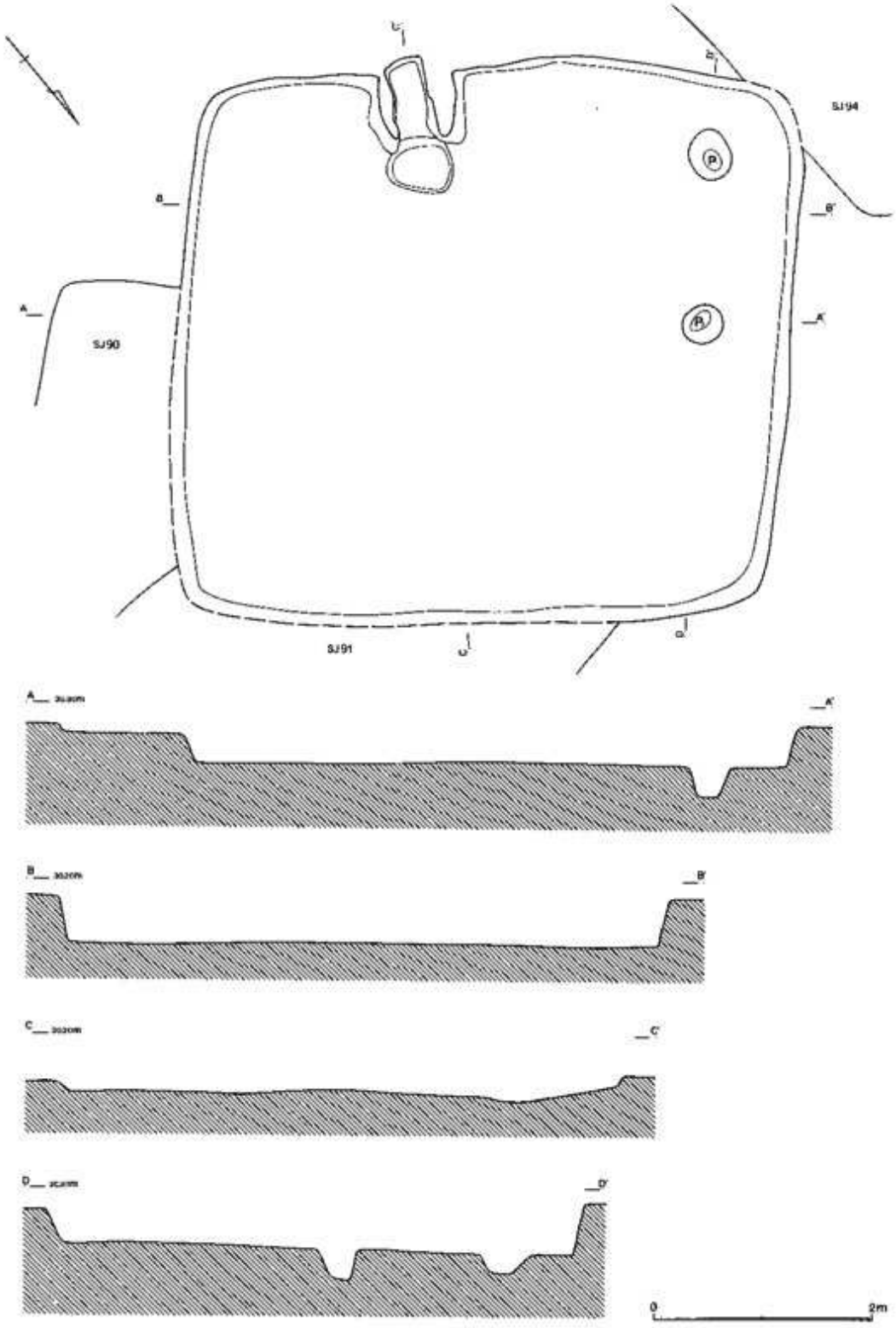
第92号住居跡（第293図）

せ－4－8グリッドを中心に位置する。第93号住居跡の床面に検出された。形態は方形に近く、規模は長軸3.94m、短軸3.62mで、第93号住居跡の床面からの深さは0.05～0.11mとなっている。主軸方位はN－37°－Eを指す。

住居の掘り方の下面を検出したに過ぎない。底面はほぼ平坦となっている。深度がなく覆土の状態は不明である。遺物は、全く見られなかった。掘り方の下面のみ検出したためであろう。



第293図　第92号住居跡



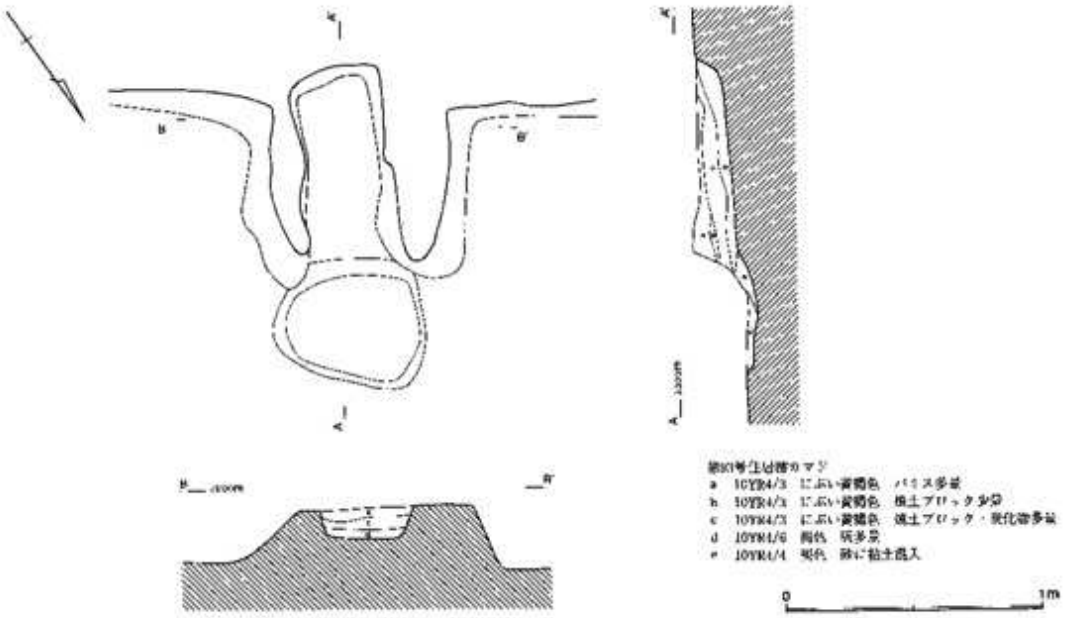
第294図　第93号住居跡

第93号住居跡（第294・295図）

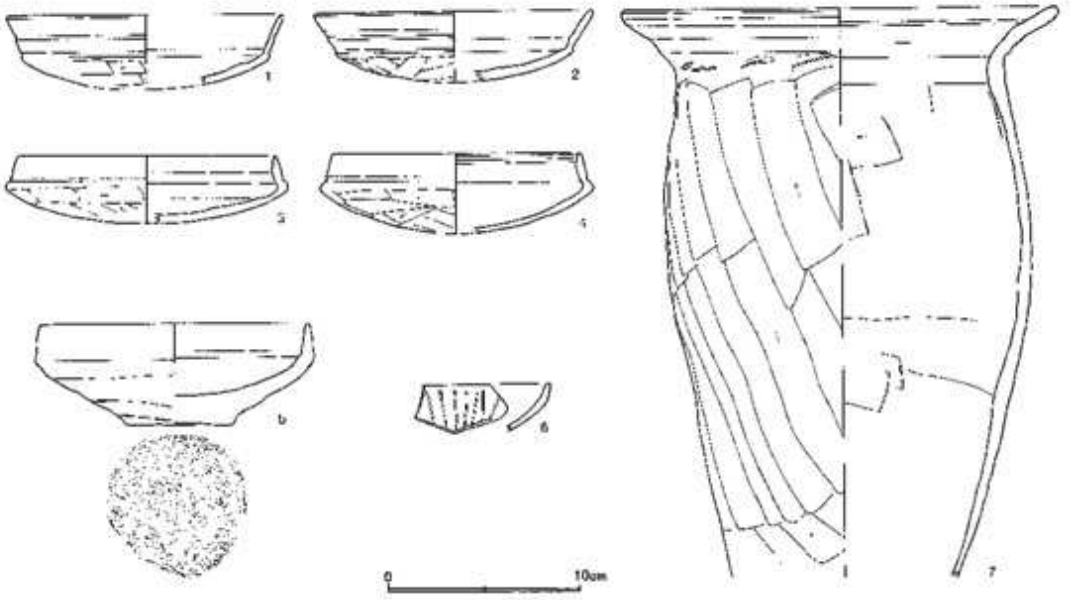
せ－4－8グリッドを中心に位置する。第92号住居跡の上に構築され、第90・91・94号住居跡に切られる。形態は方形に近く、規模は長軸5.78m、短軸4.86m、深さ0.24～0.30mである。主軸方位はS－43°－Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ち上がる。覆土の状態は不明である。

カマドは南西側の壁の中央より東寄りに設置される。燃焼部手前に深さ3cm程の掘り込みがある。燃焼部の大部分は壁内に留まり周辺の床面より僅かに高くなっている。最下層には灰を多量に含む



第295図　第93号住居跡カマド



第296図　第93号住居跡出土遺物

褐色土が見られる。ピットは2本検出された。共に柱穴とは判断できなかった。

出土遺物は少なく、全て覆土からである。5の土師器は底部に木葉痕を残し、口縁はヨコナデされているが、体部は未調整である。図示できなかったが比企型坏の細片が1片出土している。

第93号住居跡出土遺物観察表（第296図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(14.1)	3.6		RB'W'W	B	浅黄橙	20%	覆土 内外面磨耗著しい
2	坏	(14.4)	3.6		W'B'RW	B	鈍い赤褐	30%	覆土
3	坏	(13.4)	3.5		B'W'RW	B	鈍い橙	30%	覆土 内外面磨耗著しい
4	坏	(12.7)	4.1		W'WB'B	B	橙	25%	覆土 内外面やや磨耗
5	坏	(13.8)	5.2	5.4	W'WB'R	B	鈍い黄橙	50%	覆土 坏底部及び台部未調整
6	坏				B'W'RW	B	浅黄橙		覆土 放射状暗文
7	甕	22.2	29.4		WB'W'BR	B	鈍い橙	60%	覆土 内外面やや磨耗

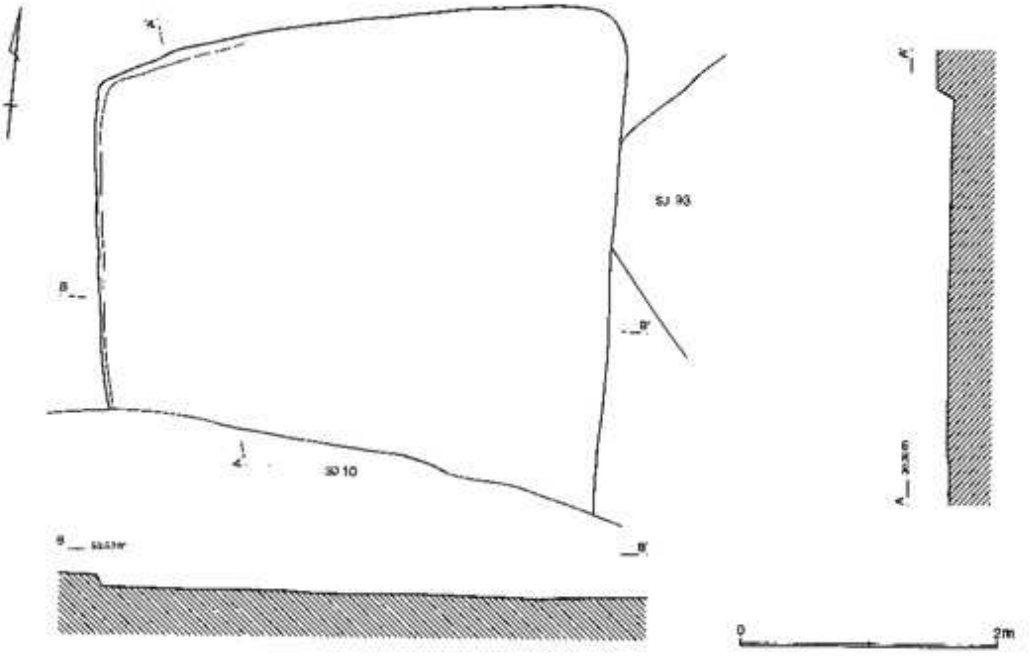
第94号住居跡（第297図）

せ－4－9グリッドを中心に位置する。第93号住居跡のコーナーを切り、南側を第10号溝跡に切られる。形態は方形となるか。残存規模は東西4.08m、南北3.92mで、深さは0～0.14mである。主軸方位は西壁を基準とするとN－7°－Wとなる。

床面は平坦で、北及び東に向かうに従って浅くなる。北壁の一部と東壁では立ち上がりは見られなくなり、辛うじて住居跡の範囲が掴めるにすぎない。深度が浅く覆土の状態は不明である。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は土師器の細片が少量出土しただけで図示できるものはなかった。大半が甕の胴部片と思われる。



第297図　第94号住居跡

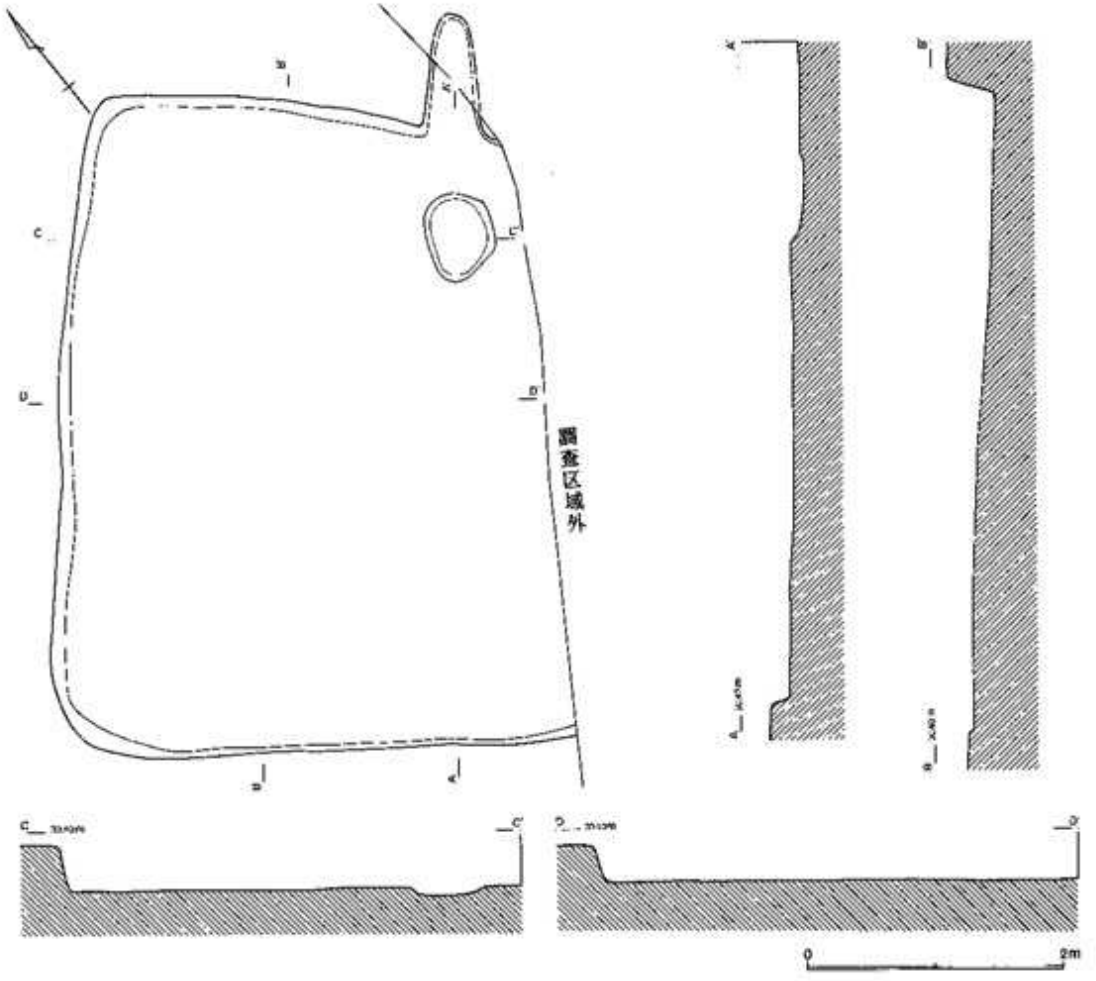
第95号住居跡（第298図）

せ－4－6グリッドを中心に位置する。南東側は調査区域外にある。形態は方形に近くなると思われる。検出規模は北西壁が5.04m、南西壁が4.02m、深さは0.14－0.36mである。主軸方位はN－40°－Eを指す。

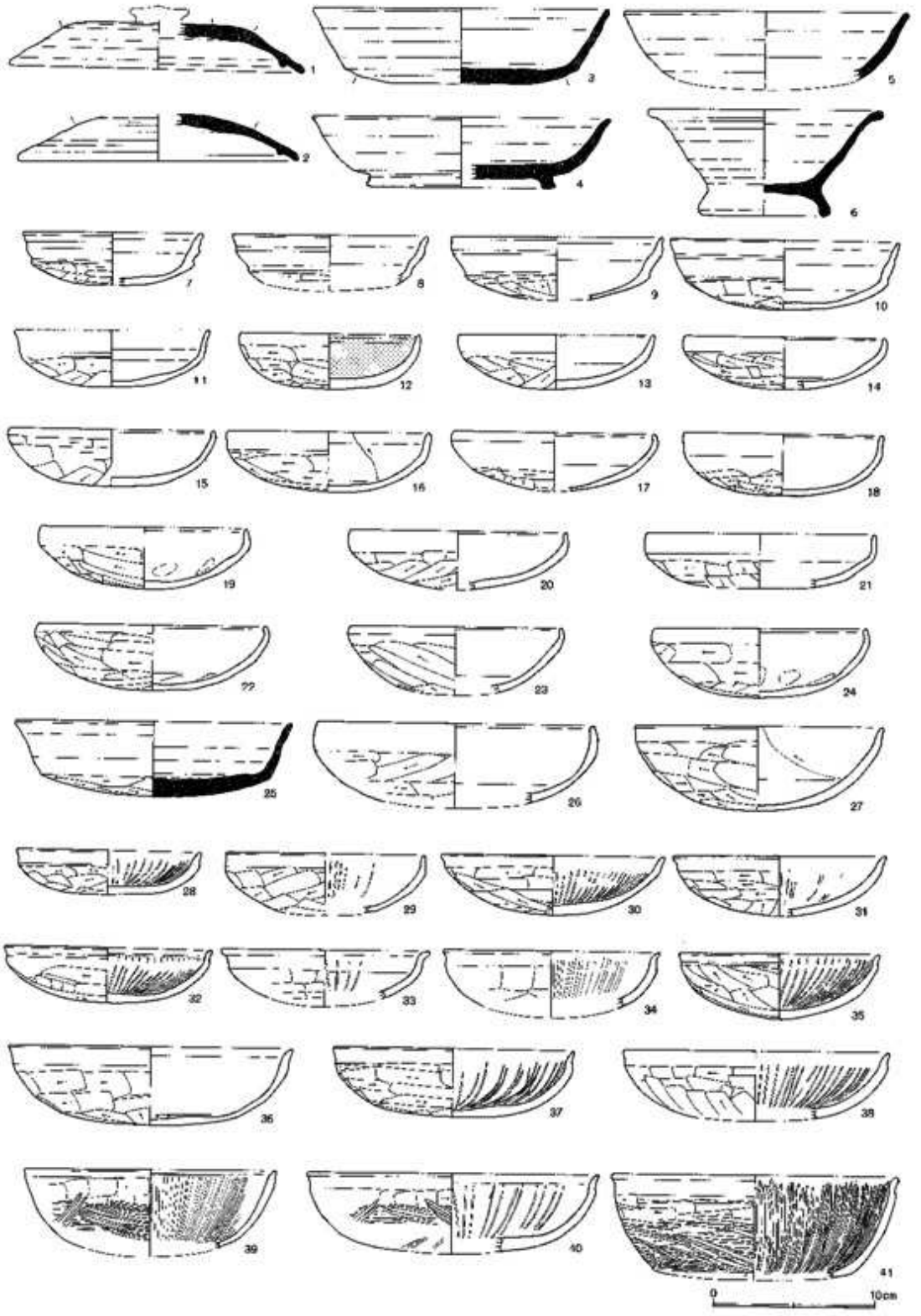
床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土の観察は出来なかった。

カマドは北東側の壁に設置され、先端部は調査区域外にでる。燃焼部の掘り込みは見られず、覆土の状態も不明である。カマド手前約60cmの所に54cm×68cm、深さ10cm程の落ち込みが見られる。これがカマドに付随するものか確認できなかったが、住居跡には伴うものであろう。貯蔵穴は検出されなかった。調査区域外に位置しているとも考えられる。

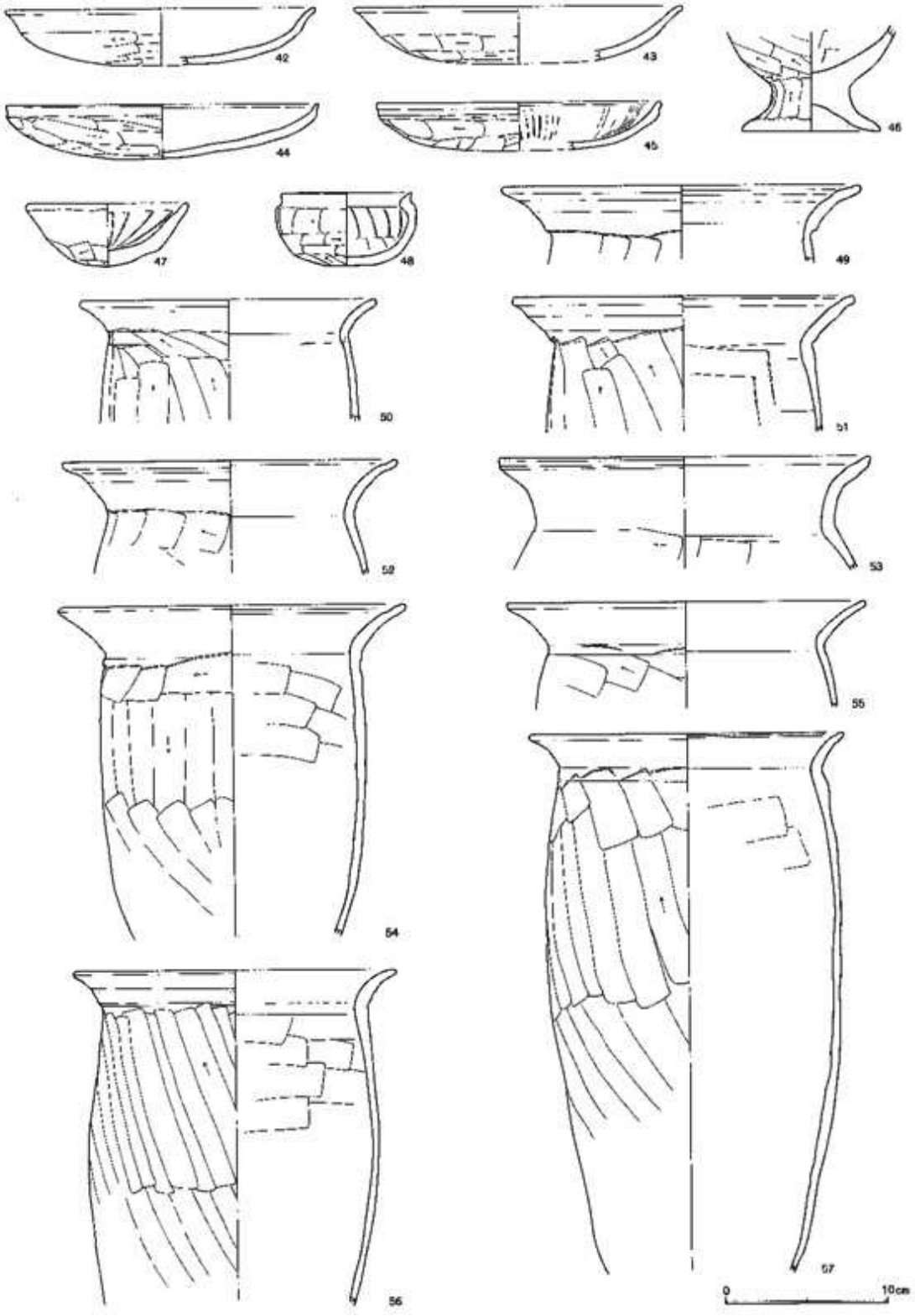
遺物は、一部混入も含め覆土から多量に出土している。須恵器蓋・坏・高台坏・甕・土師器坏・椀・皿・甕等が認められる。64・65の甕の内面当て具痕は格子状となっており、66の当て具痕は丸の中心に点が入っている形が多くついている。92は砂岩製の砥石で、四面が使用され、下端面も僅かに擦れている。93は鉄製刀子、両端は欠損し、両関である。94は釘と思われる。



第298図　第95号住居跡



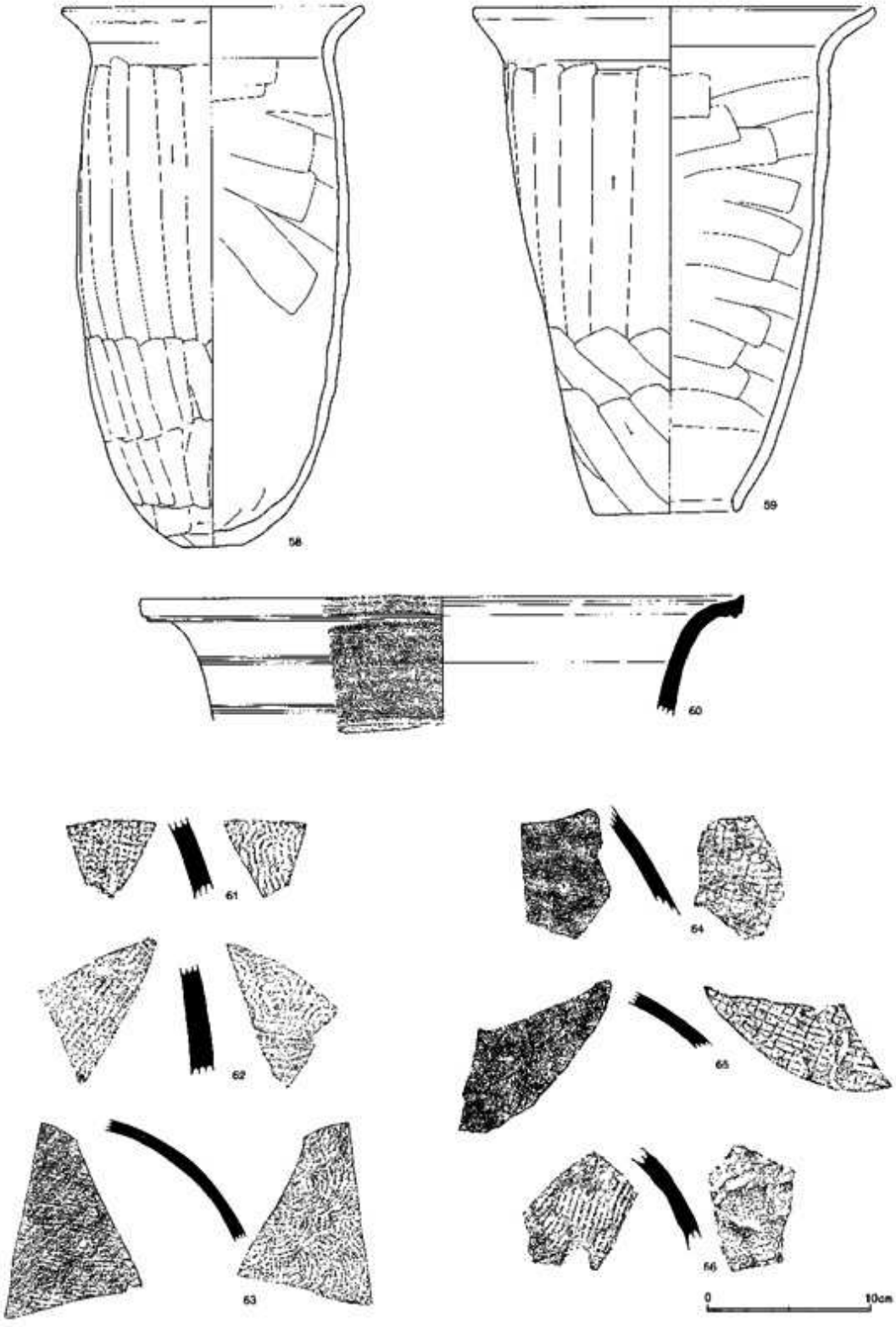
第299図　第95号住居跡出土遺物(1)



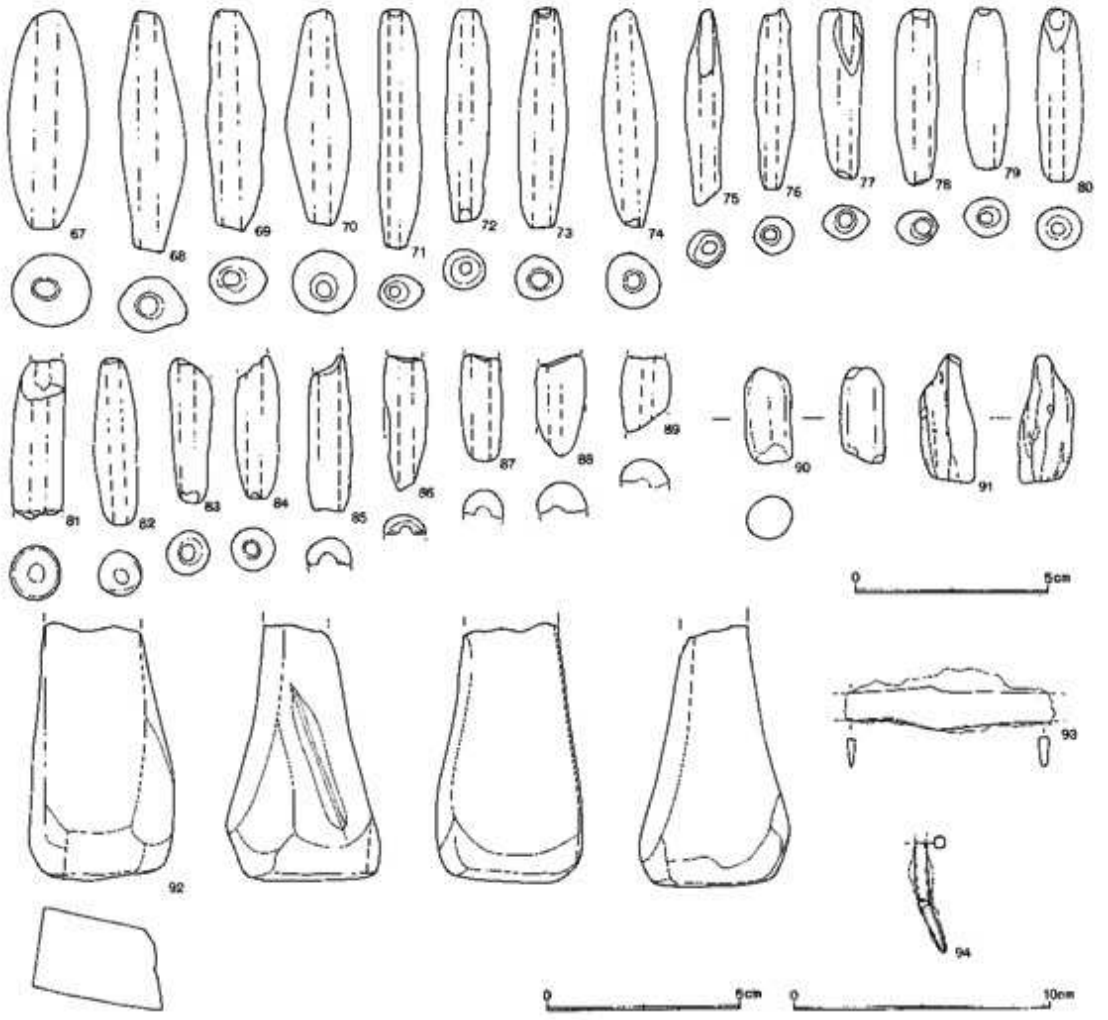
第300図　第95号住居跡出土遺物(2)

第95号住居跡出土遺物観察表（第299～302図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(18.0)	2.9		WW'R	B	暗灰	25%	覆土 鈕欠失 末野産
2	蓋	17.0	2.9		SW'WB	A	灰	90%	覆土 鈕欠失 末野産
3	坏	(18.0)	4.6	(12.7)	SW'B'	A	灰	30%	覆土 末野産 底部回転ヘラケズリ
4	高台坏	(18.2)	4.4	(11.1)	W'W	A	灰	15%	覆土 産地不明
5	坏	(17.2)	4.2		SBWW'	B	灰	30%	覆土 末野産 厚手でボッタリした作り
6	高台坏	(14.1)	6.5	7.3	WW'B'R	B	黄橙	40%	覆土 酸化焔焼成 磨耗著しい 混入
7	坏	(10.8)	3.2		WW'B'	A	橙	40%	覆土 有段口縁坏
8	坏	(12.0)	3.0		W'B'BW'	B	橙	20%	覆土 有段口縁坏 内外面磨耗著しい
9	坏	(13.0)	3.8		B'WW'R	B	橙	25%	覆土 有段口縁坏 内面磨耗著しい
10	坏	14.0	4.3		SB'W'W	B	橙	85%	覆土 有段口縁坏 内外面磨耗著しい
11	坏	(11.8)	3.5		SRB'W'	A	鈍い黄橙	20%	覆土 磨耗著しく特に内面は激しい
12	坏	(11.0)	3.4		B'W'WR	A	橙	30%	覆土 内面黒褐 黒色処理の後ミガキか
13	坏	11.9	3.4		B'WW'	B	橙	70%	覆土
14	坏	(12.3)	3.2		B'WBW'	A	橙	40%	覆土
15	坏	(12.5)	3.6		B'W'	B	橙	20%	覆土 内外面磨耗著しい
16	坏	12.5	3.7		B'WW'R	B	橙	85%	覆土 ナデ抜き上げ痕
17	坏	(12.4)	3.6		W'B'WB	A	鈍い橙	20%	覆土
18	坏	(12.2)	3.8		WW'B'	B	橙	45%	覆土 内面磨耗著しい
19	坏	12.7	3.8		B'WR	B	鈍い黄橙	60%	覆土 北武蔵型坏 内面磨耗著しい
20	坏	(13.3)	3.6		B'W'WB	A	鈍い橙	25%	覆土 内外面磨耗著しい
21	坏	(14.0)	3.3		W'B'W	B	橙	30%	覆土 北武蔵型坏 内外面磨耗著しい
22	坏	(14.0)	4.0		W'B'W	B	橙	30%	覆土
23	坏	(13.0)	4.0		B'W'W	A	橙	25%	覆土
24	坏	13.1	4.3		B'WR	B	鈍い橙	60%	覆土 内面指押え 内面磨耗著しい
25	坏	16.9	4.6	14.1	WS	B	暗青灰	80%	覆土 末野産か 底部厚い
26	椀	(17.0)	4.9		W'B'WR	A	橙	20%	覆土 内外面やや磨耗
27	椀	15.1	5.3		B'WW'B	B	橙	85%	覆土 内面ナデ抜き上げ痕
28	坏	(11.2)	2.7		WW'B'	B	橙	60%	覆土 放射状暗文
29	坏	(12.2)	3.6		B'W'W	B	橙	25%	覆土 磨耗著しい 放射状暗文不明瞭
30	坏	(13.6)	3.7		WW'B'B	A	橙	45%	覆土 磨耗著しい 放射状暗文不明瞭
31	坏	(13.0)	3.7		WB'W'R	A	橙	20%	覆土 磨耗著しい 放射状暗文不明瞭
32	坏	(12.7)	3.4		W'B'RW	B	橙	60%	覆土 放射状暗文
33	坏	(12.4)	3.0		W'B'WBR	A	鈍い黄橙	10%	覆土 放射状暗文 内外面やや磨耗
34	坏	(13.4)	3.5		B'W'WRB	A	橙	20%	覆土 放射状暗文 やや磨耗
35	坏	(12.2)	4.0		W'B'WR	A	橙	80%	覆土 放射状暗文
36	皿	(17.5)	4.9		B'W'	B	橙	45%	覆土
37	坏	(14.3)	4.2		WW'BB'R	B	橙	90%	覆土 放射状暗文
38	坏	(16.8)	4.1		B'W'WRB	A	橙	20%	覆土 放射状暗文
39	坏	(15.3)	4.9		W'B'WR	A	橙	20%	覆土 放射状暗文 ミガキ不明瞭
40	坏	(17.9)	4.8		W'B'RW	A	橙	20%	覆土 放射状暗文 外面ヘラケズリ
41	椀	(17.4)	6.2		B'W'RW	A	鈍い橙	40%	覆土 内面ミガキ
42	皿	(18.8)	3.5		B'W'WR	B	橙	15%	覆土
43	皿	(20.0)	3.4		B'RW'W	B	橙	20%	覆土 内面磨耗著しい
44	皿	19.1	3.3		B'W'	B	橙	75%	覆土 内面磨耗の為調整不明
45	皿	(17.5)	2.9		B'W'W	B	橙	30%	覆土 放射状暗文不明瞭 内面磨耗著しい
46	台付甕		6.4	8.4	B'W'WR	A	橙	90%	覆土 外面二次被熱か



第301図　第95号住居跡出土遺物(3)



第302図　第95号住居跡出土遺物(4)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
47	鉢	9.6	3.9		B'W'RWB	B	鈍い橙	80%	覆土 粗いつくり 内面ヘラナデ
48	小形壺	(8.0)	4.4		B'W'WRB	B	橙	30%	覆土
49	甕	(22.0)	4.8		B'W'WR	A	鈍い橙	20%	覆土 内外面磨耗著しい
50	甕	(18.0)	7.5		B'SW'R	B	橙	25%	覆土
51	甕	(20.8)	8.3		WW'BB'R	B	鈍い橙	40%	覆土 内外面やや磨耗
52	甕	(20.6)	6.9		SW'RB'	A	鈍い黄橙	25%	覆土 内外面磨耗著しい
53	甕	(22.7)	7.1		W'B'RW	A	鈍い橙	15%	覆土
54	甕	(20.9)	20.4		WRBB'	B	鈍い橙	45%	覆土 内外面磨耗著しい
55	甕	(22.0)	6.5		BRWB'W'	B	鈍い橙	20%	覆土 内外面磨耗著しい
56	甕	19.8	20.7		SWB'BRW'	B	鈍い黄橙	45%	覆土 内外面やや磨耗
57	甕	19.2	33.7		WB'R片S	B	橙	70%	覆土 内外面磨耗著しい
58	甕	18.0	32.9	3.6	WRB'B	B	灰白	45%	覆土 外面二次被熱
59	甑	24.3	30.7	8.5	WRB'B	B	鈍い橙	90%	覆土
60	甕	(36.8)	7.3		WBW'	A	灰	10%	覆土 胎土極めて緻密
61	甕				WW'BB'	A	灰		覆土
62	甕				WB	A	灰		覆土

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
63	甕				WB	A	灰黄		覆土
64	甕				WW'B'B	B	灰		覆土 内外面磨耗 内面当て具痕 格子
65	甕				WW'B'B	B	灰		覆土 内外面磨耗 内面当て具痕 格子
66	甕				WBW'	A	灰黄		覆土 内面当て具痕珍しい
67	土錘		覆土		SWW'		鈍い黄橙	100%	長5.5cm 径2.0cm 孔0.6cm 重21.11g
68	土錘		覆土		BWB'		明褐灰	100%	長6.3cm 径1.8cm 孔0.5cm 重12.13g
69	土錘		覆土		BWB'W'		鈍い黄橙	100%	長5.8cm 径1.5cm 孔0.5cm 重9.59g
70	土錘		覆土		SB'W'		浅黄橙	100%	長5.5cm 径1.6cm 孔0.4cm 重11.97g
71	土錘		覆土		S		灰白	100%	長6.2cm 径1.2cm 孔0.3cm 重5.83g
72	土錘		覆土		SBB'W'W		浅黄橙	100%	長5.5cm 径1.1cm 孔0.3cm 重5.49g
73	土錘		覆土		WW'		灰褐	100%	長5.7cm 径1.2cm 孔0.5cm 重7.52g
74	土錘		覆土		BB'SW'		鈍い黄橙	100%	長5.6cm 径1.4cm 孔0.4cm 重9.52g
75	土錘		覆土		WW'RB'		浅黄橙		長5.1cm 径1.0cm 孔0.4cm 重3.09g
76	土錘		覆土		W		黒	100%	長4.7cm 径1.0cm 孔0.3cm 重4.26g
77	土錘		覆土		SW'W		浅黄橙		長4.5cm 径1.2cm 孔0.4cm 重3.77g
78	土錘		覆土		BB'		鈍い黄橙	100%	長4.6cm 径1.1cm 孔0.4cm 重4.16g
79	土錘		覆土		RBB'WW'		浅黄橙	100%	長4.2cm 径1.2cm 孔0.4cm 重5.21g
80	土錘		覆土		RB'W'		橙	100%	長4.5cm 径1.2cm 孔0.4cm 重6.07g
81	土錘		覆土		RW'		鈍い赤褐		残4.2cm 径1.4cm 孔0.4cm 重8.31g
82	土錘		覆土		WW'B'R		橙	100%	長4.3cm 径1.1cm 孔0.4cm 重5.94g
83	土錘		覆土		SW'B'		灰白		残3.8cm 径1.1cm 孔0.4cm 重3.68g
84	土錘		覆土		BWW'		橙		残3.7cm 径1.1cm 孔0.4cm 重4.02g
85	土錘		覆土		BB'WW'		浅黄橙		残4.1cm 径1.2cm 孔0.5cm 重2.51g
86	土錘		覆土		SB'		橙		残3.5cm 径1.2cm 孔0.4cm 重1.67g
87	土錘		覆土		W'		黒褐		残3.8cm 径1.1cm 孔0.4cm 重1.78g
88	土錘		覆土		SW		鈍い赤褐		残2.6cm 径1.3cm 孔0.3cm 重2.09g
89	土錘		覆土		RW'B'		橙		残2.0cm 径1.3cm 重1.48g
90	棒状土製品		覆土		WBW'B'		橙		長さ2.3cm 幅1.2cm 重量3.16g
91	貝巣穴痕泥岩		覆土						
92	砥石		覆土	長さ6.6cm 幅3.4cm 厚さ2.7cm 重量117g 砂岩製					
93	刀子		覆土	残長 8.2cm 重量23.60g 両端欠 両関					
94	釘状鉄製品		覆土	残長 4.3cm 重量2.95g					

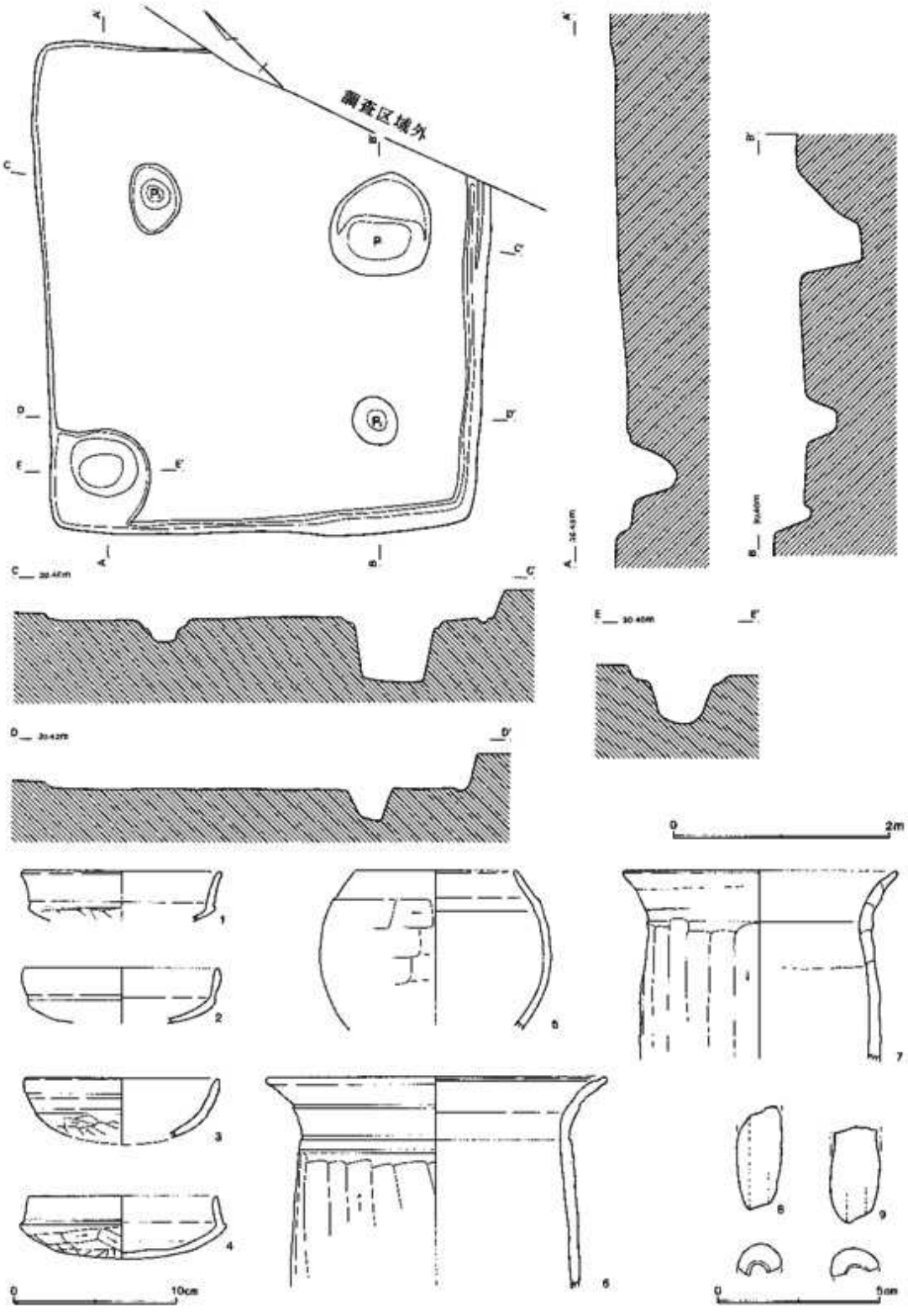
第96号住居跡（第303図）

せ－4－11グリッドを中心に位置し、東側のコーナーは調査区域外にでる。形態は方形に近く、規模は長軸4.40m、短軸4.18mで、深さは0.04～0.30mと北側ほど浅くなっている。主軸方位はN－41°－Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ち上がる。覆土の状態は不明である。

カマドは検出されていない。調査できなかった箇所に設置されていたと推察される。西側コーナーでは直径約92cm、深さ8cm程の浅い落ち込みの中に、52cm×62cmの楕円形で、深さ40cmの貯蔵穴が検出された。ピットは3本検出された。何れも位置的には柱穴と考えられるが、P1は他の2本と比べて大きく、深いためやや疑問が残る。壁溝は南側の2辺で検出しており、幅12～24cm、深さ2～4cmで、貯蔵穴の落ち込みに繋がっている。

遺物は少なく、全て覆土からの出土であり、土師器の坏・鉢・甕等が認められる。



第303図　第96号住居跡・出土遺物

第96号住居跡出土遺物観察表（第303図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.2)	3.1		W'WRB	C	鈍い橙	20%	覆土 内外面やや磨耗
2	坏	(11.9)	3.4		B'WRW'B	B	明黄褐	30%	覆土 内外面磨耗著しい
3	坏	(11.8)	3.6		B'RW'W	A	鈍い橙	30%	覆土 内外面磨耗著しい
4	坏	(11.6)	3.9		B'W'W	B	浅黄	40%	覆土 内面磨耗著しい
5	壺?	(10.0)	9.8		W'WBB'	B	鈍い黄橙	10%	覆土 内外面磨耗著しい
6	甕	20.8	13.0		WW'RB'B	B	浅黄橙	40%	覆土 内外面磨耗著しい
7	甕	(16.7)	11.7		SB'WW'	B	橙	20%	覆土 内外面やや磨耗
8	土錘	覆土			SW'		浅黄橙		残3.2cm 径1.4cm 孔0.6cm 重3.01g
9	土錘	覆土			W'R		橙		残3.0cm 径1.5cm 重3.30g

第97号住居跡（第304図）

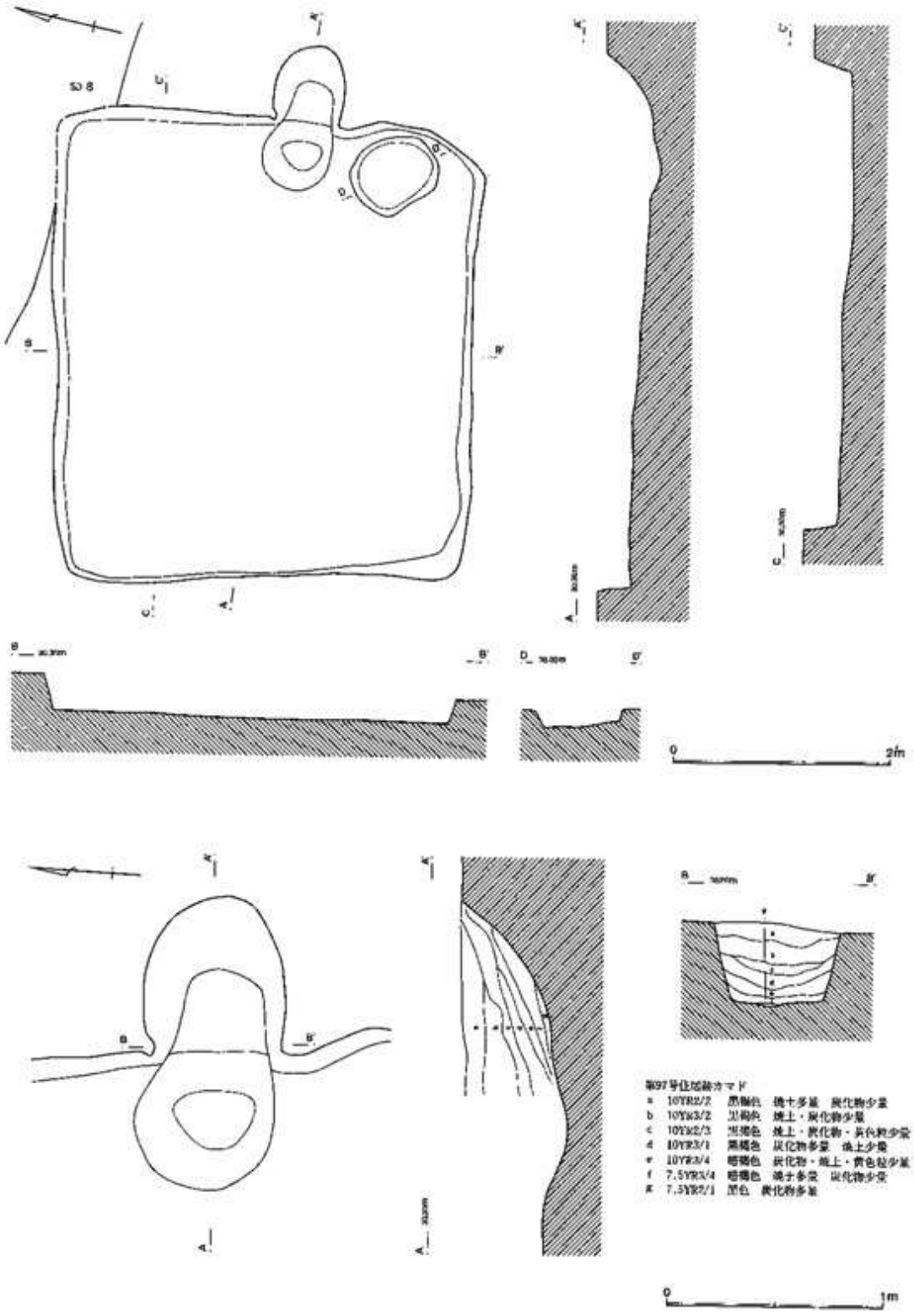
せ－4－13グリッドを中心に位置する。北東コーナーを第8号溝跡に切られるが、下場は検出できた。形態は東西にやや長い長方形で、規模は長軸4.36m、短軸3.82m、深さ0.22～0.42mである。主軸方位はN－76°－Eを指す。

床面には緩やかな起伏が見られ、東半部が低くなっている。壁は垂直に立ち上がる。覆土の観察は出来なかった。カマドは東壁中央より南側に設置される。燃焼部は床面を10cm程皿状に掘り込んでいる。覆土の観察は奥半しか出来なかったが、焼土・炭化物を含む黒褐色土が主体となっている。貯蔵穴はカマド右側に位置し、64cm×80cmの楕円形で、深さは約19cmを測る。

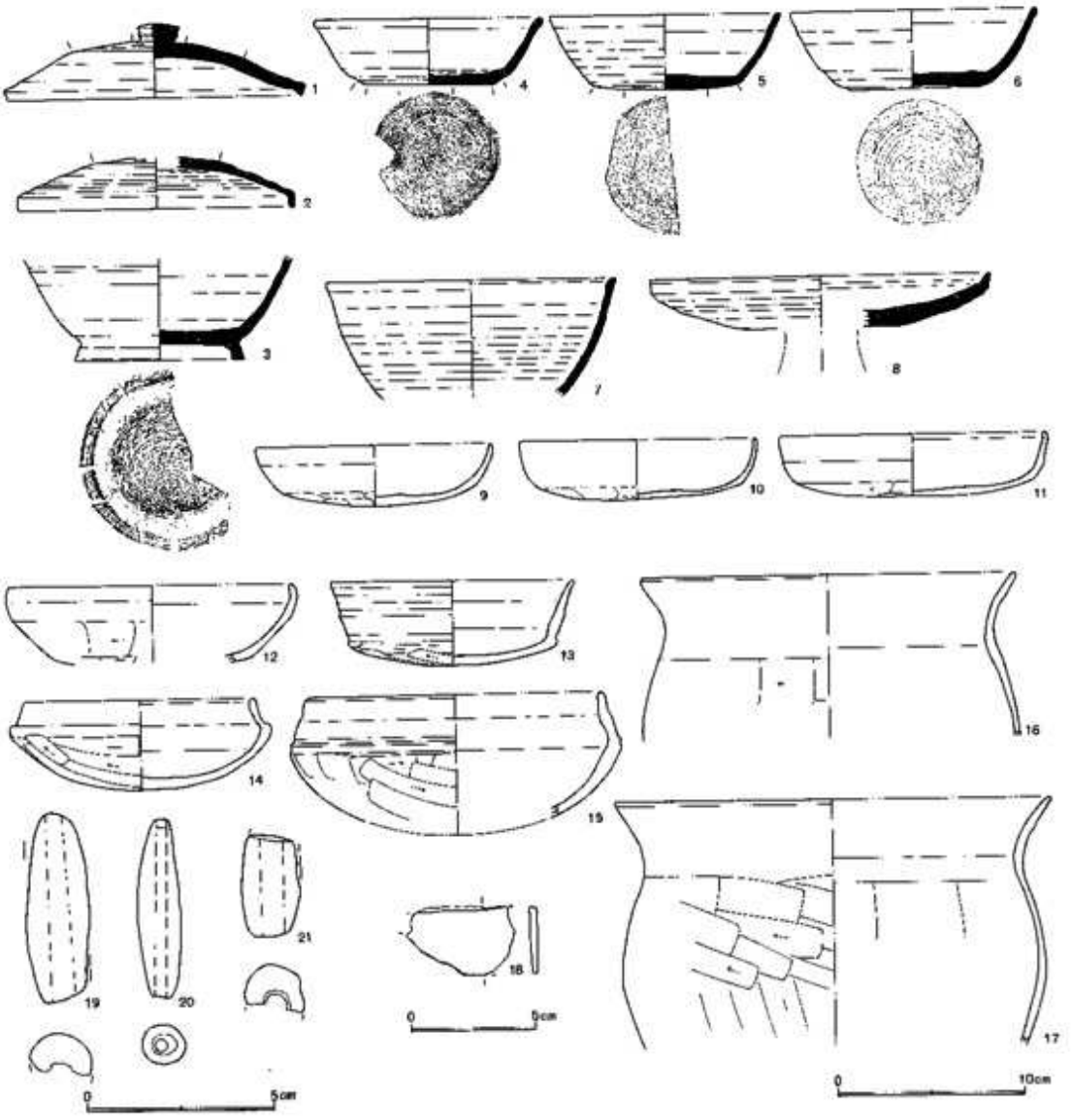
遺物は多量に出土し、重複する住居跡が見られないが遺物に混入が著しい。南比企産の須恵器が多く見られる。18の板状鉄製品の使途は不明である。

第97号住居跡出土遺物観察表（第305図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	15.6	3.9		WW'	A	青灰	95%	覆土 錐頂部及び天井部内面磨耗
2	蓋	(14.5)	2.7		WW'	B	灰白	30%	覆土 南比企産 高台坏蓋か
3	高台坏		5.4	(8.9)	BW'W	A	灰	40%	覆土 末野産か
4	坏	11.8	3.5	6.6	BWW'	B	青灰	70%	覆土 末野産か
5	坏	(12.2)	3.9	(7.6)	WW'	A	灰	25%	覆土 南比企産
6	坏	12.9	4.2	7.0	W	A	灰白	90%	覆土 南比企産
7	椀	(15.4)	6.3		WW'	B	灰白	25%	覆土 南比企産
8	高盤	(18.0)	2.7		WB'	B	灰白	15%	覆土 産地不明
9	坏	12.5	3.2		B'W'BWR	C	鈍い橙	60%	カマド 内外面磨耗著しい
10	坏	12.5	3.1		W'WB'R	B	橙	80%	覆土 内外面磨耗著しい
11	坏	(14.0)	3.3		W'B'	B	橙	20%	覆土 内面磨耗著しい
12	坏	(14.8)	4.1		B'W'WB	B	橙	20%	覆土 内外面磨耗著しい
13	坏	12.8	4.5		B'W'WR	B	橙	80%	覆土 混入
14	坏	12.0	4.8		W'B'WB	C	鈍い橙	75%	覆土 混入
15	坏	(15.4)	6.6		W'B'RWS	B	橙	20%	覆土 内面磨耗著しい 高師小僧多量付着
16	甕	19.7	8.7		B'W'WB	C	橙	70%	カマド 内外面磨耗著しい
17	甕	(23.3)	13.1		WW'B'R	B	橙	20%	覆土 内面磨耗著しい
18	板状鉄製品		覆土 重量12.71g						
19	土錘		覆土		RW		明赤褐		残5.1cm 径1.7cm 重9.53g
20	土錘		覆土		RW'B		黄橙	100%	長4.8cm 径1.2cm 孔0.3cm 重4.87g
21	土錘		覆土		BR		橙		残2.7cm 径1.7cm 重4.66g



第304図　第97号住居跡



第305図　第97号住居跡出土遺物

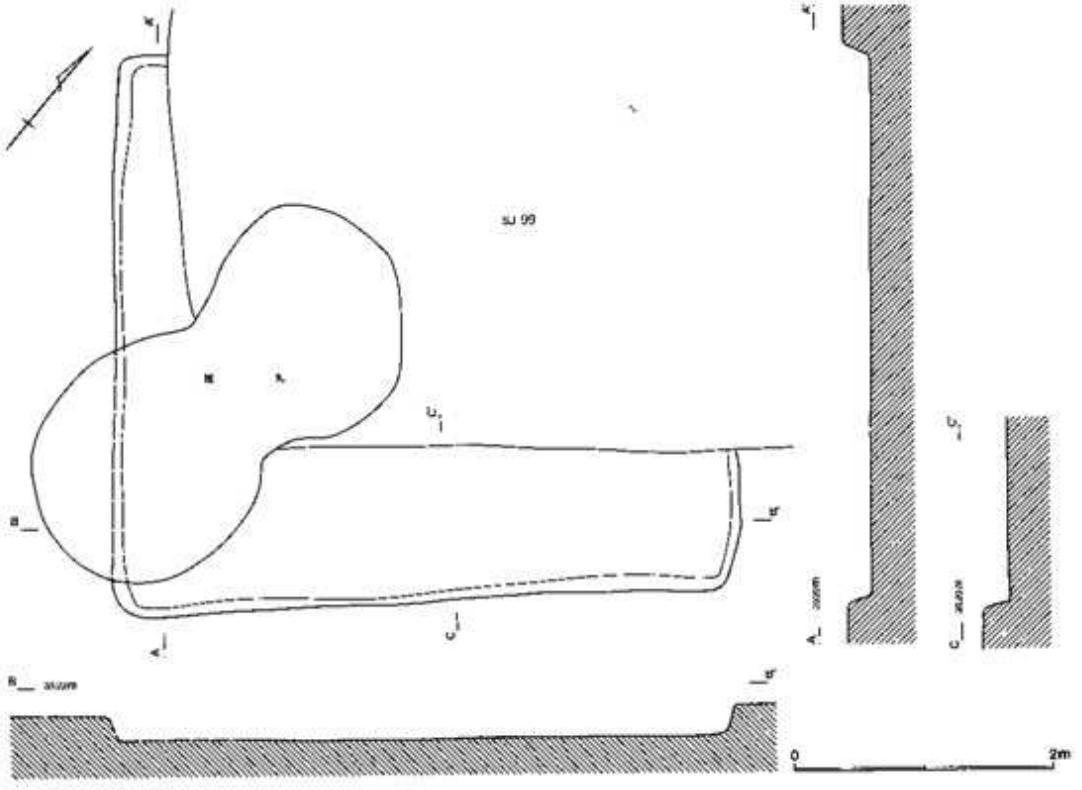
第98号住居跡（第306図）

せ－4－17グリッドを中心に位置し、第99号住居跡と重複している。新旧関係は明瞭ではないが、本住居跡が旧いと思われる。一部は攪乱で壊されている。形態は長方形になると想定され、規模は長軸4.92m、短軸4.34mで、深さは0.16～0.20mとなる。主軸方位はN－40°－Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土の状態は不明である。

カマド、貯蔵穴は検出されなかった。第99号住居跡に切り取られたと思われる部分に位置していたと推察される。

出土遺物は、全く見られない。



第306図　第98号住居跡

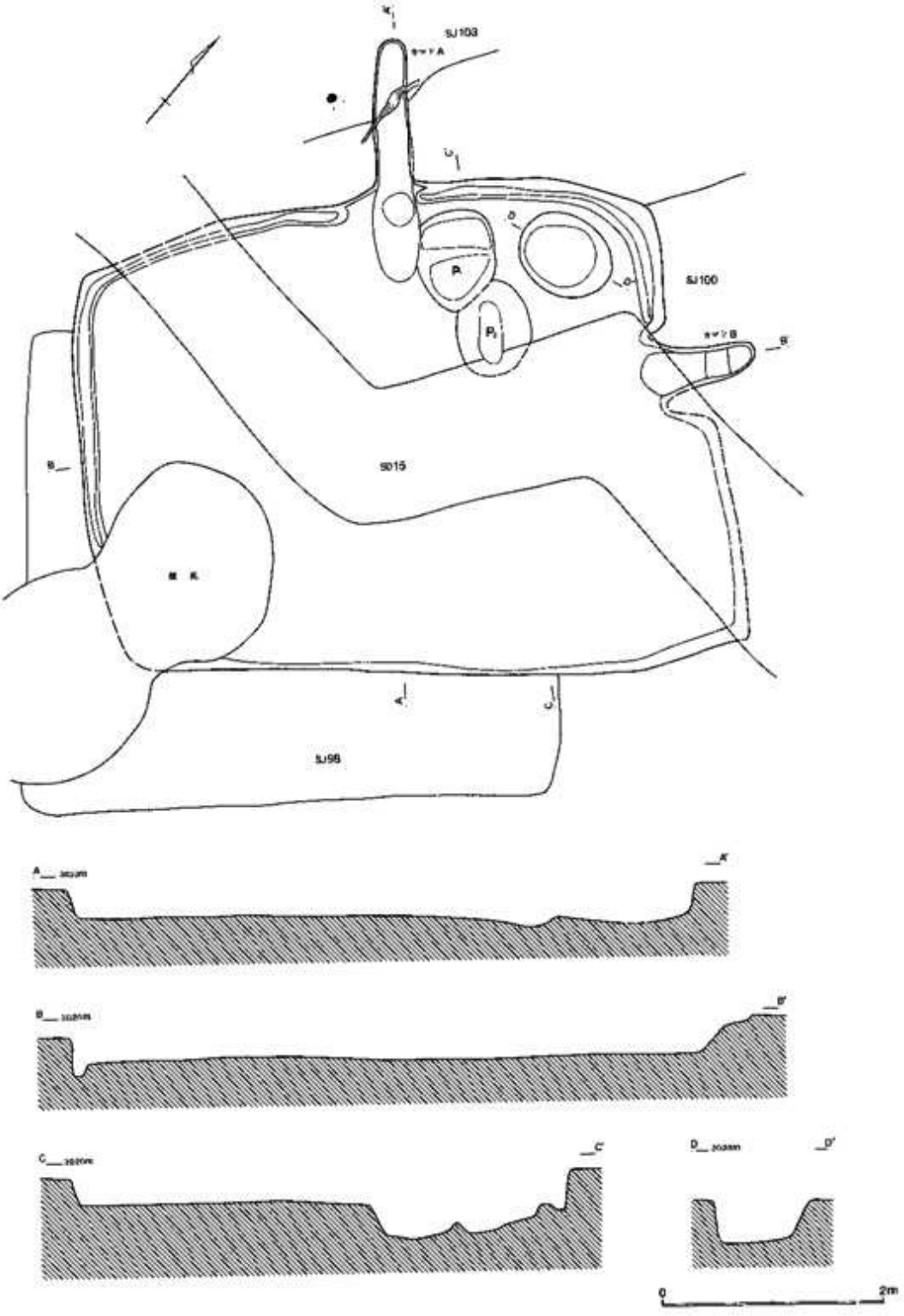
第99号住居跡（第307・308図）

せー4－22グリッドを中心に位置する。第98・100・103号住居跡を切り、中央部を第15号溝跡に切断され、南側コーナー部は攪乱で壊されている。形態は長方形で、規模は長軸5.22m、短軸4.16m、深さ0.22～0.28mである。主軸方位はN－47°－Wを指す。

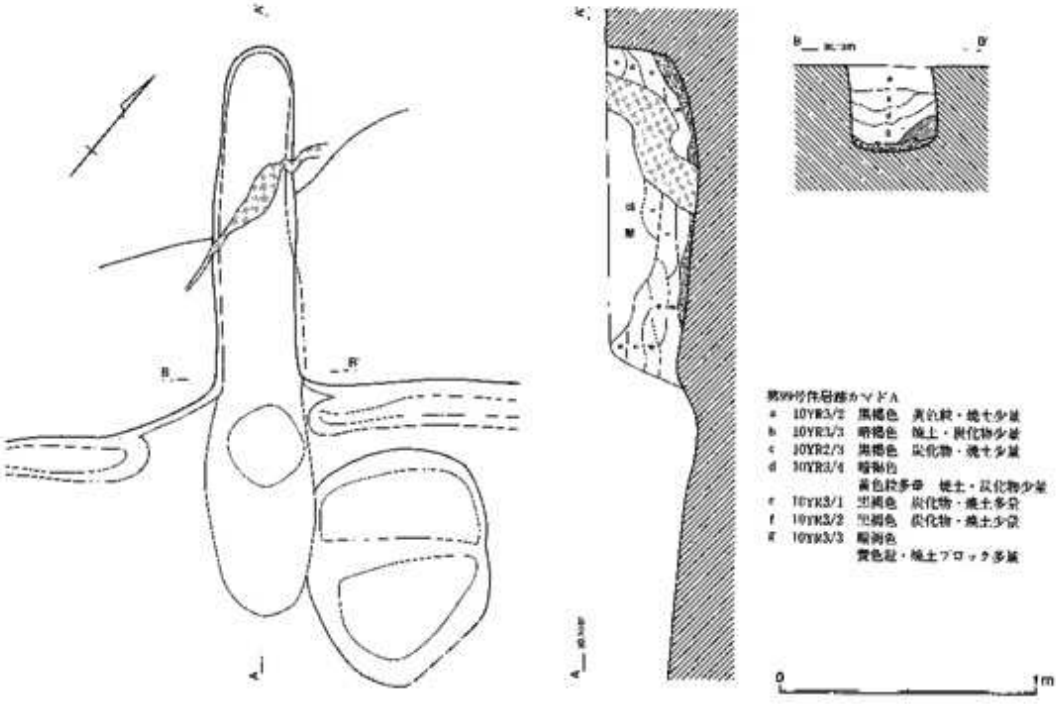
床面はほぼ平坦で、第15号溝跡の底面とほとんど同じ高さとなっている。壁は垂直に立ち上がる。覆土の状態は不明である。

カマドは2基検出された。カマドAは北西側の壁に設置される。燃焼部は床面を10cm程掘り込み、この部分の覆土は観察できなかった。煙道は長く延び、途中を噴砂に切られるが目立った歪みはない。最下層には炭化物層が残存していた。袖は検出できなかった。カマドBは北東側の壁に設置され、両袖を第15号溝跡に壊されるが、燃焼部底は確認できた。燃焼部の掘り込みはなく、煙道は段を持って立ち上がる。カマドAとBの新旧関係は、カマドBの遺存状態が悪く判断することはできなかった。

貯蔵穴は北側コーナーに位置し、72cm×90cmの楕円形で、深さは約41cmを測る。ピットはカマドAの脇に2本検出された。P1はカマドAの燃焼部の掘り込みに接する形で検出され、P2はP1のすぐ横にある。深さは共に33cm程度で、貯蔵穴とも考えられるが位置的に疑問が残る。壁溝は幅15～30cm、深さ3～10cmで、カマドAとBの間が広くなっている。カマドBの右側の壁は、第15号溝跡に壊されているが、南東側の壁からの繋がりから考えると、やや東側に突出すると思われる。



第307図　第99号住居跡

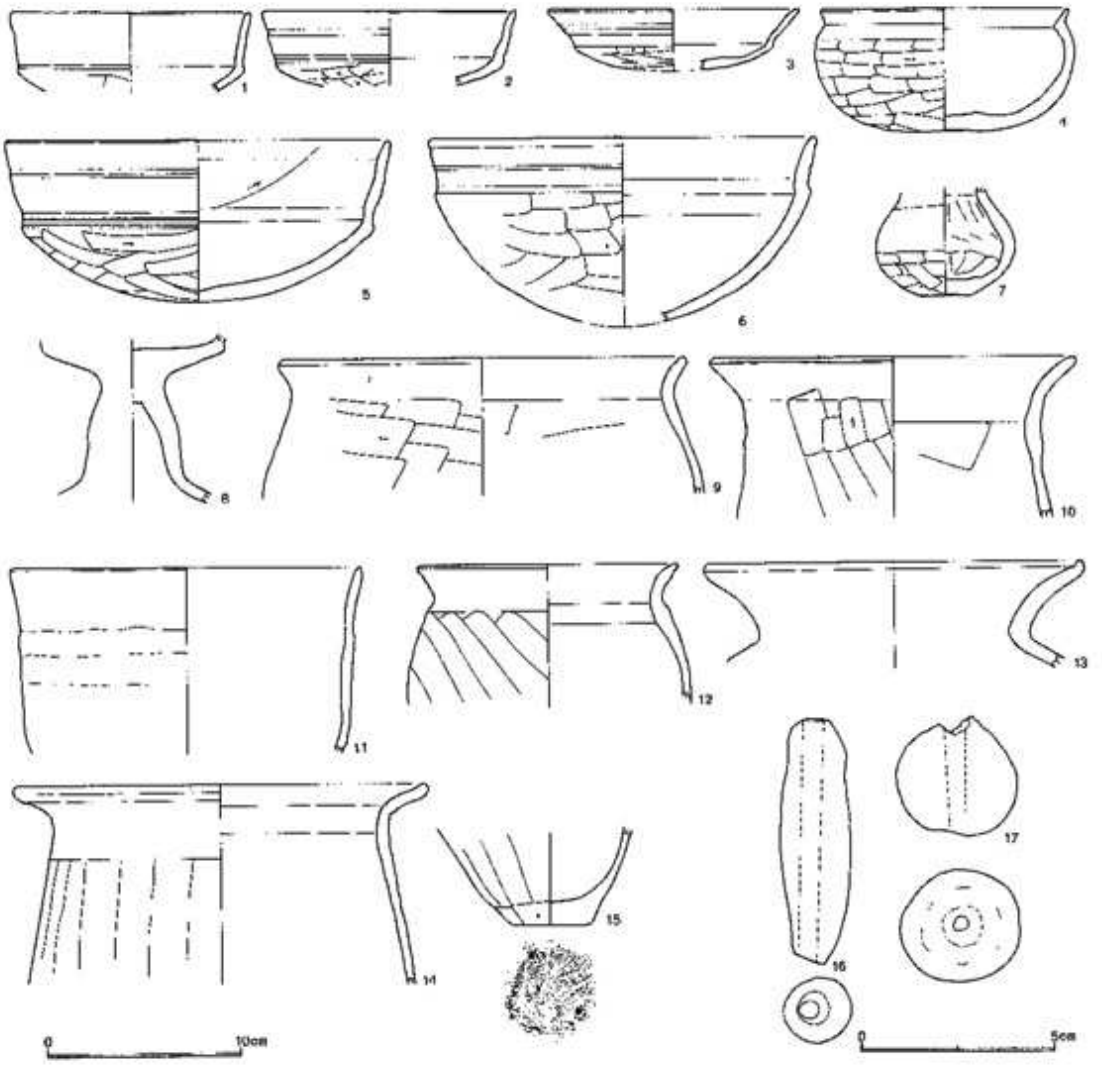


第308図　第99号住居跡カマド

第99号住居跡出土遺物観察表（第309図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.3)	4.2		WRBB'	A	橙	10%	覆土
2	坏	(12.9)	3.8		WBR片	B	浅黄橙	30%	貯穴 内外面やや磨耗
3	坏	(13.0)	3.1		WBB'	B	鈍い褐	20%	覆土 内外面やや磨耗
4	椀	12.6	6.4	4.0	WW'RB	A	橙	100%	覆土
5	鉢	(19.7)	8.4		WRBB'	A	浅黄橙	50%	覆土 内外面やや磨耗
6	鉢	(19.8)	10.5		WRBB'	A	灰白	30%	覆土 内面磨耗著しい
7	ミニチュア		5.6	2.5	WW'BR	B	明赤褐	100%	覆土 外面やや磨耗
8	高坏		9.0		WBRB'	B	鈍い橙	70%	覆土 内外面磨耗著しい
9	甕	(20.8)	7.1		WBS	B	灰白	20%	覆土
10	甕	(18.4)	8.4		片WW'BB'R	B	鈍い橙	20%	覆土
11	甕	(18.0)	9.6		WBB'R	B	褐灰	20%	覆土 内面磨耗著しい 外面接合痕明瞭
12	甕	(13.3)	7.3		WBW'R	B	灰白	20%	貯穴
13	壺	(19.4)	5.5		WBB'R	A	橙	30%	覆土
14	甕	(21.1)	10.4		WRB'B	B	灰白	30%	覆土 胎土密
15	甕		5.1	(4.0)	WRB'BS	B	橙	60%	覆土 底部木葉痕 内外面磨耗著しい
16	土錘	覆土			WBW'		浅黄橙	100%	長6.3cm 径1.8cm 孔0.5cm 重18.57g
17	土玉	覆土			WBW'		橙		長3.1cm 径4.1cm 孔0.4cm 重25.52g

遺物は多く、全て覆土からの出土である。他の遺構からの混入も考えられ、接合率はあまり良くない。出土土器の大半は土師器で、坏・高坏・鉢・甕・ミニチュア等が認められる。須恵器は器種不明の小片が1片あり、外面には自然釉が見られる。やや大型の土錘と土玉が1個づつ出土している。



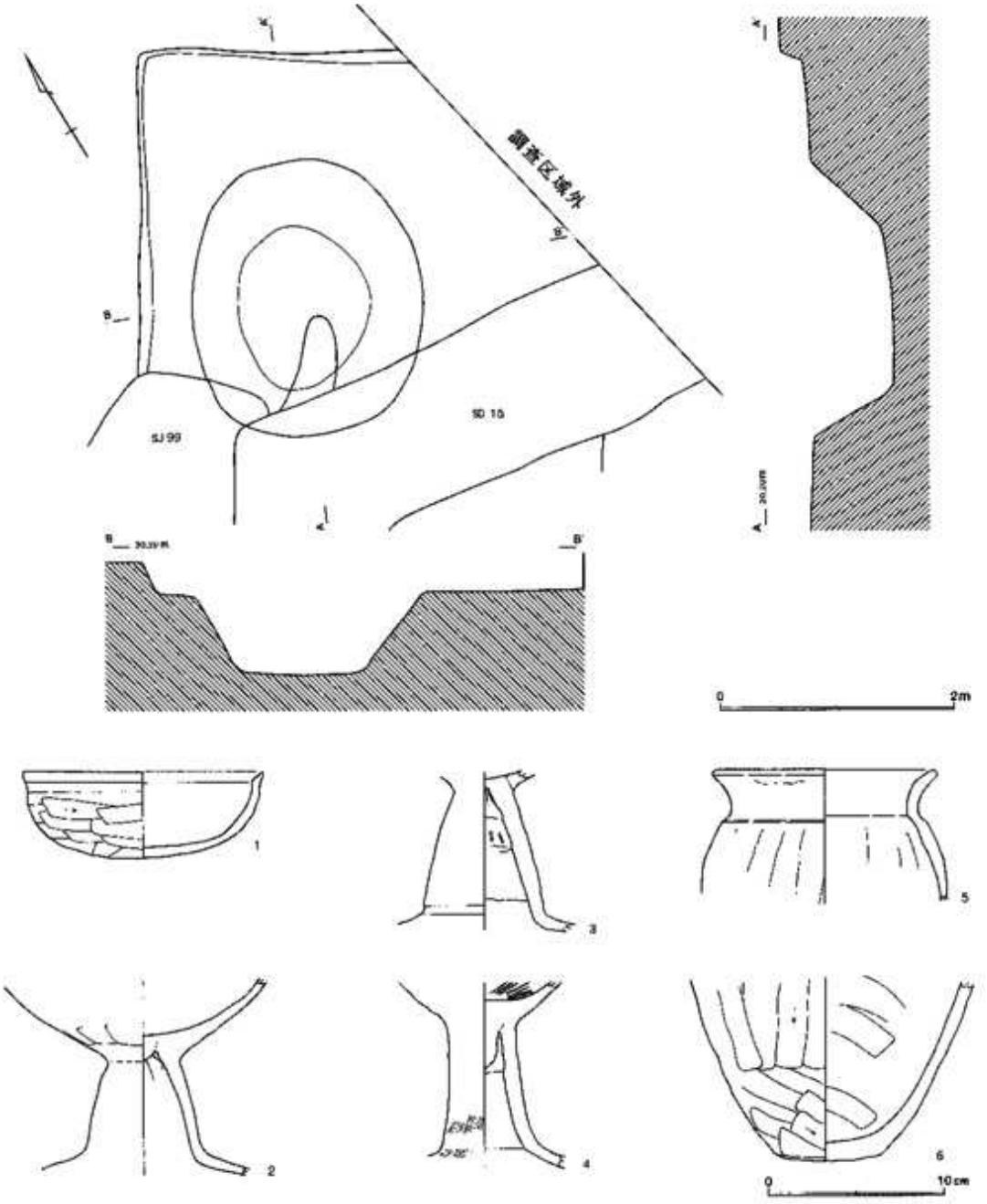
第309図　第99号住居跡出土遺物

第100号住居跡（第310図）

せ－４－22グリッドを中心に位置する。東側は調査区域外となり、南側を第99号住居跡、第15号溝跡に切られる。北側コーナー付近を検出しただけで形態、規模は不明とせざるを得ない。検出規模は北西壁2.70m、北東壁2.32m、深さ0.12～0.20mである。主軸方位は北西壁を基準とするとN－31°－Eとなる。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土の観察は出来なかった。カマドは検出されなかった。調査区域外或いは他の遺構に切られた箇所に設置されていたものと思われる。床面に200cm×230cm、深さ約70cmの土壙状の穴が検出されている。周辺の遺構調査時には見られず、本住居跡の床面精査時に検出されたため当初は貯蔵穴とも考えたが、位置や大きさにおいて疑問が残る。

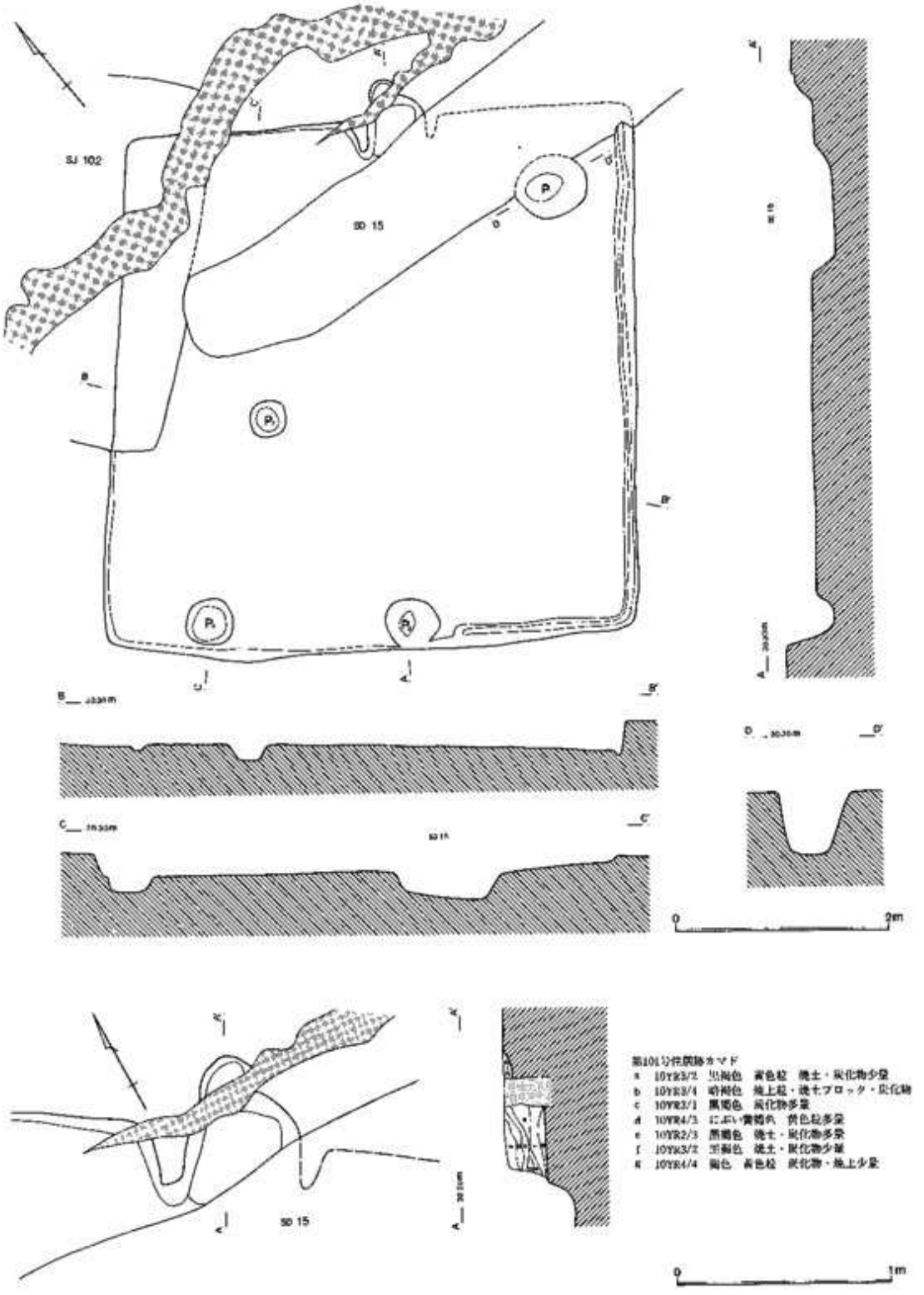
出土遺物は、全て貯蔵穴と考えた穴からの出土である。土師器の坏・高坏・甕・鉢等が認められる。



第310図　第100号住居跡・出土遺物

第100号住居跡出土遺物観察表（第310図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	13.5	4.9		WBB'RS	B	橙	90%	貯穴
2	高坏		11.0		WBR	B	橙	40%	貯穴 内外面磨耗著しい
3	高坏		9.0		WBRW'	A	鈍い橙	100%	貯穴 外面磨耗著しい
4	高坏		10.5		WBRS	B	橙	70%	貯穴 坏部内面暗文状の磨き
5	甕	(12.4)	7.6		WBB'S	B	鈍い赤褐	40%	貯穴 内外面磨耗著しい
6	甕		10.2	6.0	WRBB'S	A	灰褐	50%	貯穴 胎土粗



第311図　第101号住居跡

第101号住居跡（第311図）

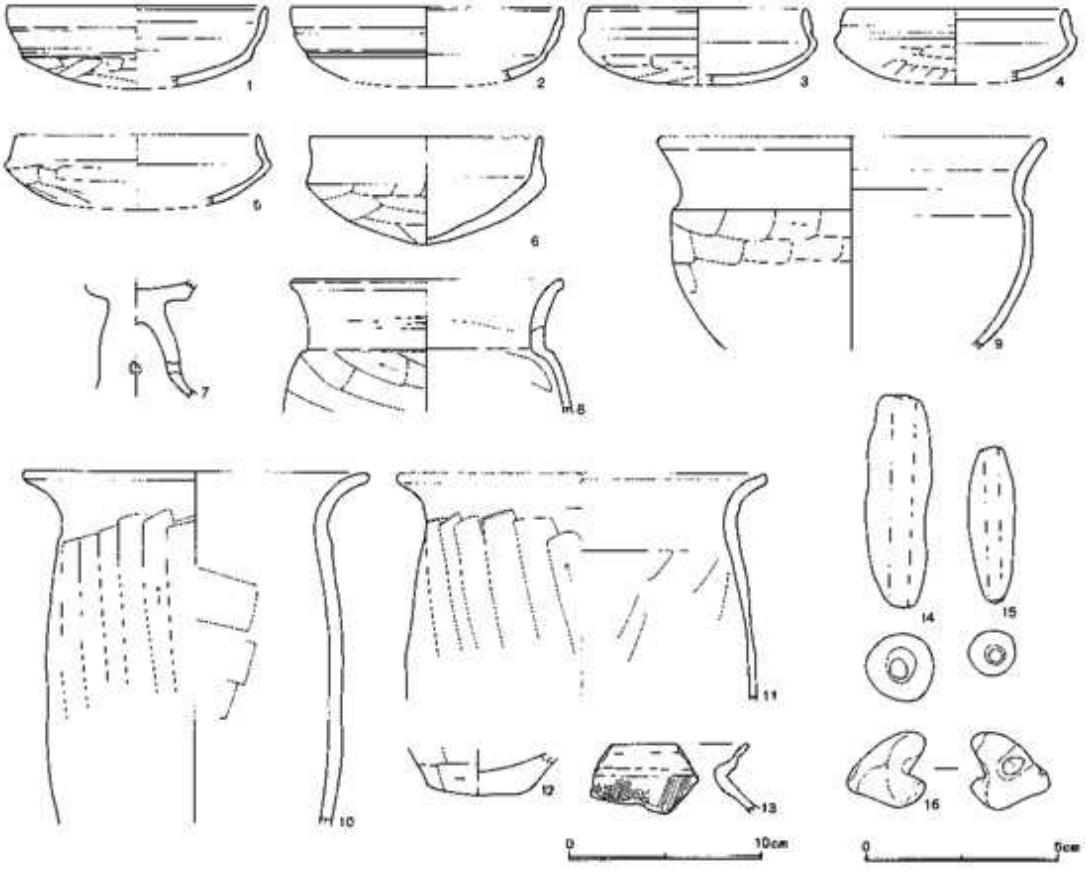
せ－４－19グリッドを中心に位置する。カマド右側の壁を第15号溝跡に切られる。第102号住居跡とも重複するが、新旧関係は判断できなかった。一辺が4.90ｍ前後の方形になると思われる。深さは0.11～0.25ｍで、第102号住居跡の床面の高さとほとんど変わらない。主軸方位はＮ－42°－Ｅを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土の状態は不明である。北側コーナー付近を最大幅55cmの噴砂が東西に走る。

カマドは北東側の壁の中央に設置される。燃焼部から右袖は第15号溝跡に壊されている。左袖から煙道先端にかけては噴砂に切られ、僅かではあるが歪みが生じている。

ピットは４本検出された。Ｐ１は一部を第15号溝跡に壊されるが、55cm×65cm程の楕円形で、深さは約59cmを測る。位置的に貯蔵穴とも考えられる。Ｐ３・Ｐ４は壁際で検出され、深さは共に15cm前後である。壁溝は南側の２辺で検出され幅10～22cm、深さ3～6cmとなっている。

出土遺物は多めに見られるが接合率は悪く、図示できたものは少ない。出土土器は全て土師器である。混入だが、Ｓ字口縁の破片が１片出土している。16は貝巣穴痕泥岩で、これ以外にも２個出土している。



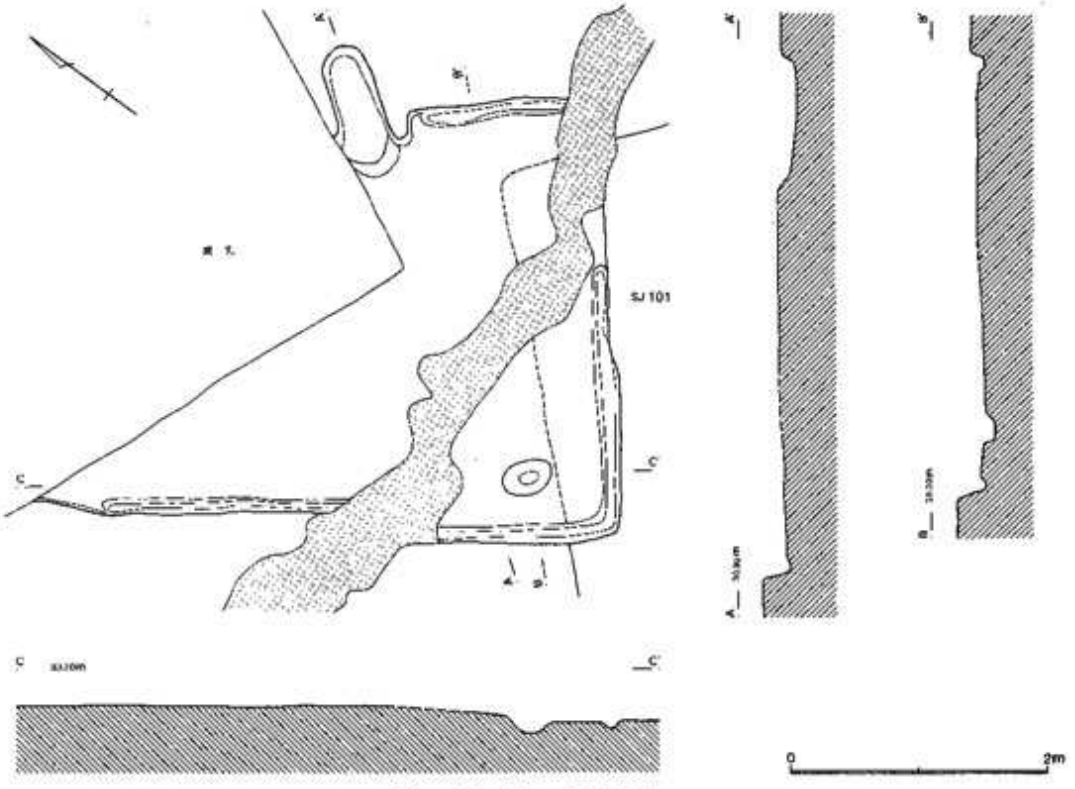
第312図　第101号住居跡出土遺物

第101号住居跡出土遺物観察表（第312図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.4)	4.2		WBB'R	B	橙	25%	覆土 内外面磨耗著しい
2	坏	(14.0)	3.8		WW'BB'RS	C	鈍い橙	25%	覆土 内外面磨耗著しい
3	坏	(11.2)	4.0		WBB'R	A	鈍い橙	25%	覆土
4	坏	(11.4)	3.7		WBRB'	B	鈍い橙	25%	覆土 内外面やや磨耗
5	坏	(12.5)	3.6		WBRB'S	B	浅黄橙	25%	覆土 内外面磨耗著しい
6	坏	(12.0)	5.6		WBR	A	浅黄橙	35%	覆土 内外面磨耗著しい
7	高坏		5.9		WBRB'	B	橙	100%	覆土 内外面磨耗著しく脚部に2孔有り
8	壺	(13.7)	6.9		WRBB'S	A	明褐	50%	貯穴
9	鉢	(19.8)	11.0		WRBB'S	B	明褐灰	25%	覆土 内面磨耗著しい
10	甕	(17.7)	18.2		WBRB'	B	灰白	20%	覆土
11	甕	(18.9)	11.7		B'RW'W片	B	浅黄橙	30%	覆土
12	甕		2.4	4.7	WBB'S	B	鈍い褐	100%	覆土 内外面磨耗著しい 胎土粗
13	台付甕				WW'RB'	B	浅黄橙		覆土 S字口縁内外面やや磨耗 混入
14	土錘		覆土		SWB		明黄褐	100%	長5.6cm 径1.8cm 孔0.6cm 重14.55g
15	土錘		覆土		BW'R		灰白	100%	長4.0cm 径1.3cm 孔0.4cm 重3.89g
16	貝巣穴泥岩		覆土						

第102号住居跡（第313図）

せ－4－24グリッドを中心に位置し、北側の大部分を攪乱によって切り取られている。第104号住居跡を切り、第101号住居跡とも重複するが、新旧関係は不明である。形態は長方形になると思われ、残存規模は長軸4.52m、短軸3.38m、深さ0.02～0.20mとなっている。主軸方位はN－55°



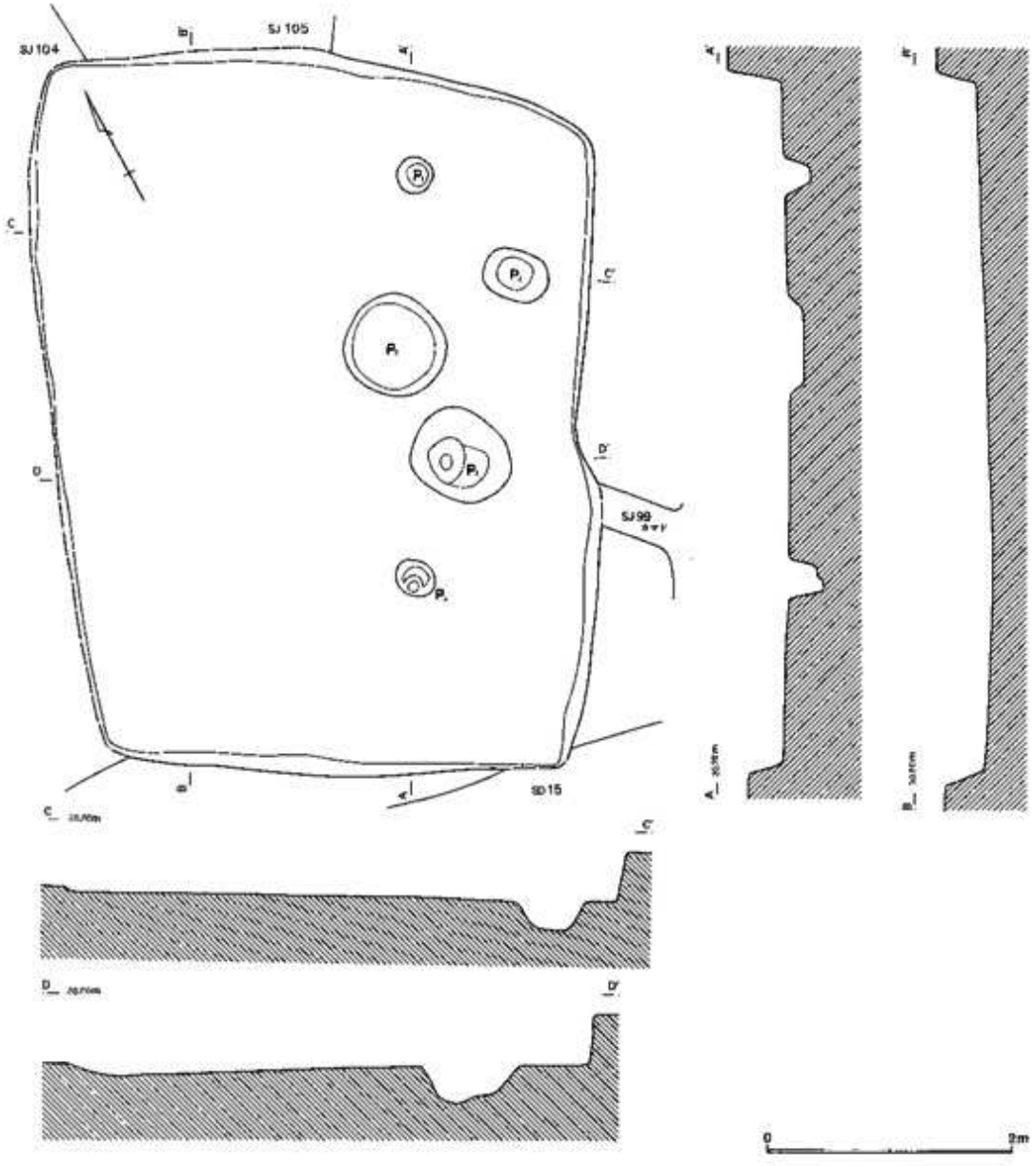
第313図　第102号住居跡

－Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。東西に最大幅70cmの噴砂が走り、南東側の壁に歪みが生じている。床面は噴砂を境に南側が僅かに低くなっている。

カマドは北東側の壁に設置され、左袖は攪乱に壊される。燃焼部は床面を13cm程掘り込む。ピットは南のコーナー近くで1本検出された。壁溝は部分的に途切れるが、幅10～20cmで、深さは3～7cmを測る。

遺物は全く見られなかった。



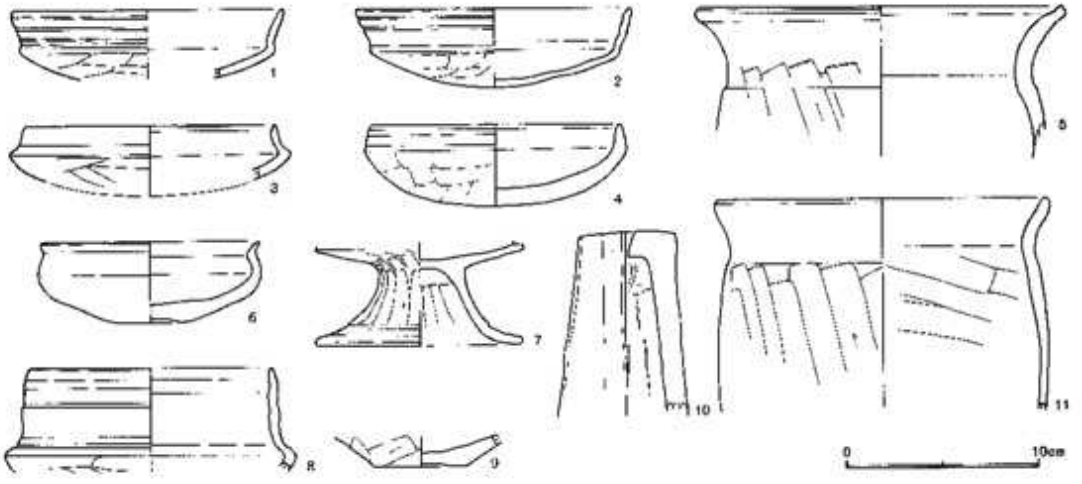
第314図　第103号住居跡

第103号住居跡（第314図）

せ－4－23グリッドを中心に位置する。第99・104・105号住居跡、第15号溝跡と重複し、本住居跡が最も旧い。形態はやや歪んだ長方形で、規模は長軸5.84m、短軸4.62mで、遺構確認面からの深さは0.24～0.44mである。主軸方位はN－26°－Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土の観察は出来なかった。カマドは検出されなかった。ピットは5本検出されたが、何れが柱穴となるのかは判断できなかった。

遺物は覆土からの出土で、全て土師器である。量的には多めに見られるが接合率が悪く、図示できたものは少ない。



第315図　第103号住居跡出土遺物

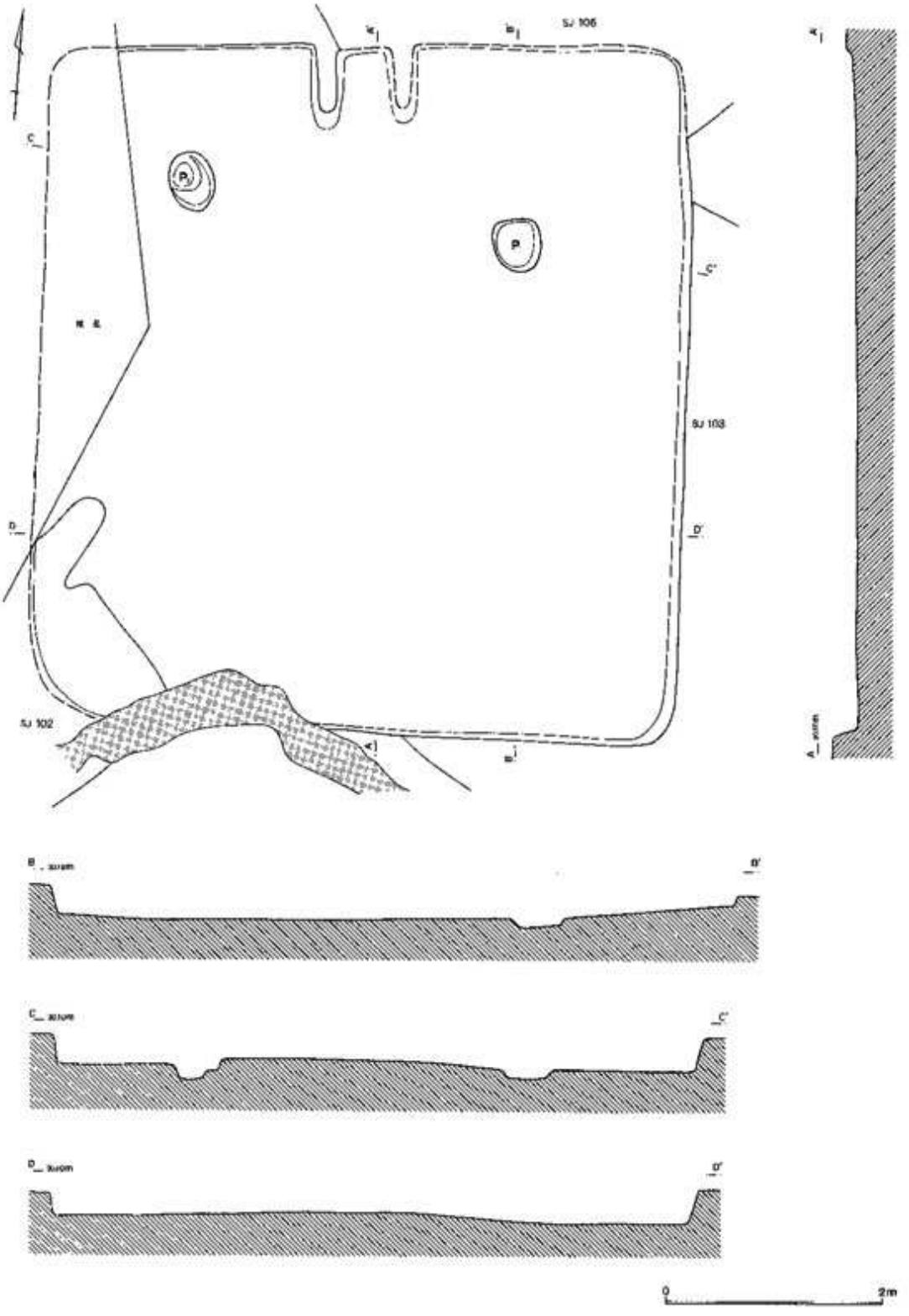
第103号住居跡出土遺物観察表（第315図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(14.0)	3.5		WBRW'	B	灰褐	25%	覆土 全体的に歪み有り 内外面やや磨耗
2	坏	14.2	4.1		WBRW'S	B	鈍い橙	60%	覆土 内外面磨耗著しい
3	坏	12.9	2.8		WBB'R片	A	暗褐	25%	覆土
4	坏	(13.0)	4.2		WBB'R	B	明褐灰	60%	覆土 内外面磨耗著しい
5	甕	18.7	7.7		WBRB'S	B	灰白	30%	覆土 胎土粗
6	坏	11.0	4.2		WBB'R	B	明赤褐	50%	覆土 内外面磨耗著しい
7	高坏		5.4	10.7	WBRB'W'	A	浅黄橙	90%	覆土
8	坏	12.4	5.3		WBB'R	A	褐灰	25%	覆土
9	甕		1.5	4.8	WW'BB'RS	B	橙	100%	覆土 内外面やや磨耗 上げ底
10	支脚	覆土			WBB'R片		橙	90%	上端径4.9cm 残高9.5cm 磨耗著しい
11	甕	(17.0)	10.9		WBB'片S	B	灰褐	20%	覆土

第104号住居跡（第316図）

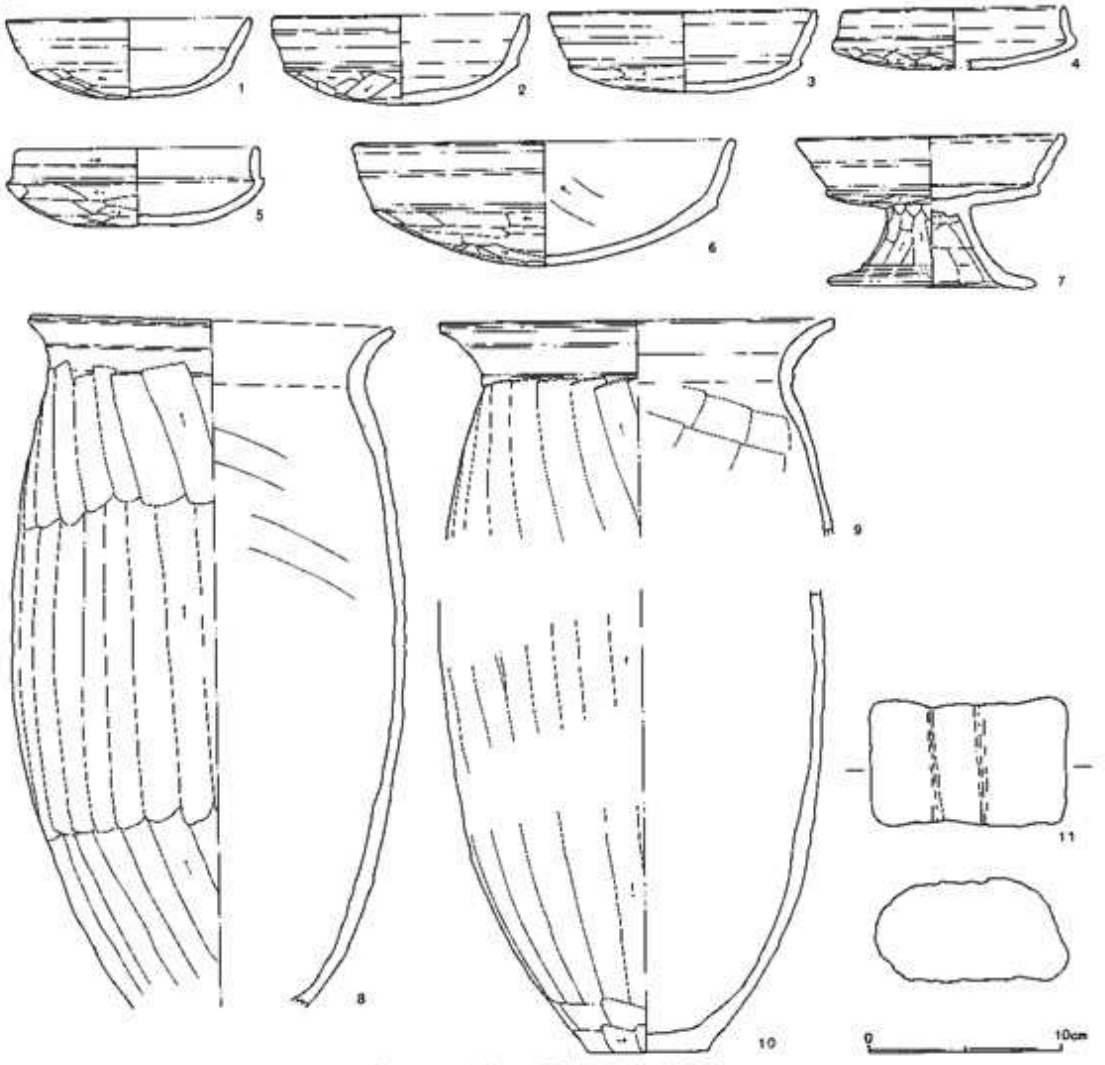
そ－4－3グリッドを中心に位置し、西側の一部を攪乱に壊される。第103住居跡を切り、第102・105・106号住居跡に切られる。形態は方形で、規模は長軸6.32m、短軸6.04m、深さ0.20～0.28mである。主軸方位はN－2°－Wを指す。

床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ち上がる。南壁の一部には第101・102住居跡と同じ大きな噴砂が東西に走る。カマドは北壁中央に設置される。右袖は重複する第106号住居跡によ



第316図　第104号住居跡

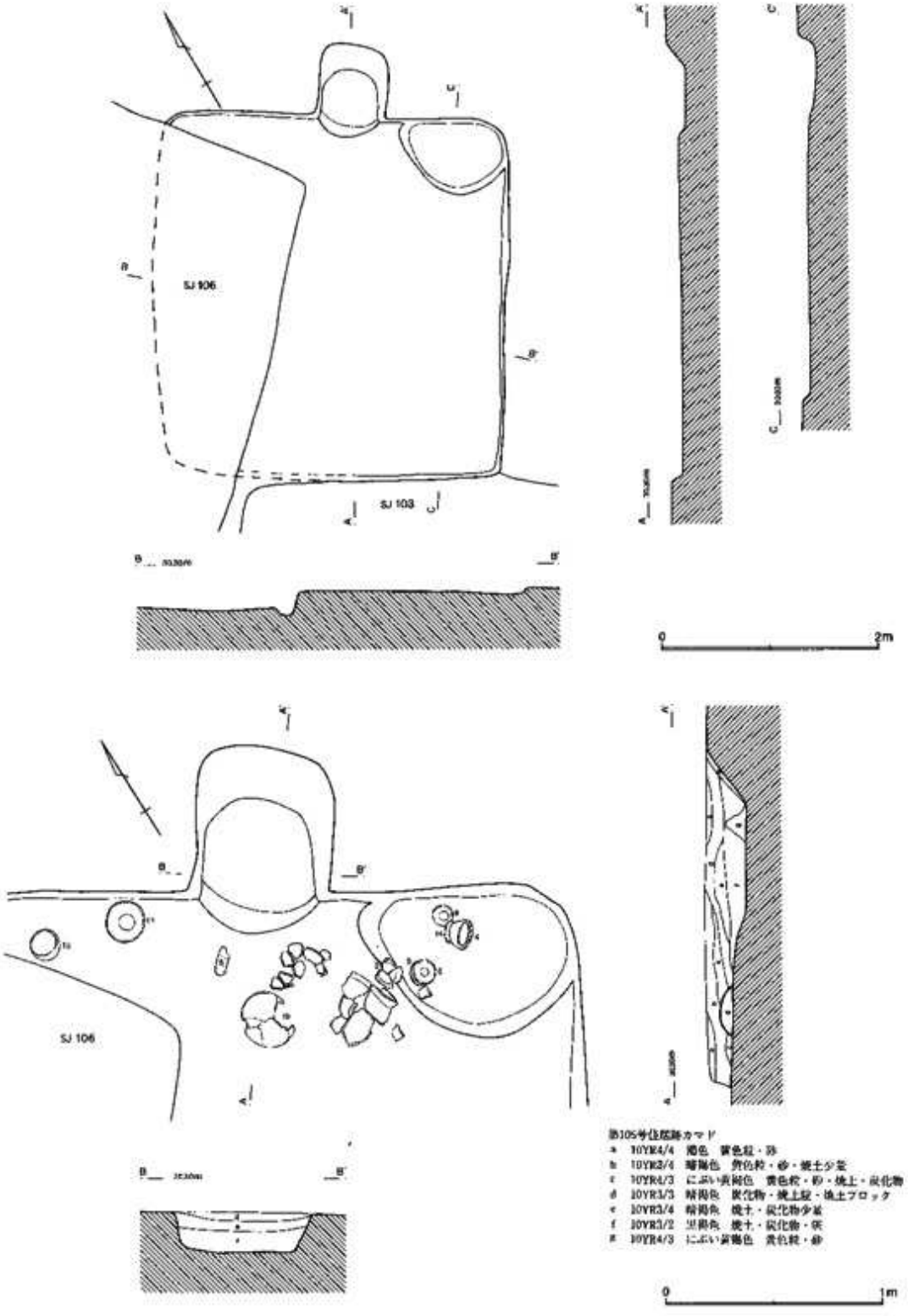
って削られており、僅かな痕跡によってその範囲が摑める程度となっている。燃焼部の掘り込みは見られない。ピットは2本検出され、共に柱穴の可能性はあるが確認出来なかった。出土遺物は土師器がほとんどで、須恵器は坏底部が1片である。11は角閃石安山岩で2条の刃跡が見られる。



第317図　第104号住居跡出土遺物

第104号住居跡出土遺物観察表（第317図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.5	4.1		B'W'WBR	B	鈍い橙	100%	覆土 内外面磨耗著しい
2	坏	13.2	4.6		B'W'BWR	B	橙	85%	覆土 内外面磨耗著しい
3	坏	13.8	4.2		B'WW'R	B	浅黄橙	80%	覆土 内外面磨耗著しい
4	坏	(11.3)	3.1		B'W'WR	B	浅黄橙	30%	覆土
5	坏	12.2	4.0		B'WW'RB	B	橙	90%	覆土 底部大きなヘラケズリで上げ底
6	鉢	19.5	6.4		WW'B'RB	A	鈍い褐	90%	覆土
7	高坏	13.7	7.8	10.3	W'WB'RB	A	橙	90%	覆土
8	甕	18.8	35.4		WBRSW'	B	鈍い黄橙	80%	覆土 内面磨耗著しい 胴部下被熱
9	甕	20.4	11.2		WBRS	A	灰白	70%	覆土 胎土緻密
10	甕		24.0	6.2	WBRS	B	灰白	60%	覆土 内外面磨耗
11	砥石か	覆土 長さ6.6cm 幅10.3cm 厚さ5.3cm 重量265g 角閃石安山岩製 刃跡有り							



第105号住居跡カマド
a 10YR4/4 褐色 黄色粒・砂
b 10YR3/4 暗褐色 黄色粒・砂・焼土少量
c 10YR4/3 にぶい黄褐色 黄色粒・砂・焼土・炭化物
d 10YR3/3 暗褐色 炭化物・焼土粒・焼土ブロック
e 10YR3/4 暗褐色 焼土・炭化物少量
f 10YR3/2 黒褐色 焼土・炭化物・灰
g 10YR4/3 にぶい黄褐色 黄色粒・砂

第318図　第105号住居跡

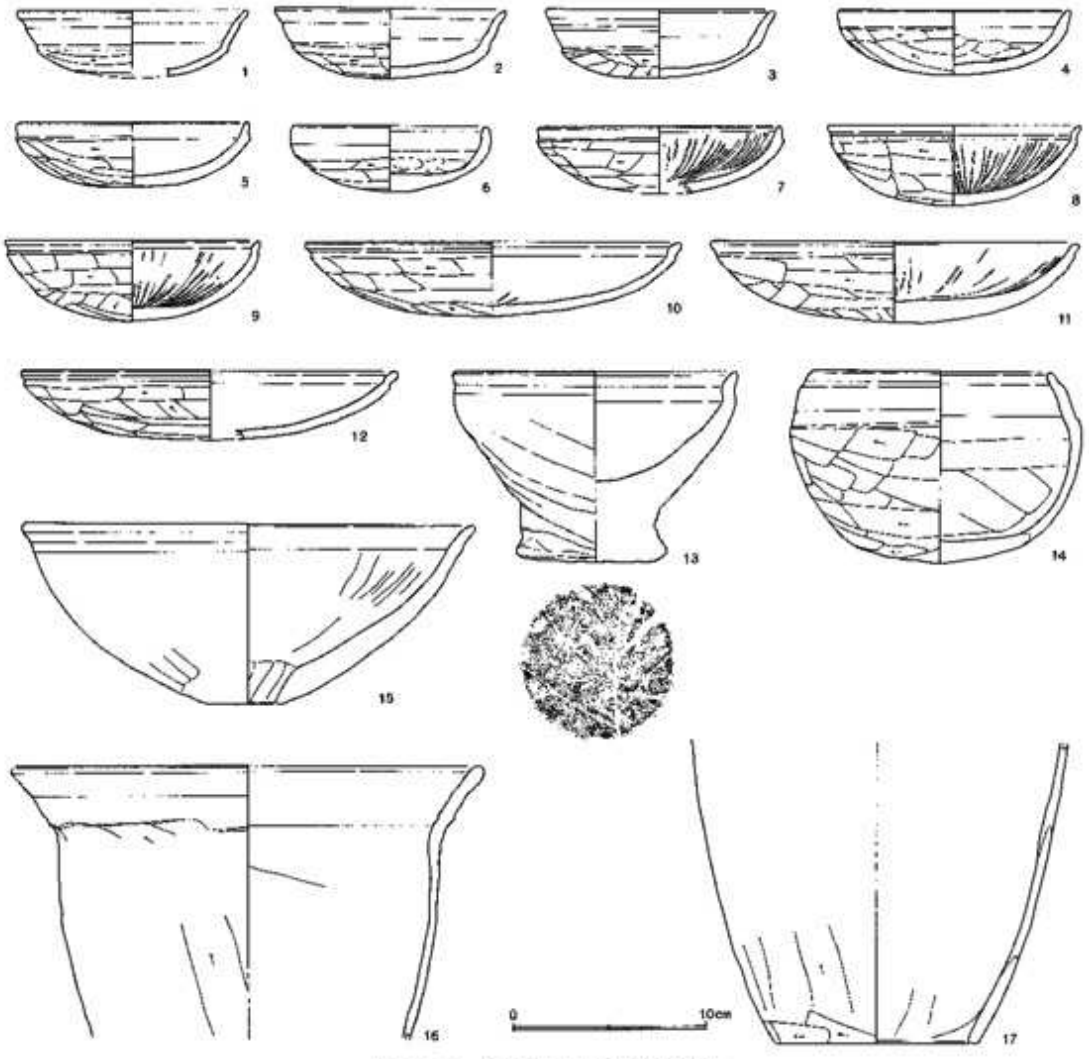
第105号住居跡（第318図）

そ－4－2グリッドを中心に位置する。第103・104号住居跡を切り、第106号住居跡に切られる。形態は方形で、規模は長軸3.30m、短軸3.06m、深さは0.04～0.08mと極めて浅い。主軸方位はN－32°－Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。深度が浅く覆土の観察は出来なかった。

カマドは北壁中央よりやや東側に設置される。燃焼部は壁外にあり、床面より7cm程低くなっている。貯蔵穴は北東コーナーに接しており、68cm×98cmの歪んだ楕円形で、深さは8cmを測る。

出土遺物は、カマドと貯蔵穴周辺に集中している。カマドの手前では長さ14cm程の河原石が出土しており、火を受けた跡は明瞭ではないが支脚として使用された可能性も考えられる。出土土器はあまり多くなく、須恵器蓋と甕の細片が各1片以外は土師器である。13は底部に木葉痕が残り、台部には捻れが見られる。口縁部はヨコナデされるが体部は未調整である。



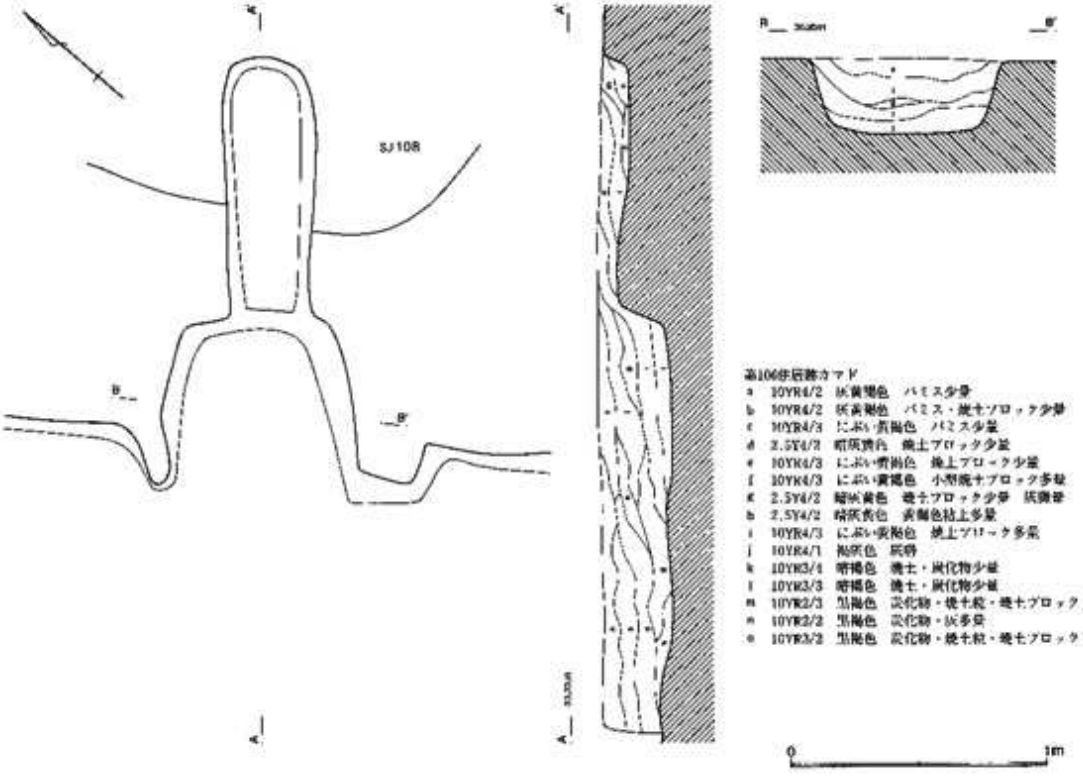
第319図　第105号住居跡出土遺物

第105号住居跡出土遺物観察表（第319図）

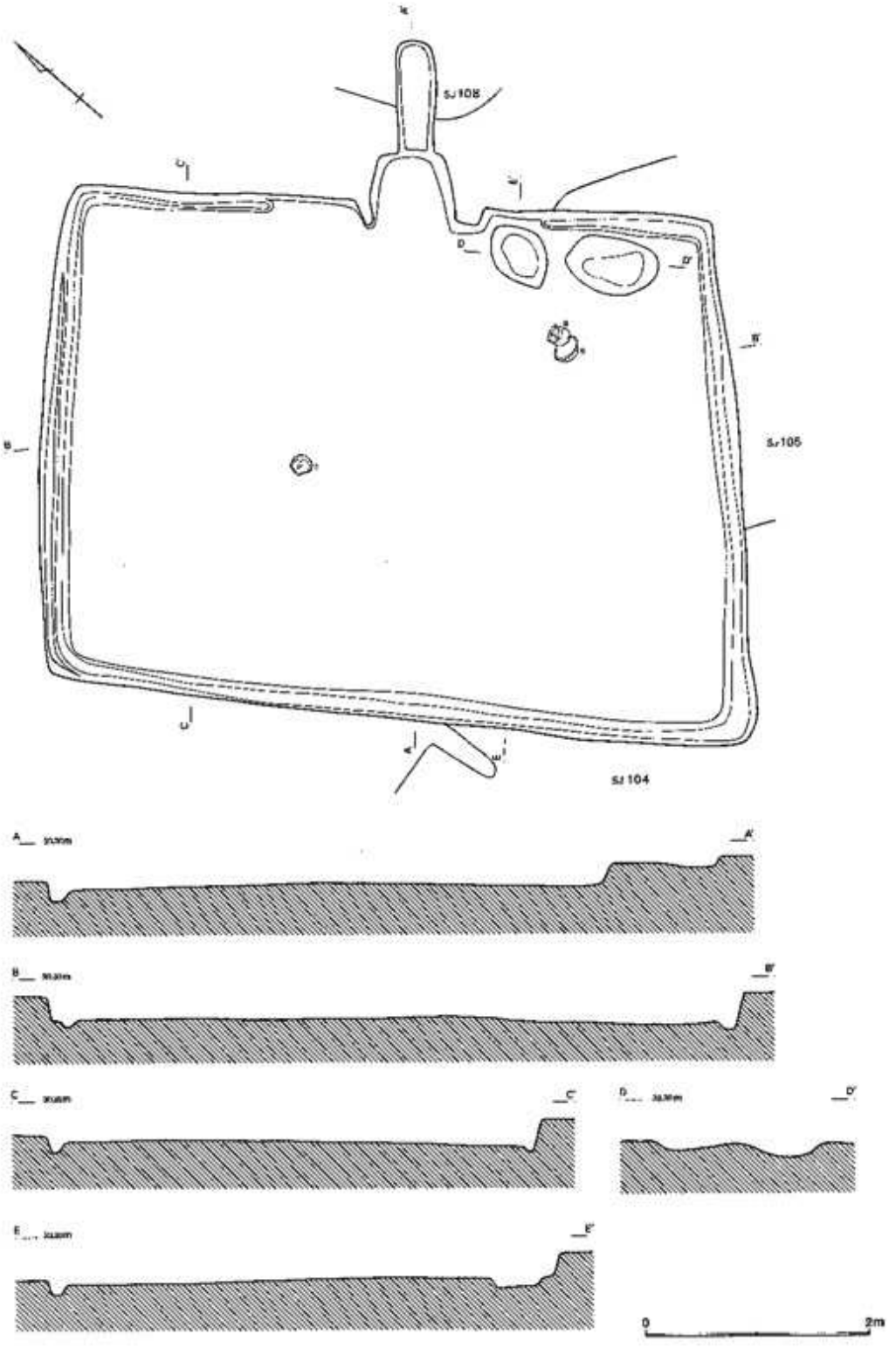
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.8)	3.4		B'W'RW	B	橙	50%	覆土 内外面やや磨耗 色調内面黒
2	坏	12.0	3.6		B'W'WRB	B	橙	90%	No8 貯穴周辺
3	坏	11.7	3.5		WW'B'RB	B	明黄褐	95%	No9 貯穴 内外面磨耗著しい
4	坏	11.9	3.4		W'B'WBR	A	浅黄橙	100%	No15 貯穴床面 内外面やや磨耗
5	坏	12.0	3.3		W'B'WR	A	橙	100%	No10 貯穴床面 内面磨耗著しい
6	坏	10.0	3.4		B'W'WRB	B	鈍い橙	100%	No13 貯穴 内外面やや磨耗
7	坏	12.4	3.4		B'W'WBR	B	橙	85%	覆土 内外面磨耗著しい
8	坏	12.9	4.2		WW'B'B	B	橙	95%	覆土 放射状暗文
9	坏	13.0	4.2		B'W'BW	B	橙	75%	No5,6 覆土床面 カマド 内外面やや磨耗
10	皿	19.2	3.9		B'WW'RB	C	浅黄橙	90%	覆土 内面磨耗著しい
11	皿	18.8	4.1		B'W'WRB	B	浅黄橙	95%	No2 覆土床面 内外面磨耗著しい
12	皿	19.3	3.6		B'W'WRB	C	浅黄橙	80%	No6 覆土床面 カマド 内面磨耗著しい
13	椀	14.6	9.7	7.7	WW'BB'R	A	黄橙	100%	No1 覆土床面 内側黒 底部木葉痕
14	椀	12.2	9.7		B'W'WRB	B	橙	95%	No14 貯穴 内側灰褐 二次被熱
15	甑	23.2	9.3	3.7	WW'RB'	B	橙	80%	No4 覆土床面 二次被熱 磨耗著しい
16	甑	24.0	14.1		B'W'WR	B	橙	50%	覆土 内外面磨耗著しい
17	甑		15.7	10.3	B'W'WR	B	橙	40%	覆土 内外面磨耗著しい

第106号住居跡（第320・321図）

そ－4－3グリッドを中心に位置する。第104・105・108号住居跡と重複し、何れの住居跡より新しい。形態はやや歪んだ長方形で、規模は長軸6.36m、短軸4.36m、深さ0.08～0.22mである。



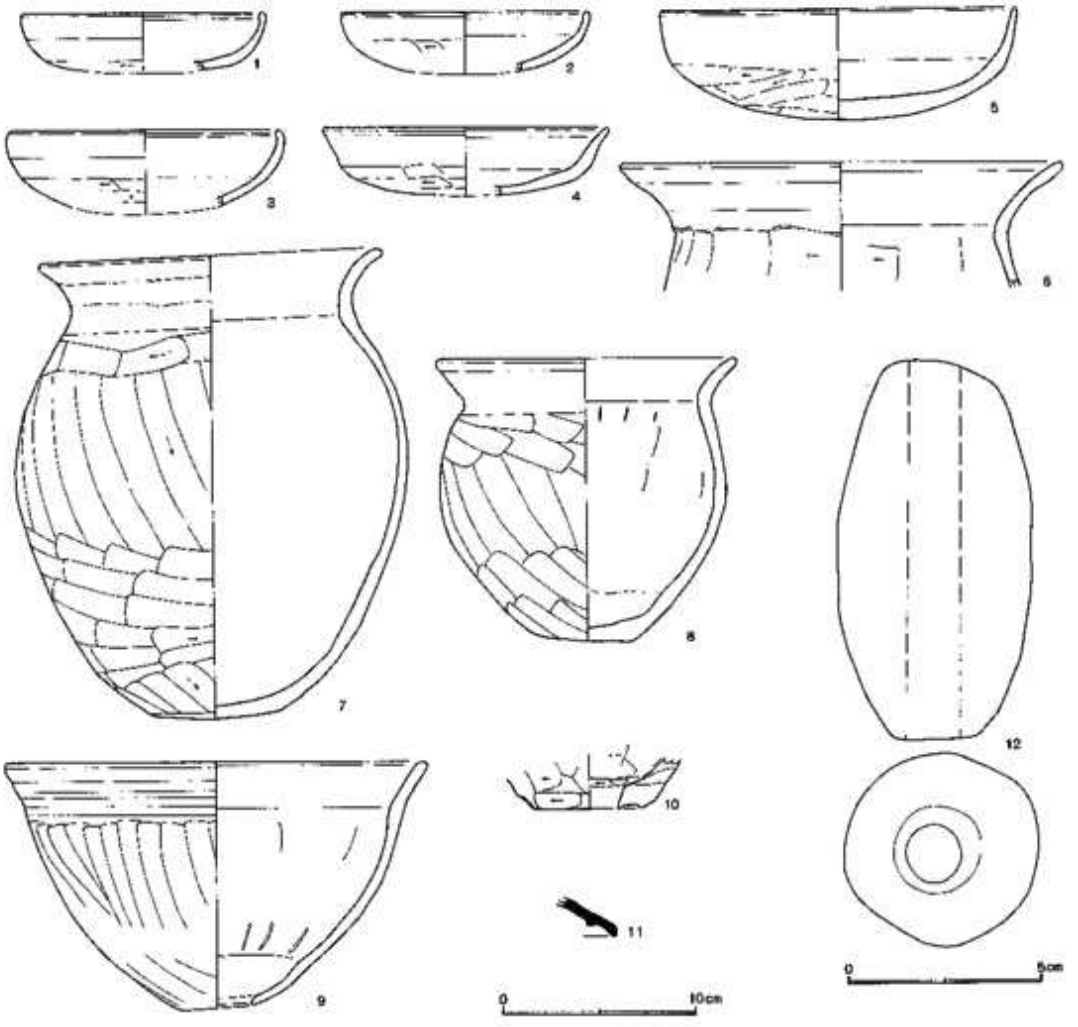
第320図　第106号住居跡カマド



第321図　第106号住居跡

主軸方位はN－53°－Eを指す。

床面には緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ち上がる。カマドは北東側の壁に設置される。



第322図　第106号住居跡出土遺物

第106号住居跡出土遺物観察表（第322図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.4)	3.0		WW'	B	橙	25%	覆土 内外面磨耗著しい
2	坏	(12.7)	3.1		WW'	B	橙	15%	覆土 内外面磨耗著しい
3	坏	(13.9)	4.0		WW'BB'R	B	鈍い橙	20%	覆土 内外面磨耗著しい
4	坏	(14.8)	3.5		WW'BB'	A	鈍い橙	25%	覆土 胎土緻密 内外面磨耗著しい
5	坏	18.8	5.7		WW'	A	橙	90%	No3 覆土(+7.2cm) 内外面磨耗著しい
6	甕	(22.5)	6.5		W'WB'R	C	橙	20%	覆土 内面口縁被熱か
7	甕	17.4	23.9	6.8	RWW'B'B	B	橙	95%	カマドNo1 覆土床面 胎土密 内外面磨耗
8	小形甕	15.4	14.6	5.0	RWW'B	B	鈍い橙	80%	No1 覆土床面 内外面磨耗 内面黒色
9	甑	21.6	12.8	3.4	WW'RSB'	B	浅黄橙	95%	No2 覆土床面 内外面磨耗著しい
10	甑		2.8	2.8	RWW'BB'	A	黄橙	50%	覆土 雑な作り
11	蓋				WW'	A	褐灰		覆土 末野産か
12	土錘	覆土			SWW'B'		灰褐	100%	長9.9cm 径5.1cm 孔1.4cm 重212.22g

広めの燃焼部は大部分が壁外にあり、掘り込みは見られない。奥壁は急激に立ち上がってやや長めの煙道に繋がる。奥壁の最下層には灰が約6cm堆積している。カマド右側に2基の落ち込みが検出されている。深さが共に11cm前後で、位置的には貯蔵穴と考えられるがやや浅い。壁溝はカマド両側から全周し、幅16～24cm、深さ2～10cmを測る。北西側では壁内側を巡る傾向にある。

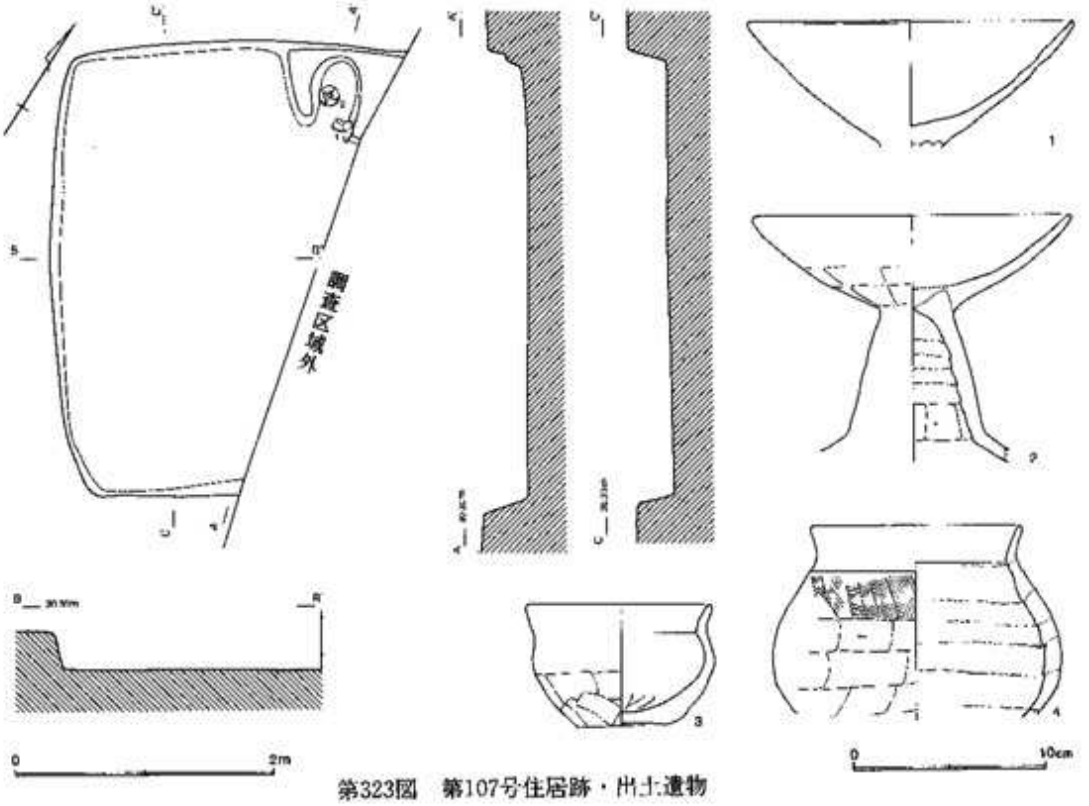
出土遺物の多くは土師器だが、須恵器が17片、灰釉陶器細片が1片見られる。

第107号住居跡（第323図）

そ－4－2グリッドを中心に位置する。東半は調査区域外にある。形態は方形であろうか。検出規模は東壁3.46m、北壁2.56m、深さ0.26～0.30mとなっている。主軸方位は東壁を基準とするとN－34°－Wとなる。

床面は平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土の状態は不明である。カマドは北壁に設置される。燃焼部の掘り込みは見られず、壁内に留まっている。貯蔵穴、ピットは検出されていない。

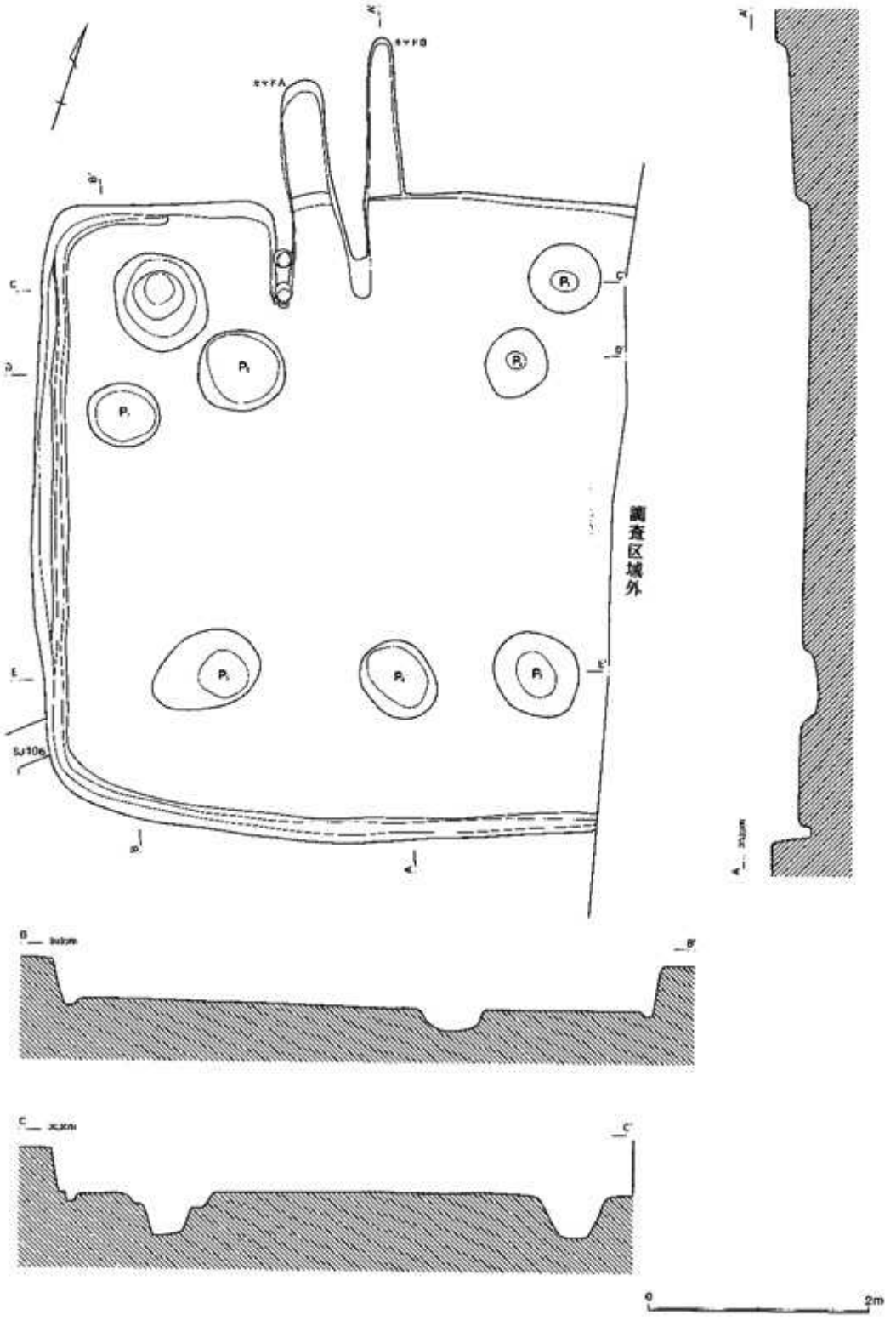
出土遺物は少量で、図示できたのは4点に留まった。高坏はカマドからの出土で、2は燃焼部において倒位で出土した。



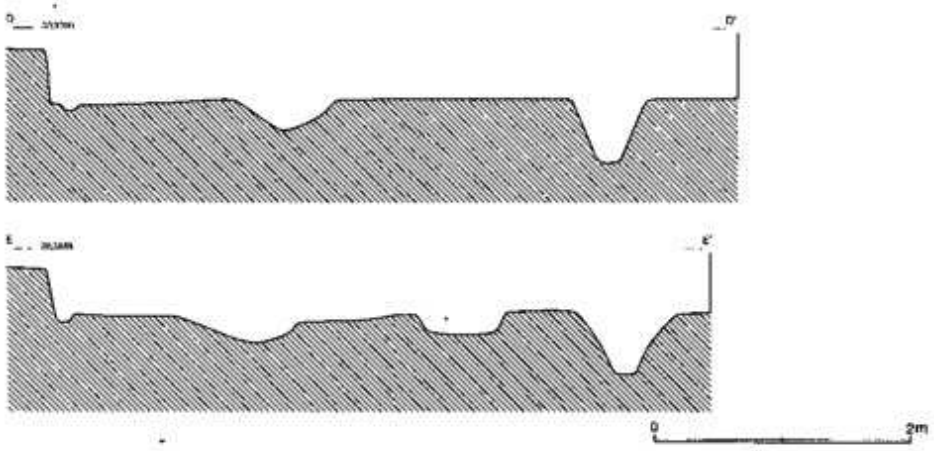
第323図　第107号住居跡・出土遺物

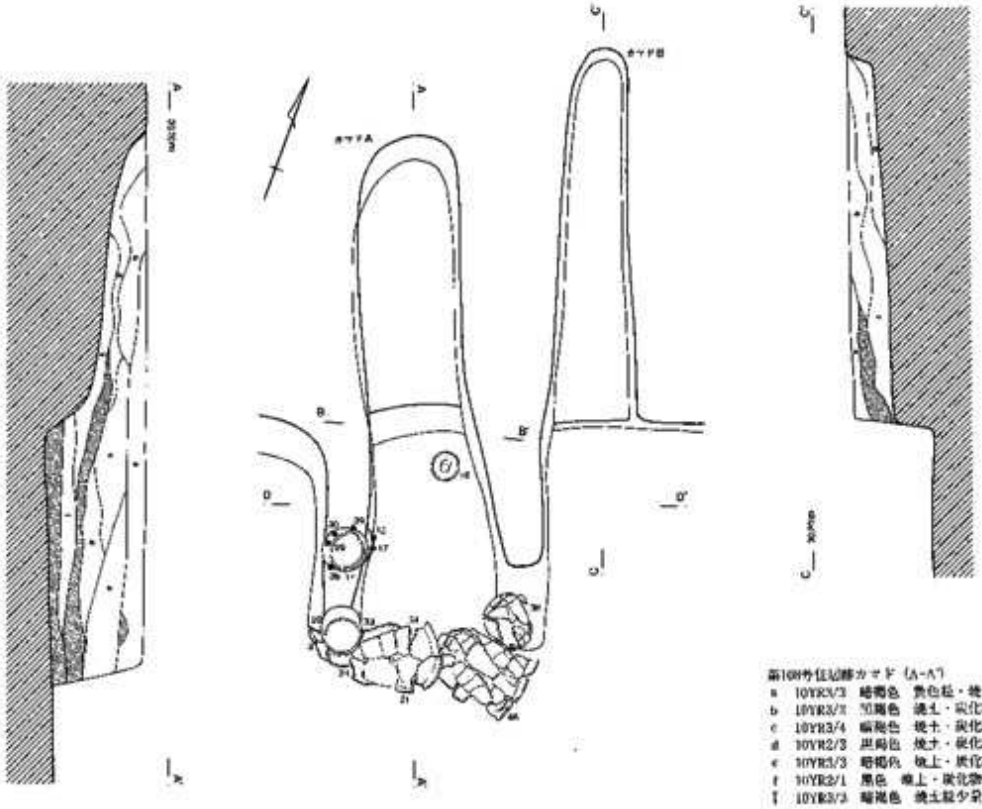
第107号住居跡出土遺物観察表（第323図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高坏	(16.7)	6.7		B'W'W	B	明赤褐	30%	No2 カマド(+8.0cm) 内外面磨耗著しい
2	高坏	16.3	12.7		W'WBB'	B	橙	90%	No1 カマド(−6.0cm) 全体に磨耗著しい
3	碗	9.4	6.3	5.0	W'WB'R	A	橙	95%	覆土 内外面磨耗 外面ヘラケズリ不明瞭
4	小形甕	(10.7)	10.0		WB'W'	B	橙	25%	覆土 胎土緻密 内面粘土接合痕明瞭



第324図　第108号住居跡



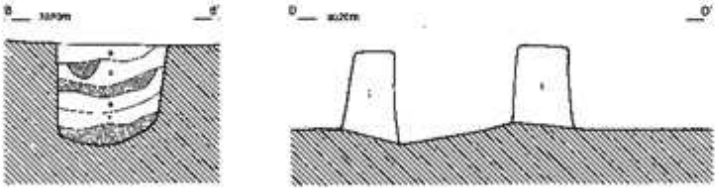


第108号住居跡カマド（A-A'）

a　10YR3/3　暗褐色　焼色粒・焼土・炭化物少量
b　10YR3/2　黒褐色　焼土・炭化物少量
c　10YR3/4　暗褐色　焼土・炭化物多量
d　10YR2/3　黒褐色　焼土・炭化物多量　灰少量
e　10YR3/3　暗褐色　焼土・炭化物・灰
f　10YR2/1　黒色　焼土・炭化物多量
T　10YR3/3　暗褐色　焼土粒少量

第108号住居跡カマド（C-C'）

a　10YR3/2　黒褐色　炭化物多量　焼土少量
b　10YR3/3　暗褐色　焼土・炭化物・灰少量
c　10YR4/3　にぶい黄褐色　黄色粒・焼土多量
d　10YR2/2　黒褐色　炭化物・焼土多量



第108号住居跡（第324図）

そ－4－7グリッドを中心に位置し、東側は僅かと思われるが調査区域外にかかる。第106号住居跡のカマドに南西コーナー付近を切られる。形態は方形に近いと思われる。検出規模は南北が5.64m、東西が5.32m、深さ0.21～0.41mである。主軸方位はN－16°－Wを指す。

床面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土の観察はできなかった。

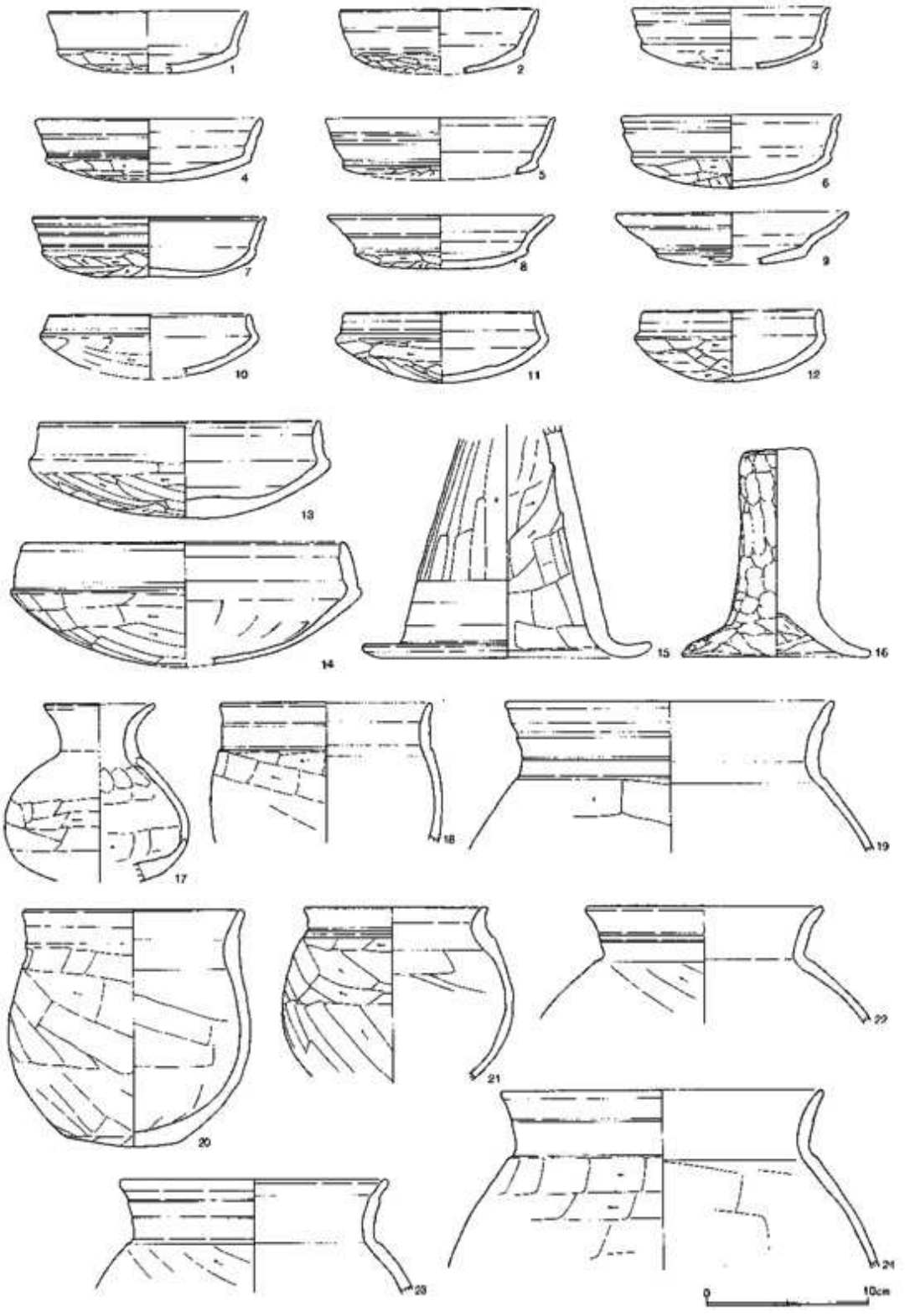
カマドは北壁に2基検出された。カマドAは北壁の西よりに設置される。燃焼部の掘り込みは見られず、奥壁は緩やかに立ち上がって煙道へ移行する。燃焼部奥壁やや手前の右側に土製支脚が出土している。覆土には最下層と中層に焼土層が残存する。左袖には土師器甕が補強材として使用されていた。カマドBはカマドAの西側に位置し、煙道部のみ残存していた。

貯蔵穴は北西コーナーに位置し、直径約88cmの円形で、深さ約39cmで、テラス状の段を持つ。ピットは7本検出された。位置的にはP2・P3・P5・P6が柱穴と考えられるが、P5・P6の掘り込みが浅い点に疑問が残る。壁溝はカマドAの左側から南壁にかけて検出され、幅20～34cm、深さ3～12cmとなっている。

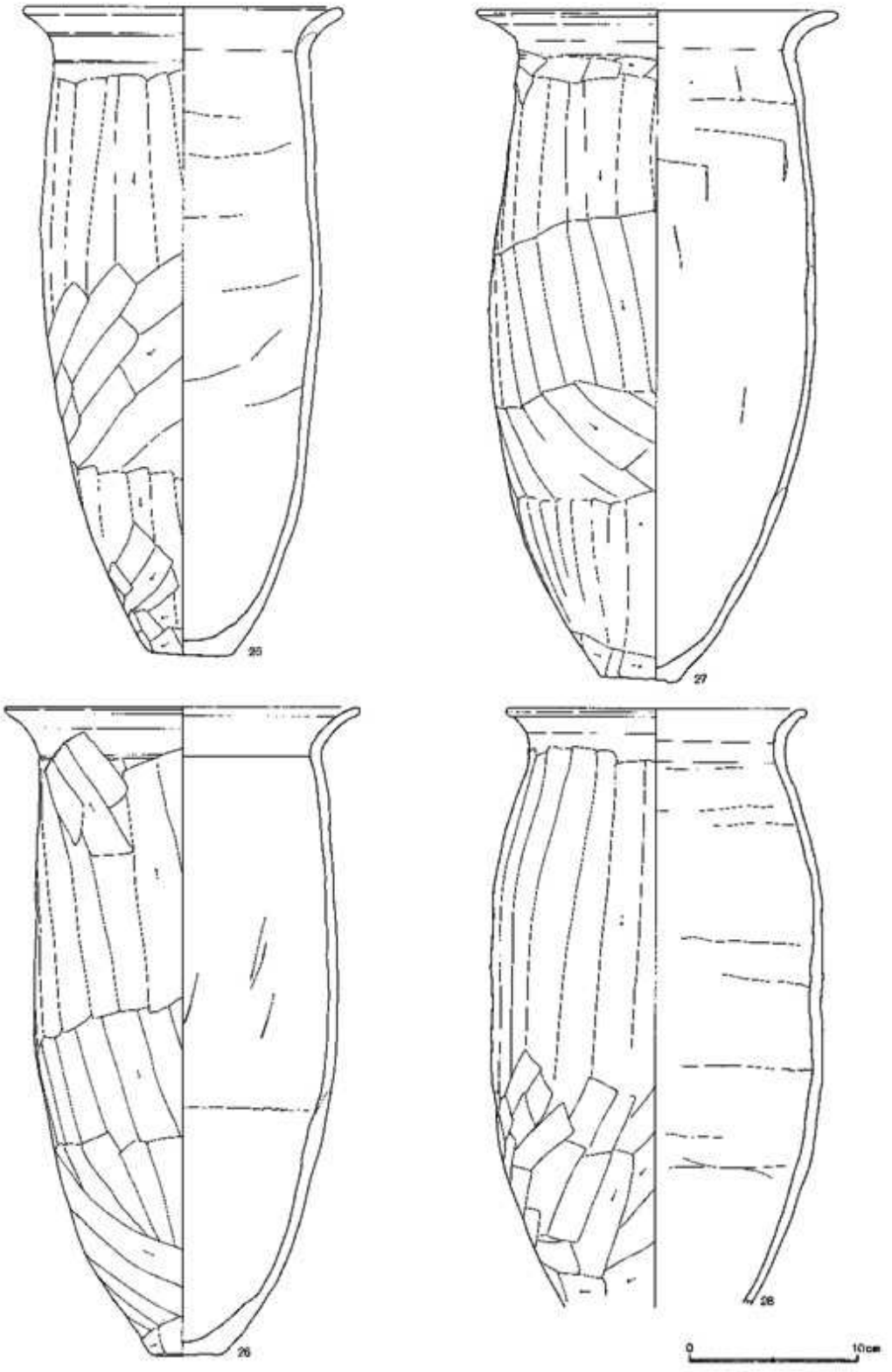
遺物は極めて多く、出土土器は器種不明の須恵器が1片以外は全て土師器である。接合率は良い方である。カマドAの焚口付近には甕がまとまって見られた。やや大きめの土錘が10本出土している。54は鉄製刀子の関部である。

第108号住居跡出土遺物観察表（第325～329図）

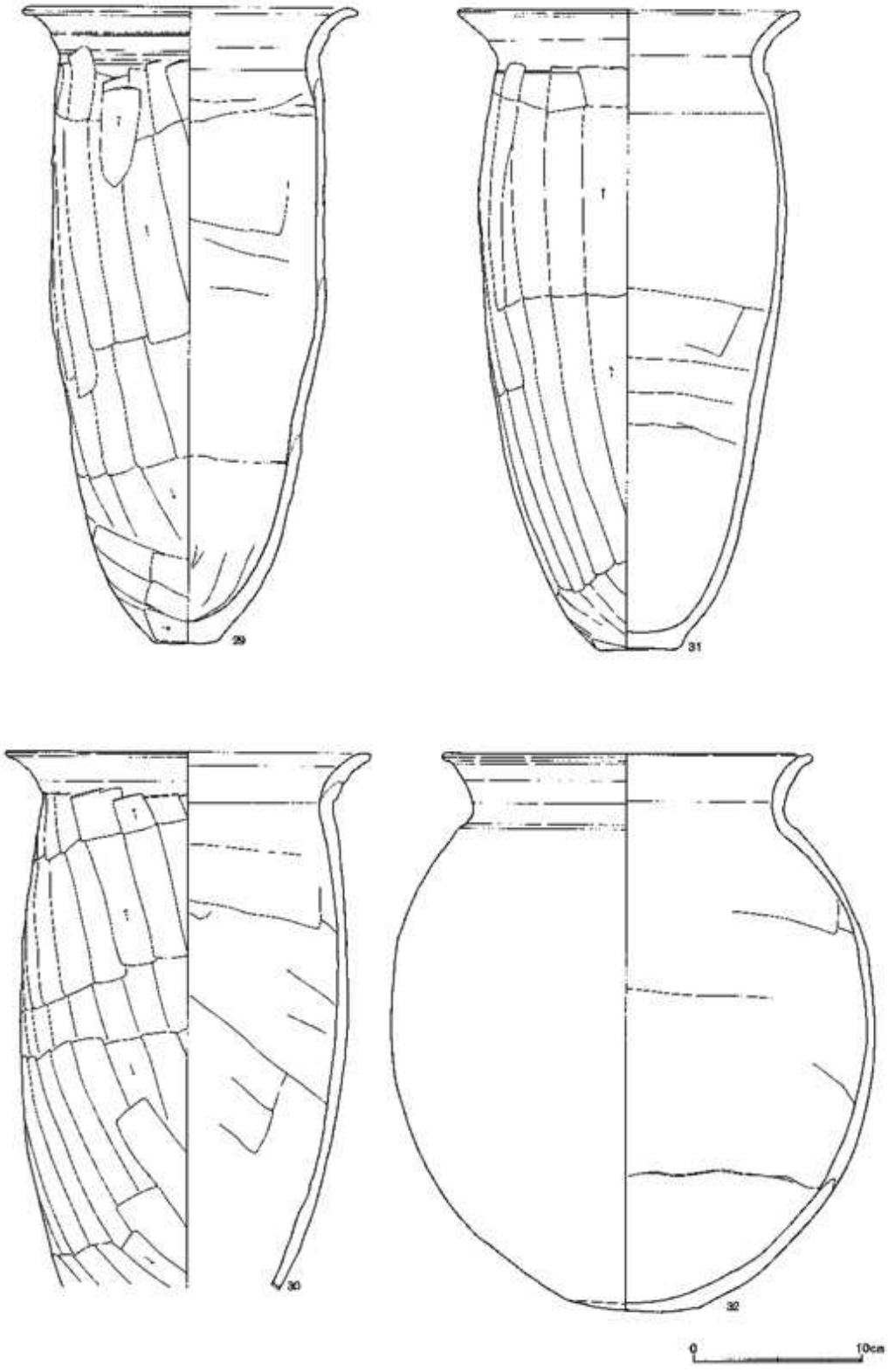
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.2)	3.7		W'WB'R	B	橙	50%	覆土 内面磨耗著しい
2	坏	12.1	4.0		B'W'WR	B	橙	65%	覆土 内面磨耗著しい
3	坏	(12.1)	3.7		B'BW'WR	B	浅黄橙	30%	PNo4 内外面磨耗著しい
4	坏	13.8	3.9		W'B'WR	B	鈍い黄橙	60%	覆土 内外面磨耗著しい
5	坏	14.1	3.5		B'W'WR	B	鈍い黄橙	30%	覆土 内面磨耗著しい
6	坏	13.4	4.4		B'WW'RB	B	橙	75%	覆土 内面磨耗著しい
7	坏	(14.4)	3.7		B'W'W	C	鈍い黄橙	50%	覆土 内面磨耗著しい
8	坏	(13.8)	3.2		B'W'WB	B	橙	50%	覆土 内外面磨耗著しい
9	坏	(14.2)	3.2		B'W'W	B	橙	30%	覆土 外面磨耗著しい
10	坏	12.2	3.8		W'B'WRB	B	橙	60%	覆土 内外面磨耗著しい
11	坏	11.8	4.4		W'WB'B	A	灰白	90%	PNo2 内外面磨耗著しい
12	坏	10.8	4.4		W'WB'R	A	浅黄橙	90%	覆土
13	鉢	17.1	5.9		WW'B'RB	B	灰赤	95%	PNo2
14	鉢	19.5	7.7		W'B'W	B	鈍い赤褐	70%	覆土 胎土緻密 ていねいな作り
15	高坏		14.4	17.7	B'W'RW	A	橙	80%	P3
16	支脚	No1 カマド床面			B'W'W		鈍い黄橙	100%	上端径4.0cm 下端径11.3cm 残高12.8cm
17	壺	(6.7)	10.9		WB'W'	B	鈍い黄橙	80%	PNo2 内外面磨耗著しい
18	壺	(12.8)	8.7		W'B'WR	C	黄橙	30%	覆土 内外面磨耗著しい
19	壺	(20.1)	9.3		B'W'WSB	B	浅黄橙	30%	覆土 内外面磨耗著しい
20	甕	13.4	14.7	7.2	SB'BWR	B	浅黄橙	90%	PNo3 内外面磨耗著しい
21	壺	11.2	10.7		B'W'WRB	A	灰白	80%	No5 カマド(+5.9cm)
22	壺	14.3	7.3		B'WW'	B	灰白	60%	覆土 内外面磨耗著しい
23	壺	(16.1)	8.1		SB'WW'RB	B	橙	40%	覆土 内外面磨耗著しい
24	壺	19.9	11.1		SB'WW'RB	B	橙	50%	No4 カマド左袖(+7.7cm) 磨耗著しい
25	甕	(18.7)	38.1	5.0	SBB'WW'R	B	橙	60%	覆土



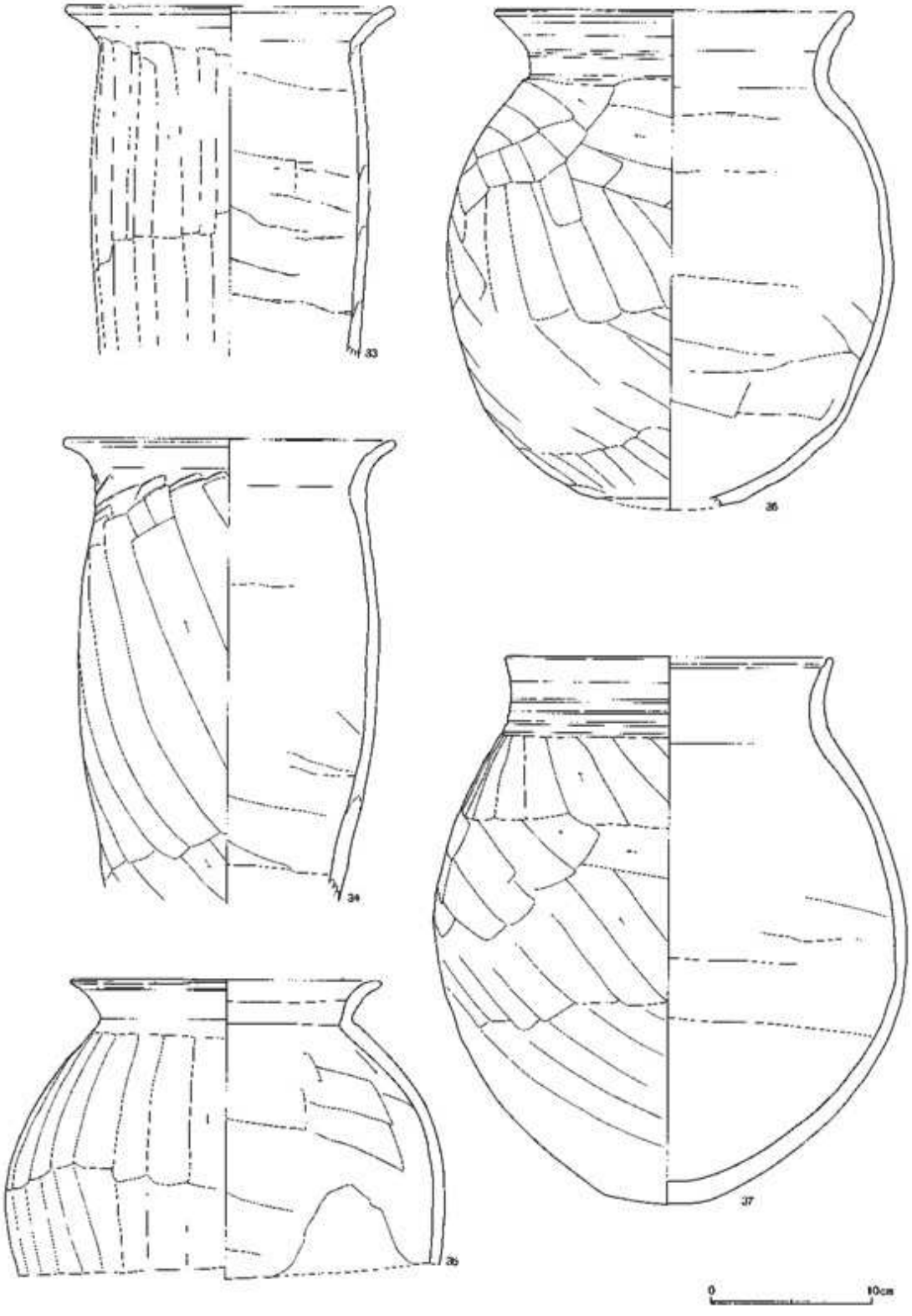
第325図　第108号住居跡出土遺物(1)



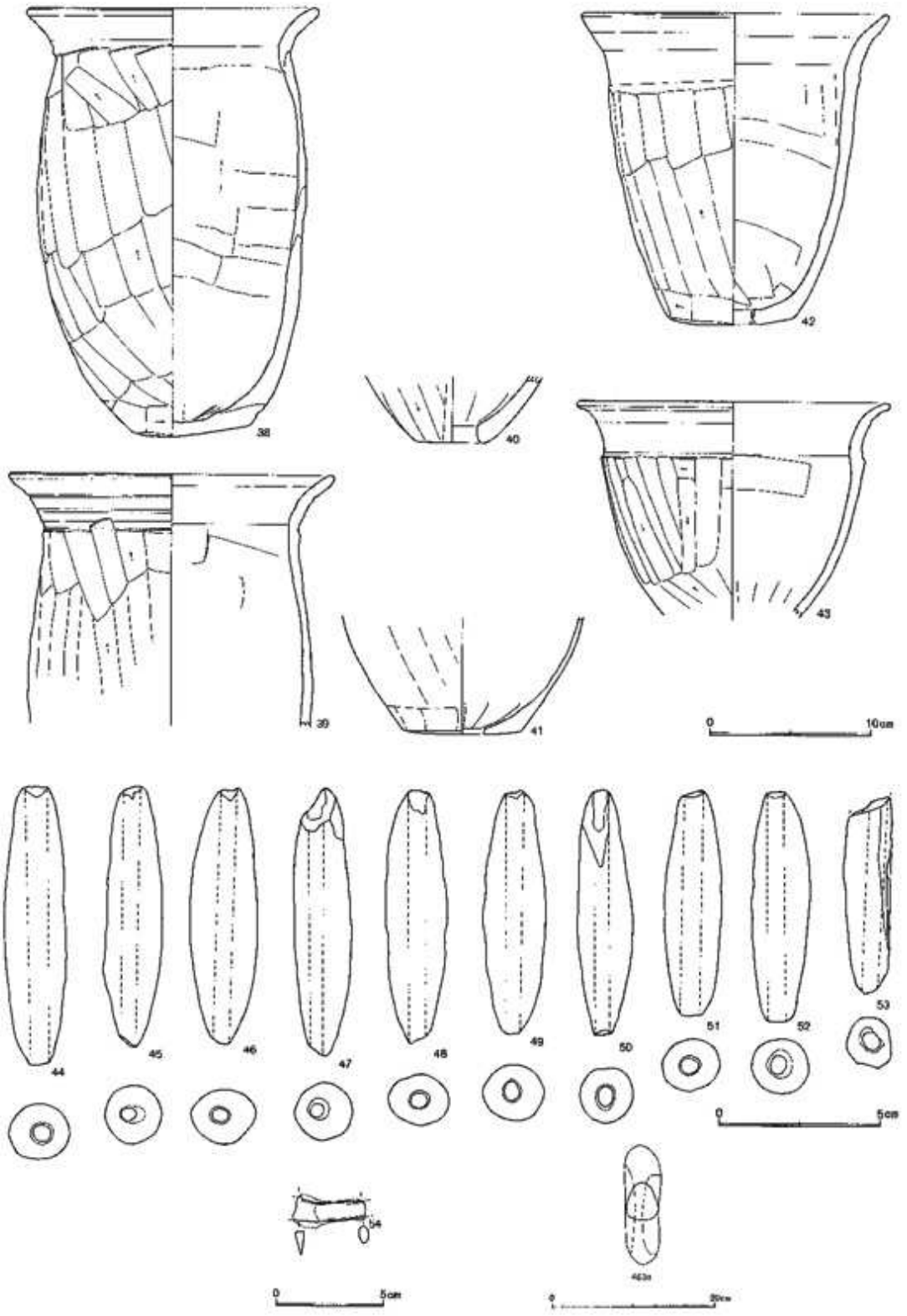
第326図　第108号住居跡出土遺物(2)



第327図　第108号住居跡出土遺物(3)



第328図　第108号住居跡出土遺物(4)



第329図　第108号住居跡出土遺物(5)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
26	甕	(21.0)	38.2	4.3	SBB'WW'	B	鈍い橙	80%	No6 カマド(+5.9cm)
27	甕	(21.1)	39.4	4.5	SBB'WW'	B	鈍い橙	80%	覆土
28	甕	(17.1)	35.5		SBB'WW'	B	明赤褐	40%	覆土
29	甕	(18.9)	37.5	3.9	SWBB'W'	B	橙	60%	No2 カマド左袖(+24.8cm)
30	甕	(21.6)	31.7		SBB'WW'	B	橙	80%	No2 カマド左袖(+24.8cm)
31	甕	19.8	37.8	4.7	SWW'BB'	B	橙	95%	No4 カマド左袖(+7.7cm)
32	壺	(21.6)	32.9	8.5	SW'WB'R	C	橙	40%	覆土 外面剥落 磨耗著しい
33	甕	(20.0)	21.7		SB'WW'B	B	橙	80%	No3 カマド左袖(+19.1cm)
34	甕	20.2	28.5		SBB'W	B	橙	85%	No5 カマド(+5.9cm)
35	壺	18.6	17.5		W'WRB'B	B	橙	90%	覆土 転用器台 口縁内面に平坦面有り
36	壺	22.0	30.6	9.3	SWB'W'B	B	鈍い橙	80%	PNo3
37	壺	(20.0)	33.6	6.7	B'W'WB	B	橙	90%	覆土 内外面磨耗著しい
38	甕	17.6	26.3	7.3	SB'W'WB	B	橙	80%	No7 カマド右袖(+11.9cm)
39	甕	19.7	15.5		SB'W'RBW	B	橙	60%	PNo2 内外面磨耗 (器面の荒れ) 著しい
40	甑		4.1	4.0	B'WW'R	A	浅黄橙	60%	覆土 内外面磨耗著しい
41	甑		7.3	7.2	WB'RW'B	B	浅黄橙	50%	覆土 内外面磨耗著しい
42	甑	18.5	19.2	7.7	SBB'WW'	B	浅黄橙	80%	覆土 内外面磨耗著しい
43	甑	(19.0)	13.3		B'W'WR	A	浅黄橙	25%	覆土 内外面やや磨耗
44	土錘	覆土			BB'W'W		浅黄橙	100%	長8.6cm 径1.9cm 孔0.7cm 重23.51g
45	土錘	覆土			BB'WW'		鈍い黄橙		長8.0cm 径1.8cm 孔0.5cm 重20.30g
46	土錘	No6 カマド(+5.9cm)			WW'BB'		鈍い橙		長7.9cm 径2.0cm 孔0.5cm 重24.40g
47	土錘	覆土			WBB'		黄橙	100%	長8.3cm 径1.8cm 孔0.4cm 重22.98g
48	土錘	覆土			BB'WW'		鈍い黄褐		長7.8cm 径1.9cm 孔0.6cm 重19.98g
49	土錘	覆土			BB'WW'		黒褐	100%	長7.5cm 径1.9cm 孔0.6cm 重20.84g
50	土錘	覆土			BWW'B'		明黄褐	100%	長7.6cm 径1.7cm 孔0.5cm 重17.14g
51	土錘	覆土			BWW'		浅黄橙	100%	長7.0cm 径1.8cm 孔0.6cm 重17.04g
52	土錘	覆土			BB'		灰黄褐	100%	長7.1cm 径1.8cm 孔0.6cm 重18.67g
53	土錘	覆土			BB'		浅黄橙		残6.0cm 径1.4cm 孔0.6cm 重11.10g
54	刀子	覆土 残長3.4cm 重量5.27g 関部							

第109号住居跡（第330～332図）

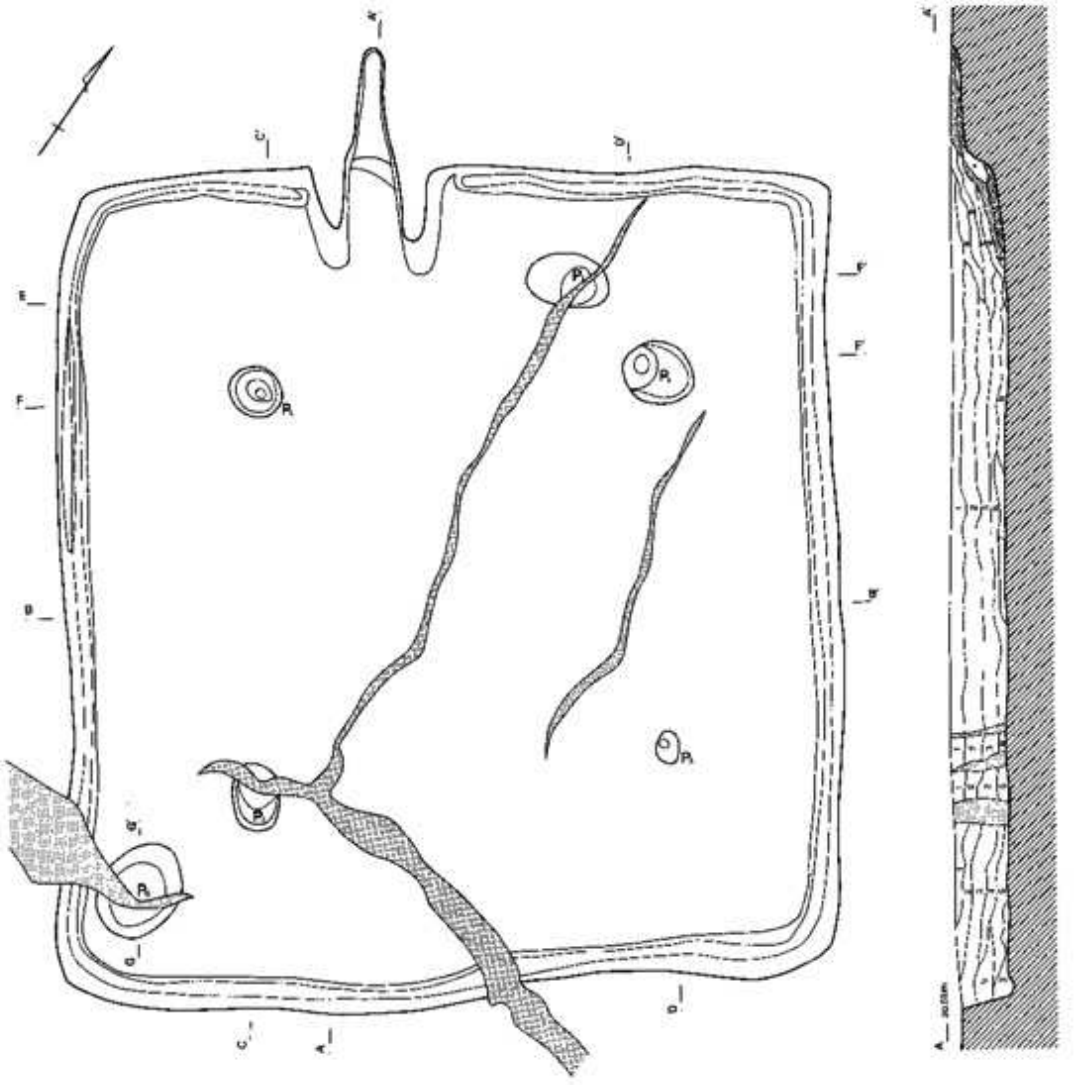
そ－４－９グリッドを中心に位置する。形態は方形で、規模は長軸6.38ｍ、短軸5.98ｍ、深さ0.32～0.44ｍである。主軸方位はＮ－36°－Ｗを指す。

床面にはやや起伏が見られ、壁は開き気味に立ち上がる。断面観察によると東西の壁際に炭化材が見られる。東西に２条、南北に２条の噴砂が走り、床面の一部には最大７cmの段差が生じている。

カマドは北西側の壁の中央より西側に設置される。燃焼部の掘り込みは見られず、奥壁付近から煙道にかけて炭化物層と焼土層が明瞭に残る。

ピットは６本検出された。Ｐ２－Ｐ５は柱穴と思われる。Ｐ１は40cm×64cm、深さ52cmで貯蔵穴の可能性もある。Ｐ６は中央を噴砂によって切られているが、本来は直径60cmほどの円形と思われる。深さは15cmとやや浅い。壁溝はカマドの両側から全周し、幅20～38cm、深さ2～12cmである。

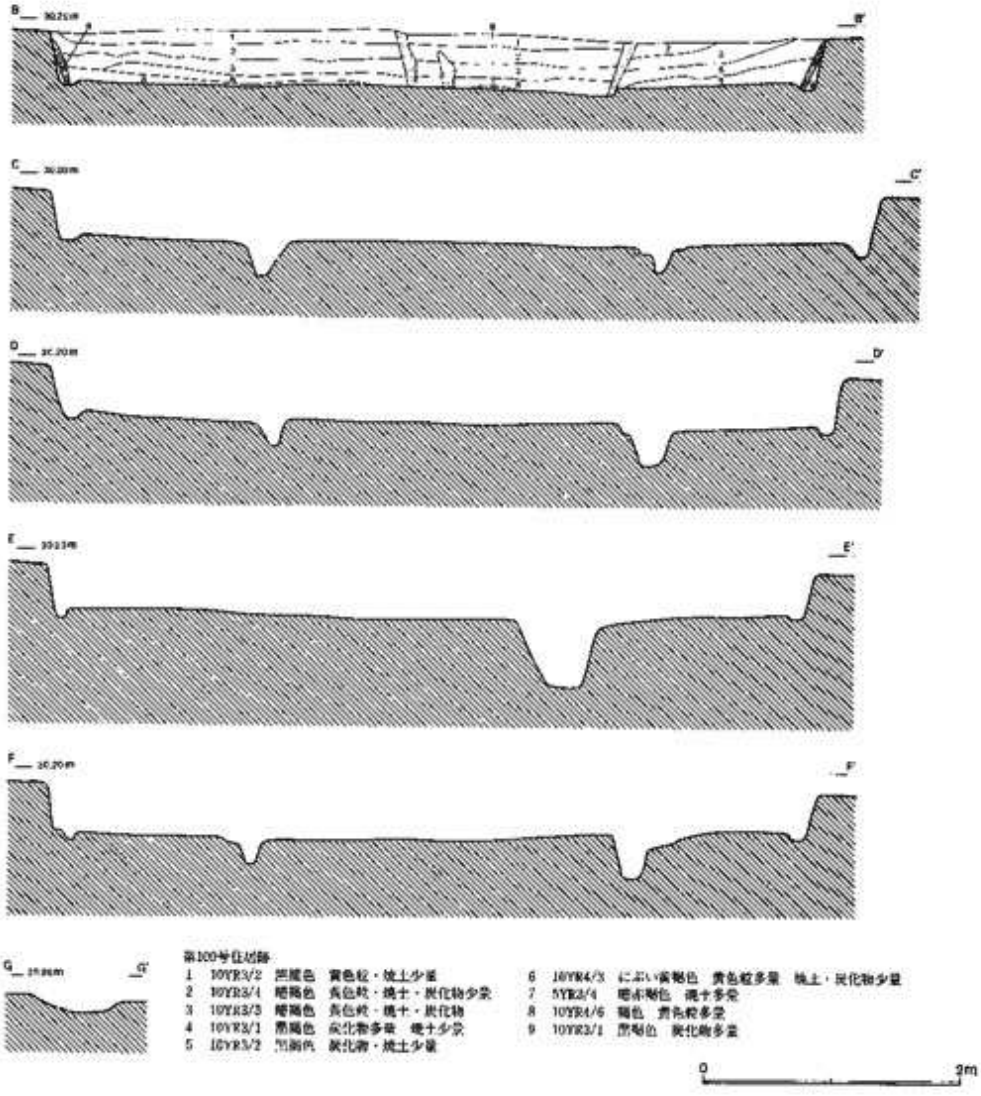
遺物は非常に多い。出土土器は全て土師器で、坏・高坏・甕・甑等が認められるが、接合率が極めて悪く、図示できたものは多くない。27は砂岩製の砥石で、主に上下二面を使用し、左右の面には刃跡が見られる。28は安山岩製の砥石で、上面に研磨面が周辺には刃跡が残る。29は角閃石安山



第330図　第109号住居跡(1)

第109号住居跡出土遺物観察表（第333・334図）

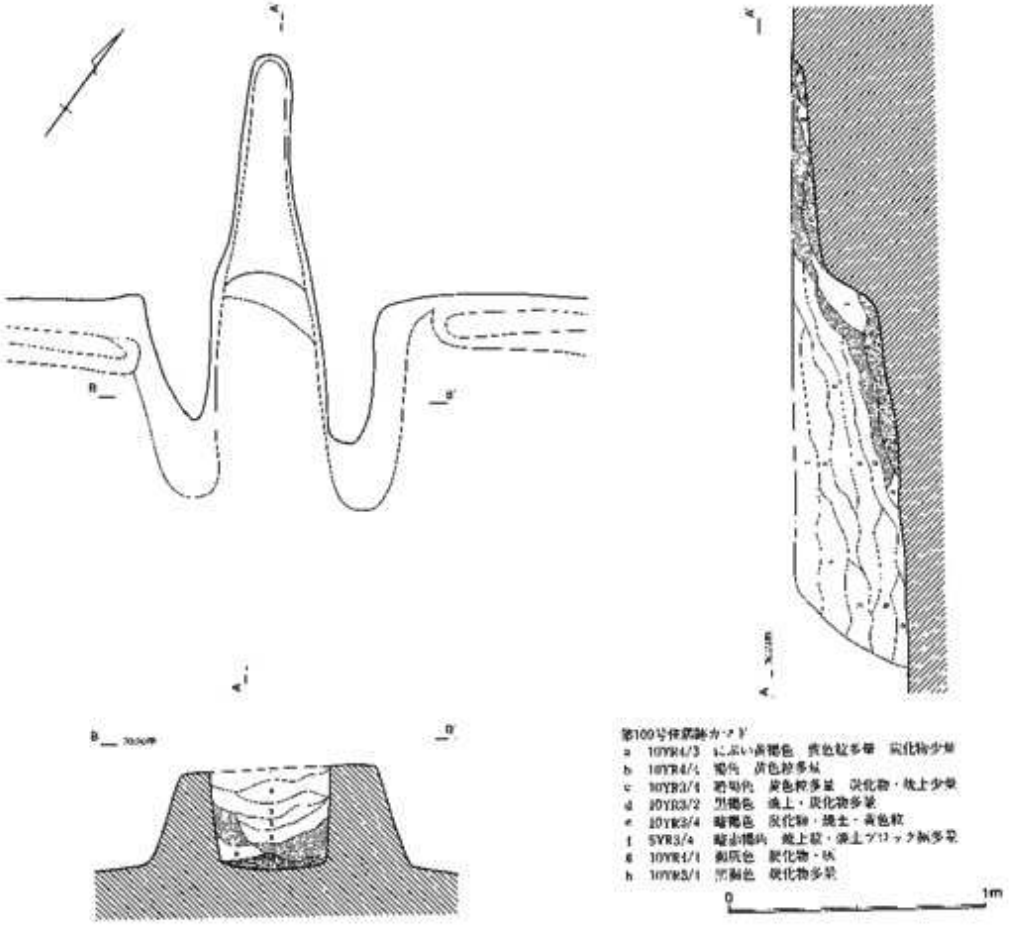
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.3)	3.5		WW'B'R	A	橙	30%	覆土 内外面磨耗著しい
2	坏	(12.3)	3.9		WW'B'R	B	橙	50%	カマド 内外面磨耗著しい
3	坏	13.6	4.1		W'WB'R	B	橙	75%	覆土 内外面磨耗著しい
4	坏	14.0	3.9		W'WB'BR	B	橙	60%	貯穴
5	坏	13.8	4.0		B'BWW'	A	橙	70%	覆土 内面磨耗著しい
6	坏	(14.3)	3.7		B'WW'R	B	鈍い褐	25%	貯穴 内外面やや磨耗
7	坏	(14.4)	3.7		W'W	B	灰黄褐	20%	貯穴 内外面磨耗著しい
8	坏	14.9	4.1		B'W'WB	B	橙	80%	覆土
9	坏	(12.0)	4.3		W'WBR	B	鈍い黄橙	25%	覆土 内外面口縁端部磨耗著しい
10	坏	(13.6)	4.1		WRW'B'	A	橙	20%	覆土 内面磨耗著しい
11	鉢	21.2	6.8		B'W'WRB	B	鈍い橙	90%	カマド 全体に歪み有り



第331図　第109号住居跡(2)

岩で、表面に刃跡が見られる。

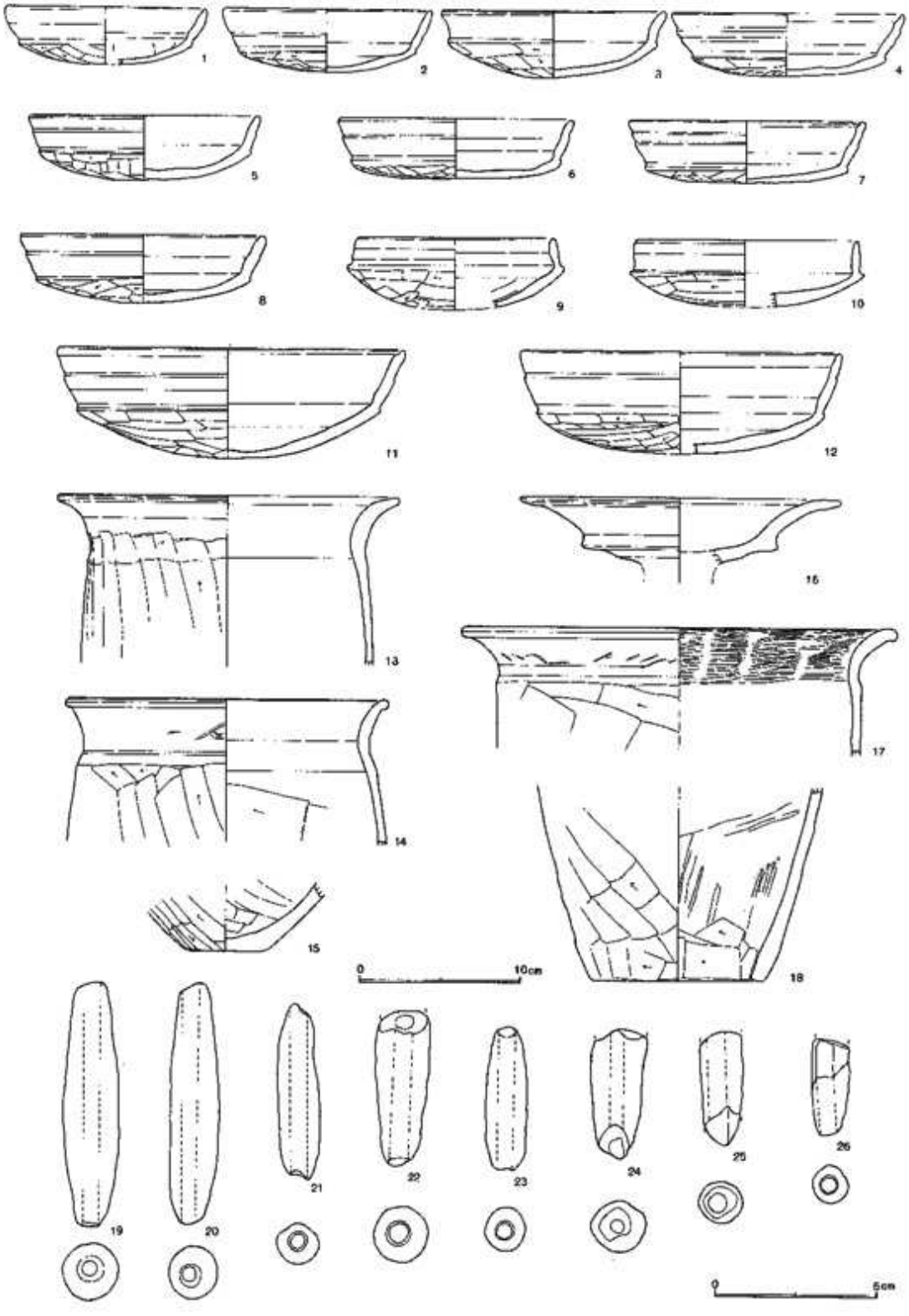
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
12	鉢	(19.7)	6.3		W'B'WR	A	鈍い橙	25%	覆土
13	甕	(20.7)	10.4		SB'WW'R	A	浅黄橙	25%	カマド 内外面磨耗著しい
14	甕	(19.5)	8.8		SWB'BW'	A	鈍い橙	20%	覆土
15	甕		4.2	(4.7)	SB'WBW'	B	鈍い褐	70%	覆土
16	高坏	(19.8)	4.1		B'W'W	A	橙	30%	覆土 作りていねい
17	甕	(26.5)	7.8		SB'W'WB	A	橙	25%	覆土 内面磨耗著しい
18	甑		12.0	(10.5)	W'B'SRB	A	鈍い橙	25%	覆土 内外面磨耗著しい
19	土錘	覆土			BB'WS		浅黄橙	100%	長7.6cm 径1.8cm 孔0.5cm 重19.90g
20	土錘	覆土			SRWB'BW'		橙	100%	長7.5cm 径1.6cm 孔0.5cm 重16.32g
21	土錘	覆土			RWW'B		鈍い褐	100%	長5.5cm 径1.4cm 孔0.4cm 重7.14g
22	土錘	覆土			BW'W		黄橙		残4.8cm 径1.7cm 孔0.6cm 重11.64g



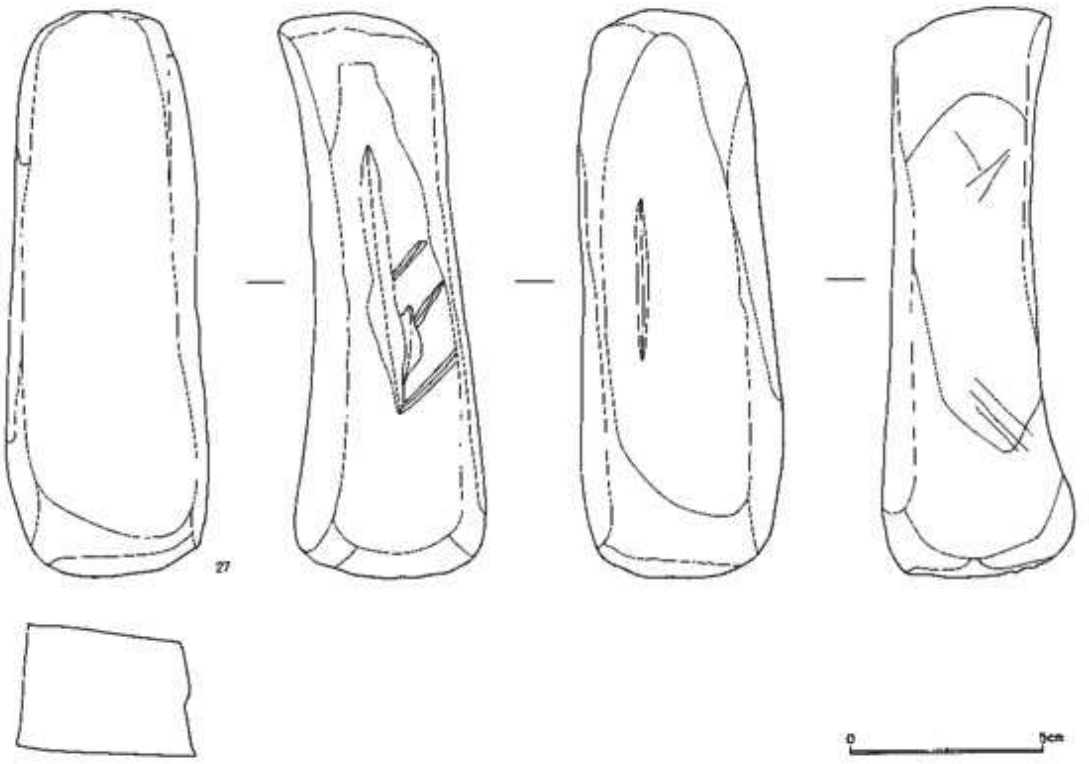
第332図　第109号住居跡カマド

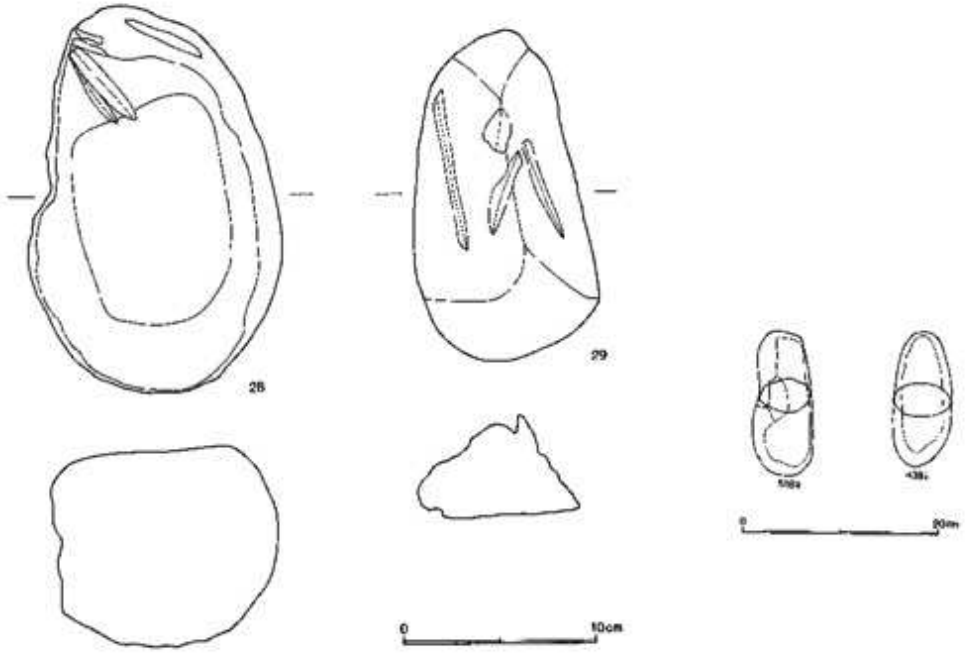
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
23	土錘	覆土			BRS		浅黄橙		長4.4cm 径1.4cm 孔0.5cm 重6.33g
24	土錘	覆土			BW'B'		浅黄橙		残4.0cm 径1.7cm 孔0.4cm 重9.14g
25	土錘	覆土			SW'R		黄橙		長3.5cm 径1.4cm 孔0.6cm 重4.48g
26	土錘	覆土			SW'		橙		残3.0cm 径1.2cm 孔0.5cm 重2.30g
27	砥石	覆土	長さ14.5cm 幅4.7cm 厚さ3.8cm 重量515g 砂岩製						
28	砥石	覆土	長さ20.0cm 幅13.2cm 厚さ10.3cm 重量2,020g 安山岩製 刃跡有り						
29	砥石か	覆土	長さ17.0cm 幅9.6cm 厚さ5.3cm 重量320g 角閃石安山岩製 刃跡有り						

発掘作業風景



第333図　第109号住居跡出土遺物(1)





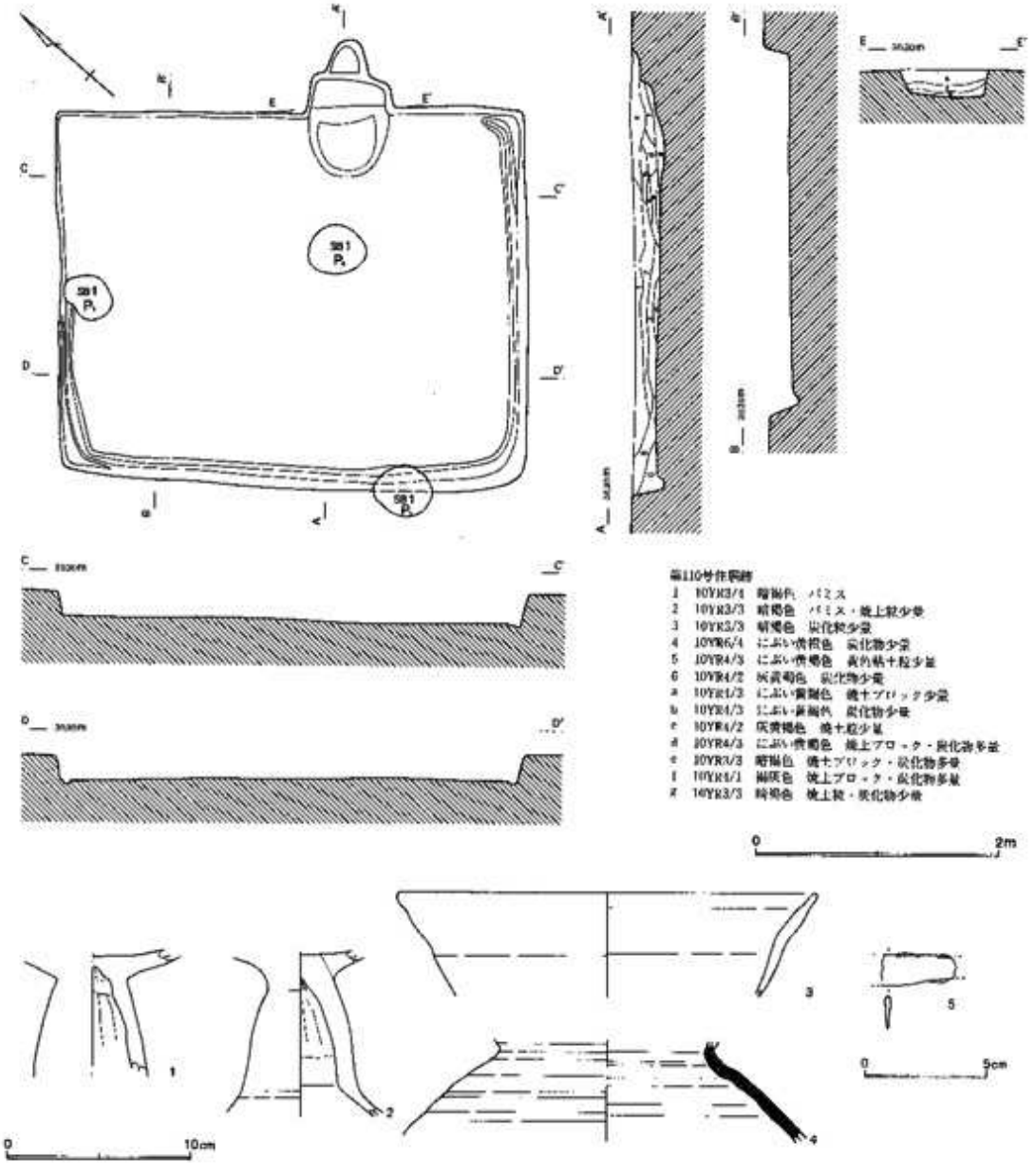
第334図　第109号住居跡出土遺物(2)

第110号住居跡（第335図）

そ－4－5グリッドを中心に位置する。第1号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡が旧い。形態は長方形で、規模は長軸3.86m、短軸2.94m、深さ0.16～0.24mである。主軸方位はN－48°－Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は6層に分けられ、上層は暗褐色土で占められる。カマドは北東側の壁に設置される。燃焼部は床面を5cm程掘り下げ、段を持って煙道へ移行する。壁溝は一部で検出され、幅10～24cm、深さ1～7cmを測る。

出土遺物は小片が少量だが時期的に多様で、混入が多いと思われる。



第335図　第110号住居跡・出土遺物

第110号住居跡出土遺物観察表（第335図）

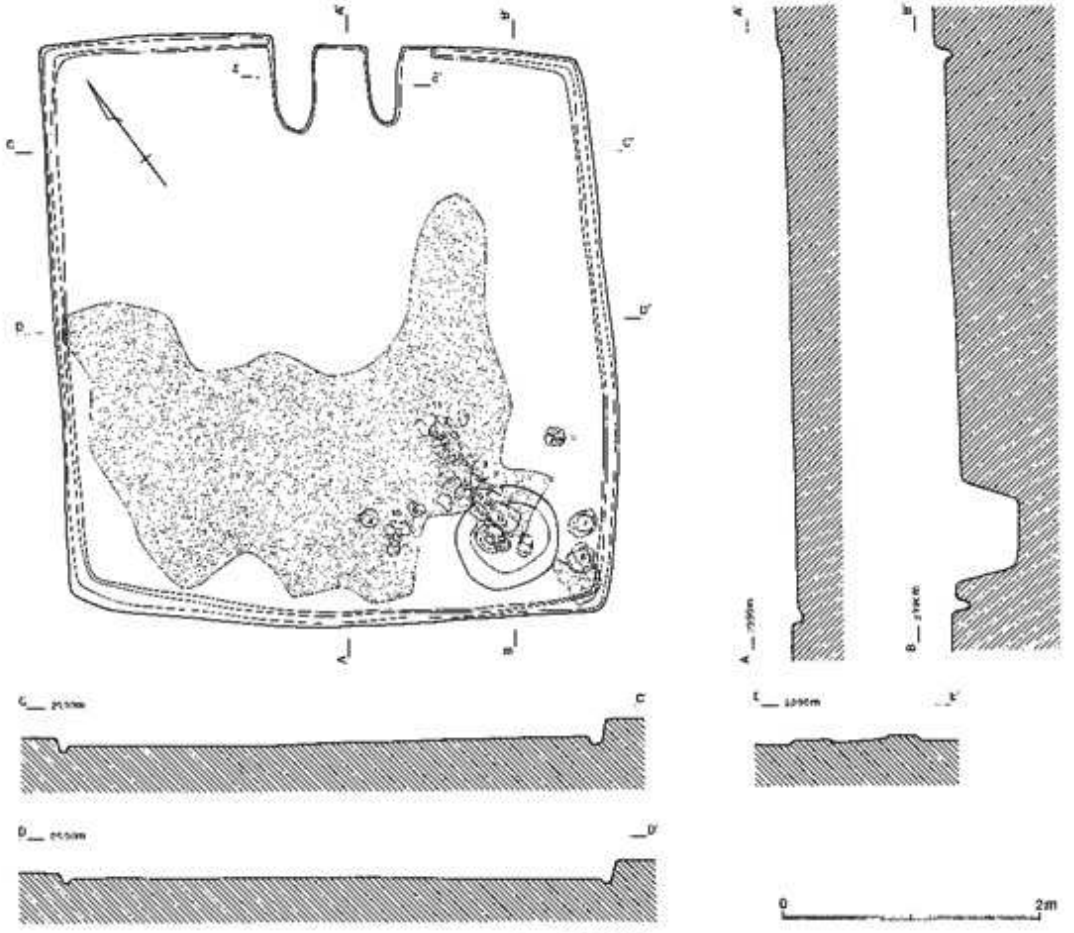
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高坏		6.9		WBRB'	B	橙	90%	覆土
2	高坏		8.9		WW'B	B	橙	90%	覆土 内外面磨耗著しい
3	鉢か	(22.8)	5.6		WBRS	B	橙	20%	覆土 内外面磨耗著しい 胎土緻密
4	壺		5.6		WBR	A	褐灰	30%	覆土 外面自然釉
5	刀子か	覆土 残長3.1cm 重量2.35g 刀子の一部か							

第111号住居跡（第336図）

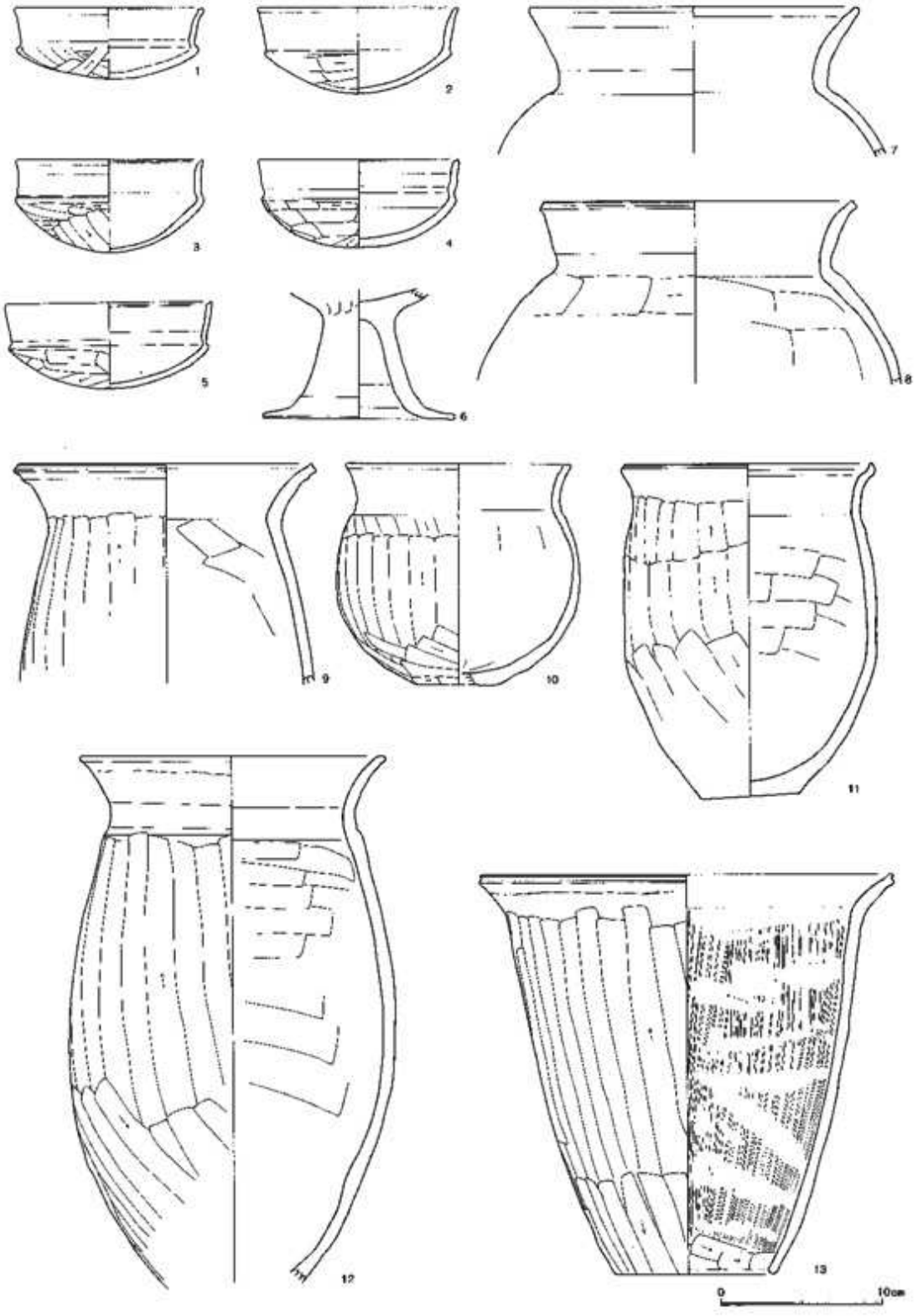
そ－5－11グリッドを中心に位置する。形態は方形で、規模は長軸4.48m、短軸4.24mで、深さは0.04～0.14mと浅い。主軸方位はN－32°－Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。深度が浅く覆土の状態は不明である。南西側床面には炭化物が広く散布している。カマドは北東側の壁ほぼ中央に設置される。燃焼部の掘り込みは見られず、袖は痕跡を残す程度となっている。貯蔵穴は南コーナーに位置し、直径約84cmの円形で、深さは約46cmを測る。壁溝はカマド両側から全周し、幅10～22cm、深さ1～8cmである。

出土遺物は、貯蔵穴周辺に集中する。量的にはあまり多くなく、接合率は良い。



第336図　第111号住居跡



第337図　第111号住居跡出土遺物

第111号住居跡出土遺物観察表（第337図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	11.5	4.4		WSB'	B	赤褐	95%	No20 覆土(−3.6cm) 内面底部剥落
2	坏	(12.4)	5.3		WBW'SB'R	B	橙	40%	No9 覆土(−3.7cm) 内外面磨耗著しい
3	坏	(11.5)	5.8		WBSW'RB'	C	橙	50%	No10,11 覆土床面 覆土 内外面やや磨耗
4	坏	(12.3)	5.4		WB'RW'	B	橙	65%	No6 覆土床面 内外面やや磨耗
5	坏	12.6	5.3		WW'B'BR片	B	明赤褐	100%	No3 覆土床面 覆土
6	高坏		8.0	(11.7)	B'BW'RW	A	鈍い橙	40%	No18 覆土床面 覆土 内外面磨耗著しい
7	甕	20.1	9.2		WW'B'R	C	橙	80%	No2 覆土(−2.3cm) 内外面磨耗著しい
8	甕	18.9	11.2		WB'W'RS	B	浅黄橙	60%	No1 覆土(−3.3cm) 覆土 転用器台
9	甕	18.0	13.5		SWB'W'R	B	鈍い橙	55%	No5 覆土(−7.2cm) 覆土
10	甕	(13.8)	13.6		WW'B'SR	B	鈍い橙	35%	No19 覆土床面 覆土 内外面やや磨耗
11	甕	15.2	20.5	6.1	SWB'	B	灰褐	65%	No16 覆土床面 覆土 磨耗著しい
12	甕	(18.5)	32.5		WB'W'RS	B	鈍い橙	85%	No4 覆土(−18.6cm)
13	甑	25.3	24.7	10.1	WB'RSW'	A	橙	90%	貯穴No1 貯穴 内面磨耗著しい

第112号住居跡（第339図）

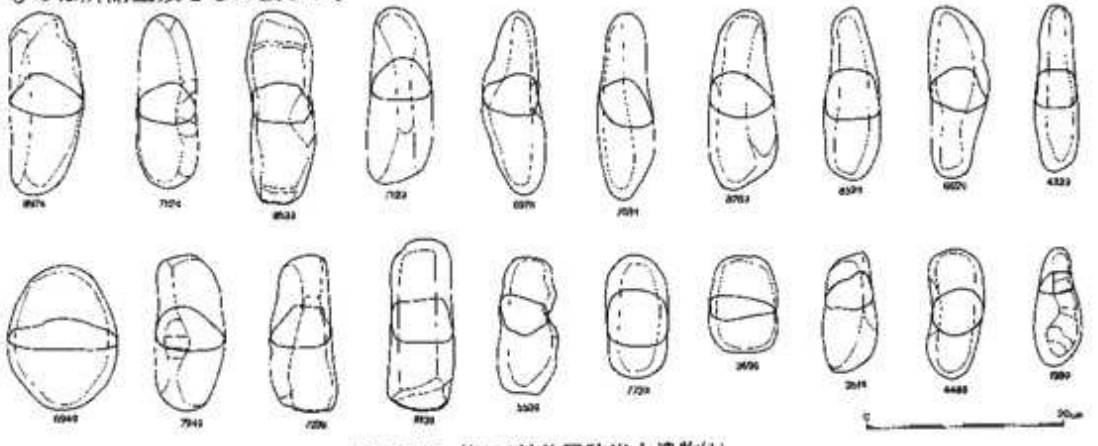
そ−5−12グリッドを中心に位置する。形態は方形で、規模は長軸5.34m、短軸5.22mで、深さは0.08〜0.16mと浅い。主軸方位はN−40°−Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。覆土の観察は出来なかった。

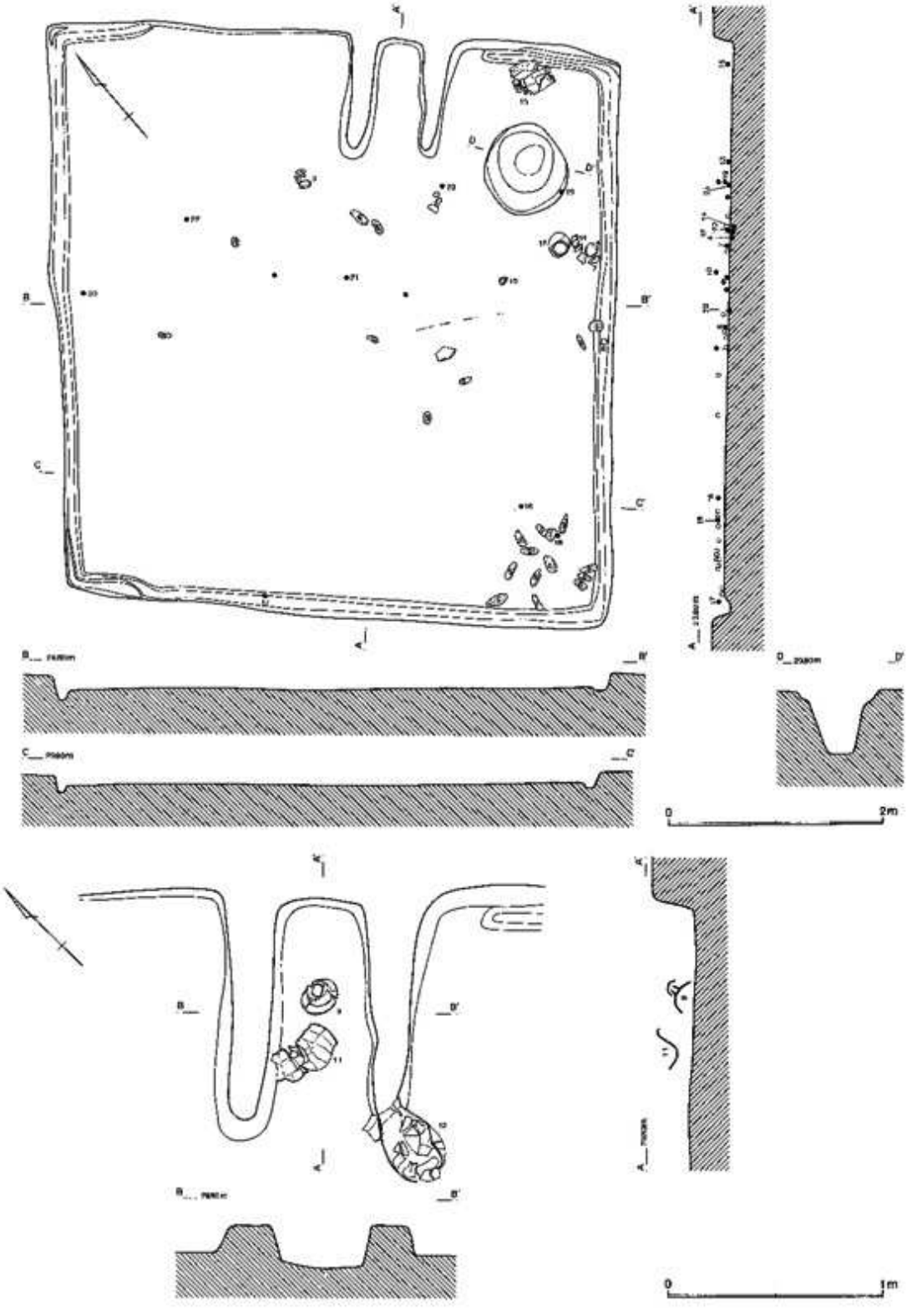
カマドは北東側の壁に設置される。燃焼部の掘り込みは見られず、奥壁はほぼ垂直に立上がる。両袖は長く、地山を残して構築されている。

貯蔵穴はカマドの右側に位置し、直径約80cmの円形で、深さは約60cmを測る。ピットは検出されていない。壁溝はカマド左側を除いてほぼ全周し、幅12〜22cm、深さ1〜8cmである。

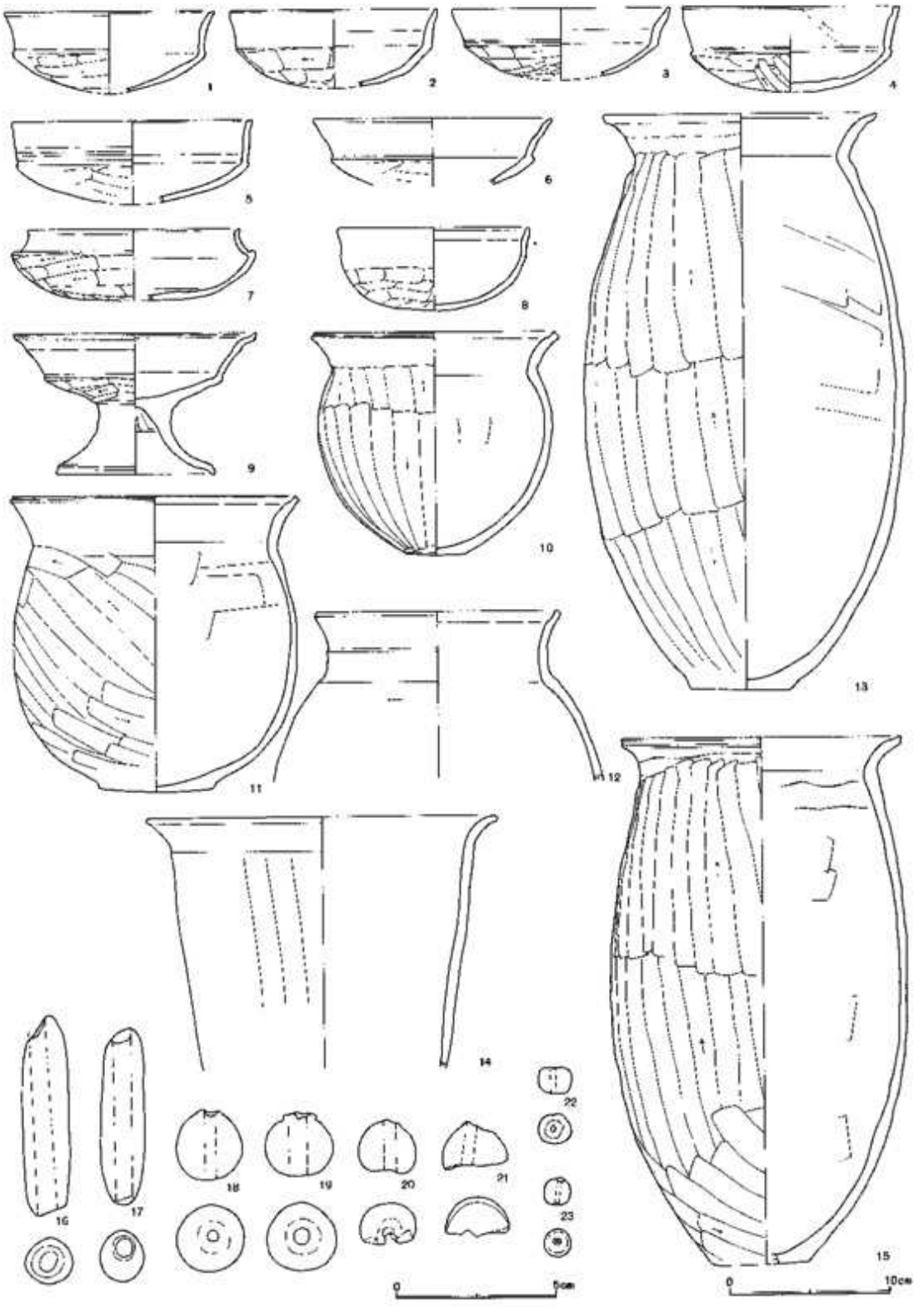
出土遺物は、カマドと貯蔵穴周辺及び南コーナーで多く見られる。出土土器は全て土師器で、坏・高坏・甕・甑等が認められる。カマドの燃焼部では、高坏が倒位で出土している。支脚として転用したのであろう。南コーナーではいわゆる編み物石が13個まとまって出土している。やや大型の土錘と土玉が散在して出土している。18〜21の土玉と22・23の小型の土玉は使途が別と考え、小型のものは所謂玉類として扱った。



第338図　第112号住居跡出土遺物(1)



第339図　第112号住居跡



第340図　第112号住居跡出土遺物(2)

第112号住居跡出土遺物観察表（第340図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.1)	5.0		W'WB'R	A	橙	35%	覆土 外面磨耗著しい
2	坏	(12.7)	4.8		WBB'R	C	橙	50%	覆土 内面磨耗著しい
3	坏	(13.4)	4.2		SRWB'	A	橙	25%	No5 覆土(+7.7cm) 内外面磨耗著しい
4	坏	13.4	5.3		SB'R	B	明赤褐	85%	No17 覆土(−5.6cm) 口縁部内面にナデ抜
5	坏	(14.8)	5.0		W'WRS	B	鈍い橙	20%	覆土 内外面磨耗著しい
6	坏	(14.6)	4.1		WB'RW'	B	橙	30%	No21 覆土(+2.7cm) 内外面磨耗著しい
7	坏	(13.0)	4.4		WW'BB'R	B	橙	25%	No18 覆土床面
8	坏	11.8	5.2		SWB'RW'	A	橙	95%	貯穴No2 覆土 外底部ヘラケズリ不明瞭
9	高坏	15.0	8.7	9.7	B'RWW'B	B	鈍い橙	90%	No2 カマド床面 内面剥落 磨耗
10	甕	(14.8)	13.9		SWB'W'	B	明褐灰	40%	No3,19 覆土(+4.0cm) 覆土 外面剥落
11	甕	(17.4)	18.3	(7.0)	SWW'R	B	橙	40%	No3 カマド(+4.0cm) 口縁部内面剥落
12	甕	(15.0)	10.5		SWW'RB'	A	鈍い橙	70%	No15 覆土(−4.5cm) 内外面磨耗著しい
13	甕	17.1	35.7	6.2	SWBB'W'	B	明褐灰	80%	No12 カマド右袖床面 覆土 粘土付着
14	甑	(21.8)	15.6		WRW'B	C	橙	20%	No3,16 覆土(−5.1cm) 内外面磨耗著しい
15	甕	17.3	32.2	6.1	SWB'RW'	B	淡橙	90%	No13 カマド右袖床面 覆土
16	土錘	No33 覆土(+4.9cm)			RSWBW'		明赤褐		残6.2cm 径1.5cm 孔0.7cm 重12.36g
17	土錘	No32 覆土(+9.6cm)			SW'		明褐		長5.5cm 径1.6cm 孔0.5cm 重11.65g
18	土玉	No35 覆土(+5.1cm)			WBW'		橙		長2.2cm 径2.1cm 孔0.4cm 重8.94g
19	土玉	No14 貯穴周辺床面			WBW'		橙		長2.0cm 径2.2cm 孔0.5cm 重7.83g
20	土玉	No30 覆土床面			WBW'B'		橙		長1.7cm 径1.8cm 孔0.4cm 重3.73g
21	土玉	No8 覆土床面			WBW'		明赤褐		長1.5cm 径2.1cm 孔0.3cm 重2.82g
22	土玉	No29 覆土床面			WB		橙		長0.8cm 径1.0cm 孔0.2cm 重0.84g
23	土玉	No11 覆土床面			WBW'		橙		長0.9cm 径0.8cm 孔0.1cm 重0.62g

第113号住居跡（第341図）

そ−5−23グリッドを中心に位置する。北東コーナーで第114号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。形態は方形で、規模は長軸4.50m、短軸4.26mで、深さは0.04〜0.16mと浅い。主軸方位はN−86°−Eを指す。

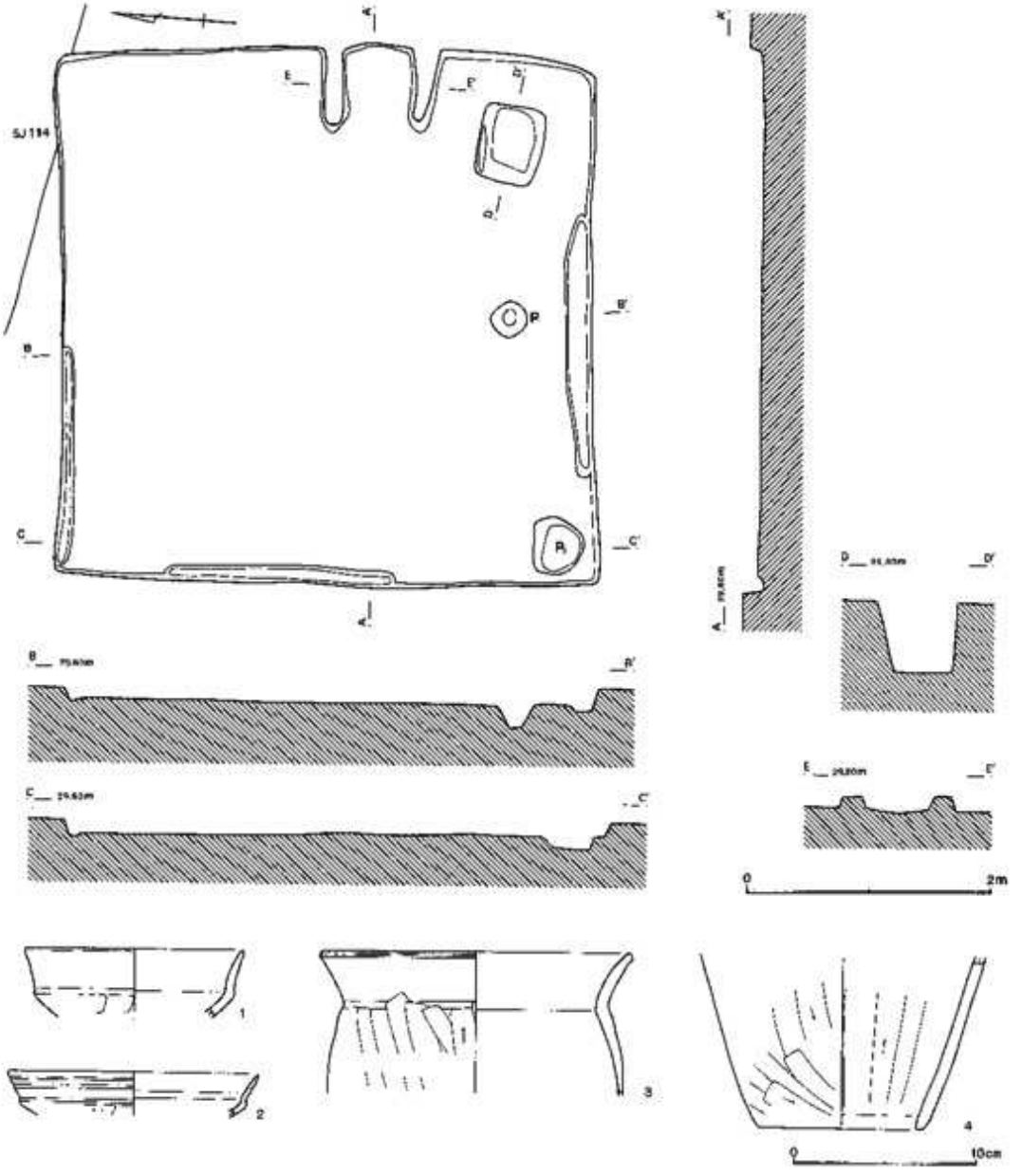
床面は緩やかな起伏があり、壁は開き気味に立ち上がる。覆土の状態は不明である。

カマドは東壁中央よりやや南に設置される。燃焼部の掘り込みは見られず、壁内に留まる。覆土の観察は出来なかった。貯蔵穴はカマド右に位置し、53cm×64cmの長方形で、深さは約60cmを測る。ピットは2本検出された。共に住居跡に伴うと思われるが柱穴等の判断は出来なかった。壁溝は東壁を除いて断続的に検出された。幅は13〜24cmで南壁のものが広く、深さは2〜5cmである。

出土遺物は、極めて少ない上に接合率が悪いため、図示できたのは少ない。土師器の坏・甕・甑等が認められる。

第113号住居跡出土遺物観察表（第341図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.8)	3.7		B'WW'R	B	橙	10%	覆土 内外面磨耗著しく調整不明瞭
2	坏	(13.6)	2.4		RWW'B'	B	鈍い橙	15%	覆土 内外面磨耗著しい
3	甕	(16.7)	7.7		WBB'W'RS	A	鈍い橙	25%	覆土 外面胴部一部剥落
4	甑		9.3	(9.0)	B'W'BWR	B	橙	20%	覆土

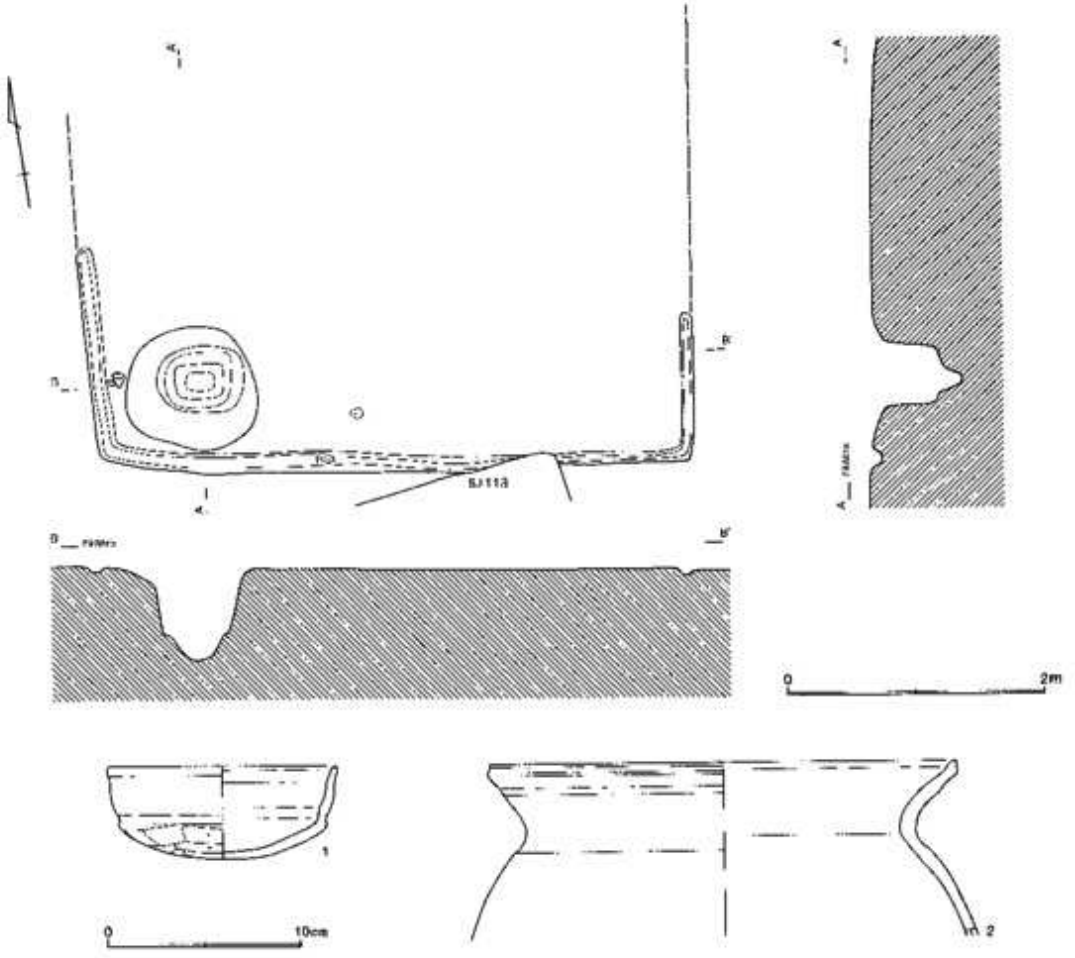


第341図　第113号住居跡・出土遺物

第114号住居跡（第342図）

そ－5－23グリッドを中心に位置する。南壁の一部を第113号住居跡に切られる。本住居跡付近から北は、遺跡を区画する旧河川に向かって地形が下がり始める。本住居跡の北側大半の深度が浅くなり、床面の範囲すら掴めなくなっているのは、この地形の影響と考える。残存規模は南壁4.68mで、深さは約0.02m程度となっている。

床面はほぼ平坦であるが、壁の立ち上がりはほとんどない。深度がなく覆土の状態は不明である。カマドは検出されていない。南壁以外に設置されていたと推察される。貯蔵穴は南西コーナーに



第342図　第114号住居跡・出土遺物

第114号住居跡出土遺物観察表（第342図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.8)	4.8		BB'WW'R	C	鈍い橙	60%	No3 覆土(+2.0cm) 内面磨耗著しい
2	甕	24.1	9.0		SB'WW'RB	B	鈍い黄橙	80%	覆土 肩部ヘラナデか 不明瞭

位置し、104cm×90cmの長方形で、深さは71cmを測る。壁溝は検出された壁では全周し、幅8～16cm、深さ2～7cmとなっている。

出土遺物は極めて少なく、図示した2点以外には土師器甕の底部と胴部の小片があるだけである。

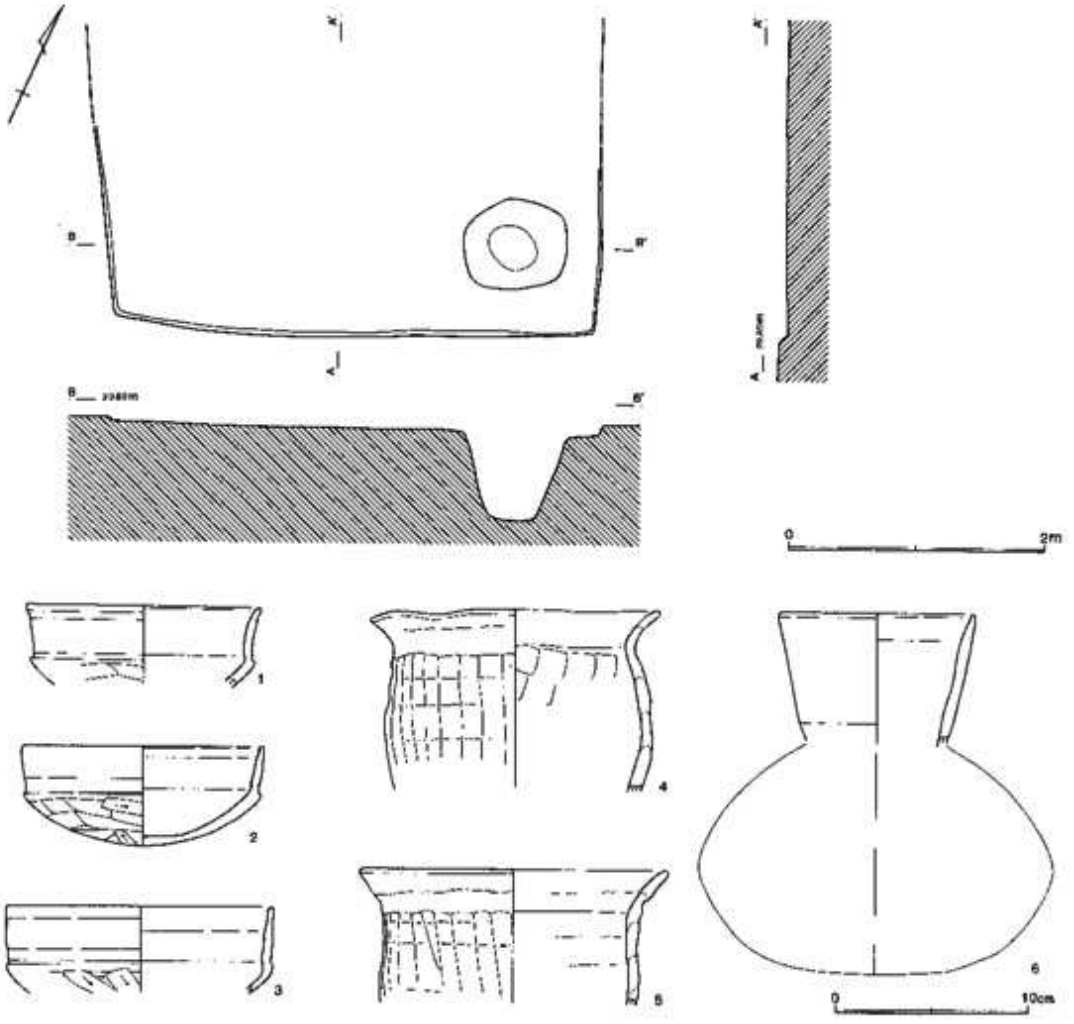
第115号住居跡（第343図）

そ－6－11グリッドを中心に位置する。北半は次第に浅くなり、床面の範囲も掴めなくなっている。残存規模は南壁が3.70m、西壁が1.44mで、深さは0～0.08mとなっている。

床面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりはやや開き気味か。深度がなく覆土の観察は出来なかった。

カマドは検出されていない。南壁以外に設置されていたと推察される。貯蔵穴は南東コーナーに位置し、70cm×80cmのやや歪んだ円形で、深さは68cmを測る。

出土遺物は少なく、図示した以外には土師器坏と甕の小片がある。



第343図　第115号住居跡・出土遺物

第115号住居跡出土遺物観察表（第343図）

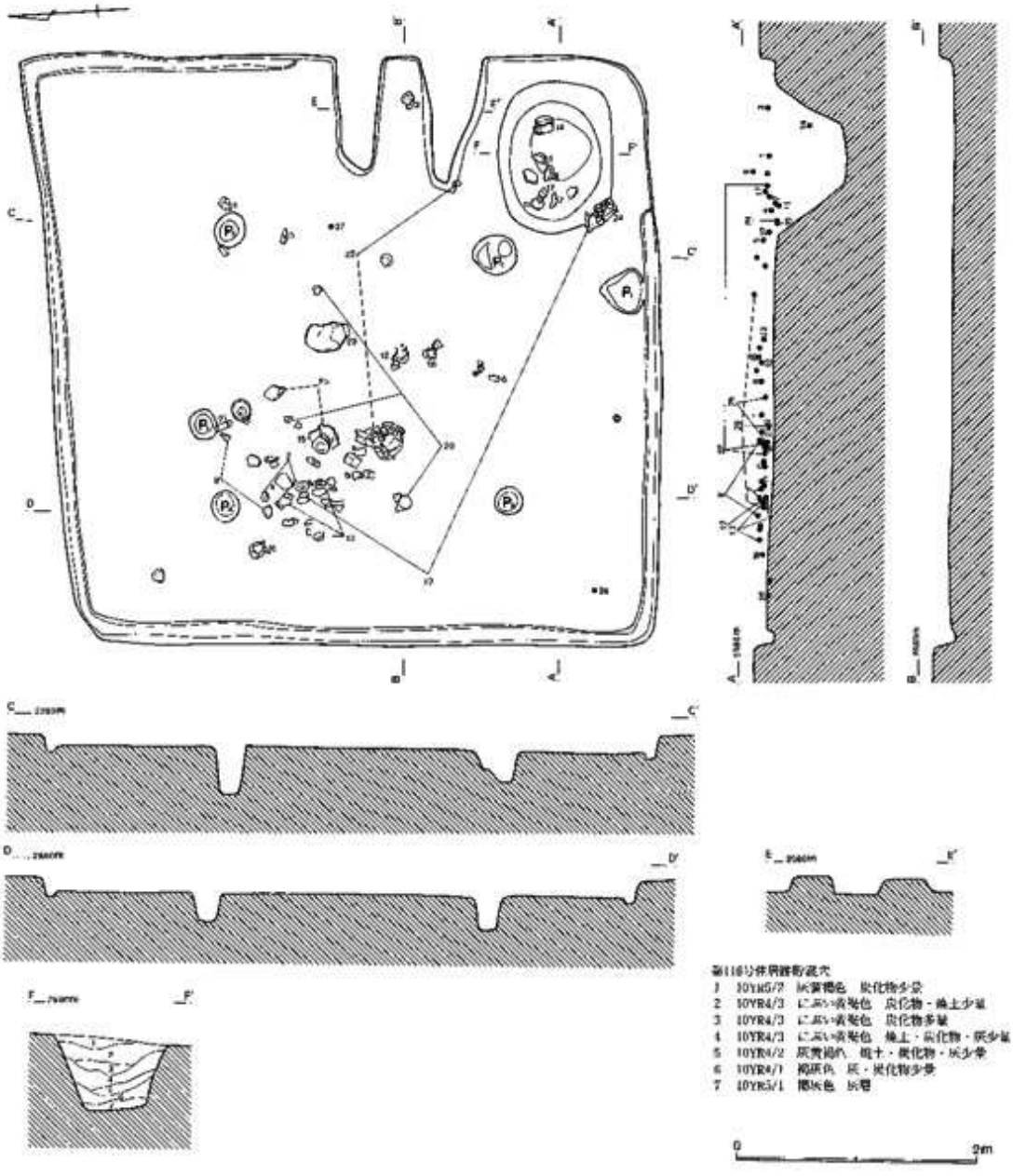
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	4.1		WW'B'R	A	鈍い橙	20%	覆土 内外面磨耗著しい
2	坏	12.2	5.2		RW'WB'	B	鈍い橙	90%	覆土 全体的やや磨耗
3	坏	(13.8)	4.5		B'W'WBR	A	橙	20%	覆土 内外面磨耗著しく特に内面激しい
4	甕	14.6	9.1		SWB'W'RB	B	黒褐	70%	一括 歪み大きい 外面粘土接合痕残る
5	甕	(15.6)	6.9		SWW'B'BR	B	橙	60%	覆土 内面色調黒 粘土接合痕残る
6	甑か	(9.8)	6.8		BRWB'W'	B	橙	20%	覆土 内外面磨耗

第116号住居跡（第344図）

そ－6－21グリッドを中心に位置する。形態は方形に近く、規模は長軸5.12m、短軸4.86m、深さ0.10～0.16mである。主軸方位はS－86°－Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土の観察は出来なかった。

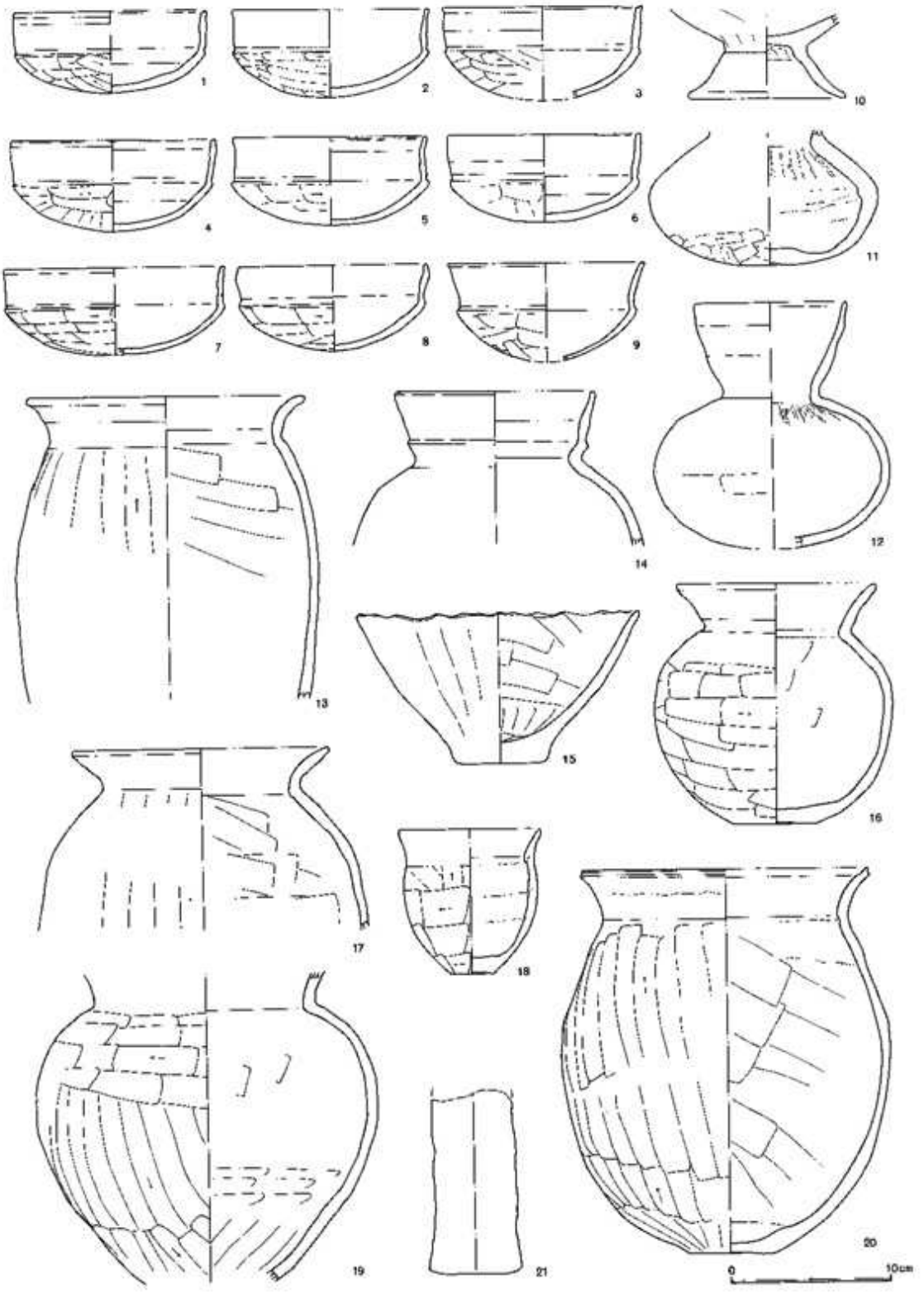
カマドは東壁中央よりやや南に設置される。燃焼部の掘り込みは見られず、壁内に留まる。袖は



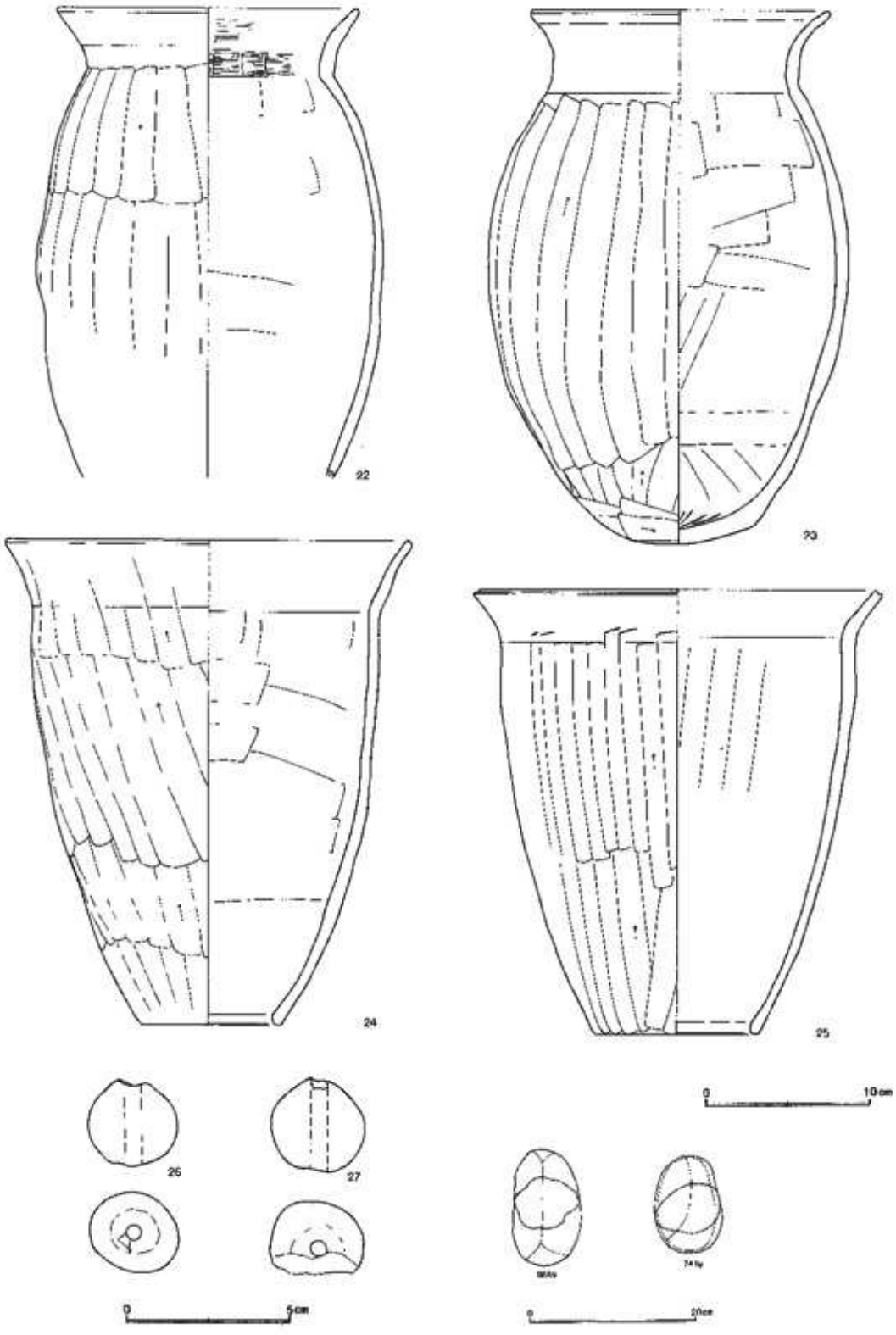
第344図　第116号住居跡

長く広い。貯蔵穴は南東コーナーに位置し、125cm×96cmの楕円形で、深さは約64cmを測る。ピットは6本検出された。P2～P4とP6は柱穴と考えられる。壁溝は南東コーナー以外で検出され、幅12～20cm、深さ3～7cmである。

出土遺物は、住居跡中央部と貯蔵穴に集中する。出土土器は多く、全て土師器である。坏・高坏・甕・甕・鉢・壺・ミニチュア等が認められる。第345図－15は甕の底部を転用した鉢である。外面は2次被熱のためか調整が不明瞭となっている。18は甕のミニチュアで、内面のつくりはやや雑だが、外面は丁寧にヘラケズリされている。21は土製の支脚で、上半部は欠損しており、カマドから離れたP5近くから出土している。



第345図　第116号住居跡出土遺物(1)



第346図　第116号住居跡出土遺物(2)

第116号住居跡出土遺物観察表（第345・346図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	11.9	5.1		WW'SBB'	B	橙	100%	No5 覆土(+9.1cm) P-No8 貯穴
2	坏	12.2	5.5		W'B'WR	B	橙	80%	No24,32 覆土(+7.4cm) 覆土 胎土緻密
3	坏	(12.8)	5.7		WW'RB'	A	橙	40%	No2 カマド(+3.2cm) 口縁端部磨耗
4	坏	12.8	5.7		W'WB'R	B	浅黄橙	70%	No43 ピット6周辺床面 一括 内面磨耗
5	坏	(12.1)	5.5		B'WW'R	B	橙	30%	No41 覆土(+6.1cm) 内外面磨耗
6	坏	(12.2)	5.5		WW'B'R	A	橙	40%	No5 覆土(+9.1cm) 覆土 内外面磨耗
7	坏	(13.8)	5.4		RW'B'W	B	鈍い橙	50%	P-No3 貯穴 内面磨耗
8	坏	(11.8)	5.4		SB'W'WR	B	橙	80%	No30,37 ピット5周辺 内面磨耗
9	坏	(12.2)	6.1		W'B'WRB	A	橙	40%	P-No4 貯穴 内外面やや磨耗
10	高坏		5.6	9.6	B'W'RW	A	橙	80%	覆土 内外面磨耗著しい
11	坩		8.2	2.5	WW'BB'R	B	橙	90%	P-No6 貯穴
12	坩	(9.4)	15.3		RWB'	A	橙	40%	No9 覆土(+8.0cm) 内外面磨耗著しい
13	甕	17.0	18.9		WBRS	B	灰白	60%	No23,27他 覆土(+5.9cm) 覆土 二次被熱
14	壺	12.4	9.5		WW'RB'	B	橙	70%	No9 覆土(+8.0cm) 内外面剥落
15	鉢	(17.6)	9.4	5.4	SW'WB'	A	橙	70%	No18 覆土(+6.2cm) 甕底部の転用か
16	壺	12.4	14.9	5.2	BW'B'WRS	A	浅黄橙	70%	No38 覆土(+7.0cm) 胴部下半被熱か
17	甕	15.9	11.5		WW'RB'	A	明赤褐	80%	No5 覆土(+9.1cm) 覆土 外面やや磨耗
18	ミニチュア甕	(8.8)	9.0	2.2	SWW'B	B	橙	60%	No8 覆土(+9.3cm)
19	壺		19.3		WBB'W'RS	A	浅黄橙	55%	No25覆土(+7.7cm) P-No1 貯穴 二次被熱
20	甕	(17.7)	23.9	5.3	SW'B'WR	B	黄い黄橙	50%	No12,20他 覆土(+3.4cm) 覆土
21	支脚	No36 ピット5周辺			WW'B'		橙	95%	下端径5.5cm 残高11.2cm
22	甕	18.2	28.5		WBB'SR	B	浅黄橙	75%	No3,13他 カマド右袖床面 剥落 磨耗
23	甕	(17.9)	32.5	7.3	WBB'SR	A	浅黄橙	60%	No22 覆土(+5.8cm)
24	甑	24.7	29.6	8.5	WBRSW'	B	浅黄橙	80%	P-No1 貯穴 内外面磨耗著しい
25	甑	(24.0)	27.1	(10.0)	W'WB'RB	B	橙	15%	No17,21 覆土(+3.0cm) 内面やや磨耗
26	土玉	No11 覆土床面			WBW'B'		橙		長2.6cm 径2.7cm 孔0.5cm 重15.02g
27	土玉	No44 覆土(+2.1cm)			WBW'B'		明赤褐		長2.8cm 径2.9cm 孔0.5cm 重16.15g

第117号住居跡（第347図）

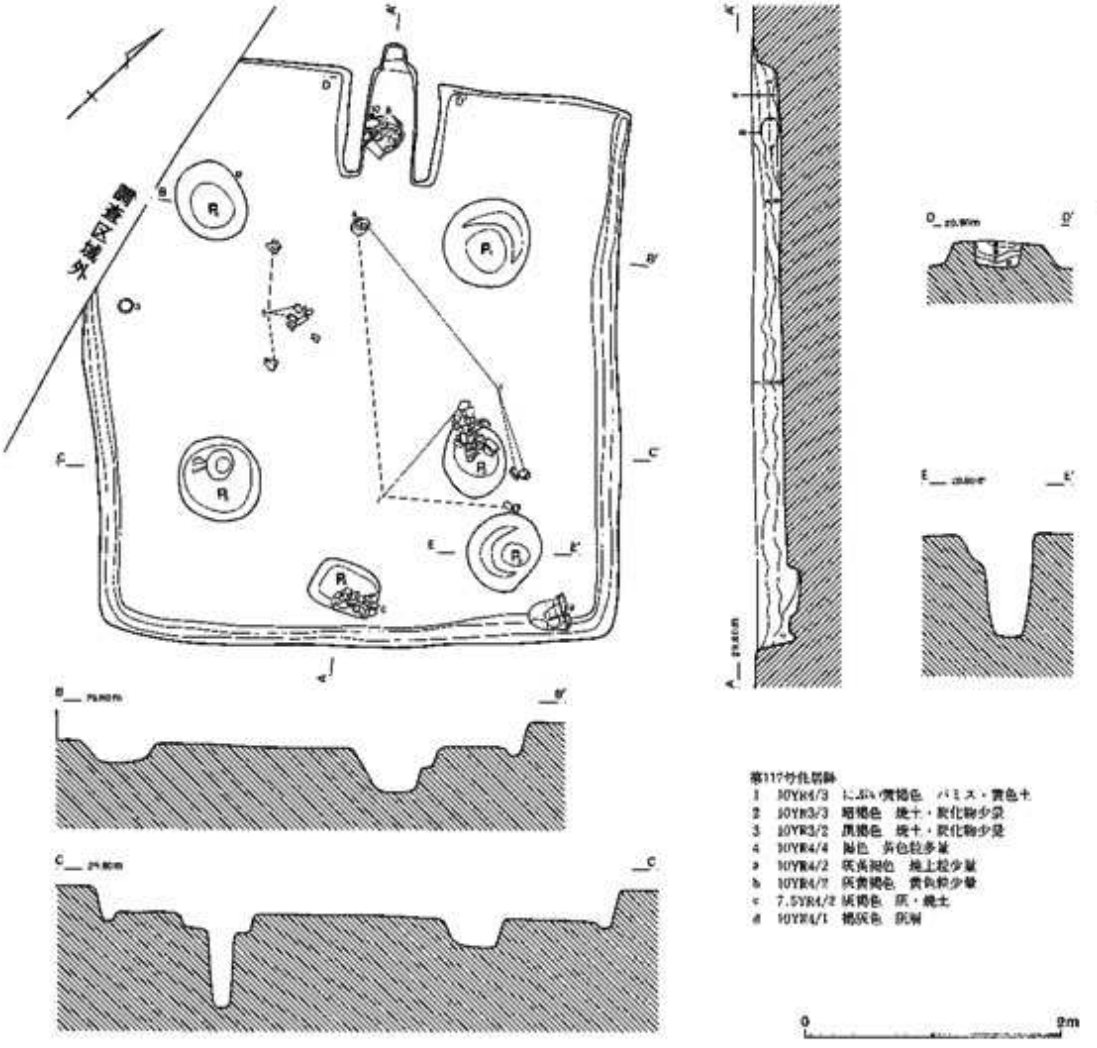
そ－6－23グリッドを中心に位置し、西側コーナー部は調査区域外にある。形態は長方形で、規模は長軸4.50m、短軸4.18m、深さ0.18～0.24mである。主軸方位はN－45°－Wを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は4層に分けられ、概ね自然堆積と思われる。

カマドは北西側の壁に設置される。燃焼部の掘り込みは見られず、最下層には灰層が残存する。

ピットは6本検出された。P1～P4は柱穴と考えられる。P5は東コーナーに位置し、直径約60cm、深さ82cmで貯蔵穴とも考えられる。P4は南東側の壁際の中央に位置している。壁溝は北西側の壁以外で検出され、幅10～22cm、深さ3～7cmを測る。

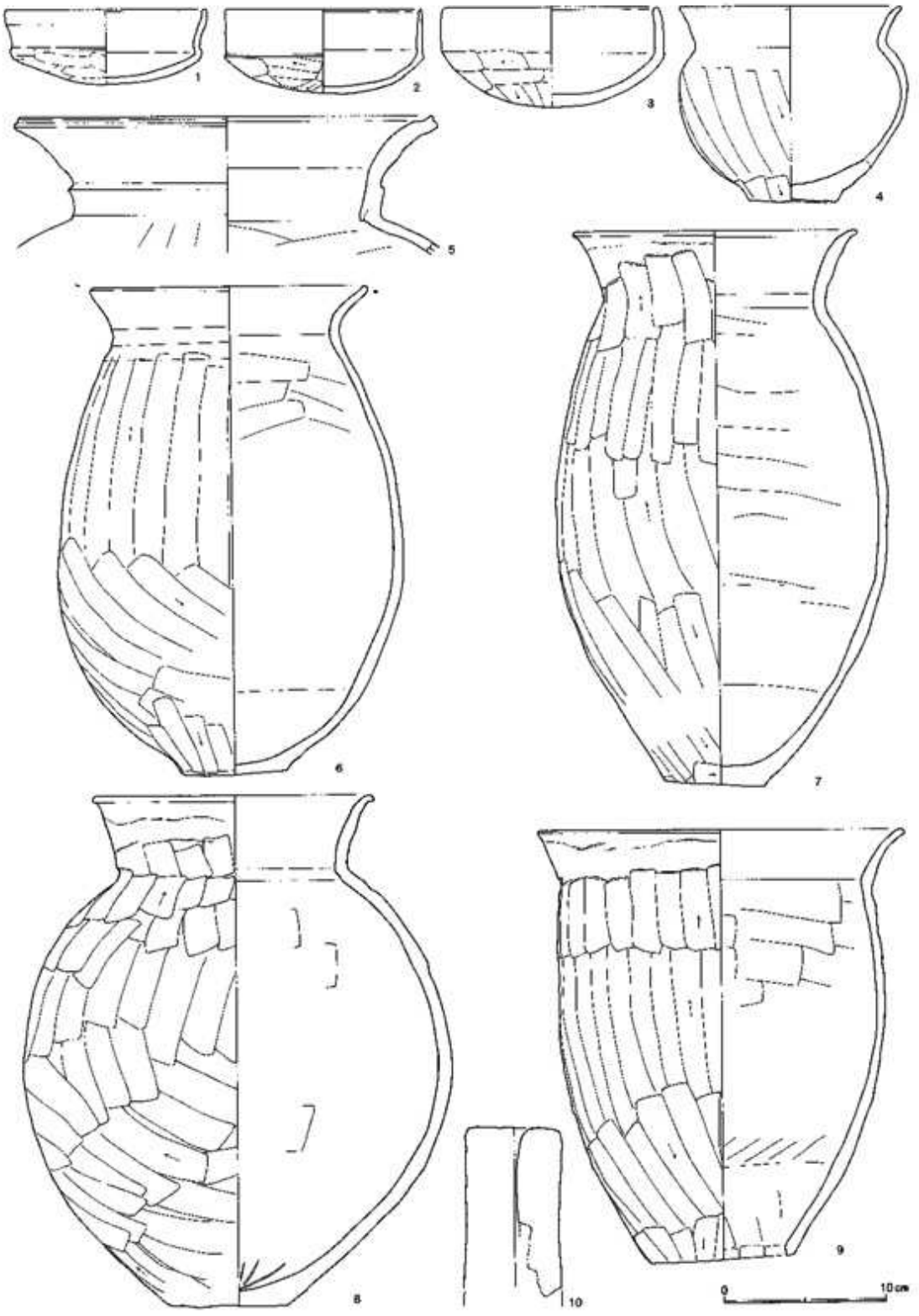
出土遺物はやや多めだが、接合率が良く、図示した土器以外は破片が少量残る程度である。出土土器は全て土師器で、坏・甕・甑等が認められる。カマド燃焼部では支脚と甕が潰れた状態で出土している。P2とP4では甕が、東コーナー付近では甑が出土している。7の甕の胴部下半は被熱している。10は土製支脚で下半を欠損する。被熱のためかなりもろくなっており、天井部は平坦で3mm程度の小さな穴が通じている。



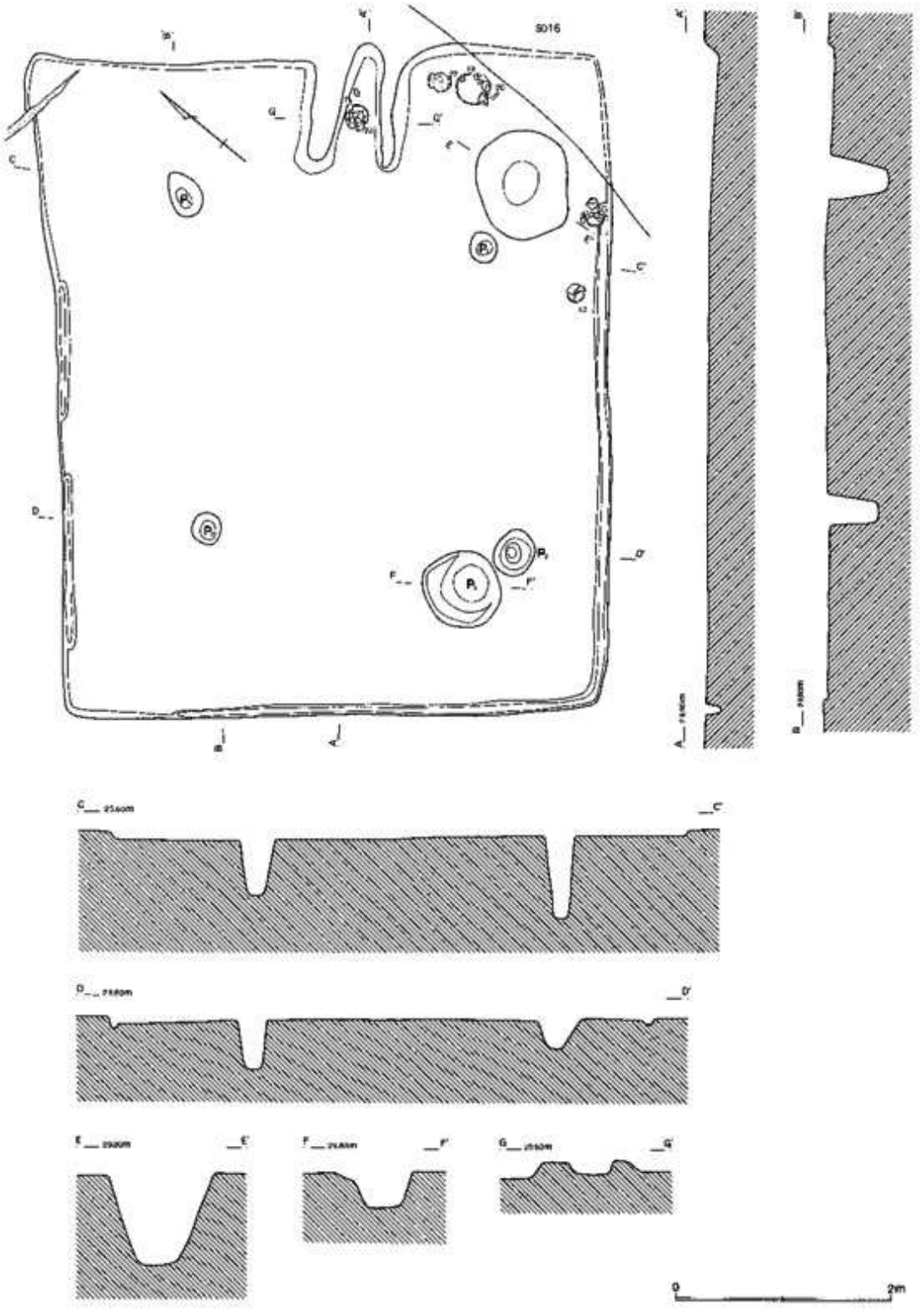
第347図　第117号住居跡

第117号住居跡出土遺物観察表（第348図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.1	4.6		B'BWW'R	B	鈍い橙	75%	No2,9 内外面磨耗著しく調整不明瞭
2	坏	12.1	5.2		WRB'	C	橙	80%	一括 内外面磨耗著しい やや歪む
3	坏	13.2	6.2		SWW'BB'	A	橙	100%	No6 覆土(−2.9cm) 内外面やや磨耗
4	小形甕	13.5	12.1	5.4	SBB'WW'R	B	鈍い橙	80%	No2 カマド覆土(−4.4cm)
5	甕	25.4	8.4		BB'WW'S	B	黄い黄橙	75%	No3,5 覆土床面 一括 外面やや磨耗
6	甕	16.7	29.8	6.5	WBB'R	B	橙	55%	No11 覆土(−2.2cm)
7	甕	17.0	34.1	6.2	WB'RS	B	鈍い橙	90%	No2,7他 ピット床面 胴下半二次被熱
8	甕	16.8	31.4	7.5	WRBW'	B	鈍い橙	85%	No1 カマド(+5.3cm) カマド 口縁部歪む
9	甑	22.2	26.5	8.8	WBRS	B	鈍い橙	95%	No12 覆土床面
10	支脚	No14 カマド床面			B'WW'B		鈍い橙	70%	上端径5.7cm 残高10.4cm



第348図　第117号住居跡出土遺物



第349図　第118号住居跡

第118号住居跡（第349図）

たー6－7グリッドを中心に位置する。東コーナーを第16号溝跡によって切られる。形態は長方形で、規模は長軸6.16m、短軸5.04m、深さは0.01～0.12mで南側が浅くなる傾向にある。主軸方位はN－49°－Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。深度が浅く覆土の観察は出来なかった。北側コーナー近くを噴砂に切られ、平面形に約8cmのずれが生じている。

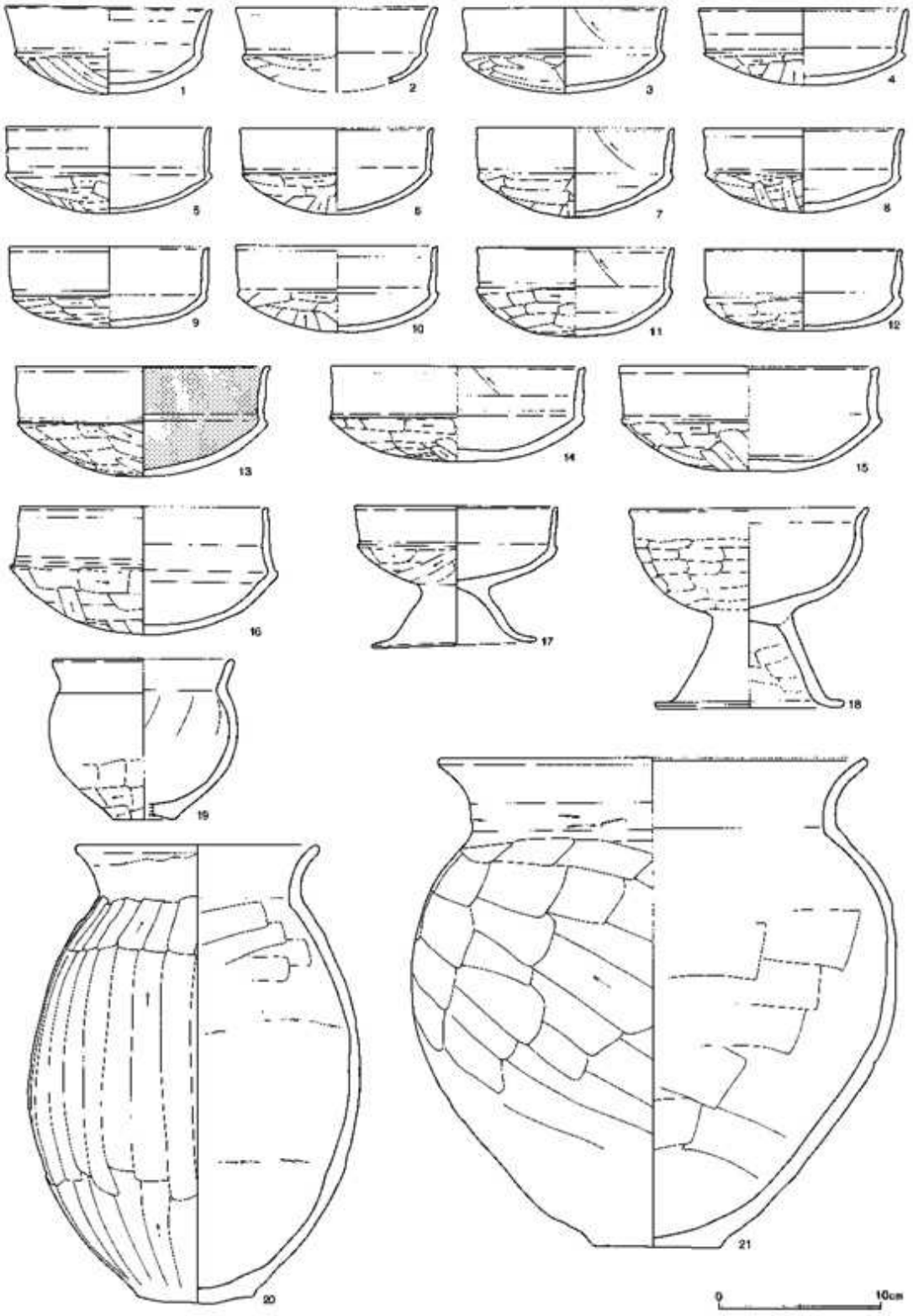
カマドは北東側の壁に設置される。燃焼部の掘り込みは見られず、両袖は長く延びる。

貯蔵穴はカマド右側に位置し、直径約98cmの円形で、深さは約85cmを測る。ピットは5本検出された。P1～P4は柱穴と思われる。P5はP2の脇に位置しているが、その性格は判断できなかった。壁溝は北東側の壁以外で断続的に検出され、幅8～14cm、深さ1～5cmとなっている。

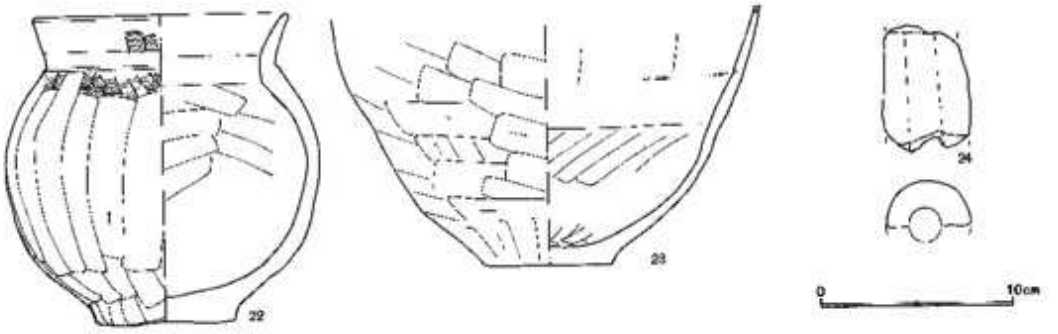
遺物はカマド及び、貯蔵穴周辺で多く出土している。量的にはやや多く、全て土師器であり、接合率は良い方である。坏・高坏・甕・壺・甑等が認められる。カマド燃焼部から甕底部が出土し、右袖の脇には甕が3個体見られた。24は羽口片である。両端は欠損しており、外径は4.3cm、孔径は1.9cmになる。図示できなかったが、土師器の小片で高熱のため器面が発泡してしまったものが1片見られた。

第118号住居跡出土遺物観察表（第350・351図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.6	5.3		W'WB'RB	B	橙	95%	貯穴 外面口縁上端に黒色皮膜状付着
2	坏	12.2	4.7		BB'W	B	鈍い橙	70%	貯穴 内面黒色皮膜状付着
3	坏	12.4	5.2		W'B'WR	A	橙	100%	貯穴 ナデ抜き上げ痕 黒色皮膜状付着
4	坏	12.8	4.7		B'W'WR	B	橙	90%	貯穴 黒色皮膜状付着
5	坏	(12.5)	5.3		W'WB'R	B	橙	80%	貯穴 黒色皮膜状付着
6	坏	(11.8)	5.3		WW'BB'	B	橙	70%	貯穴 内外面やや磨耗 黒色皮膜状付着
7	坏	12.0	5.5		RW'WB'	A	浅黄橙	100%	貯穴 黒色皮膜状付着
8	坏	12.3	5.1		W'B'WR	B	橙	80%	貯穴 黒色皮膜状付着
9	坏	12.2	5.0		B'W'RW	B	橙	90%	貯穴 黒色皮膜状付着
10	坏	12.4	5.3		B'W'WRB	B	鈍い橙	85%	貯穴 黒色皮膜状付着 内外面やや磨耗
11	坏	12.0	5.5		W'RB'W	A	橙	100%	貯穴 内面やや磨耗 黒色皮膜状付着
12	坏	12.1	5.0		WW'B'R	B	橙	70%	覆土 外面磨耗著しく調整不明瞭
13	坏	15.6	6.7		RW'B'W	A	橙	95%	No3 覆土床面 内外面やや磨耗
14	坏	15.6	5.8		W'WB'R	A	橙	95%	貯穴 黒色皮膜状付着
15	坏	15.8	6.4		WW'RB'	A	橙	95%	貯穴 黒色皮膜状付着
16	坏	15.3	7.8		WRB'W'	A	橙	90%	覆土 口縁部やや磨耗
17	高坏	12.5	8.5	10.2	WW'B'R	B	橙	75%	貯穴 磨耗著しく特に坏部内面は激しい
18	高坏	14.5	12.3	11.4	WW'B'RB	B	橙	80%	覆土
19	小形甕	(10.9)	9.8	(3.8)	BB'WW'R	B	橙	50%	No5 カマド右袖(－10.4cm) 磨耗著しい
20	甕	14.7	28.1	7.1	WW'RBB'	B	淡橙	80%	No5 カマド右袖(－10.4cm)
21	甕	26.1	30.0	7.8	WW'RB	A	淡橙	75%	貯穴 下半二次被熱 剥落 磨耗著しい
22	小形甕	12.8	15.8	7.1	WW'RBB'片	B	鈍い橙	60%	No4 カマド右袖床面
23	甕		13.4	6.6	SBB'WW'	B	鈍い黄橙	80%	No1 カマド(＋4.7cm)
24	羽口	覆土			B'W'R		灰		長さ6.6cm 幅4.5cm 両端部欠損



第350図　第118号住居跡出土遺物(1)



第351図　第118号住居跡出土遺物(2)

（2）掘立柱建物跡

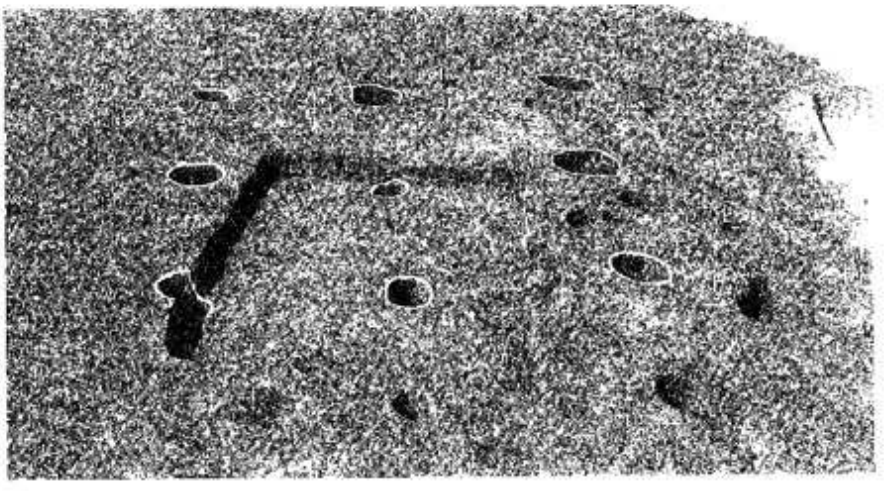
第１号掘立柱建物跡（第352図）

そ－４－５グリッドを中心に位置する。第110号住居跡の上に構築されている。２×２間の総柱建物と考えられる。規模は、桁行4.40ｍ、梁行4.20ｍで、主軸方位はＮ－53°－Ｗを指す。

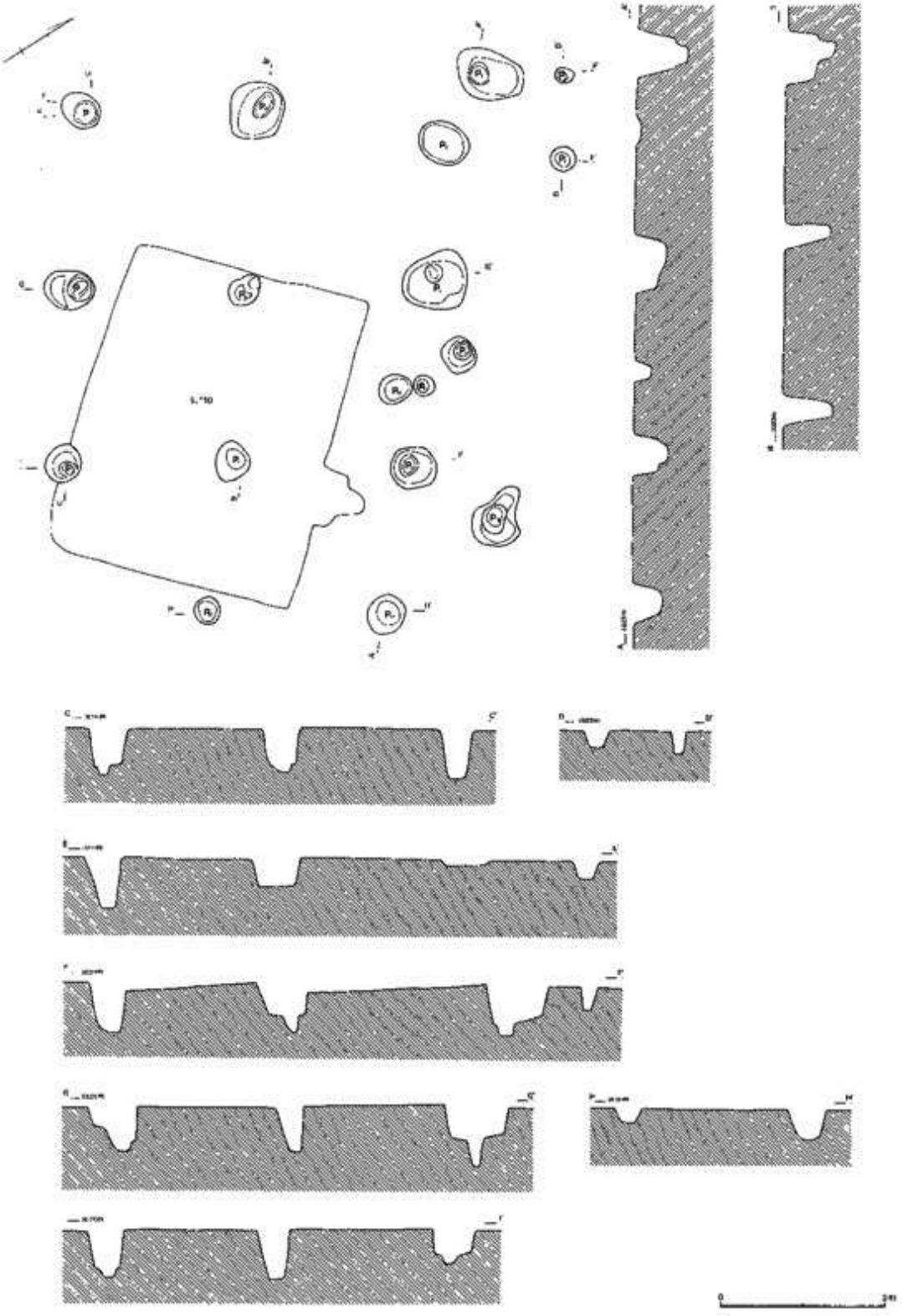
調査時においてはＰ１～Ｐ９までを柱穴と考えたが、東側隅柱のＰ１は柱筋からかなりずれており、位置的にはＰ10の方が適当とも考えられる。しかし、Ｐ10は深さが９㎝と浅く、Ｐ１の深さは62㎝で、底面に柱の痕跡と思われる小ピットが見られることからＰ１の方が可能性が高い。

柱穴は円形または楕円形で、径は35㎝から78㎝とばらつきが見られる。Ｐ10を除き、深さは43㎝から75㎝と一定しないが比較的しっかりと掘り込まれている。Ｐ１－Ｐ３・Ｐ５～Ｐ８において柱穴の底面に小ピットが穿たれている。柱の最下部の痕跡と思われる。この痕跡を基準とした柱間は、桁行2.2ｍ、梁行2.1ｍとなる。

Ｐ３とＰ４から南東側にそれぞれ1.85ｍ離れた位置にやや小さめのピットが検出された（Ｐ17・Ｐ18）。建物跡に伴うとも考えられたが、Ｐ18が柱筋から外れる点や、Ｐ５の南東側には見られない点など疑問が残る。Ｐ11からＰ16は建物跡には伴わないと思われる。



第１号掘立柱建物跡



第352図　第１号掘立柱建物跡

（3）井戸跡（第353～357図）

井戸跡は35基検出されている。居立遺跡は自然堤防上に立地し、旧河川によって画されている。調査区域の南北及び東側にその旧河川が見られる。調査区域内の地形は中央部がほぼ平坦で、南北端は旧河川に向かって下がっている。井戸跡もこの地形の影響を受けていると思われ、中央部の平坦面に掘られている。井戸跡の分布は大きく３つに分けられる。第７号溝跡と第９号溝跡に囲まれた地域、第７号溝跡の南端付近で溝跡の両岸、調査区の東端近くのものである。

第７号溝跡と第９号溝跡に囲まれた地域に掘られた井戸跡は20基と最も多い。住居跡や溝跡が密集する地域でもあり、大半の井戸跡がこれらと重複している。第７号溝跡南端付近には７基の井戸跡（第２－７・10号井戸跡）が見られる。この一帯も住居跡が密集しており、重複が激しい。調査区の東端近くには８基の井戸跡（第１・12－14・16・17・24・30号井戸跡）がある。第１号井戸跡は現在では他の井戸跡と離れているように見えるが、その間を流れる福川は河川改修後の流路であり、本来は遺構が存在したと考えられる。井戸跡もある程度の数が想像できる。

井戸跡は全て素掘りで、石組みや木組みのものは検出されなかった。平面形は円形あるいは楕円形で、一部には崩落のためか不整円形となるものも見られる。最大径は１ｍに満たないものから３ｍとなるものまであるが、２ｍ前後が約半数を占め、2.5ｍを越すものが６基検出されている。遺構確認面からの深さは0.5ｍに満たないものから1.5ｍ近いものまであるが、10基の井戸跡では底部の確認ができなかった。

出土遺物が見られない井戸跡は11基だけで、後は量の多少はあるが遺物が出土している。土師器・須恵器をはじめ、焙烙・近世陶器・板碑・石臼等様々な遺物が見られる。しかし、前述したように井戸跡は他の遺構との重複が激しく、これらからの流入も考えられ、井戸跡の年代の根拠となるものは少ない。

第１号井戸跡（第353図）

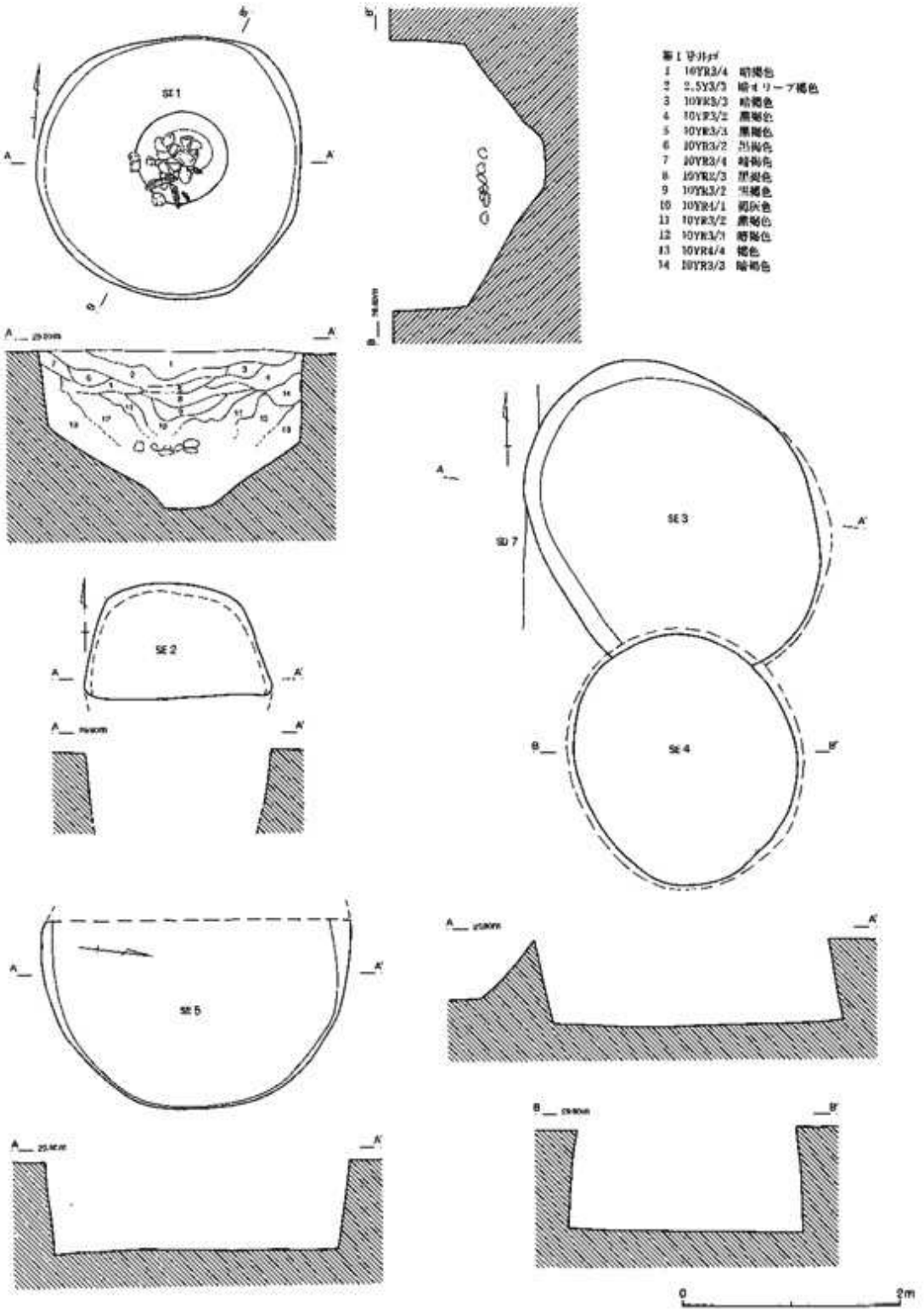
し－３－７グリッドに位置する。最大径2.46ｍ、深さ1.42ｍの大型の井戸跡である。壁は垂直に約0.7ｍ掘り込まれ、急激に窄まって底面は直径0.4ｍ程の円形となっている。底面から約５０㎝浮いたところで河原石と自然木がまとまって検出されている。出土遺物は、焙烙片３・石臼片２の他、僅かに土師器・須恵器が見られた。

第15号井戸跡（第355図）

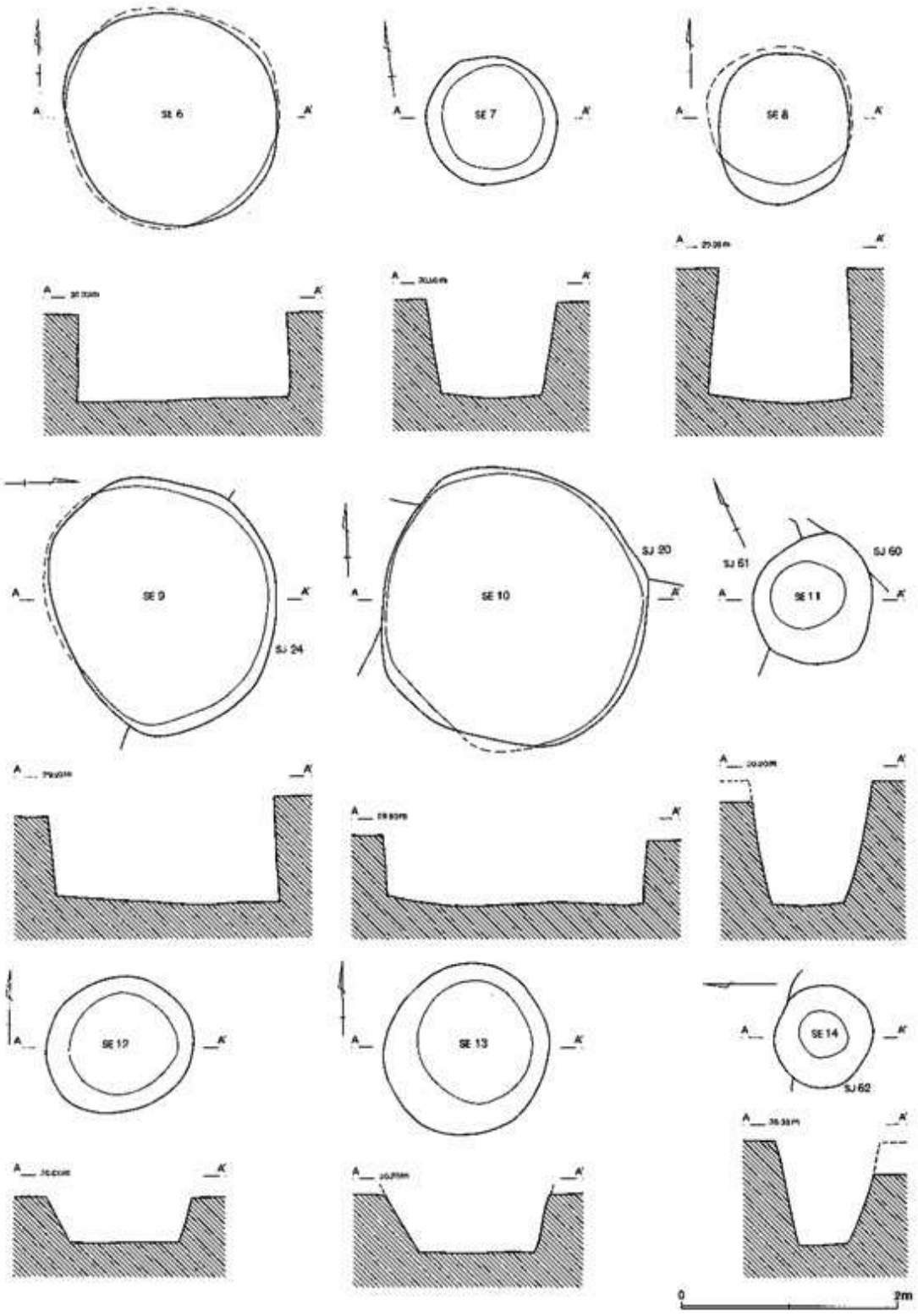
すー４－19グリッドに位置し、第13号溝跡と重複するが新旧関係は明らかでない。最大径2.0ｍ、深さ1.04ｍの大型の井戸跡である。五輪塔の水輪・板碑片・焙烙片の他、土師器・須恵器が出土している。

第18号井戸跡（第355図）

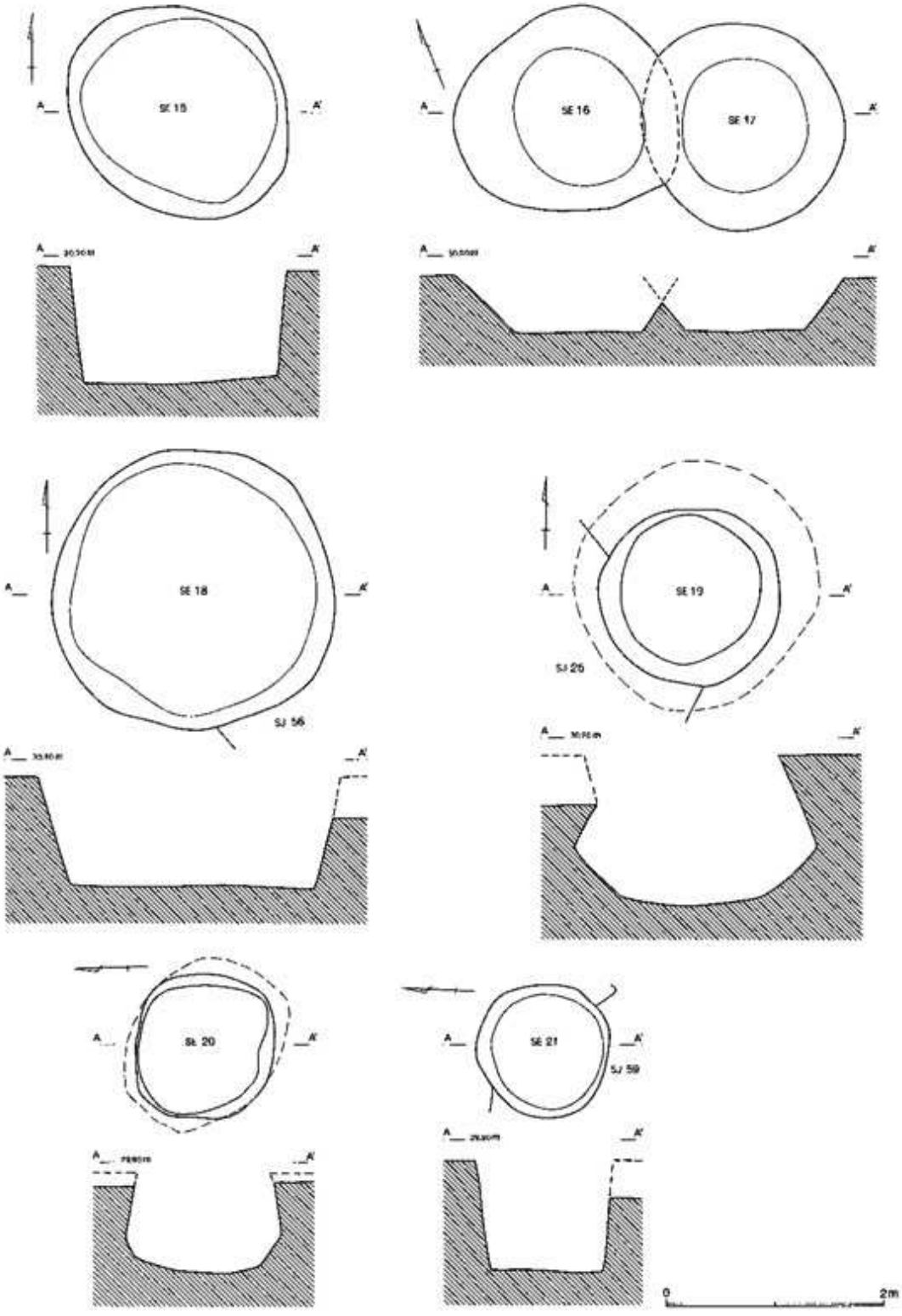
せー５－３グリッドに位置し、第56号住居跡、第13号溝跡と重複する。第56号住居跡よりは新し


SE1
SE2
SE3
SE4
SE5
SD7
1 10YR3/4 暗褐色
2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色
3 10YR3/3 暗褐色
4 10YR3/2 黒褐色
5 10YR3/3 黒褐色
6 10YR3/2 黒褐色
7 10YR3/4 暗褐色
8 10YR2/3 黒褐色
9 10YR3/2 黒褐色
10 10YR4/1 褐灰色
11 10YR3/2 黒褐色
12 10YR3/1 暗褐色
13 10YR4/4 褐色
14 10YR3/3 暗褐色
0
2m

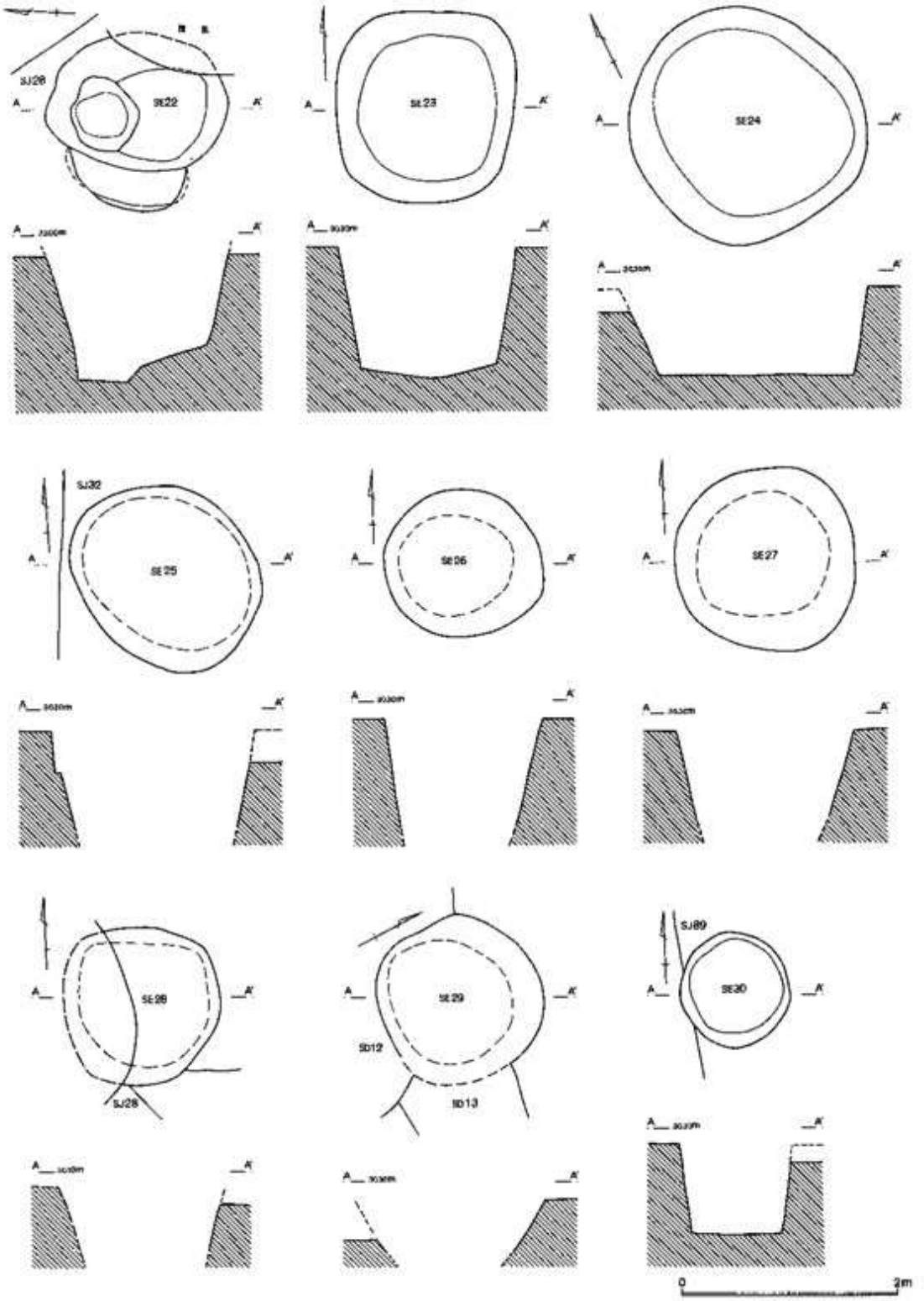
第353図　井戸跡(1)


SE 6
SE 7
SE 8
SE 9
SJ 24
SE 10
SJ 20
SJ 61
SJ 60
SE 11
SE 12
SE 13
SE 14
SJ 62
0
2m

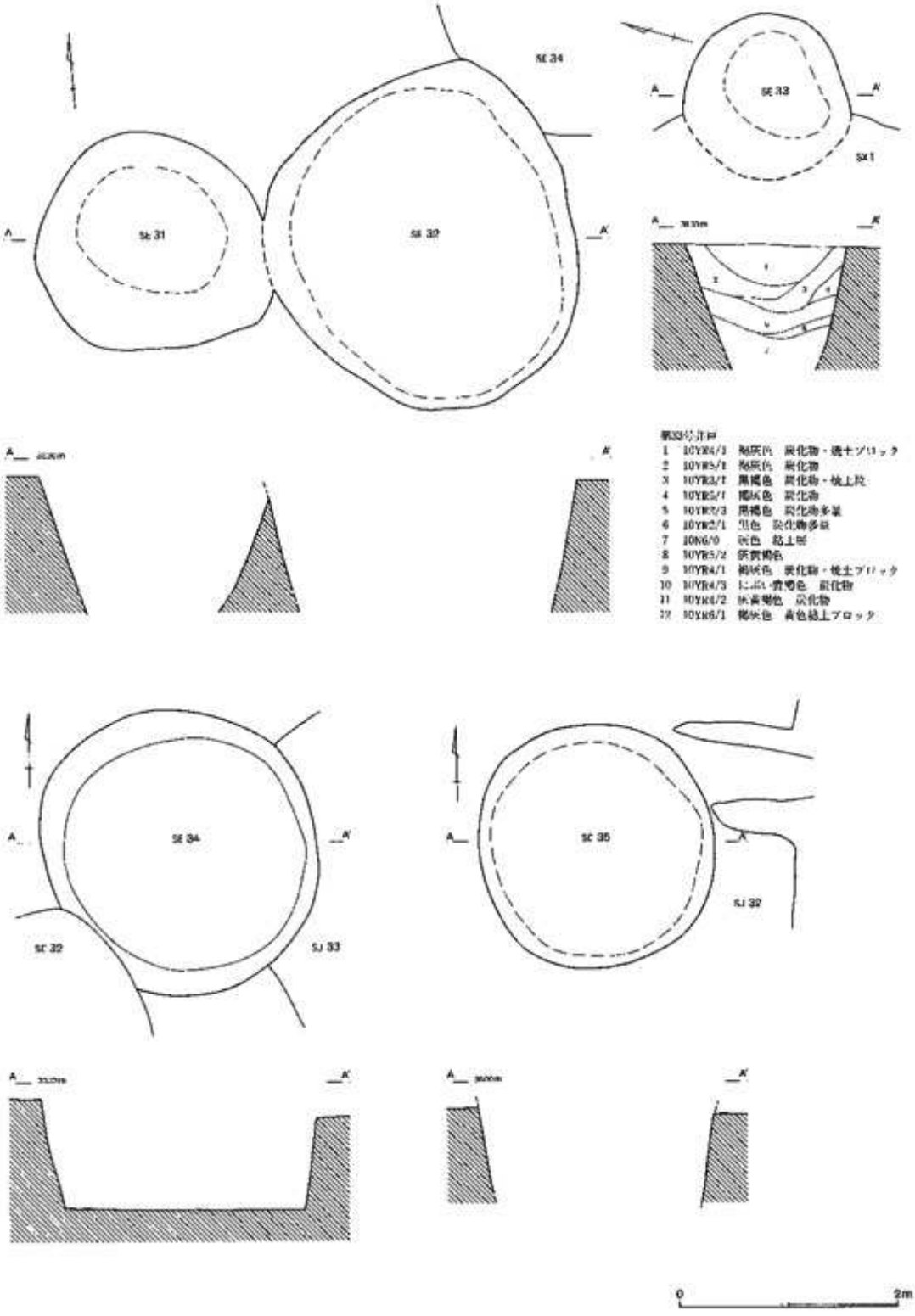
第354図　井戸跡(2)



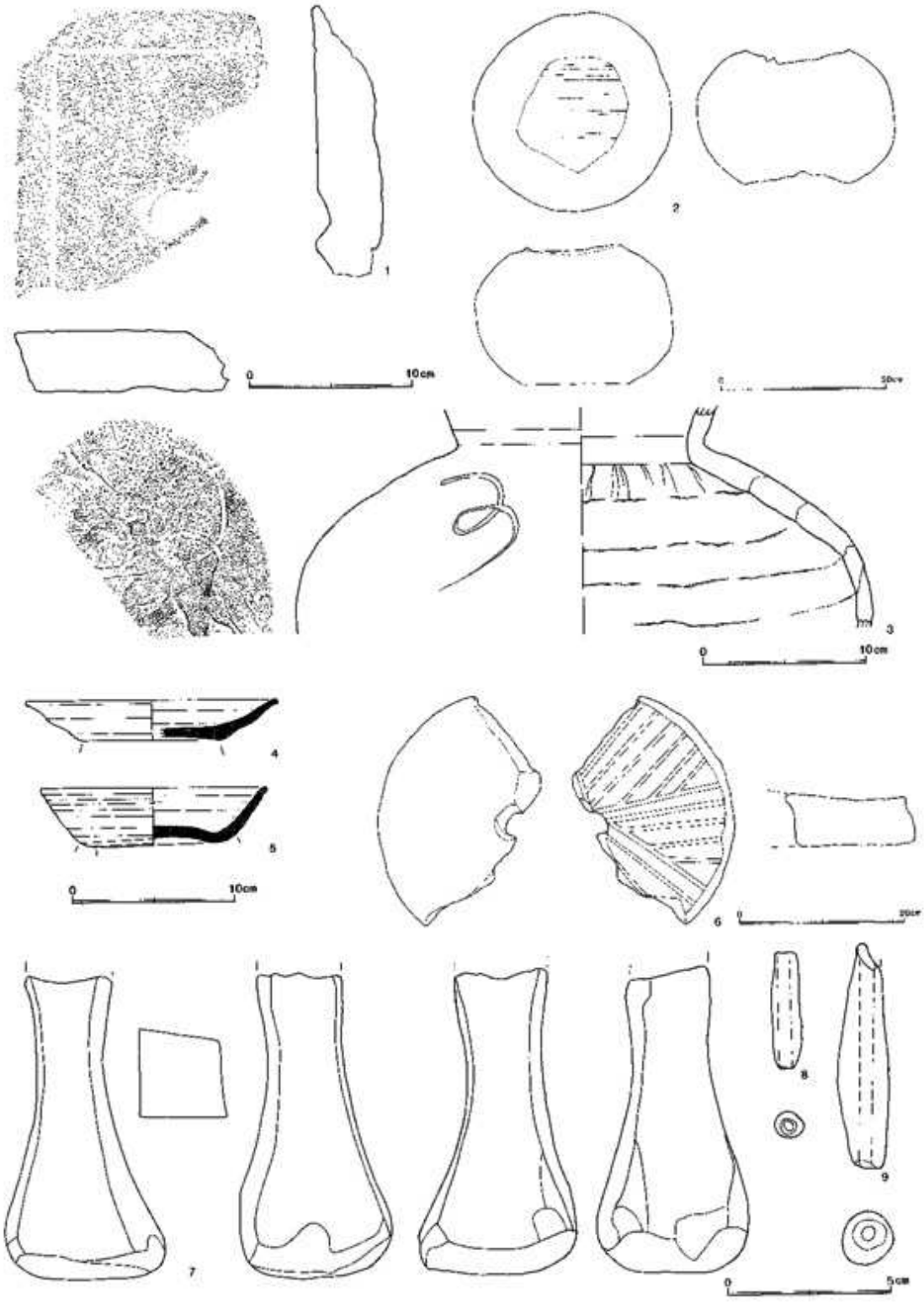
第355図　井戸跡(3)


SJ28
SE22
SE23
SE24
SJ32
SE25
SE26
SE27
SE28
SJ28
SE29
SD12
SD13
SJ89
SE30
0
2m

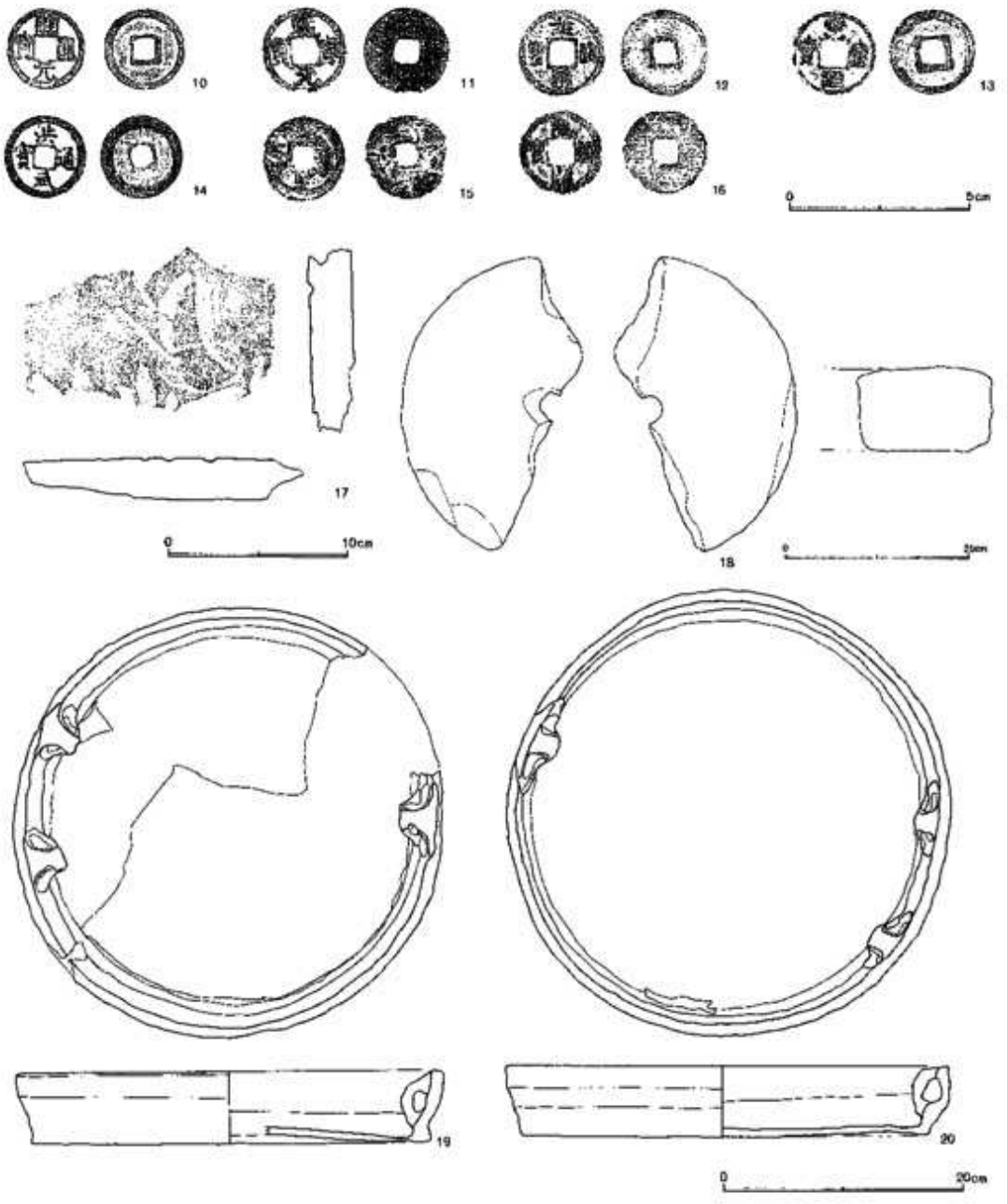
第356図　井戸跡(4)


SE 34
SE 33
SX 1
SE 31
SE 32
A
A'
第33号井戸
1 10YR4/1 褐灰色 炭化物・焼土ブロック
2 10YR5/1 褐灰色 炭化物
3 10YR3/1 黒褐色 炭化物・焼土粒
4 10YR5/1 褐灰色 炭化物
5 10YR2/3 黒褐色 炭化物多量
6 10YR2/1 黒色 炭化物多量
7 10N6/0 灰色 粘土層
8 10YR5/2 灰黄褐色
9 10YR4/1 褐灰色 炭化物・焼土ブロック
10 10YR4/3 にぶい黄褐色 炭化物
11 10YR4/2 灰黄褐色 炭化物
12 10YR6/1 褐灰色 黄色粘土ブロック
SE 34
SE 35
SE 32
SJ 33
SJ 32
0
2m

第357図　井戸跡(5)



第358図　井戸跡出土遺物(1)



第359図　井戸跡出土遺物(2)

いが、第13号溝跡との関係は判断できなかった。最大径2.6m、深さ1.0mの大型の井戸跡である。断面の観察は出来なかったが、掘り方と思われる壁の遺存は良い。井戸跡のなかでは最も多くの遺物が出土しており、古銭7・板碑片1・石臼2・焙烙2の他、土師器が少量見られる。第359図－10は開通元宝（唐・621）、11は熙寧元宝（北宋・1068）、12は元祐通宝（北宋・1086）、13は聖宋元宝（北宋・1101）、14は洪武通宝（明・1367）で、15・16は遺存状態が悪く不明である。何れも第18号井戸跡の出土である。17は板碑の破片である。主尊種字は阿弥陀三尊であろうか。18は礫岩製の石臼である。推定径は36.6cm、厚さは8.5cmとなる。19・20は内耳を持つ焙烙である。共に内耳

井戸跡出土遺物観察表（第358・359図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	板碑	SE15覆土 残高21.0cm 幅15.6cm 厚さ4.0cm 緑泥片岩 枠線と主尊種子の一部を残すのみ 阿弥陀か							
2	五輪塔	SE15覆土 水輪 直径24.0cm 残高16.6cm 溶岩製 刻字等は見られない							
3	壺		13.7		WW'B	A	褐灰	80%	SE33覆土 瀬美窯 12C後～13C前半
4	坏	(13.8)	3.6		WW'BR	B	灰白	50%	SE16覆土底部回転糸切り遺構伴わないか
5	皿	(15.4)	2.4	(8.6)	WBB'	A	黄灰	35%	SE16覆土底部回転糸切り遺構伴わないか
6	石臼	SE16覆土 下臼 直径(35.0)cm 厚さ6.8cm 砂岩製							
7	砥石	SE32覆土 長さ9.3cm 幅2.7cm 厚さ3.1cm 重量204g 安山岩製							
8	土錘	SE12覆土			BB'W		褐灰	100%	長3.6cm 径0.9cm 孔0.4cm 重2.04g
9	土錘	SE27覆土			W'B		鈍い褐		残6.9cm 径1.7cm 孔0.4cm 重15.15g
17	板碑	SE18覆土 残高9.9cm 幅16.9cm 厚さ2.4cm 緑泥片岩 枠線と種子 蓮台の一部分のみ残存 キリークか							
18	石臼	SE18覆土 直径(36.6)cm 厚さ8.5cm 礫岩製							
19	焙烙	(33.6)	5.0	(31.8)	WW'B'R	B	褐灰	45%	SE18覆土 被熱の為底部が歪んでいる
20	焙烙	36.8	5.8	33.6	WRB'B	B	褐灰	95%	SE18覆土

は３個で、やや偏平な粘土紐を貼り付けている。

（４）土壙（第360～362図）

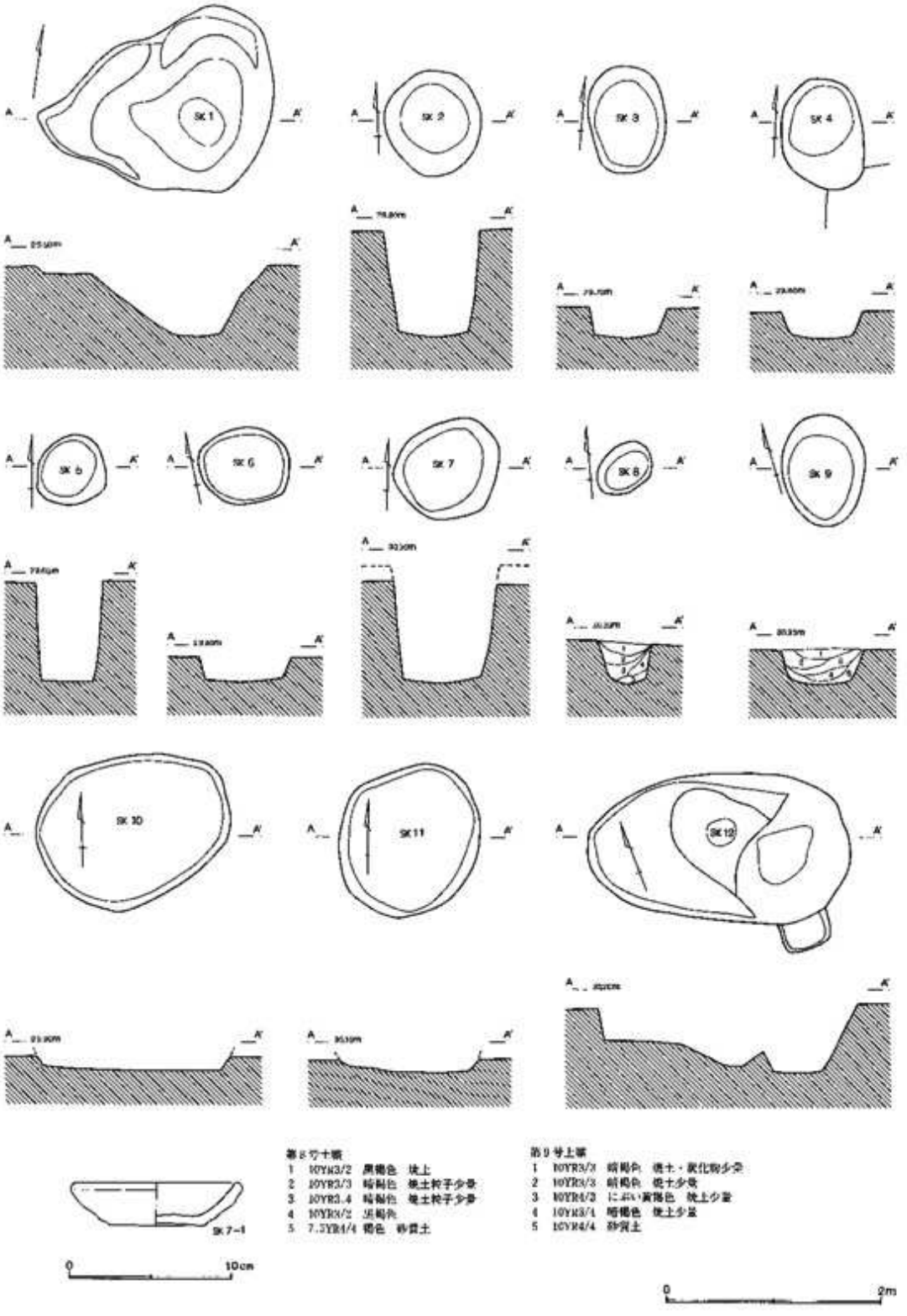
土壙は14基検出され、分布は散漫である。このうち10基では量の多少はあるが、土師器・須恵器から焙烙・灯明皿等の遺物が出土している。第７号土壙からは土師器片・須恵器片・近世と思われる灯明皿・緑泥片岩等が出土している。第369図－１は第７号土壙出土のかわらけで、口径9.9cm、高さ2.2cm、底径5.9cmである。底部には回転糸切り痕が見られ、にぶい橙色をする。完形品である。

第13号土壙と第14号土壙では近世の遺物が多量に出土している。以下この２基について説明を加える。

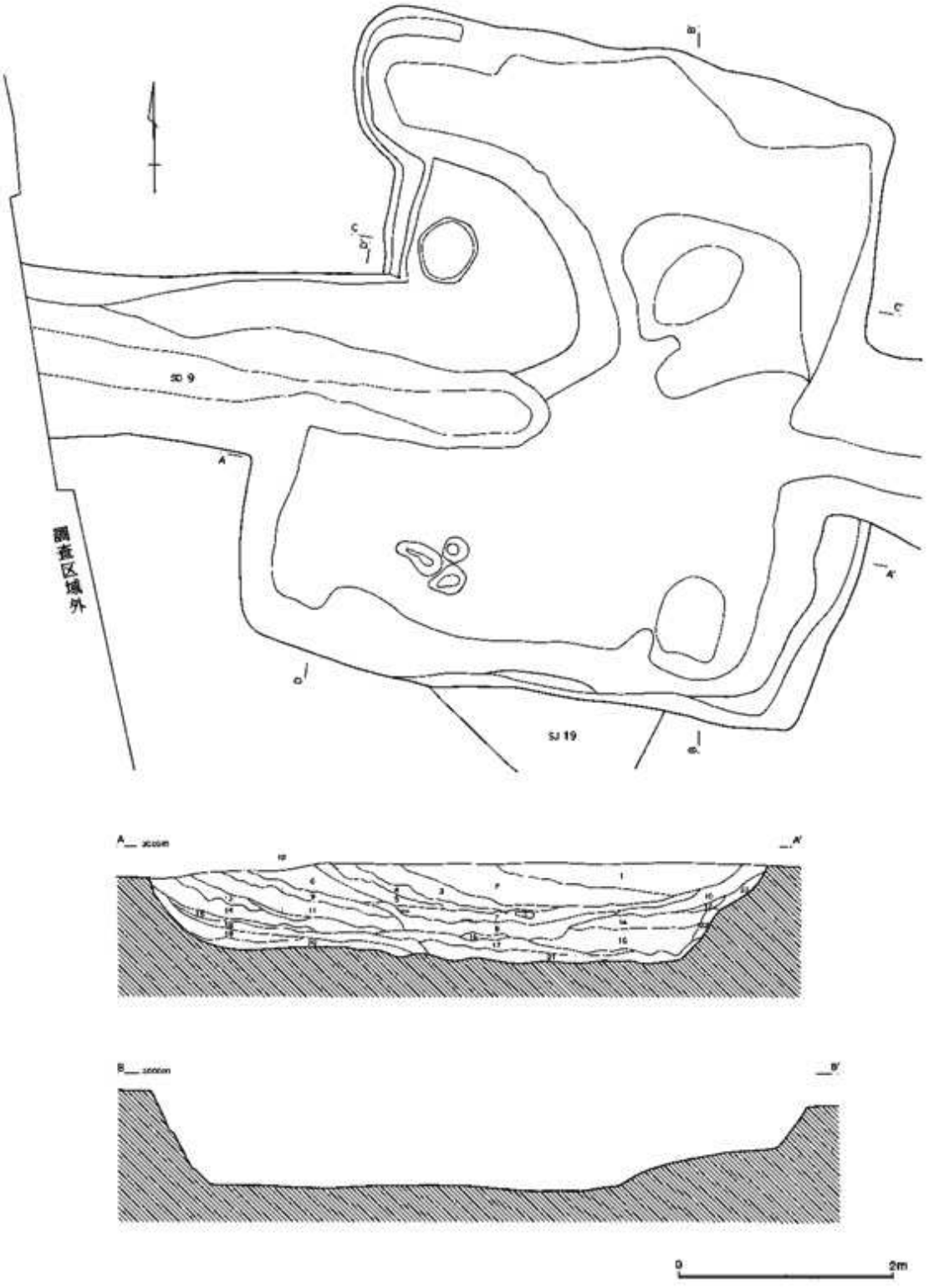
第13号土壙（第361図）

す－４－５グリッドに位置する。第19号住居跡の上に掘り込まれ、第９号溝跡と重複するが、新旧関係は明らかでない。同一時期の可能性もある。形態は長方形で、規模は長軸6.10ｍ、短軸5.04ｍで、深さは0.6～0.74ｍとやや幅がある。主軸方位はＮ－14°－Ｅを指す。底面は凹凸が目立ち、４本のピットが検出された。覆土の観察から人為的に埋め戻されたものと思われ、ゴミ穴的な性格と考えられる。

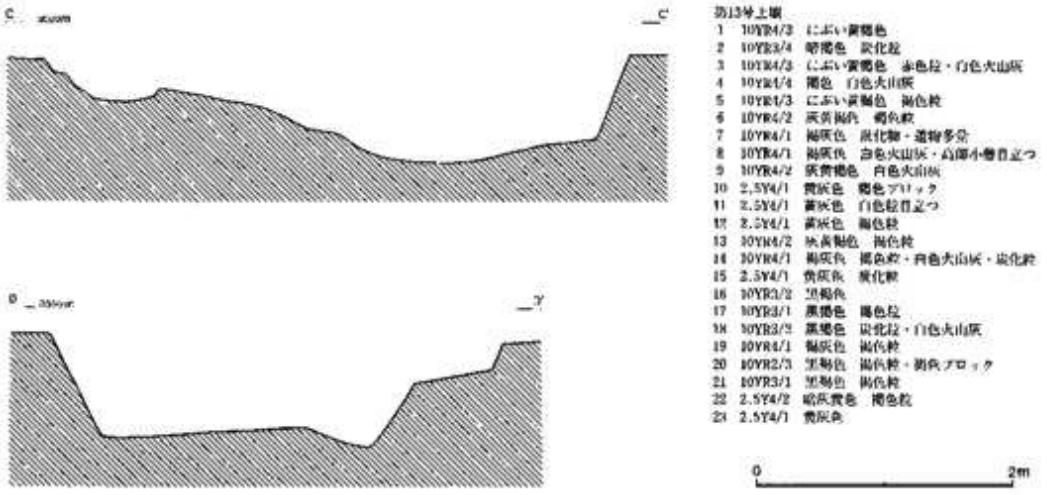
遺物は近世陶磁器類・焙烙が多量に出土し、砥石・石臼も見られた。近世陶磁器は、瀬戸・美濃が中心で碗・片口・菊皿・香炉・皿等が認められるが、完形あるいは接合後に完形となるものは１個体もなかった。図示した以外に、天目碗の高台片が20個体分程度、皿の高台が７枚分前後見られる。瀬戸・美濃以外では、伊万里碗・青磁、唐津碗・皿、丹波擂鉢等が認められる。所謂呉器手碗は図示した以外に高台部分が14個体分程度見られる。第364－28～30は瀬戸・美濃の香炉だが、口縁端部がかけており、煙草盆に使用された可能性がある。焙烙は極めて多量に出土し、破片は遺物整理用コンテナで10箱以上となった。全体が把握できるまで復原できたものは図示した７個体で、全て３個の内耳を持っている。残りの破片のうち、内耳片だけ取り出し(131片)、単純に３で割る



第360図　土壙・出土遺物



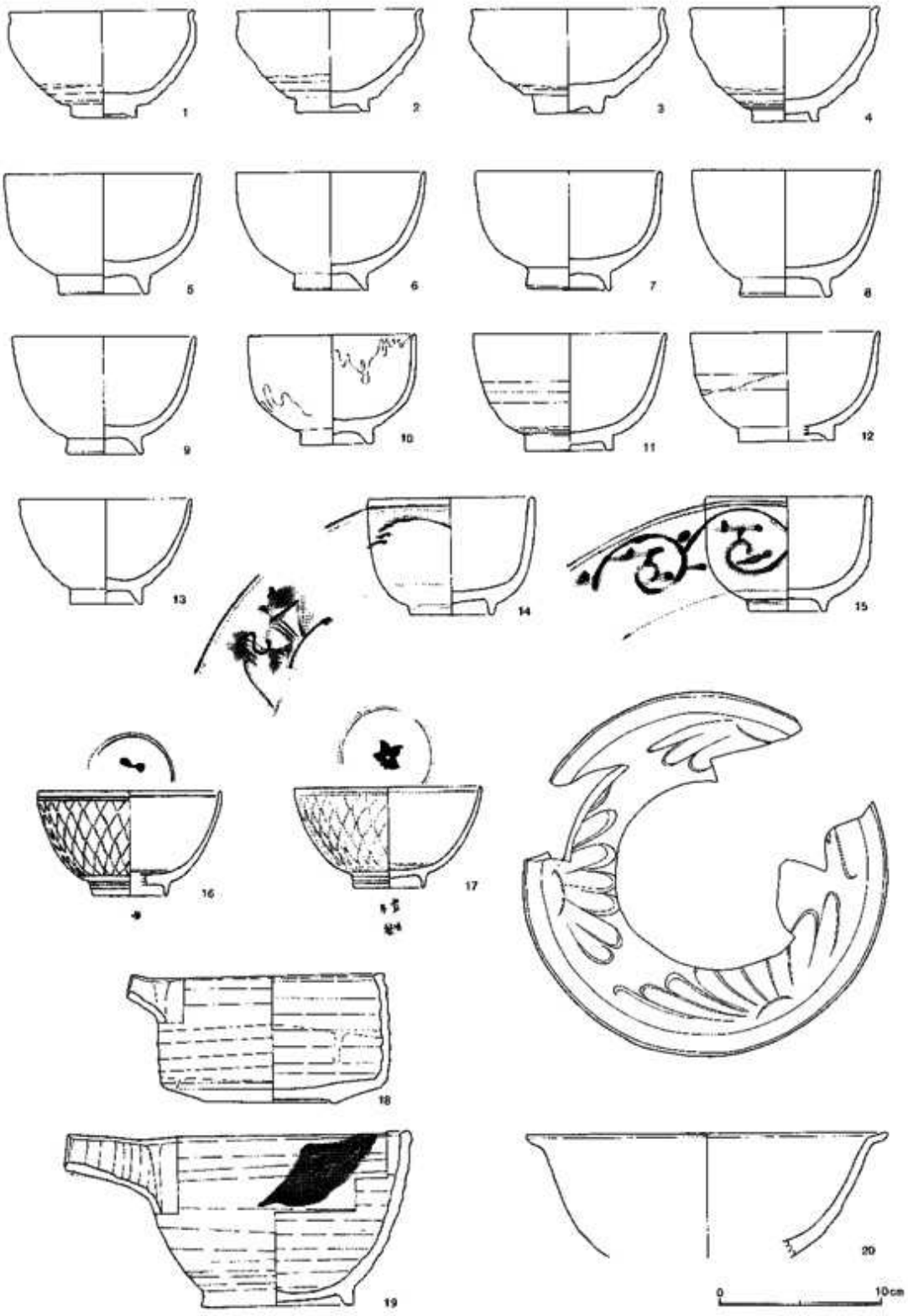
第361図　第13号土壙(1)



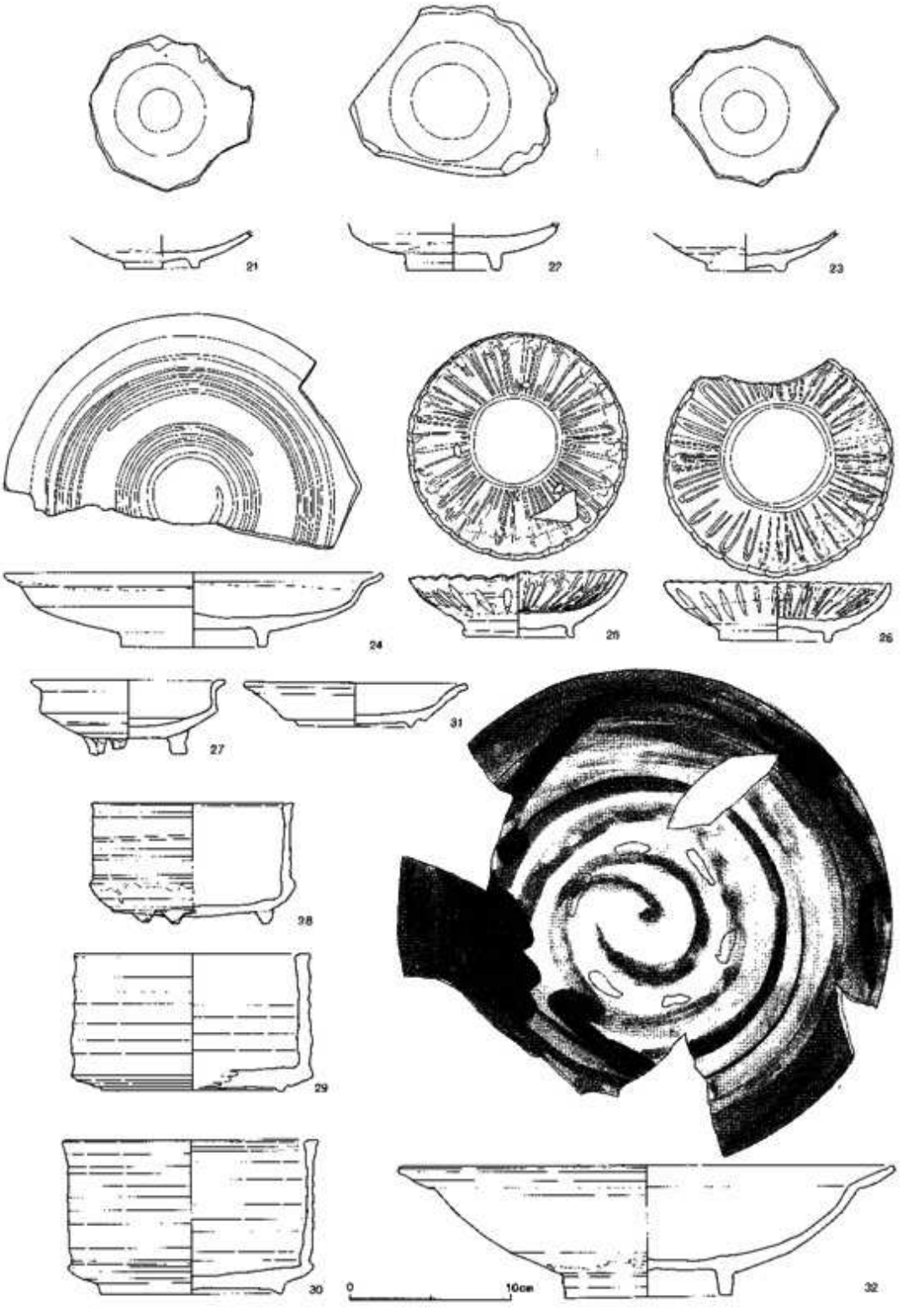
第362図　第13号土壙(2)

第13号土壙出土遺物観察表（第363－367図）

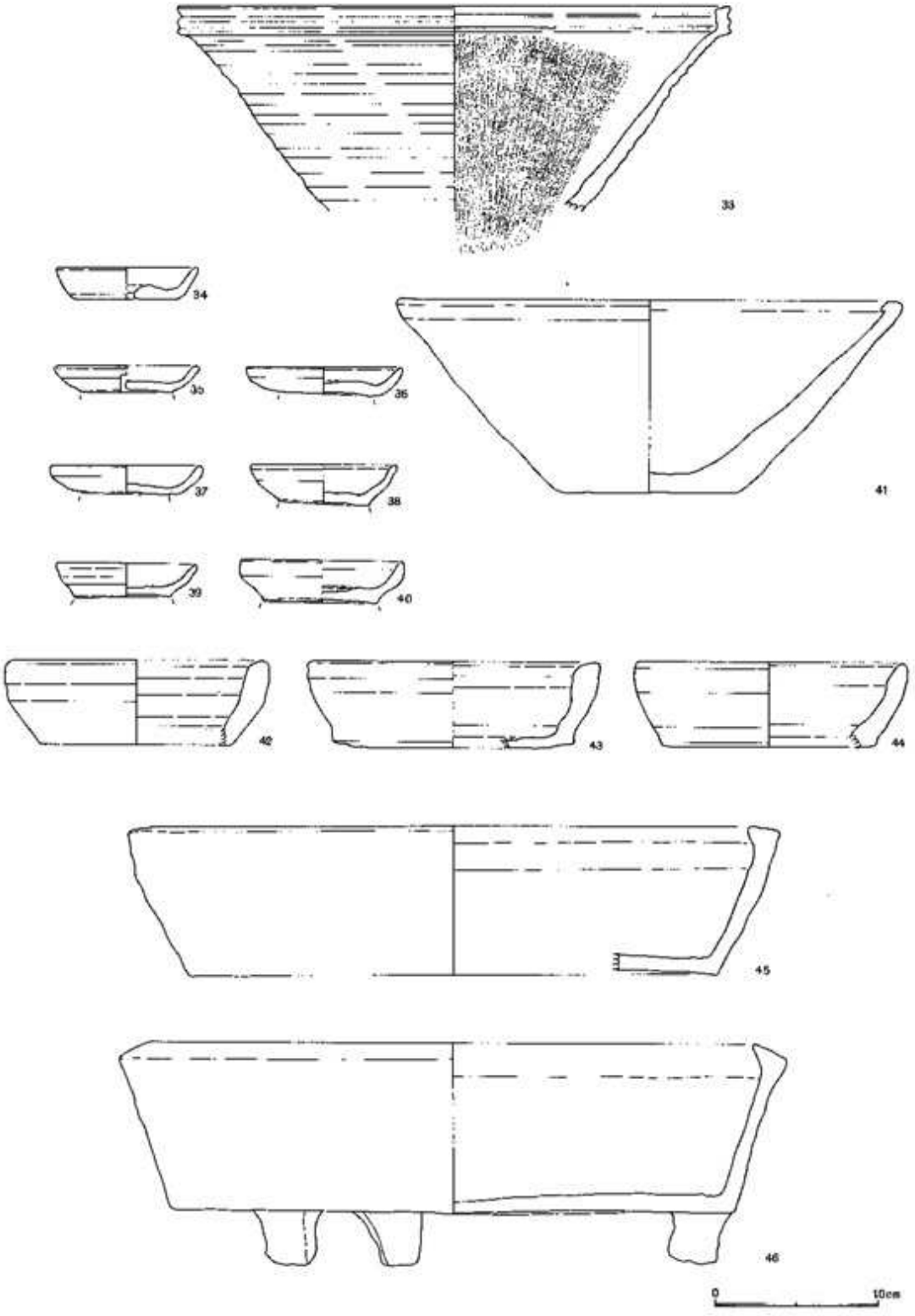
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	碗	(11.1)	6.5	4.0	BWW'	A	灰白	70%	覆土 瀬戸・美濃 天目碗 釉色調褐灰
2	碗	11.4	6.3	4.5	WBW'	A	灰白	80%	覆土 瀬戸・美濃 天目碗 釉色調黒
3	碗	11.8	6.9	4.1	WBW'	A	灰白	85%	覆土 瀬戸・美濃 天目碗 釉色調黒
4	碗	(11.6)	7.0	4.2	WW'B	A	灰白	60%	覆土 瀬戸・美濃 天目碗 釉色調黒
5	碗	(11.7)	7.4	5.3	BW'	A	灰白	50%	覆土 唐津 呉器手碗 釉色調淡黄
6	碗	11.7	7.2	4.5	WB	A	灰白	90%	覆土 唐津 呉器手碗
7	碗	11.4	7.3	5.0	BW	A	灰白	85%	覆土 唐津 呉器手碗 釉色調淡黄
8	碗	(11.5)	7.8	5.3	B	A	灰白	80%	覆土 唐津 呉器手碗 釉色調淡黄
9	碗	(11.1)	7.3	(4.4)	WBW'	A	灰白	20%	覆土 唐津 呉器手碗 釉色調灰白
10	碗	(10.1)	6.8	4.4	BWW'	A	灰白	30%	覆土 唐津 呉器手碗 釉色調オリーブ灰
11	碗	15.9	7.2	5.5	BW	A	灰白	60%	覆土 瀬戸・美濃 鉄釉丸碗 釉色調黒
12	碗	(11.8)	6.7	(6.0)	BWW'	A	灰白	35%	覆土 瀬戸・美濃 鉄釉丸碗 釉暗オリーブ
13	碗	(10.5)	6.5	4.5	WB	A	淡黄	30%	覆土 伊万里 青磁生焼け 釉色調明緑灰
14	碗	10.0	7.3	5.1	WB	A	灰白	80%	覆土 伊万里 釉色調明緑灰
15	碗	(10.0)	7.1	4.9	WBW'	A	灰白	70%	覆土 伊万里 釉色調明緑灰
16	碗	(11.2)	6.5	(4.4)			灰白	30%	覆土 釉色調灰白
17	碗	11.5	6.2	4.2			灰白	55%	覆土 釉色調灰白
18	片口	14.0	8.0	8.0	WW'B	A	灰白	90%	覆土 瀬戸・美濃 鉄釉 釉色調灰褐
19	片口	16.6	10.7	9.3	WBW'R	A	灰白	95%	覆土 瀬戸・美濃 鉄釉流し灰釉片口
20	鉢	22.1	7.7				灰白	70%	覆土 伊万里 釉色調明緑灰
21	皿		2.0	4.6	WW'B	A	灰白	80%	覆土 唐津 外釉灰白 内釉緑と青
22	皿		2.9	(5.8)	WB	A	灰白	90%	覆土 唐津 外釉灰白 内釉緑と茶
23	皿		2.3	4.8	WBW'	A	灰白	80%	覆土 唐津 外釉灰白
24	皿	(23.4)	4.5	(9.0)	WW'B	A	灰赤	50%	覆土 唐津 釉色調オリーブ灰
25	菊皿	13.5	4.1	6.5	WW'B	A	灰白	95%	覆土 瀬戸・美濃 緑釉流し灰釉菊皿
26	菊皿	(14.0)	3.1	7.0	WBR	A	灰白	90%	覆土 瀬戸・美濃 緑釉流し灰釉菊皿
27	香炉	(12.0)	4.6	4.6	WW'B	A	灰白	40%	覆土 瀬戸・美濃 灰釉香炉 灰釉灰白
28	香炉	12.3	7.4	9.7	WBW'	A	灰白	80%	覆土 瀬戸・美濃 釉色調灰白 暗灰黄
29	香炉	(14.4)	8.5	(11.2)	WB	A	灰白	40%	覆土 瀬戸・美濃 灰釉香炉 釉色調灰白
30	香炉	(15.5)	19.5	11.1	BW	A	灰白	75%	覆土 瀬戸・美濃 灰釉香炉 釉色調灰白
31	皿	13.8	2.7	7.0	WB	A	灰白	50%	覆土 瀬戸・美濃 長石釉皿 釉色調灰白



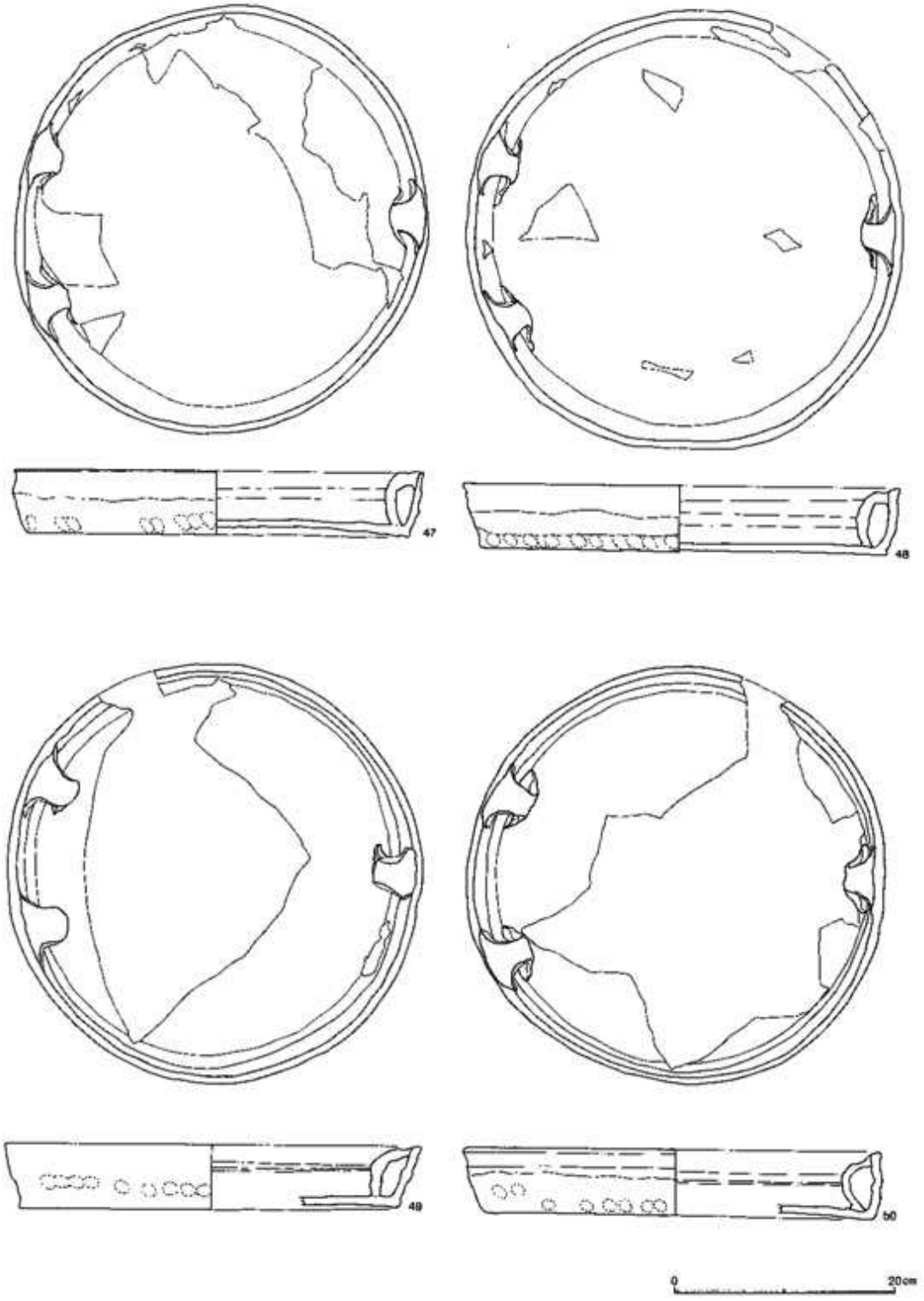
第363図　第13号土壙出土遺物(1)



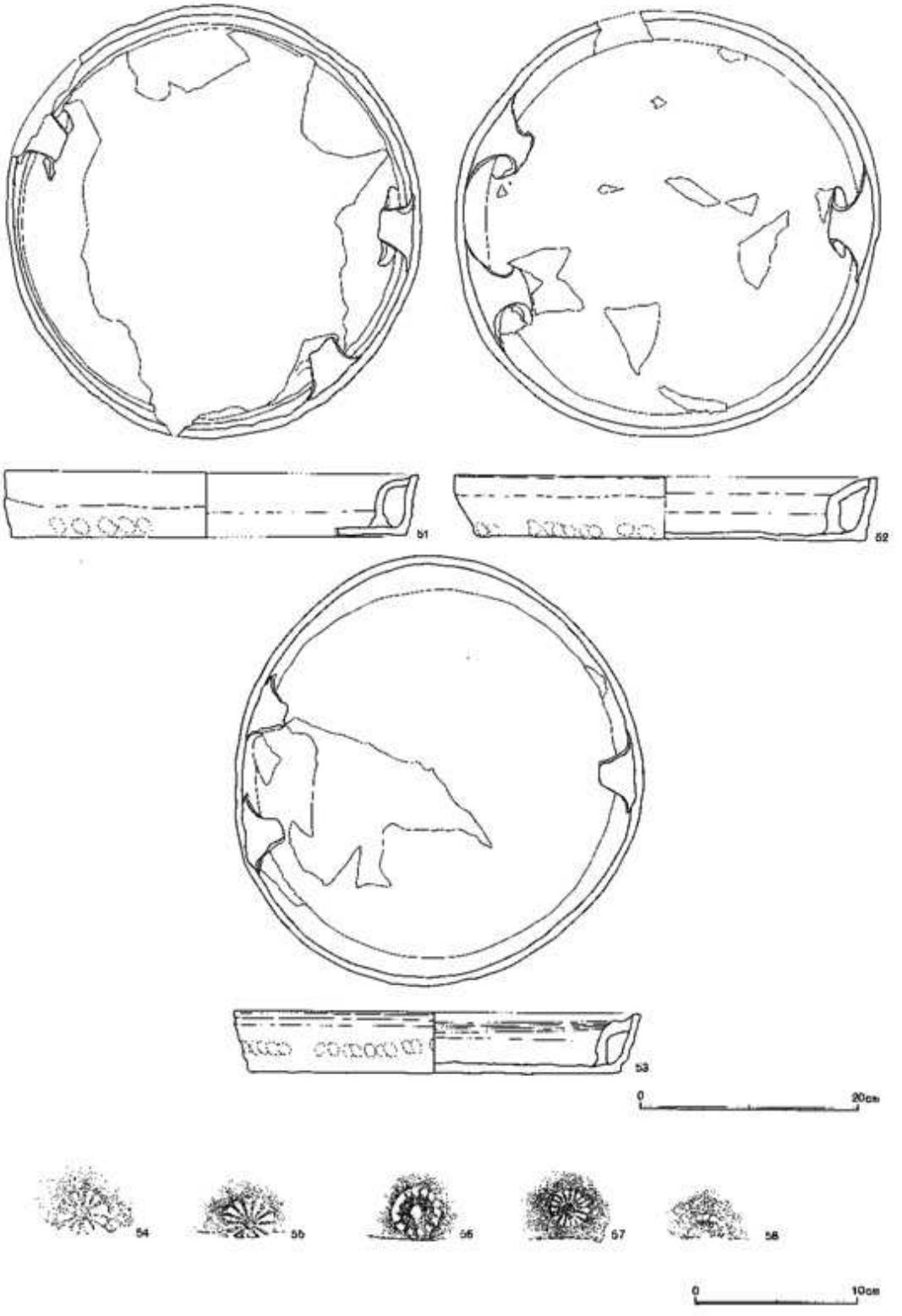
第364図　第13号土壙出土遺物(2)



第365図　第13号土壙出土遺物(3)

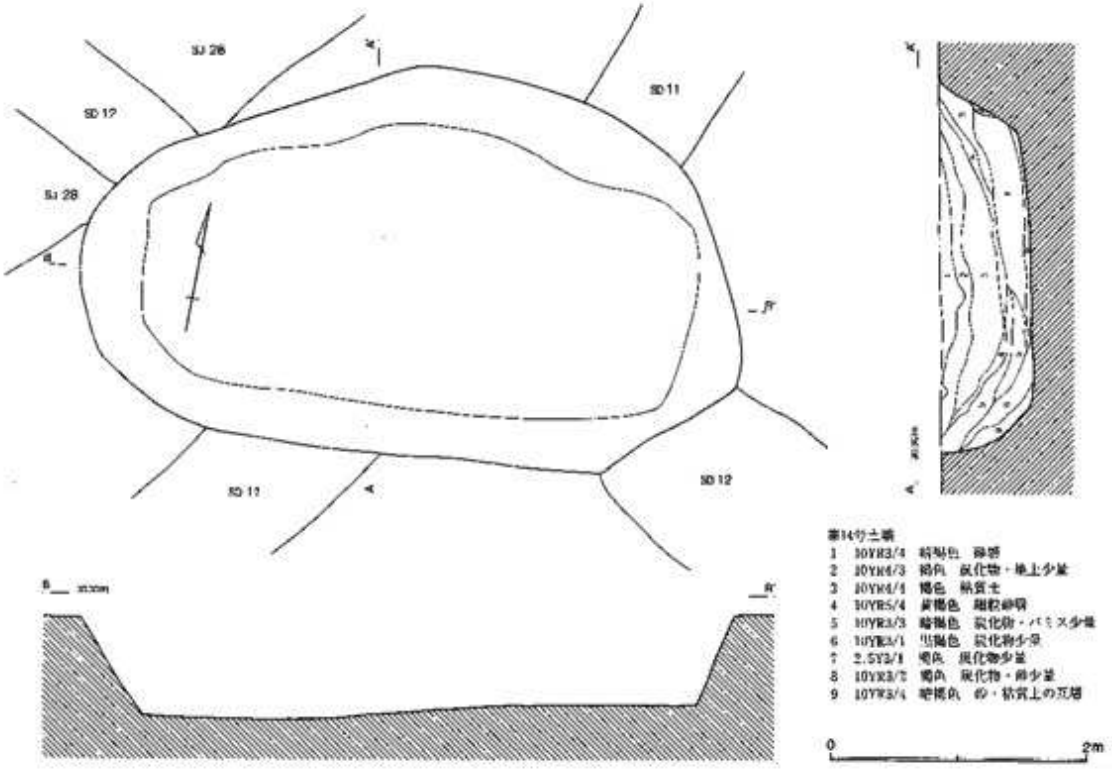


第366図　第13号土壙出土遺物(4)

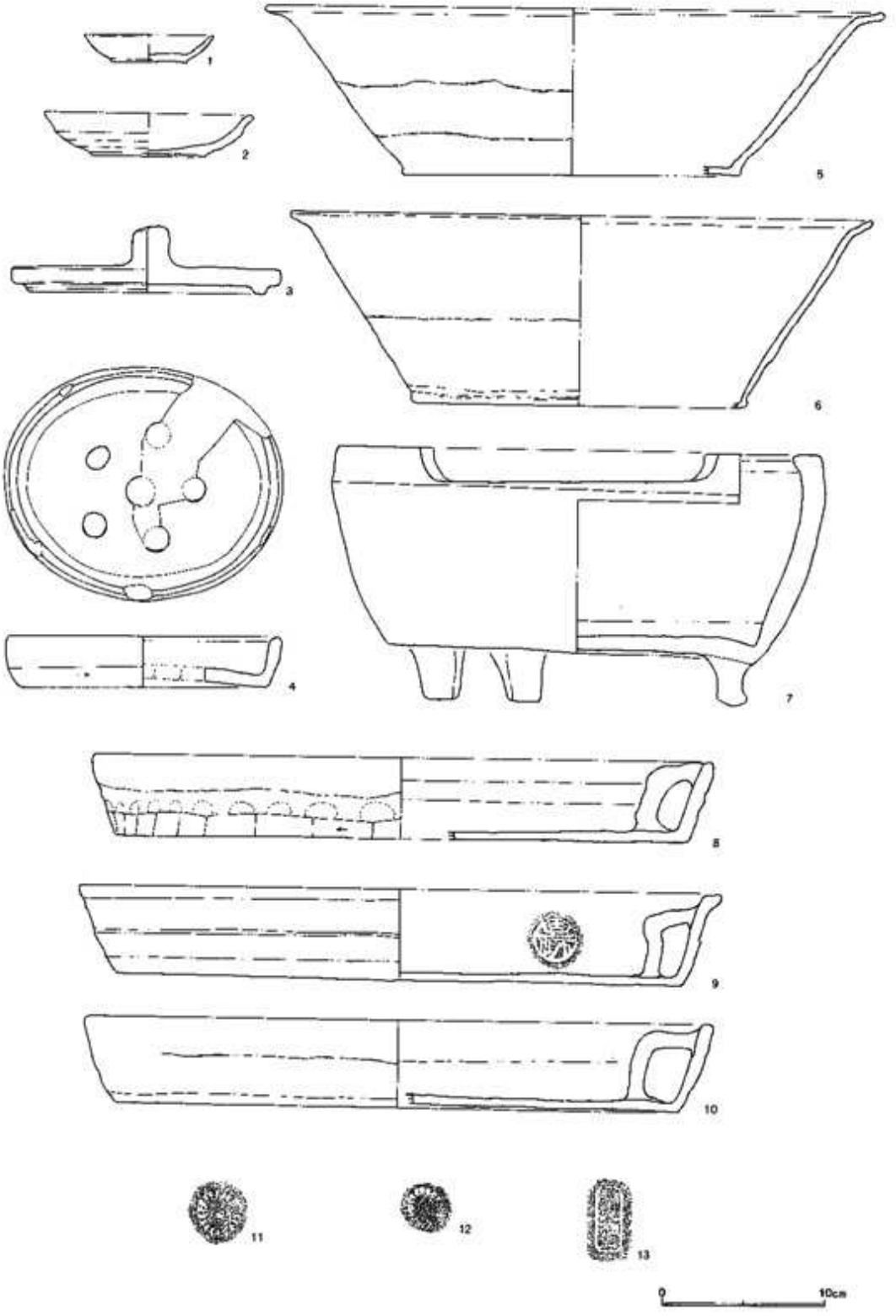


第367図　第13号土壙出土遺物(5)

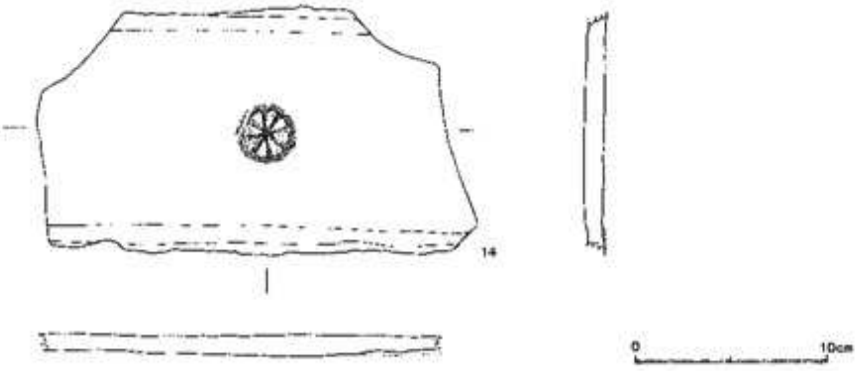
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
32	大平鉢	30.5	8.0	10.3	WBR	A	灰黄	75%	覆土 唐津 緑釉流し灰釉大平鉢
33	すり鉢	(33.7)	12.6		WBW'	A	灰白	20%	覆土 丹波 釉色調暗紫灰
34	かわらけ	(8.5)	1.9	(6.2)	WW'BB'R	C	浅黄橙	30%	覆土 底部中央に径8mmの孔をもつ
35	かわらけ	(8.4)	1.6	5.5	WW'BB'R	B	浅黄橙	40%	覆土 底部中央に径6mmの孔をもつ
36	かわらけ	9.5	1.7	5.5	WW'BB'R	B	鈍い橙	75%	覆土 底部回転糸切り
37	かわらけ	9.2	1.7	5.3	WW'BB'R	B	明褐灰	85%	覆土 底部回転糸切り
38	かわらけ	8.8	2.4	5.4	WW'BB'R	C	橙	75%	覆土 底部回転糸切り
39	かわらけ	8.5	2.1	5.8	WW'BB'R	B	鈍い橙	80%	覆土 底部回転糸切り
40	かわらけ	9.5	2.6	6.9	WW'BB'R	B	淡橙	55%	覆土 底部切り離し不明
41	片口鉢	(29.1)	11.7	(10.7)	WW'BB'	A	鈍い褐	30%	覆土
42	火鉢	15.4	5.2	11.7	WW'BB'	B	黒褐	70%	覆土
43	火鉢	17.0	5.3	14.8	WW'BB'	B	灰白	30%	覆土
44	火鉢	16.2	5.2	13.5	WW'BB'R	C	鈍い橙	40%	覆土
45	火鉢	(36.5)	9.1	(32.5)	WB'BR	B	淡赤橙	65%	覆土
46	火鉢	37.1	13.5	34.5	WW'B'B	A	鈍い黄橙	60%	覆土 3足
47	焙烙	36.7	5.4	34.5	WW'BB'R	B	黒褐	90%	覆土 被熱の為底部の湾曲著しい
48	焙烙	39.2	5.9	36.8	WBB'R	A	褐灰	90%	覆土
49	焙烙	37.3	5.7	34.3	WW'BR	B	黒褐	65%	覆土
50	焙烙	36.9	5.9	35.3	WW'B'R	B	褐灰	60%	覆土
51	焙烙	37.5	5.9	36.2	WW'B'R	B	褐灰	50%	覆土
52	焙烙	38.5	5.7	35.8	WW'BB'R	A	灰白	95%	覆土
53	焙烙	36.9	5.4	34.0	WW'B'R	A	灰白	95%	覆土



第368図　第14号土壙



第369図　第14号土壙出土遺物(1)



第370図　第14号土壙出土遺物(2)

第14号土壙出土遺物観察表（第369・370図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	かわらけ	(7.8)	1.7	(4.6)	WW'RBB'	B	灰白	70%	SX2覆土 底部中心に孔有り
2	皿	(12.8)	2.6	(7.0)	WR	A	灰白	40%	SX2覆土 志野 釉色調灰白
3	蓋	(14.5)	4.1		BWW'RB'	A	灰	35%	SX2覆土
4	不明	16.5	3.1	15.1	BRB'W	A	浅黄橙	80%	SX2覆土 すのこ状土製品 使途不明
5	鍋	37.5	10.3	20.7	WBB'R	B	灰白	40%	SX2覆土 外面全体に大量のすす付着
6	鍋	(35.6)	11.6	(20.5)	B'W'WB	C	褐灰	35%	SX2覆土
7	火鉢	29.3	13.4	22.5	WB'RB	B	浅黄橙	65%	SX2覆土 土風炉か 3足
8	焙烙	(38.3)	5.0	(35.2)	WBW'B'	B	黒	30%	SX2覆土
9	焙烙	39.3	5.6	34.7	WBB'R	B	褐灰	45%	SX2覆土 刻印有り
10	焙烙	37.9	5.4	34.7	WBB'R	A	灰	60%	SX2覆土
14	不明	SX2覆土			W'WB'R	A	黄灰		長さ22.7cm 幅13.9cm 厚さ1.0cm 刻印有

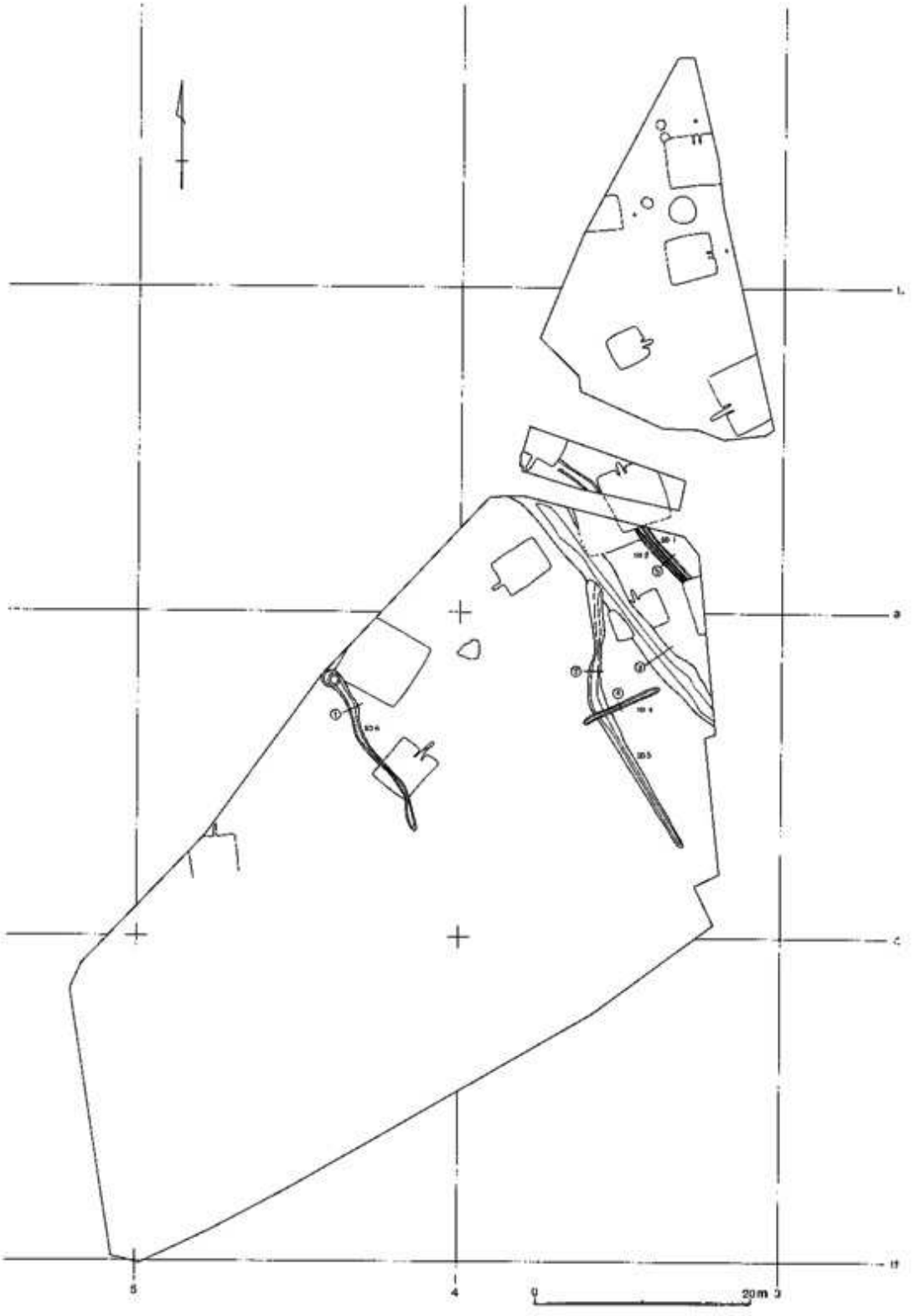
と、43個体以上となる。焙烙の底部内面に押印の見られる破片がある（第367図－54～58）。

他の出土遺物には擂鉢・土師質皿・火鉢等が認められる。遺物の年代は概ね17世紀後半代で納まるであろう。第365図－41は在地産の片口鉢で、14世紀後半と思われる。混入である。

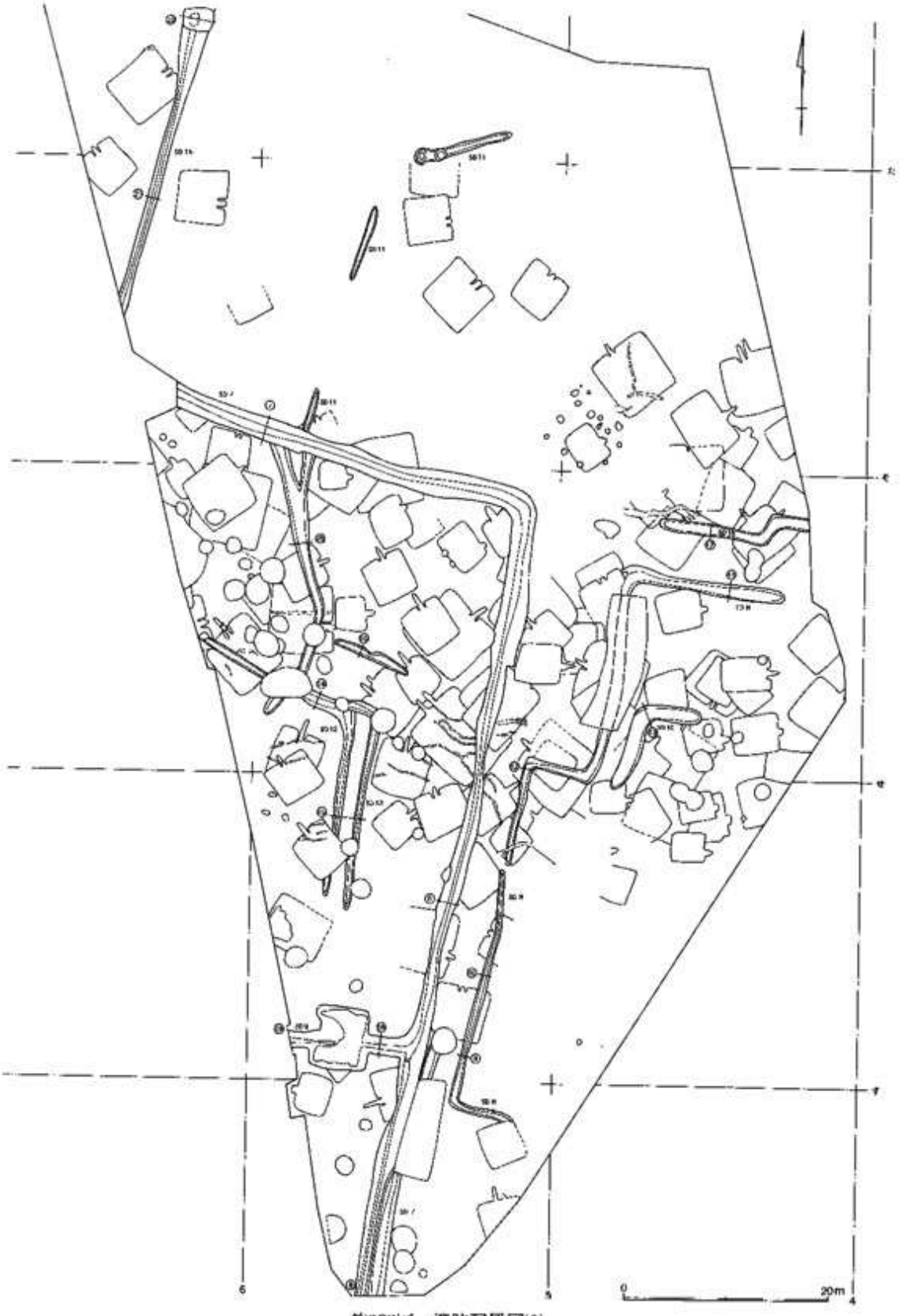
第14号土壙（第368図）

す－5－10グリッドに位置し、第11・12号溝跡と重複する。新旧関係は明らかではないが、第11号溝跡よりは新しいと思われる。形態は楕円形で、規模は長軸5.04m、短軸2.96m、深さ0.6～0.74mである。底面にはやや起伏がある。覆土下半は埋め戻された土であろうか。

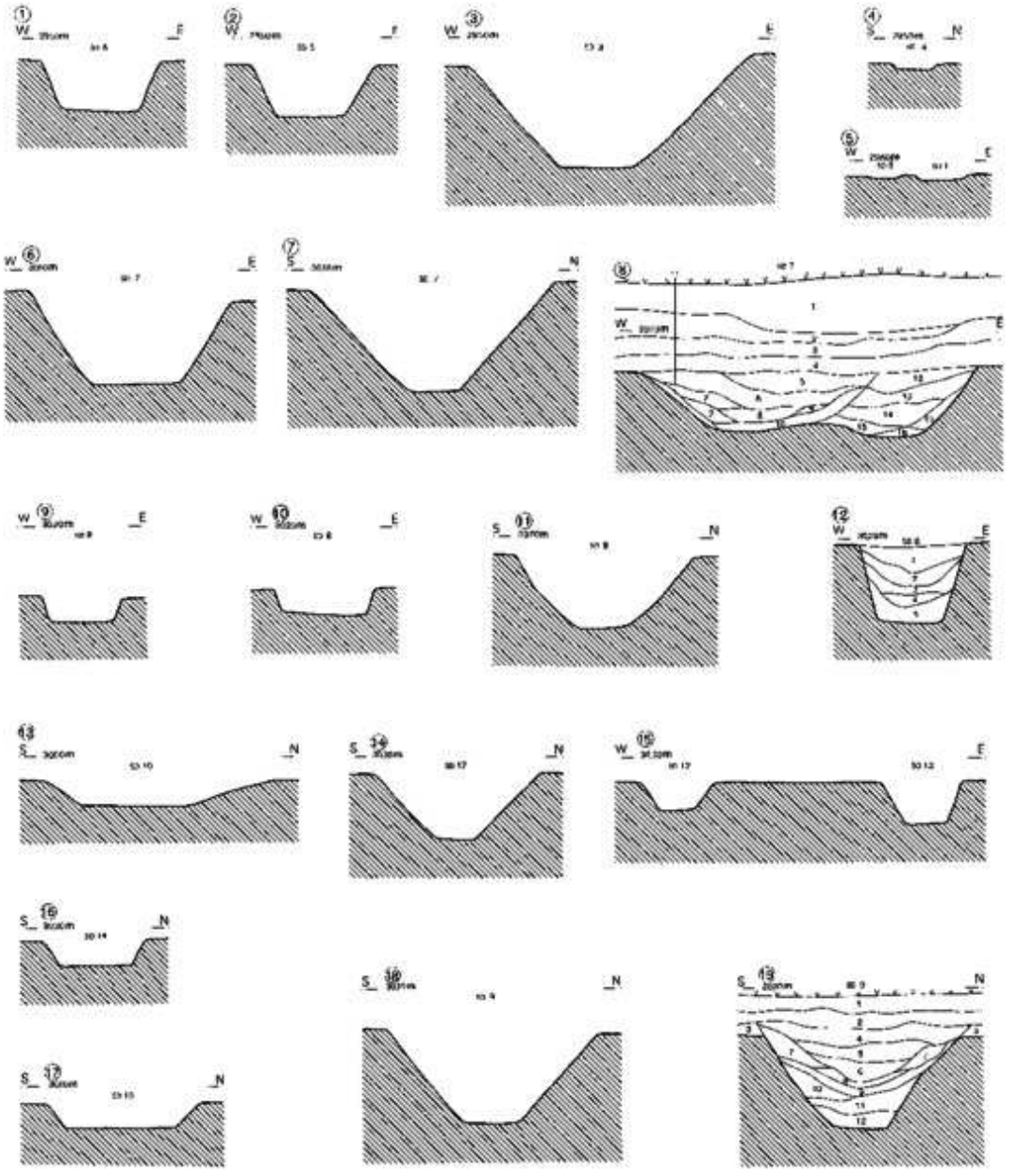
遺物は近世の陶磁器類・焙烙・土師質皿・鍋・火鉢等が出土しているが、量的には少ない。第369図－4は土師質のすのこ状土製品である。底はやや上がり気味で5個の孔が見られ、楕円形をしている。用途は判らない。5・6は鍋であろう。5の外面には多量の煤が付着している。7は火鉢と思われる。口縁部に切り込みを持ち、3足が付けられる。8～10は焙烙である。9の底部内面には押印が見られる。11～13は図示できなかった焙烙に見られる押印である。13は「大極上」と読める。14は瓦質で箱形になるものと思われる。中央に押印が見られる。出土遺物の年代は第13号土壙と同年代と思われる。



第371図　清跡配置図(1)



第372図　溝跡配置図(2)



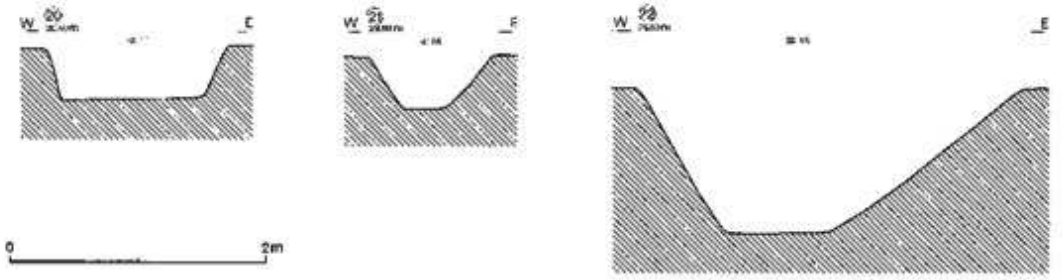
第7号溝
1～3　表土・及び耕作土
4　10YR4/4　褐色　焼土・炭化物・パミス少量
5　10YR4/2　灰黄褐色　焼土・炭化物・パミス・砂少量
6　10YR4/3　黄褐色　焼土・炭化物少量
7　10YR4/1　褐灰色　炭化物少量
8　10YR4/3　黄褐色　炭化物・焼土少量
9　10YR5/4　黄褐色　焼土・黄色土粒
10　2.5Y4/1　黄灰色　粘土層　炭化物・砂少量
11　10YR3/4　暗褐色　黄色粘土粒
12　10YR4/1　褐灰色　炭化物・焼土微量
13　10YR4/3　黄褐色　炭化物・焼土少量
14　10YR5/2　灰黄褐色　炭化物・焼土少量
15　10YR4/2　灰黄褐色　焼土・炭化物少量
16　10YR4/4　褐色　黄色粒・炭化物・焼土少量

第8号溝　SPA（西）－SPA'（東）
1　10YR3/3　暗褐色　炭化物・焼土少量
2　10YR2/3　黒褐色　黄色粒・炭化物少量
3　10YR3/2　黒褐色　黄色粒・炭化物・焼土少量
4　10YR3/1　黒褐色　黄色粒・炭化物・焼土少量
5　10YR2/2　黒褐色　黄色粒・炭化物・焼土少量

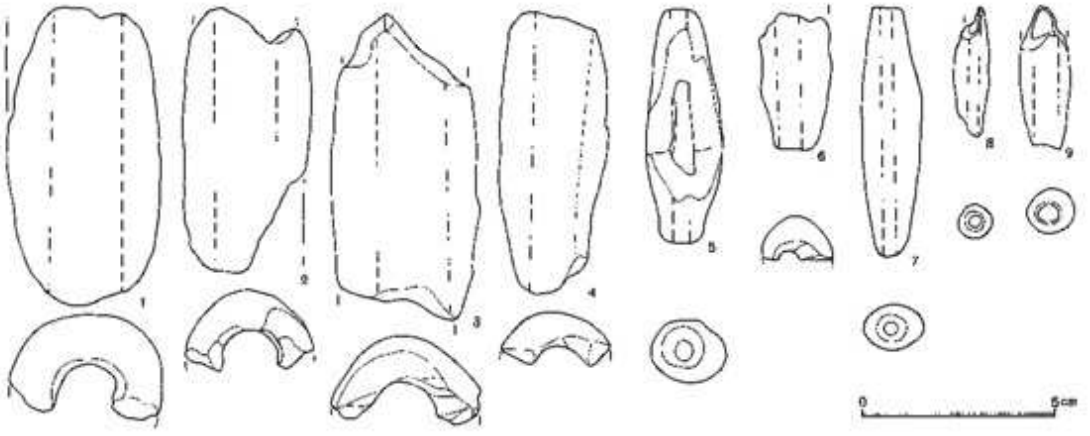
第9号溝
1　表土　10YR4/2
2　10YR3/3　暗褐色　黄色粒・炭化物・焼土少量
3　10YR4/3　黄褐色　黄色粒粒多量
4　10YR3/2　黒褐色　黄色粒・炭化物
5　10YR3/3　暗褐色　黄色粒少量
6　10YR4/3　黄褐色　黄色粒多量
7　10YR3/3　暗褐色　黄色粒・炭化物・焼土少量
8　10YR4/1　褐灰色　黄色粒少量
9　10YR3/3　暗褐色　黄色粒・炭化物微量
10　10YR4/1　褐灰色　黄色粒・炭化物微量　砂分多量
11　10YR3/2　黒褐色　黄色粒・炭化物少量
12　10YR3/4　暗褐色　黄色粒多量　炭化物少量

0　2m

第373図　溝跡土層図(1)



第374図　溝跡土層図(2)



第375図　溝跡出土土錘

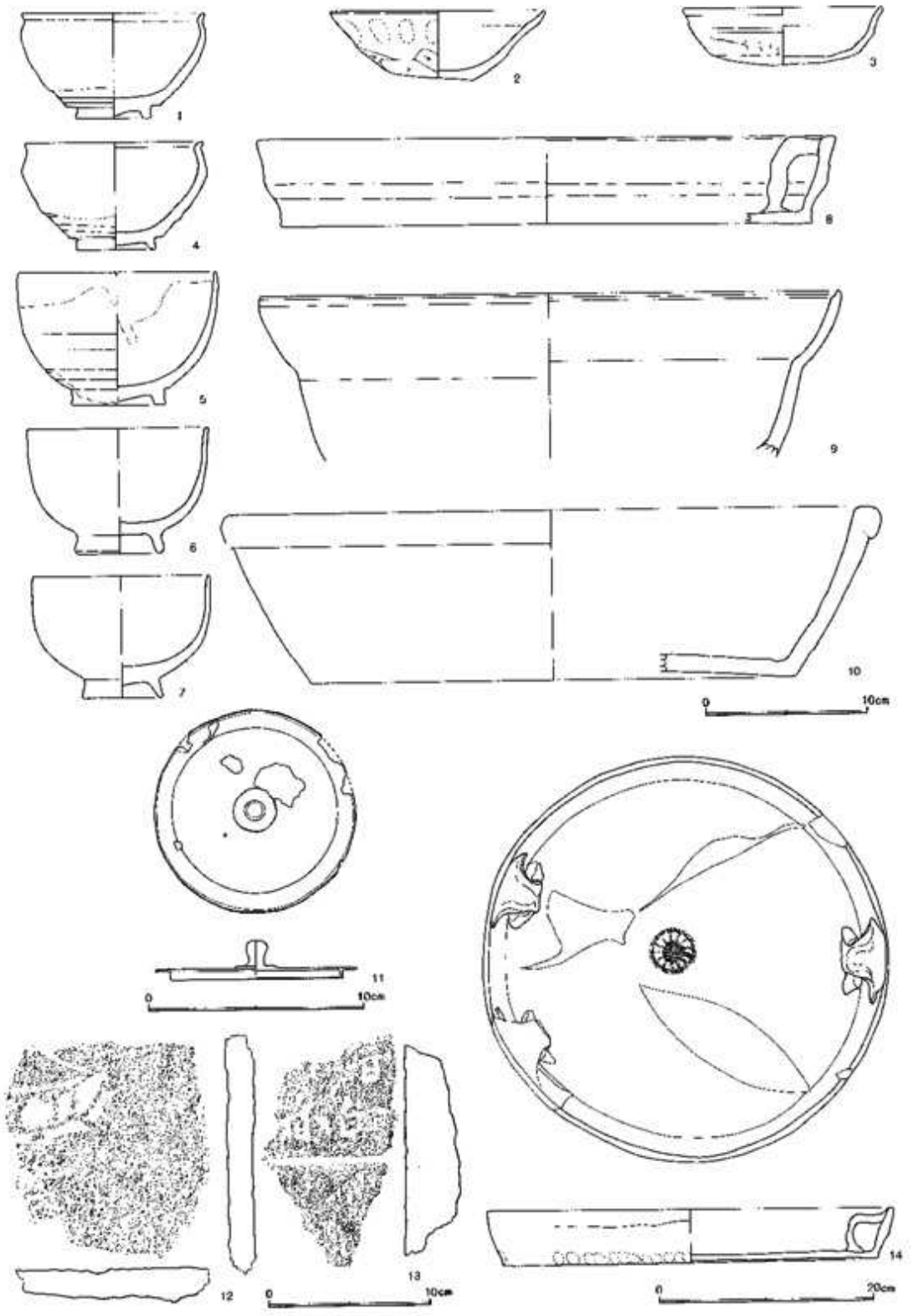
溝跡跡出土土錘観察表（第375図）

番号	器種	出土位置	胎土	焼成	色調	残存	法量
1	土錘	SD07覆土	BWB'		灰白		残7.8cm 径4.0cm 孔1.5cm 重58.29g
2	土錘	SD07覆土	BWW'B'S		灰白		残6.7cm 径3.4cm 孔1.0cm 重29.92g
3	土錘	SD10覆土	SBW'WB'		橙		残7.9cm 径3.9cm 孔1.7cm 重46.64g
4	土錘	SD11覆土	WB'		灰白		長7.3cm 径2.9cm 重20.04g
5	土錘	SD08覆土	RSW'B		鈍い橙		長6.1cm 径2.0cm 孔0.5cm 重14.90g
6	土錘	SD08覆土	WW'RB'		褐灰		残3.6cm 径1.9cm 孔0.6cm 重6.05g
7	土錘	SD05覆土	WBB'		褐灰	100%	長6.5cm 径1.7cm 孔0.4cm 重12.24g
8	土錘	SD07覆土	W'W		褐灰		残3.4cm 径0.9cm 孔0.3cm 重1.73g
9	土錘	SD05覆土	SB		鈍い黄橙		残3.7cm 径1.3cm 孔0.6cm 重4.11g

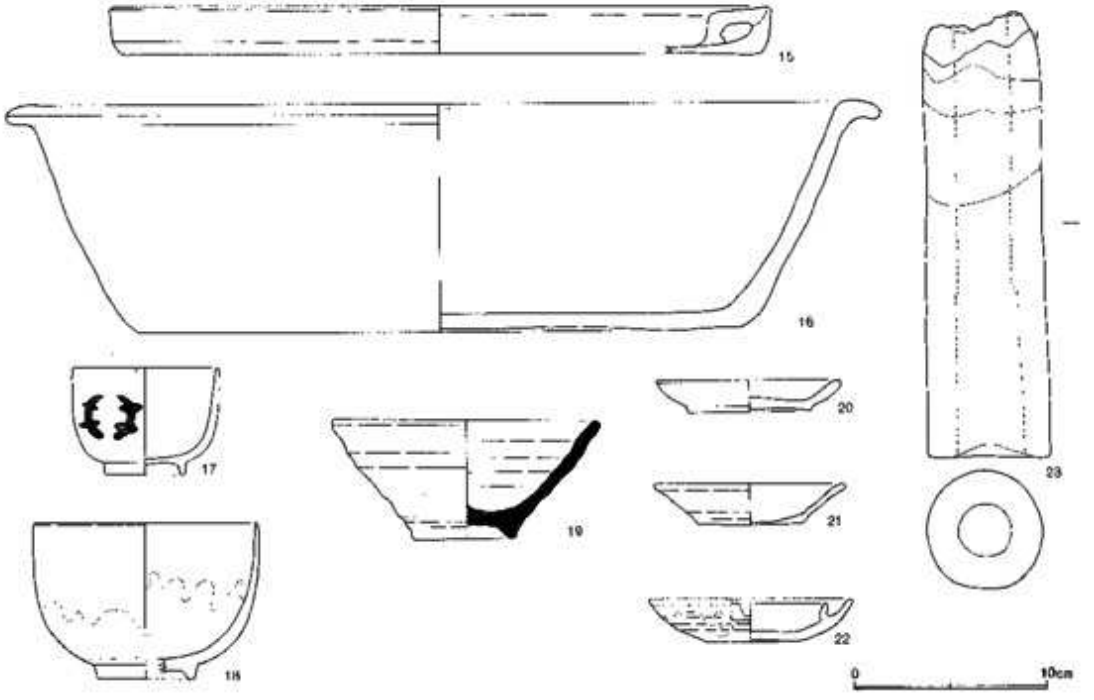
（5）溝跡

溝跡は16条検出されている。出土遺物が全く見られないのが6条（第1・2・4・9・15・16号溝跡）、土師器・須恵器だけ出土したものが3条（第5・6・11号溝跡）である。他は出土状況の詳細は不明ながら近世の陶磁器類が出土している。

第7号溝跡は遺跡内を直線的に北上し、せ－5－21グリッド内で直角に曲がり西進して調査区外に出る。幅1.45m～2.90m、深さ0.48～1.07m、断面は概ね逆台形となっており、明確な遺構は検出されていないが、館跡に伴う堀跡か、集落を区画する溝跡と思われる。す－5－3グリッド内で



第376図　溝跡出土遺物(1)



第377図　溝跡出土遺物(2)

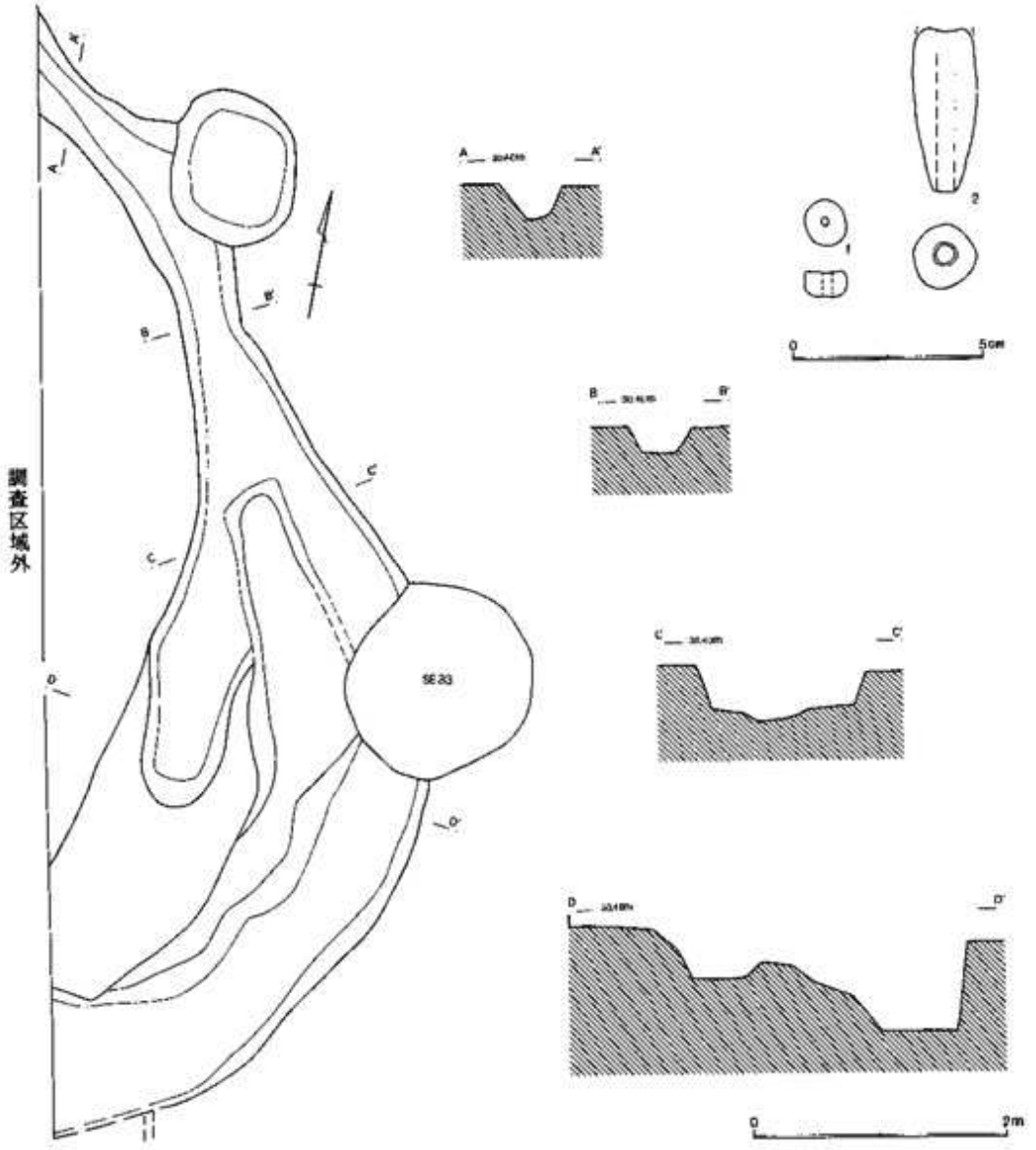
溝跡出土遺物観察表（第376・377図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	碗	(11.0)	6.5	4.5	BWW'	A	灰白	60%	SD03覆土下層 瀬戸・美濃 天目碗 釉黒
2	坏	13.2	4.3	4.9	B'RW'W	B	灰白	95%	SD05覆土 内面磨耗著しい
3	坏	12.2	3.5		WW'B'	A	橙	100%	SD06覆土 内外面磨耗著しい
4	碗	10.9	6.6	4.3	WW'B	A	灰白	70%	SD07覆土 瀬戸・美濃 天目碗 釉黒
5	碗	(12.0)	8.2	5.8	WB	A	灰白	75%	SD07覆土 瀬戸・美濃 鉄釉丸碗 釉黄褐
6	碗	(10.9)	7.7	5.1	BW	A	灰白	35%	SD07覆土 唐津 呉器手碗 釉灰白
7	碗	(11.0)	7.5	5.0	WB	A	淡橙	40%	SD07覆土 唐津 呉器手碗 釉灰白
8	焙烙	(35.8)	5.3	(32.9)	BB'WW'R	B	灰	10%	SD07覆土
9	内耳鍋	(36.0)	10.2		BWW'	B	褐灰	15%	SD07覆土
10	鍋	(41.0)	10.5	(29.9)	WB'BW'R	A	灰	20%	SD07覆土
11	蓋	SD07覆土		直径9.3cm 高さ1.8cm 重量65.63g 銅製経筒の蓋か 表面は剥落 錆など荒れている					
12	板碑	SD07覆土		残高14.8cm 幅(12.0)cm 厚さ1.9cm 緑泥片岩					
13	板碑	SD07覆土		残高13.0cm 幅(9.5)cm 厚さ(3.4)cm 緑泥片岩					
14	焙烙	36.9	5.0	34.6	WW'BB'	B	褐灰	80%	SD07覆土
15	焙烙	(34.4)	2.4	(23.4)	WW'B'B	A	鈍い橙	15%	SD08覆土 土師質
16	鍋	(42.4)	10.7	(30.1)	WW'BB'S	A	褐灰	45%	SD08覆土 内面黒うるし 口縁端朱うるし
17	碗	(7.6)	5.5	(4.0)			灰白	45%	SD08覆土 伊万里
18	碗	(11.6)	8.0	(5.0)	BW	A	灰白	20%	SD08覆土 瀬戸・美濃 鉄釉丸碗 釉暗褐
19	高台坏	(13.7)	6.2	5.5	WW'	B	灰白	40%	SD11覆土 雑な作り やや歪む
20	かわらけ	9.6	1.6	6.4	BB'WW'R	A	灰白	85%	SD14覆土 底部回転糸切り
21	かわらけ	(9.8)	2.1	5.6	BB'RW	A	灰白	50%	SD14覆土 底部回転糸切り
22	灯明皿	10.6	2.2	4.6	BW	A	鈍い黄橙	100%	SD14覆土 瀬戸 鉄釉にぶい赤褐
23	羽口	SD14覆土			W'WB'		灰		長さ22.9cm 径6.0cm 先端部欠損

第９号溝跡と直角に交わる。この付近以南は浅くなり、流路の掘り直しが見られる。溝の主体は第９号溝跡の方向に曲がっていると考えられる。溝跡の北西側は、調査区域外で第16号溝跡跡と繋が

ることは容易に推察できる。第７号溝跡の南北流の東側にはこれと平行或いは直交する溝跡が検出されており（第８・10・15号溝跡）、これらの溝跡は関連性を持って機能していたと考えられる。第７号溝跡と第９号溝跡に囲まれた部分にもこれと平行する溝跡が検出されており（第12－14号溝跡）、館跡或いは集落との関連が想定できる。時期的には出土遺物から17世紀後半代と考えられる。第376図－11は第７号溝跡出土の銅製の蓋である。器面はかなり荒れており、経筒の蓋であろうか。14は焙烙で、中央に押印が見られる。第377図－23は第14号溝跡出土の羽口で上端は欠損している。孔の約1/3が広くなっている。

（６）周溝状遺構



第378図　第１号周溝状遺構

周溝状遺構は２基検出されている。共に同じ周溝状遺構という名称にしたが形態・規模が全く異なっており、機能も別のものと思われる。

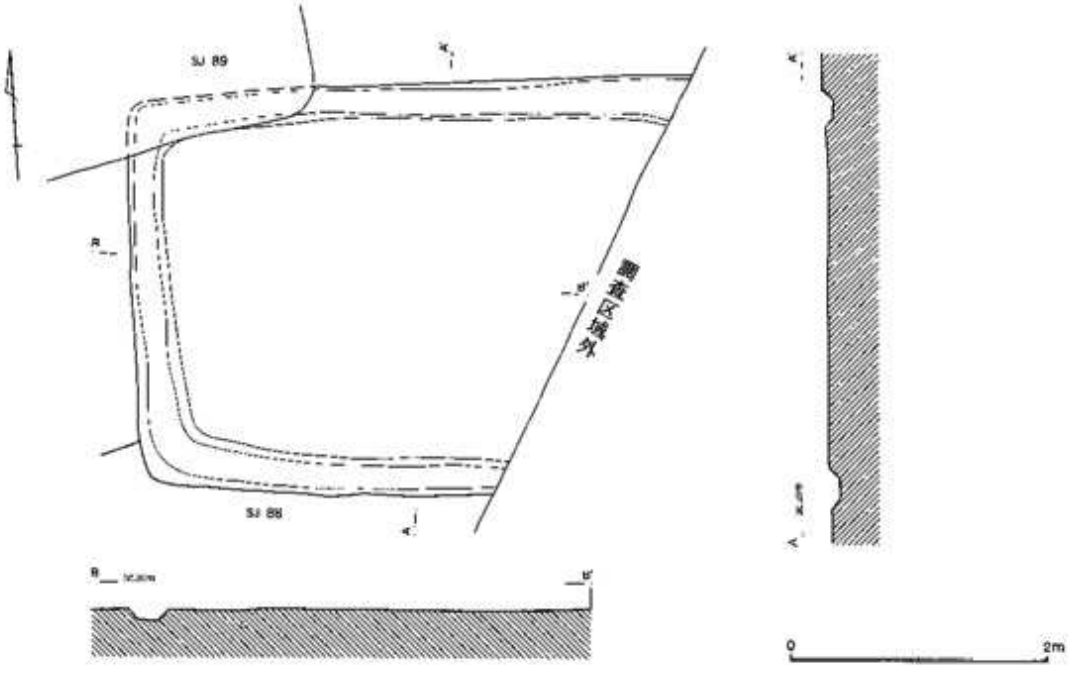
第１号周溝状遺構（第378図）

せ－６－16グリッドを中心に位置する。第33号土壙と重複するが、新旧関係は明らかでない。大半は調査区域外にあり、形態は不明とせざるを得ない。検出された部分では弧を描いており、南側は溝が２本に分かれている。全体では円形に近くなるのであろうか。遺構の具体的な機能は不明である。出土土器は、土師器の小片がやや多めに、須恵器の甕胴部片が２片見られる。土師器には、坏・甑が認められるが、図示できるものはない。この他には、滑石製臼玉１と土錘１が出土している。臼玉（第378図－１）は、直径12mm、厚さ7.0mm、重さ1.73ｇでほぼ完形である。土錘（第378図－２）は上半を欠損し、残長4.3cm、最大径1.7cm、孔径0.5cm、重さ12.02ｇで、にぶい橙色をしている。

第２号周溝状遺構（第379図）

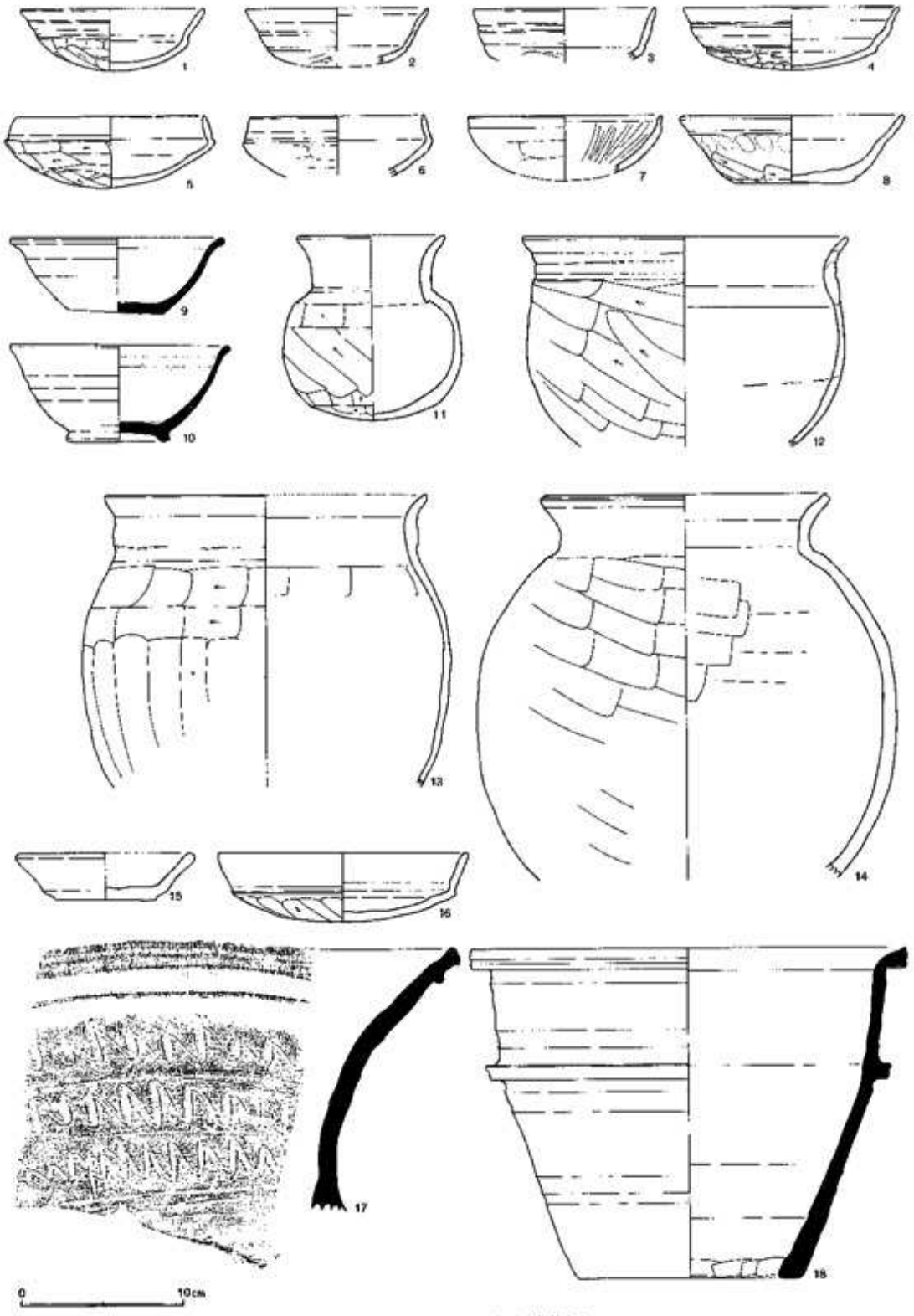
せ－４－２グリッドを中心に位置する。第88号住居跡を切り、第89号住居跡に切られる。東側は調査区域外にある。形態は長方形になると思われ、検出された規模は長軸4.32ｍ、短軸3.07ｍで、溝の幅0.26～0.4ｍ、深さ0.08～0.1ｍとなっている。主軸方位はＮ－82°－Ｗを指す。住居跡の壁溝の部分とも考えられるが、周辺の住居跡の壁溝と比較すると幅が広く、床面の痕跡も検出できなかったため周溝状遺構とした。

遺物は土師器小片が８片出土しただけで図示できるものはない。

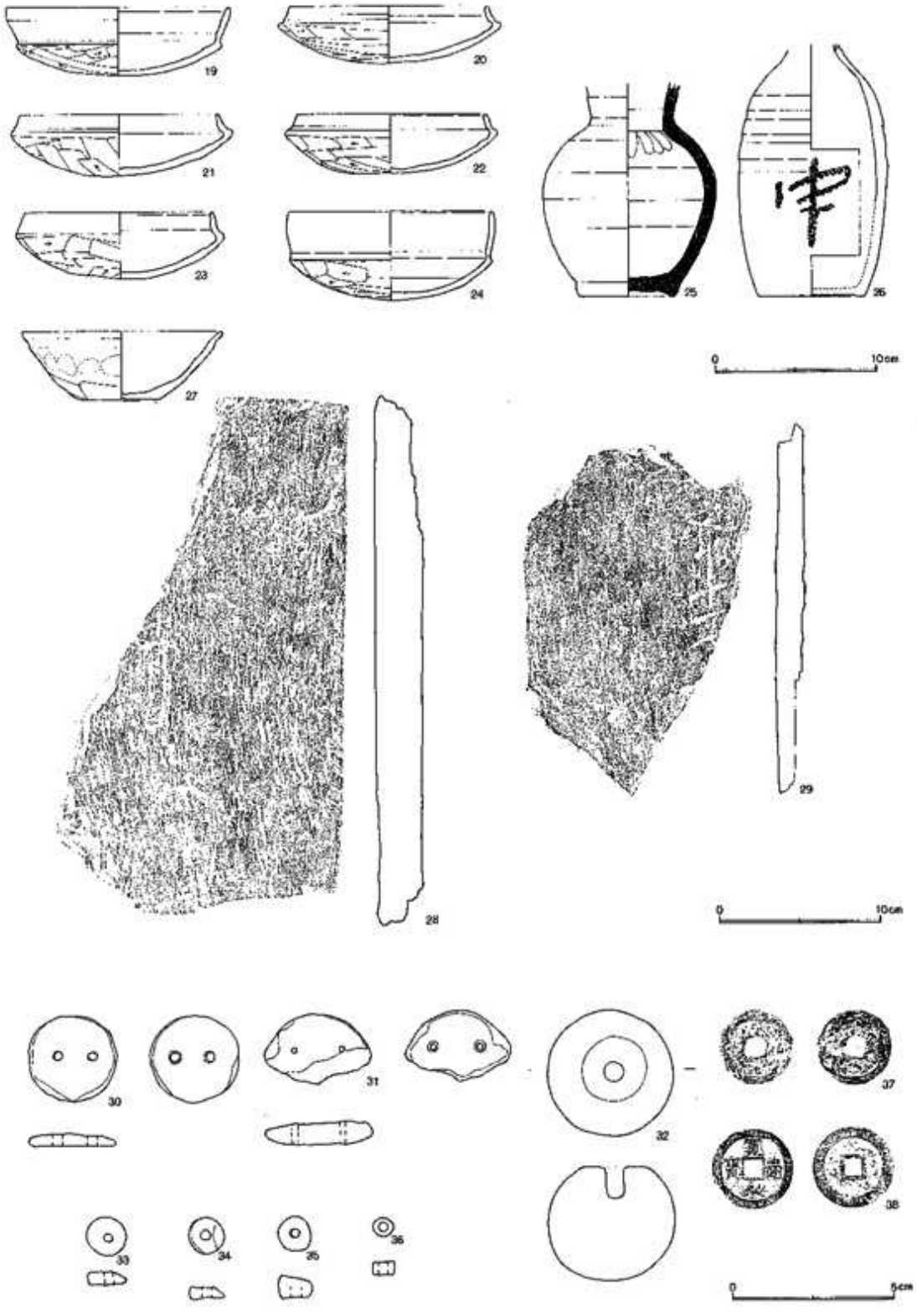


第379図　第２号周溝状遺構

（7）グリッド出土遺物（第380～382図）



第380図　グリッド出土遺物(1)



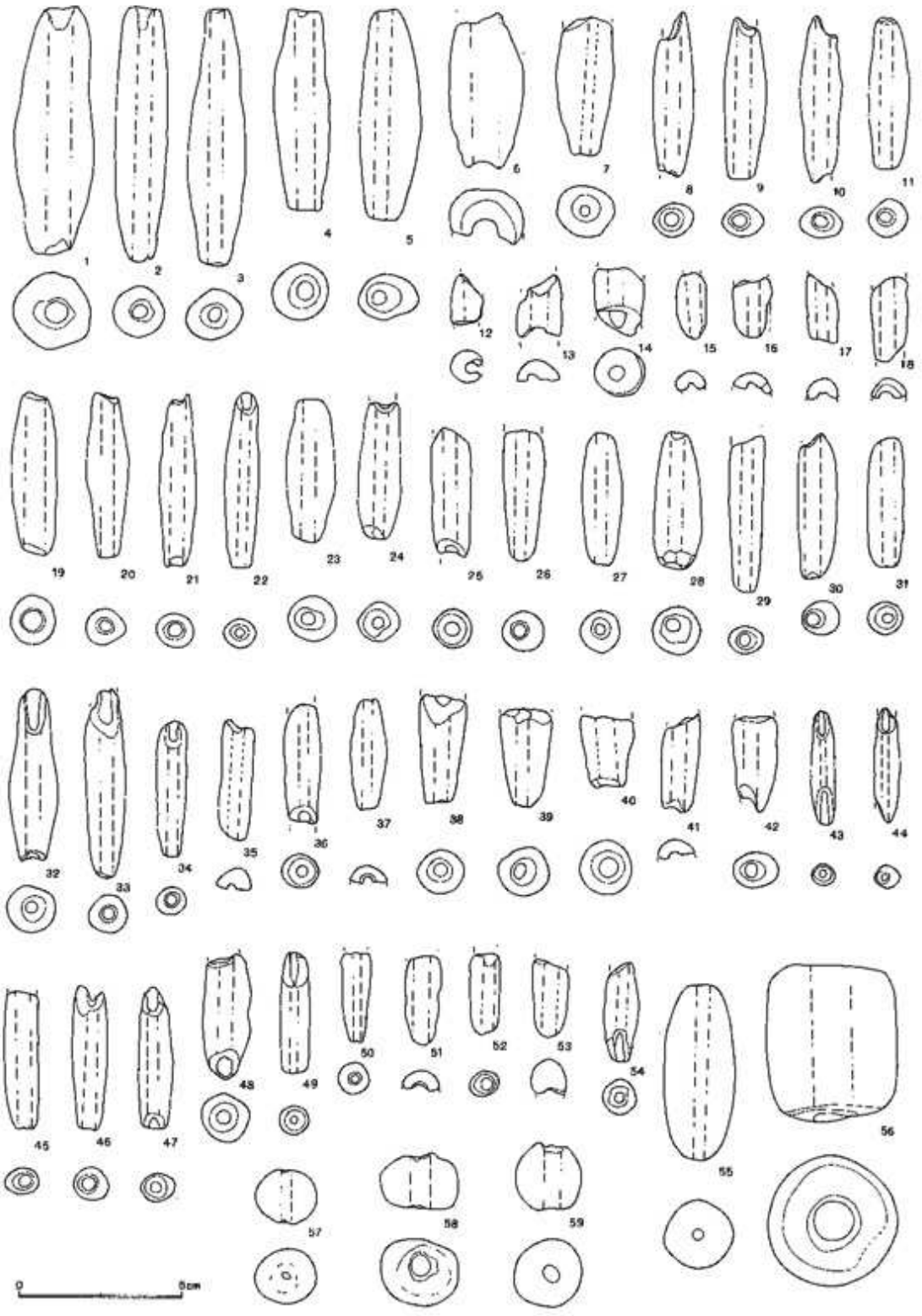
第381図　グリッド出土遺物(2)

グリッド出土遺物観察表（第380・381図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	11.0	3.8		B'W'WR	B	褐灰	95%	す-4-24 旧SJ47 内外面やや磨耗
2	坏	(11.3)	3.4		B'WW'	B	浅黄橙	20%	す-4-24 旧SJ47 内面色調褐灰
3	坏	(11.2)	3.2		B'W'RW	B	鈍い黄橙	15%	す-4-24 旧SJ47 内外面やや磨耗
4	坏	13.4	3.9		B'RW'W	B	浅黄橙	75%	す-4-24
5	坏	11.5	4.4		RB'W'	B	橙	85%	す-4-24
6	坏	(10.7)	3.7		B'W'RW	B	明黄褐	15%	す-4-24 旧SJ47 内外面磨耗著しい
7	坏	(11.9)	3.6		W'WB'	B	黄橙	15%	す-4-24 旧SJ47 放射状暗文不明瞭
8	坏	13.6	4.2	7.3	B'W'RW	A	橙	90%	す-4-24 底部砂底一部ケズリが入る
9	坏	13.0	4.5	5.8	W'WR	C	褐	75%	す-4-24 底部回転糸切り 酸化焔焼成
10	高台坏	13.4	6.0	5.5	WB'W'	B	灰白	90%	す-4-24
11	壺	(8.8)	11.5	7.9	B'WSR	B	橙	60%	す-4-24 旧SJ47 内外面やや磨耗
12	鉢	(20.1)	12.9		RB'W'	B	橙	20%	す-4-24 内面やや磨耗
13	甕	(19.9)	18.0		W'B'WR	B	鈍い橙	30%	す-4-24 内外面磨耗著しい
14	甕	17.5	23.7		SW'B'RW	C	浅黄橙	25%	す-4-24 旧SJ47
15	かわらけ	(10.4)	2.9	(6.3)	BB'WRW'	B	浅黄橙	50%	す-4-25 底部回転糸切り
16	坏	15.3	4.3		WB'W'R	A	黒褐	90%	せ-4-14 内外面剥落 磨耗著しい
17	甕				WBW'	B	黄灰		せ-4-14 群馬産か
18	甑	27.0	20.4	13.7	WBS	B	灰白	40%	せ-4-13
19	坏	13.7	4.3		BB'WW'R	B	橙	100%	す-5-2付近
20	坏	12.1	3.5		WW'BB'S	B	灰褐	75%	す-5-2付近
21	坏	12.2	3.3		WBB'RS	B	鈍い橙	100%	す-5-2付近
22	坏	11.6	3.6		WW'B'BR	B	鈍い赤褐	100%	す-5-2付近
23	坏	11.4	4.1		WW'BB'RS	A	鈍い赤褐	100%	す-5-2付近
24	坏	12.5	5.5		B'WW'BR	A	橙	100%	せ-5-25-P-1 ていねいな作り
25	壺		13.1	(5.8)	WBB'片	B	褐灰	55%	た-5-7付近 産地不明 器面磨耗著しい
26	徳利		15.5	6.6	BR		明黄褐	95%	表採 胴部に「中」と釘書
27	坏	12.3	4.2	4.8	WW'BB'R	B	橙	100%	表採
28	板碑	せ-5-4 残高32.5cm 幅18.9cm 厚さ3.1cm 緑泥片岩							
29	板碑	せ-5-4 残高23.0cm 幅14.5cm 厚さ1.7cm 緑泥片岩							
30	有孔円板	こ-3-14 直径26.0mm 厚さ4.0mm 重量5.30g 砂岩製 完形							
31	有孔円板	こ-3-12 直径33.0mm 厚さ7.0mm 重量7.15g 滑石製 一部欠損							
32	不明	せ-6-16 長さ3.9cm 幅3.9cm 孔径0.6cm 重量65.24g 砂岩製							
33	白玉	こ-3-13 直径12.0mm 厚さ4.0mm 重量1.03g 滑石製							
34	白玉	す-4-25 直径11.0mm 厚さ4.0mm 重量0.72g 滑石製 一部欠損							
35	白玉	こ-3-8 直径10.5mm 厚さ7.0mm 重量1.25g 滑石製							
36	白玉	表採 直径7.0mm 厚さ4.0mm 重量0.22g 滑石製 ほぼ完形							

ここでは、グリッド出土遺物の他、第1次調査時に出土した遺物と表採遺物で縄文時代の遺物以外を一括した。

25は須恵器の壺である。器面の風化が著しく、ざらついている。26は瀬戸・美濃の徳利で、胴部に「中」と釘書されている。28・29は板碑の破片で、28の銘文は「十‥月日」、29は「文□（永か）十‥」である。30・31は有孔円板である。30は砂岩製の完形品、31は滑石製で下半を欠損する。33～36は白玉で、何れも滑石製である。32は不明石製品である。ほぼ球状であるが小孔が穿たれており、この小孔が穿たれた面を平らに加工している。類似するものは浦和市上大久保新田遺跡（柳田



第382図　グリッド出土土錘

グリッド出土土錘観察表（第382図）

番号	器種	出土位置	胎土	焼成	色調	残存	法量
1	土錘	表採	BW		浅黄橙	100%	残7.6cm 径2.4cm 孔0.7cm 重33.14g
2	土錘	せ-4-25	SBB'WW'		鈍い褐	100%	長7.9cm 径1.6cm 孔0.5cm 重18.63g
3	土錘	こ-4-4付近	BB'W		灰白	100%	残7.8cm 径1.8cm 孔0.4cm 重18.85g
4	土錘	け-4-21	WW'		黒褐	100%	長6.2cm 径1.7cm 孔0.6cm 重16.09g
5	土錘	こ-3-14	SWBW'R		鈍い黄橙	100%	長6.5cm 径1.9cm 孔0.4cm 重17.67g
6	土錘	せ-4-4	WW'		橙		残4.8cm 径2.3cm 孔0.8cm 重12.65g
7	土錘	す-4-24	BRWW'		鈍い橙		残4.3cm 径1.8cm 孔0.3cm 重9.66g
8	土錘	せ-4-20	BB'WW'		灰黄褐		残5.1cm 径1.3cm 孔0.4cm 重5.09g
9	土錘	す-4-24	WRBW'		橙		残5.0cm 径1.3cm 孔0.4cm 重4.77g
10	土錘	す-4-24	BRWB'W'		明赤褐		残5.2cm 径1.3cm 孔0.5cm 重4.60g
11	土錘	す-4-24	W'BS		鈍い黄橙	100%	長4.7cm 径1.2cm 孔0.4cm 重5.64g
12	土錘	こ-3-7	B'W		橙		残1.6cm 径1.0cm 孔0.4cm 重1.00g
13	土錘	す-4-24旧HSJ47	BW		橙		残1.9cm 径1.3cm 重1.40g
14	土錘	こ-3-14	SWBB'		灰黄褐		残2.2cm 径1.6cm 孔0.5cm 重3.41g
15	土錘	す-5-11G	BW'		橙		残2.1cm 径1.0cm 孔0.3cm 重1.24g
16	土錘	し-3-4	RWB		橙		残1.9cm 径1.2cm 孔0.4cm 重0.91g
17	土錘	し-3-4	BW'W		浅黄橙		残2.1cm 径1.0cm 孔0.3cm 重0.54g
18	土錘	し-3-4	B		浅黄橙		残2.7cm 径1.1cm 孔0.4cm 重1.40g
19	土錘	こ-3-9	BB'W		鈍い橙	100%	長5.0cm 径1.5cm 孔0.7cm 重9.35g
20	土錘	す-4-24	WBW'		鈍い赤褐	100%	長5.1cm 径1.3cm 孔0.4cm 重5.68g
21	土錘	せ-5-17	SBB'W'W		鈍い黄橙		長5.3cm 径1.2cm 孔0.5cm 重4.88g
22	土錘	す-4-24	BB'W'		鈍い黄橙		長5.4cm 径1.0cm 孔0.3cm 重4.36g
23	土錘	せ-4-13	BB'W'W		浅黄橙	100%	長4.4cm 径1.5cm 孔0.4cm 重7.23g
24	土錘	せ-4-13	BB'WW'R		橙		残4.2cm 径1.3cm 孔0.3cm 重6.21g
25	土錘	せ-4-12	WBW'B'		鈍い黄橙		残4.0cm 径1.2cm 孔0.4cm 重6.01g
26	土錘	す-4-24	WW'B		鈍い黄橙		残4.0cm 径1.3cm 孔0.4cm 重4.92g
27	土錘	せ-4-7	WW'B'		褐灰	100%	長4.1cm 径1.3cm 孔0.4cm 重6.04g
28	土錘	す-4-24	SBWW'		鈍い黄橙	100%	長4.2cm 径1.5cm 孔0.5cm 重8.68g
29	土錘	す-4-24	WW'B'		灰褐		残4.8cm 径1.1cm 孔0.4cm 重4.40g
30	土錘	せ-5-23	SRW'BB'W		鈍い黄橙		残4.4cm 径1.2cm 孔0.5cm 重5.36g
31	土錘	せ-5-23	SB'BR		橙	100%	長4.0cm 径1.1cm 孔0.4cm 重4.75g
32	土錘	す-4-24旧HSJ47	BB'WW'R		鈍い黄橙		長5.3cm 径1.6cm 孔0.4cm 重8.48g
33	土錘	せ-4-7	BB'		褐灰		残5.8cm 径1.2cm 孔0.4cm 重5.82g
34	土錘	せ-4-13	SBRW'		鈍い黄橙		長4.2cm 径1.0cm 孔0.4cm 重3.65g
35	土錘	表採	BW'B'		浅黄橙		長3.7cm 径1.1cm 孔0.3cm 重2.55g
36	土錘	こ-3-14	BW'B'		灰白		残3.7cm 径1.2cm 孔0.3cm 重4.32g
37	土錘	せ-4-13	RWW'		鈍い橙		長3.4cm 径1.2cm 孔0.3cm 重1.70g
38	土錘	こ-3-14	SBB'W'		浅黄橙		残3.3cm 径1.4cm 孔0.4cm 重5.72g
39	土錘	こ-4-16付近	WBW'B'		橙		残3.0cm 径1.6cm 孔0.5cm 重5.58g
40	土錘	す-4-24	RWW'B'B		極暗赤褐		残2.2cm 径1.7cm 孔0.6cm 重4.55g
41	土錘	せ-4-9	WBB'		橙		残3.0cm 径1.2cm 孔0.4cm 重1.78g
42	土錘	す-4-24	RB'B		鈍い褐		残3.0cm 径1.5cm 孔0.5cm 重3.69g
43	土錘	す-4-24	RBWB'W'		明黄褐		長3.5cm 径0.8cm 孔0.2cm 重1.45g
44	土錘	す-4-24	RBW'B'		鈍い黄橙		残3.5cm 径0.8cm 孔0.2cm 重1.60g
45	土錘	せ-4-5	BWB'		灰黄褐	100%	残4.3cm 径1.1cm 孔0.4cm 重3.74g
46	土錘	こ-3-7	BW		鈍い黄橙		長4.5cm 径1.1cm 孔0.4cm 重4.18g
47	土錘	す-4-24	BB'W		鈍い黄橙		長4.4cm 径1.1cm 孔0.4cm 重3.53g
48	土錘	こ-3-12	BWB'W		褐灰		残3.9cm 径1.5cm 孔0.5cm 重6.93g

番号	器種	出土位置	胎土	焼成	色調	残存	法量
49	土錘	す-4-24	W'B'WB		鈍い黄橙		長3.7cm 径0.9cm 孔0.2cm 重2.90g
50	土錘	せ-4-10	WBW'B'		橙		残2.3cm 径1.0cm 孔0.3cm 重2.20g
51	土錘	し-3-4	B		浅黄橙		残2.7cm 径1.2cm 孔0.5cm 重1.56g
52	土錘	す-4-24	BB'WW'		明褐灰		残2.5cm 径0.9cm 孔0.4cm 重1.79g
53	土錘	す-4-25	SW'		浅黄橙		残2.4cm 径1.1cm 重2.51g
54	土錘	せ-4-4	BB'R		鈍い黄橙		残3.1cm 径1.1cm 孔0.3cm 重2.54g
55	土錘	す-5-2付近	BW'WB'		黒褐	100%	残5.4cm 径2.2cm 孔0.4cm 重22.75g
56	土錘	表採	SBW'B'W		灰黄褐	100%	長4.8cm 径4.0cm 孔1.2cm 重83.77g
57	土玉	す-4-24旧SJ47	WBW'B'		橙		長1.2cm 径1.9cm 孔0.3cm 重5.18g
58	土玉	表採	WBW'B'		浅黄橙		長1.7cm 径2.4cm 孔0.6cm 重7.35g
59	土玉	表採	WBW'B'		鈍い橙		長2.1cm 径2.1cm 孔0.5cm 重7.63g

他　1987)、熊谷市光屋敷遺跡（川口　1989)、坂戸市宮町遺跡（大谷　1991)、毛呂山町堂山下遺跡（宮瀧　1991）他に見られ、、坂戸市稲荷前遺跡A区（富田　1992）では土製だが同様な形態を示している。37・38は古銭で、37は第65号住居跡出土だが風化が著しく判読できない。38はせ－4－15グリッド出土、「文」銭の寛永通宝である。

グリッド出土遺物及び表採遺物には56個の土錘と3個の土玉が見られ、大半は欠損しているが第382図－56のような大型品も含まれる。

（8）縄文時代の遺物（第383図）

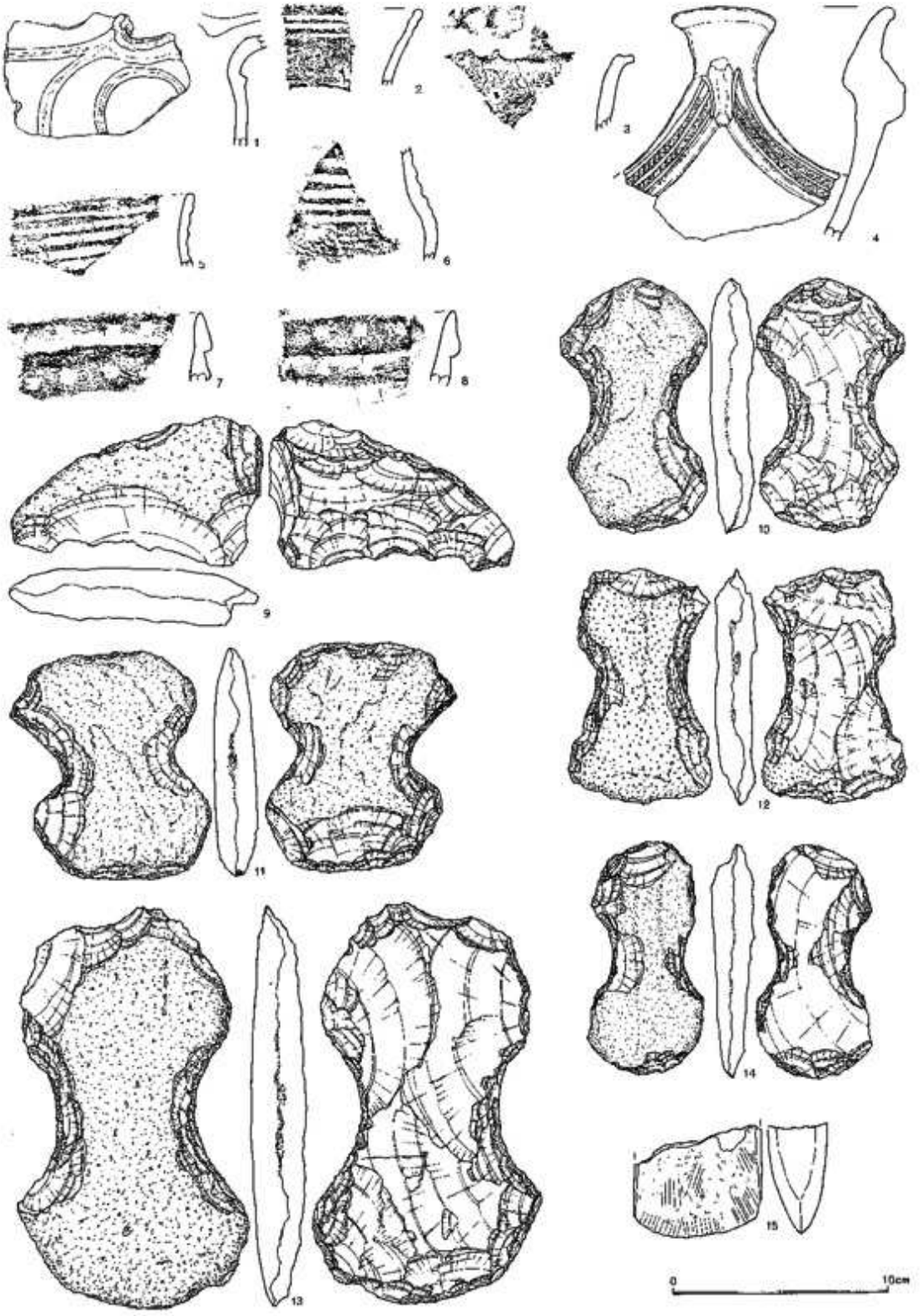
ここでは出土遺構やグリッドを問わず、縄文時代の遺物として一括した。遺物は、後期から晩期にかけての土器片と、石器類が出土している。

出土土器には称名寺式、加曽利B式、高井東系、大洞式等が認められる。1は第13号土壙、2は第6号溝跡、3は第53号住居跡、4はし－3－13グリッド、5・6は第32号住居跡、7・8は第5号溝跡の出土である。この他に土器片は29片出土しており、時期的には図示したものと同様と思われる。

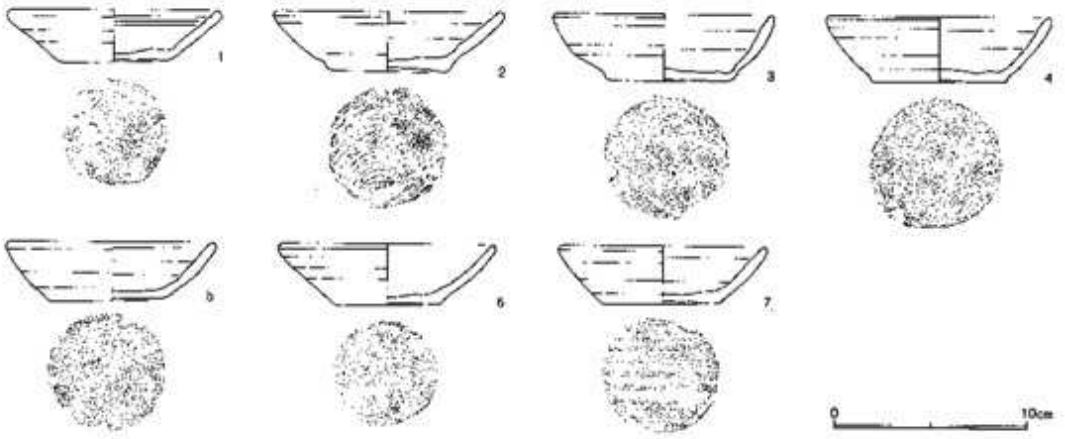
石器類は大半が分銅型の打製石斧だが、9は横刃の礫器、15は磨製石斧である。9はさ－3－3グリッド、10は第53号住居跡、11はこ－4－9グリッド、12は第77号住居跡、13は第13号土壙、14は第76号住居跡、15はこ－3－19グリッドの出土である。これら以外には打製石斧片が2点見られる。

（9）深谷市大字石塚地内出土遺物（第384図）

ここで取り上げた遺物は、第1次調査時に第134号と仮称した遺構確認のためのトレンチから出土した土師質の皿で、出土地点は深谷市大字石塚字北久保地内である。このトレンチからは図示した土師質の皿以外に焼土片・陶器片が10数点出土しているが、出土状況は不明である。遺物が出土したトレンチを拡張し、周辺を慎重に精査したが遺構は検出されず、遺跡とされなかったため、第2次調査は実施されなかった。



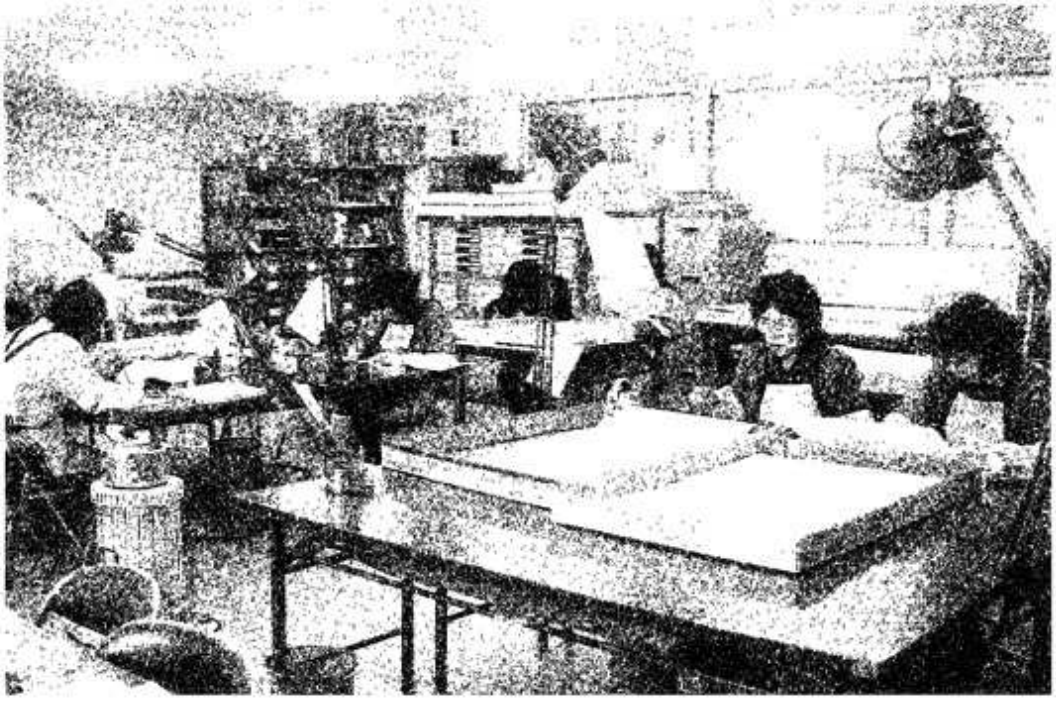
第383図　縄文土器及び石器



第384図　深谷市大字石塚地内出土遺物

深谷市大字石塚地内出土遺物観察表（第384図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	かわらけ	10.2	2.6	5.2	WW'B'BR	B	鈍い橙	95%	回転糸切り痕
2	かわらけ	11.6	2.9	6.4	WB'BR	B	鈍い橙	60%	回転糸切り痕
3	かわらけ	11.3	3.4	6.5	WBB'R	B	鈍い橙	85%	回転糸切り痕
4	かわらけ	11.3	3.4	7.0	WBB'R	A	浅黄橙	100%	
5	かわらけ	10.5	3.0	6.0	WBB'R	A	鈍い橙	95%	
6	かわらけ	10.9	3.2	5.4	WBB'R	B	鈍い橙	100%	糸切り痕
7	かわらけ	10.5	3.0	5.9	WBB'R	B	橙	95%	



整理作業風景

居立遺跡住居跡新旧対照表

新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧
1	8	21	45	41	58	61	24	81	35	101	106
2	3	22	31	42	67	62	39	82	88	102	109
3	5	23	20	43	74	63	33	83	89	103	108
4	1	24	21	44	66	64	41	84	86	104	113
5	7	25	22	45	75	65	40	85	42	105	116
6	6	26	25	46	72	66	44	86	94	106	111
7	2	27	26	47	70	67	29	87	87	107	114
8	4	28	28	48	73	68	30	88	32	108	115
9	120	29	36	49	65	69	38	89	90	109	112
10	13	30	54	50	71	70	101	90	99	110	110
11	11	31	56	51	69	71	102	91	93	111	77
12	12	32	55	52	84	72	103	92	119	112	76
13	10	33	51	53	62	73	100	93	118	113	78
14	9	34	50	54	68	74	104	94	97	114	79
15	16	35	61	55	64	75	96	95	91	115	80
16	17	36	57	56	63	76	95	96	92	116	81
17	15	37	52	57	34	77	46	97	98	117	82
18	14	38	53	58	37	78	43	98	117	118	83
19	18	39	59	59	27	79	48	99	105	119	
20	19	40	60	60	23	80	85	100	107	120	

居立遺跡井戸跡新旧対照表

新	旧	新	旧	新	旧
1	1	13	34	25	24
2	2	14	30	26	17
3	4	15	12	27	18
4	3	16	32	28	25
5	5	17	33	29	26
6	6	18	27	30	28
7	7	19	13	31	20
8	9	20	16	32	22
9	10	21	14	33	21
10	8	22	35	34	19
11	11	23	15	35	23
12	29	24	31		

居立遺跡土壙新旧対照表

新	旧	新	旧
SK1	SK1	SK9	SK9
2	2	10	10
3	3	11	11
4	4	12	12
5	5	13	SX1
6	6	14	2
7	7	周溝状遺構1	3
8	8	周溝状遺構2	4

居立遺跡掘立柱建物跡新旧対照表

新	旧	新	旧
SB1 P1	SB1 P1	SB1 P10	そ－4－10G P1
2	2	11	2
3	3	12	3
4	6	13	そ－4－5G P6
5	9	14	5
6	8	15	4
7	7	16	3
8	4	17	2
9	5	18	1

居立遺跡井戸一覧表

No	グリッド	平面形	最大径(m)	深さ(m)	備考
1	し－3－7	円　形	2.46	1.42	石臼片　土師器少量　須恵器片
2	し－5－8	不整円	1.74	0.58	
3	し－5－13	楕円形	2.74	0.80	ＳＥ４と重複　土師器片
4	し－5－13	円　形	2.30	0.94	ＳＥ３と重複
5	し－5－14	半円形	2.80	0.80	擂鉢　焙烙片　石臼片
6	し－5－19	円　形	2.00	0.80	
7	し－5－23	〃	1.20	1.00	
8	す－5－9	〃	1.36	1.22	
9	す－5－15	〃	2.36	1.00	ＳＪ24より新
10	す－5－2	〃	2.65	0.64	ＳＪ20より新　ＳＤ７と重複　焙烙片　土師器片
11	す－5－18	不整円	1.18	1.14	ＳＪ60、61より新　土師器片　須恵器片
12	す－4－24	円　形	1.20	0.40	ＳＪ82、83より新　土錘　土師器片
13	す－4－22	〃	1.52	0.54	ＳＪ88より新
14	せ－4－7	〃	0.94	0.94	ＳＪ91より新
15	す－4－19	〃	2.00	1.04	ＳＤ13と重複　板碑　五輪塔
16	す－4－24	楕円形	1.94	0.52	ＳＪ81、82、86より新　須恵器　石臼　焙烙　ＳＥ17と重複
17	す－4－23	円　形	1.90	0.48	ＳＪ80、81、82より新　ＳＥ16と重複　土師器片
18	せ－5－3	〃	2.60	1.00	ＳＪ56より新　ＳＤ13と重複　第359図　土師器片
19	す－5－19	〃	1.68	1.38	ＳＪ25より新　ＳＤ13と重複
20	せ－5－3	不整円	1.32	0.82	ＳＪ57、59より新　土師器
21	せ－5－3	円　形	1.24	1.02	ＳＪ59より新
22	せ－6－11	不整円	1.70	1.14	ＳＪ28より新
23	せ－5－9	方　形	1.76	1.20	
24	せ－4－3	楕円形	2.22	0.42	ＳＪ86、87より新
25	せ－5－15	〃	1.86	0.96	ＳＪ31、32より新　土師器片　須恵器片
26	せ－6－16	円　形	1.52	1.02	土師器片
27	せ－6－16	〃	1.72	0.88	ＳＪ35、36より新　土錘　土師器片
28	せ－5－10	不整円	1.46	0.44	ＳＪ28、32より新　土師器片
29	せ－5－9	円　形	1.50	0.54	ＳＤ12、13と重複
30	せ－4－3	円　形	1.02	0.84	ＳＪ89より新　土師器片
31	せ－6－11	不整円	2.20	1.06	ＳＪ31より新　ＳＥ32と重複　土師器片　須恵器片
32	せ－6－16	円　形	3.00	0.96	ＳＪ31より新　ＳＥ31、34と重複　砥石　土師器片
33	せ－6－16	〃	1.50	1.02	ＳＪ36より新　ＳＸ１と重複　瀬戸甕　土師器片
34	せ－5－20	〃	2.68	1.00	ＳＪ31、32、35より新　土師器片　須恵器片
35	せ－5－15	〃	2.18	0.70	ＳＪ32より新　ＳＤ11と重複　近世　鉢　土師器片

居立遺跡土壙一覧表

No	グリッド	平面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	備　　考
1	こ－3－25	不整円形	2.08	1.72	0.64	土師器片
2	し－3－8	円　形	0.90	0.98	1.00	焼烙　かわらけ
3	し－3－12	楕円形	0.90	0.70	0.30	
4	し－3－12	〃	1.04	0.70	0.44	ＳＪ14より新
5	す－4－5	〃	0.64	0.62	1.00	土師器片　須恵器片
6	し－3－12	〃	0.84	0.70	0.32	
7	せ－5－5	〃	0.98	0.90	0.94	ＳＪ26、27より新 かわらけ　土師器
8	そ－6－2	〃	0.56	0.40	0.38	
9	そ－6－2	〃	1.02	0.76	0.32	
10	せ－6－21	〃	1.80	1.40	0.14	ＳＪ36、37より新 土師器片
11	せ－4－3	円　形	1.46	1.30	0.12	ＳＪ87より新 土師器片
12	せ－4－3	楕円形	2.42	1.36	0.30～0.62	
13	す－4－5	長方形	6.10	5.04	0.36～0.90	ＳＪ19より新　第363～367図
						ＳＤ９と重複
14	す－5－10	楕円形	5.04	2.96	0.60～0.74	ＳＤ11、12と重複　第369、370図

V　調査のまとめ

1　前・居立遺跡出土の土器について

前および居立遺跡からは合わせて134軒の住居跡が検出され、大量の土器が出土している。これらは古墳時代から平安時代に至るまで、一時途切れる期間が見られるものの営々と営まれている。その中心となるのは古墳時代の後期、いわゆる鬼高期に属し、居立遺跡では全体の８割以上の住居跡がこの時期の所産と考えられる。本項ではこれらの土器を11期に区分し、その変遷を略示した。しかし、住居跡も各時期において特徴が見られると考えられるが、力量不足のためほとんど併記することが出来なかった。

なお、図版中の「M」は前遺跡出土の土器を示し、他は居立遺跡出土の土器である。また、前遺跡第５号住居跡は古墳時代前期に属し、他の住居跡とは時期的に隔絶するため、この区分からは除外している。

第Ⅰ期（第385図）

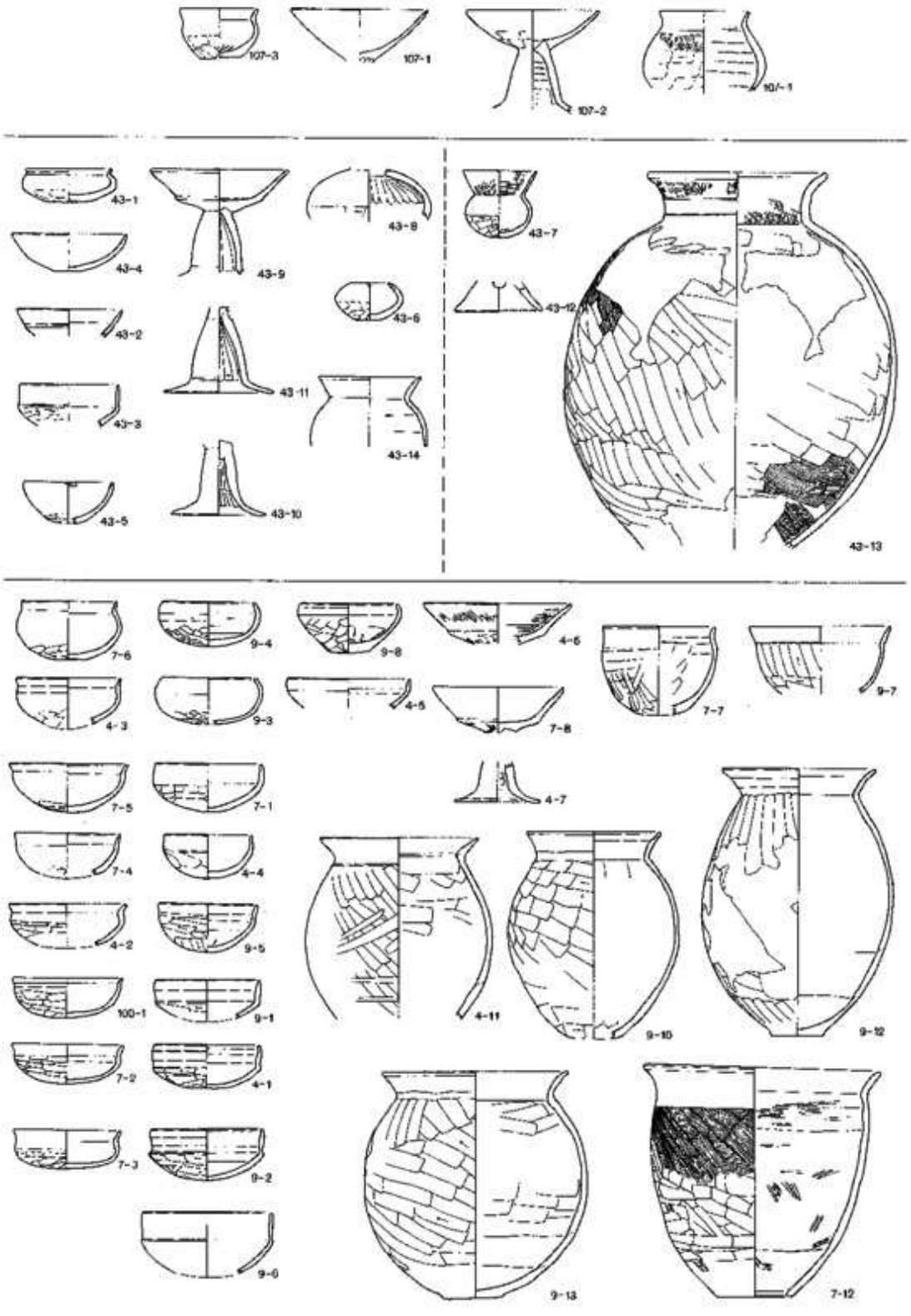
本期に該当するのは居立遺跡第107号住居跡１軒である。第107号住居跡は調査区の北東端に検出され、一部は調査区外にあるため完掘されていないが、カマドは既に設置されており、住居内に留まる形態を示している。遺物の出土は乏しく、必ずしも良好な資料とは言い難い。

椀は平底で、やや胴部が張っている。高坏は２点出土しているが、共に坏部に段が見られず、柱状部から直線的に開くものである。甕は出土していないため不明である。小形甕は胴部が膨らみ、口縁部下にハケメ調整を残し、内面には粘土接合痕が明瞭に見られる。

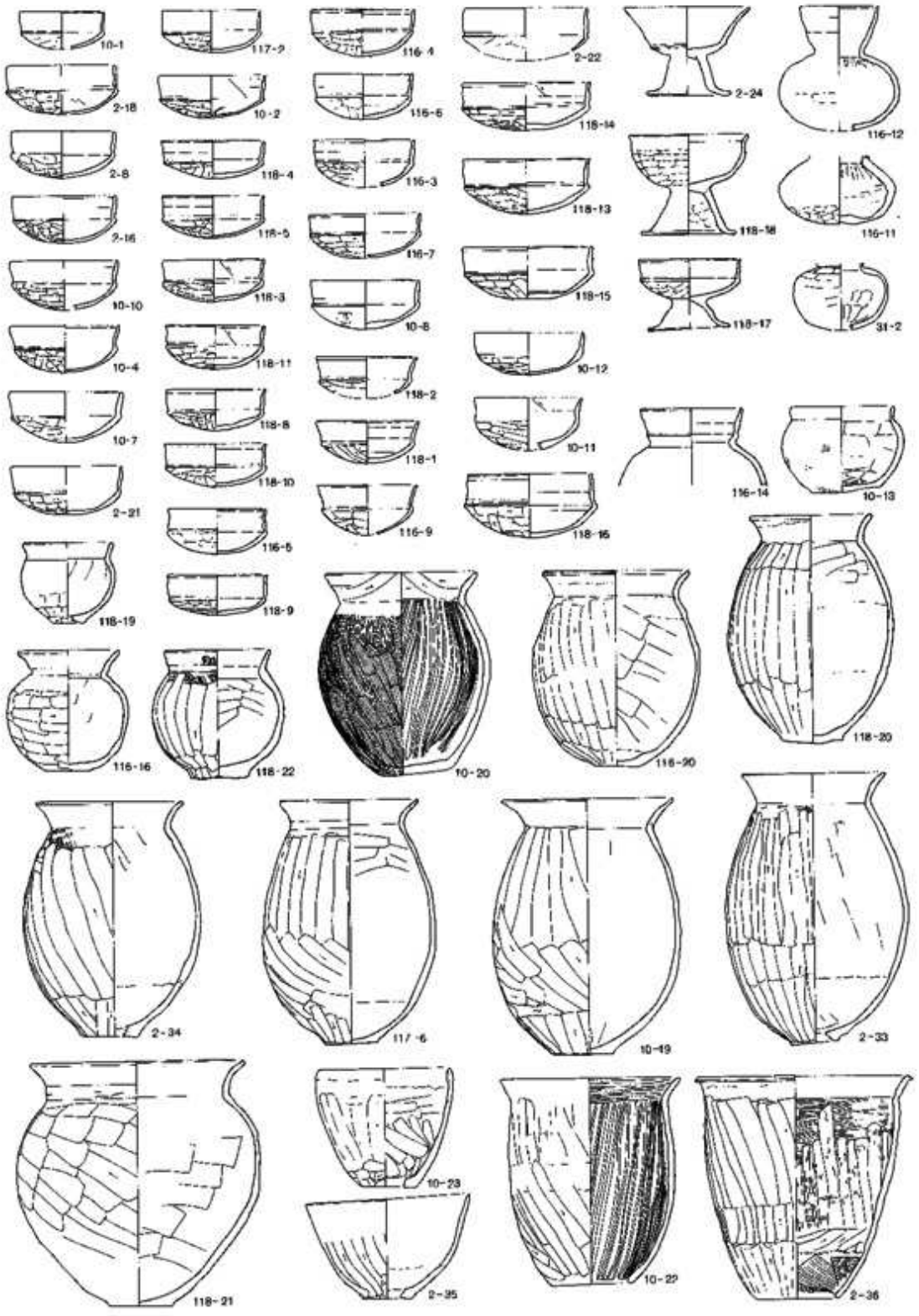
第Ⅱ期（第385図）

本期に該当するのは居立遺跡第43号住居跡１軒である。第43号住居跡は周辺の３軒の住居跡と第７号住居跡によって壊されている。形態は方形で、カマドは検出されておらず、貯蔵穴は南東コーナーで検出されている。遺物の出土はやや多めだが接合率が悪く、周囲からの混入も認められる。

出土土器には、椀・坏・高坏・坩・小形甕・ミニチュア・壺等が認められる。甕は出土していないため詳細は不明である。椀は器肉が厚く、体部が張り、口縁は短く屈曲し、平底となり器高が低いもの（43-１）が見られる。坏には底部から僅かに内湾気味に立上がるもの（43-２）や、口縁部と底部の境に段を持つ、いわゆる模倣坏のタイプがある。これには口縁部が開くもの（43-２）と直立するもの（43-３）が認められる。口縁部が直立するタイプは第Ⅲ期に継続していくものと考えられる。高坏は、坏部に段を持ち、直線的に開く。柱状部は僅かに膨らみ、ナデ整形で、内面はヘラケズリされている。裾部は大きく開くが口縁部径を上回るものではない。坩は、破片で詳細は不明だが胴部径が大きいものと、胴部径が小さく、最大径が口縁部にあるものの２種類が見られる。後者には口縁内外面にハケ調整が認められる。小形甕は、下半を欠損するが胴部は球形となり、最大径も胴部中位にあると思われる。壺は大形で、口縁に段を有し、胴部は球形で、最大径は中位にある。胴部や口縁部にはハケ調整が認められる。43-12は器種は不明だが脚部の破片である。孔を有している。43-７の坩、43-12の脚部、43-13の壺は他の出土土器に比べると古い要素が見られる



第385図　前・居立遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの土器



第386図　前・居立遺跡Ⅳ期の土器

ようである。

第Ⅲ期（第385図）

本期は居立遺跡第4・7・9・100号住居跡出土土器に代表される。出土土器には椀・坏・高坏・鉢・甕・甑等が認められる。

椀は、一部胴部に最大径を持つものが見られるが、大半は胴部の膨らみが弱く、口縁部に最大径を持つ。また、器高は高いものと低いものが見られ、概ね後者は口縁の屈曲が弱い。坏には、底部から内湾気味に立上がり体部と口縁部との境に弱い稜を持つもの、平底から直線的に開き口縁部は屈曲して直立するもの、体部と口縁部の境に明瞭な段を持ち口縁は直立するものが見られる。高坏は、坏部の段は弱くなり口縁端部は僅かに内屈し、ハケ調整の見られるものもある。脚部の開きは弱くなるようである。甕は、胴部が球形を示すものが主体を占めるが、やや長胴化を示すものも見うけられる。この点において9-12は顕著である。甑は大形品であり、胴部に膨らみは強くハケ調整が見られる。

第Ⅳ期（第386図）

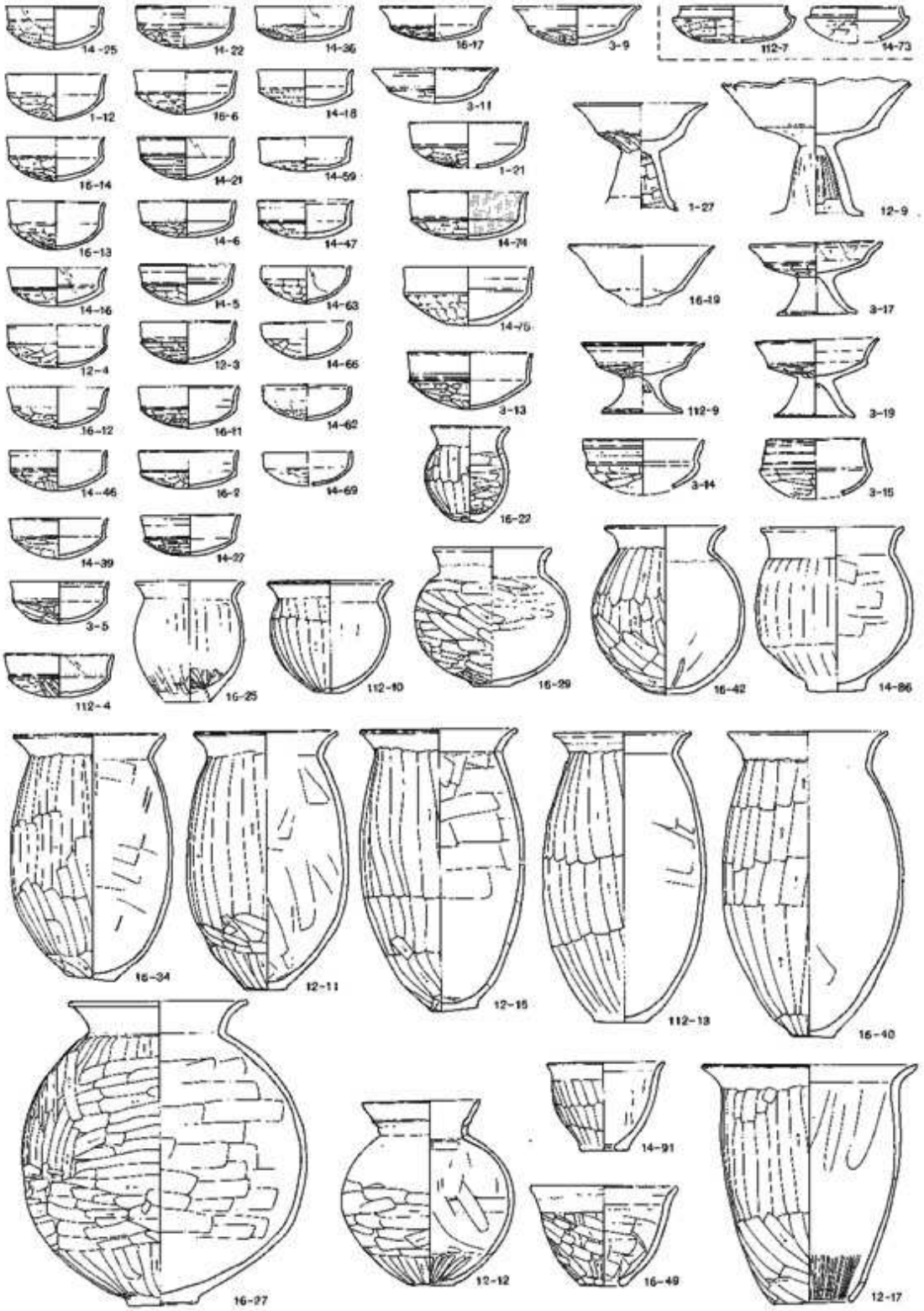
本期は居立遺跡第2・10・31・116・118号住居跡出土土器に代表される。出土土器には坏・高坏・坩・甕・壺・甑等が認められる。

坏は、口縁部と体部の境に明瞭な段を持つ模倣坏が主体となる。口縁部は僅かに内湾気味になるものと直立するものがあり、やや大形品も見られる。高坏は、前期からの系譜と引くものと模倣坏に短い脚部を付けたような形態のものが見られ、前者は第Ⅲ期に比すると柱状部が短くなっている。坩は、体部は楕円形となり口縁は僅かに内湾し、弱い稜を持っている。甕は、器高が低く前期からの形態を強く残すものも見られるが、主体は長胴化した形態のものである。何れも最大径は胴部中位或いは中位よりやや下半にあり、外面はヘラケズリされるが一部にはハケ調整を残すものも見られる。また、小形甕は多くの形態が見受けられる。壺の胴部はやや長くなり、下半部は急激に窄まる。甑は、胴部の膨らみはやや弱くなり、内面にはヘラミガキやハケ調整が施されている。また、小形の鉢型甑が認められる。

第Ⅴ期（第387図）

本期は居立遺跡第1・3・12・14・16・112号住居跡出土土器に代表される。出土土器には坏・高坏・甕・壺・甑等が認められる。

坏は、模倣坏が主流だが第Ⅳ期よりやや器高が低くなり、口縁部が開き気味となる。一方、器形にバリエーションが見られようになり、器高が低く口縁は直立し、端部が短く開くもの。全体が丸みを持ち口縁部と体部の境が稜程度で、口縁端部が短く外側に屈曲するもの。器高が低く、口縁が外反しながら大きく開くもの等であり、やや大形品も見受けられる。また、第14・112号住居跡から各々1点出土しただけだが、須恵器坏身を模倣した口縁部が内屈する坏が見られる。口縁は外反しながら立上がり、体部と口縁部との境は鋭い。何れも小片で混入の可能性も考えられるが一応本期に入れておいた。高坏は、第Ⅳ期と同様2種類が見られる。第Ⅲ期からの系譜を引くものは坏部の稜がより弱くなり、模倣坏に脚部を取り付けたものは口縁部が大きく開く。甕は、より長胴化が進み、ハケ調整のものは見られなくなる。小形甕には、第Ⅳ期同様様々なタイプが見られる。壺は、



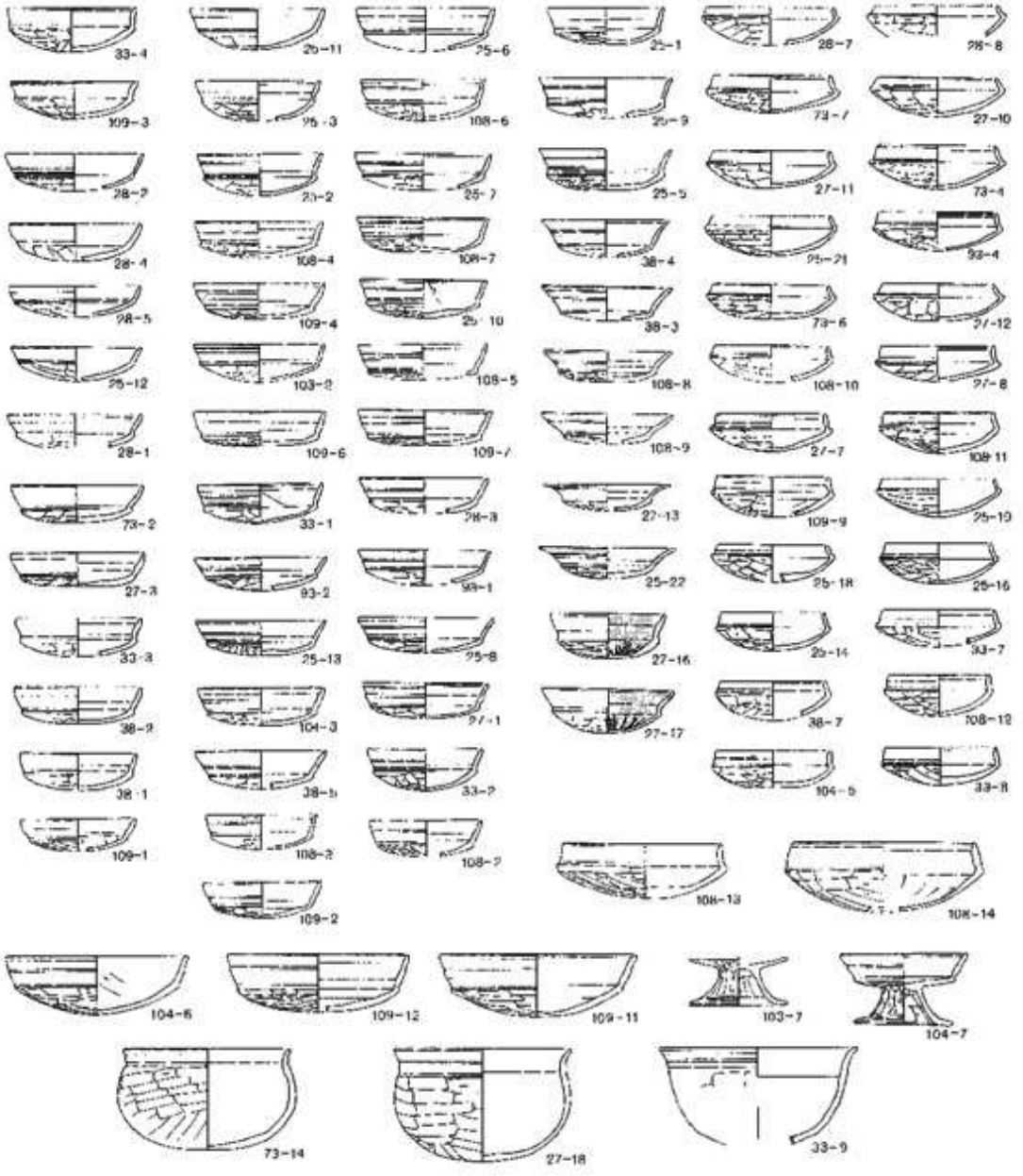
第387図　前・居立遺跡Ⅴ期の土器

大形品と小形のものが見られる。大形甑は、甕同様胴部が長くなり、胴部の膨らみは弱くなる。また、鉢型の小形甑も見られる。

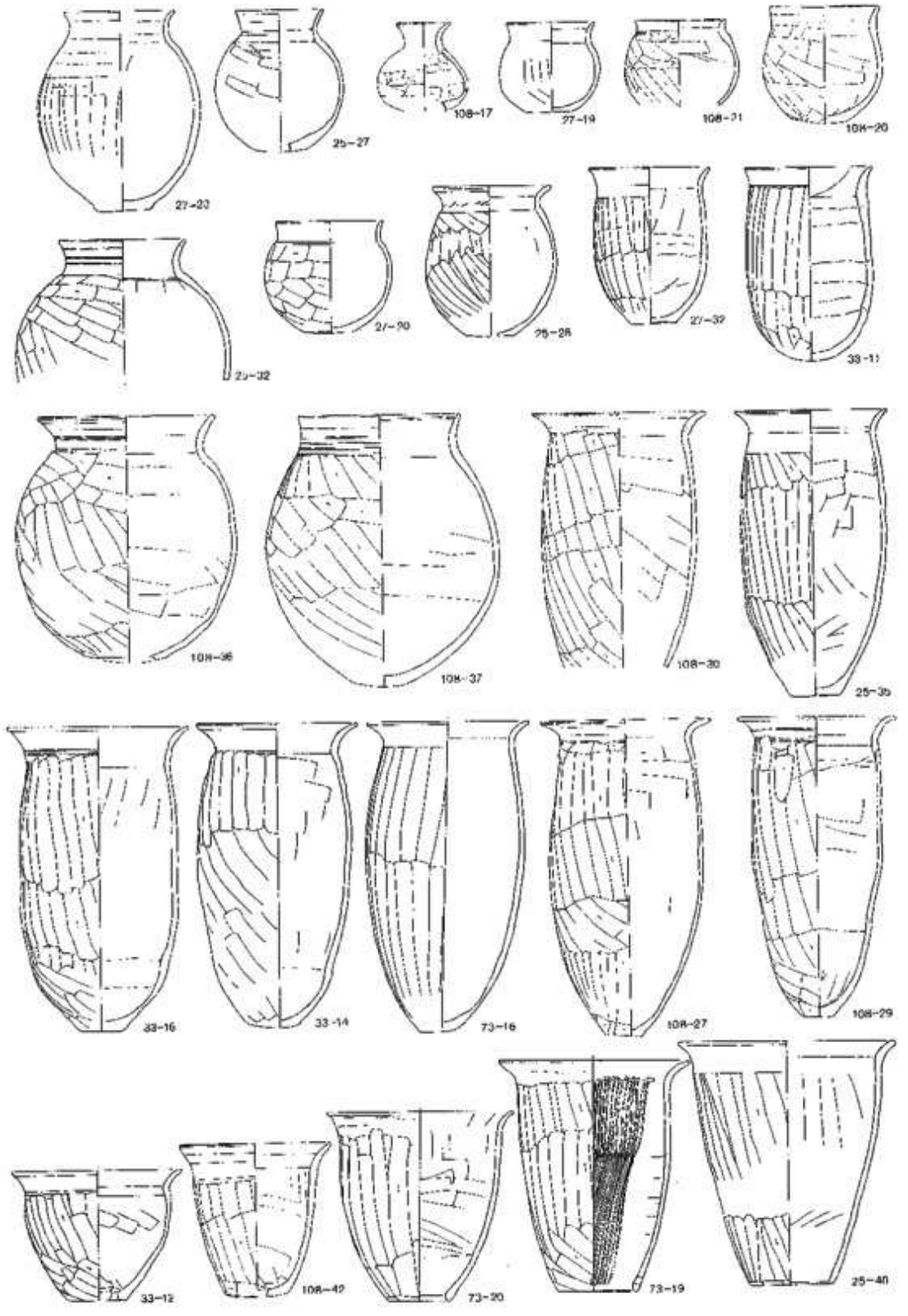
第Ⅵ期（第388・389図）

本期は居立遺跡第25・27・28・93・108号住居跡他の出土土器に代表される。出土土器には坏・高坏・鉢・甕・壺・甑等である。

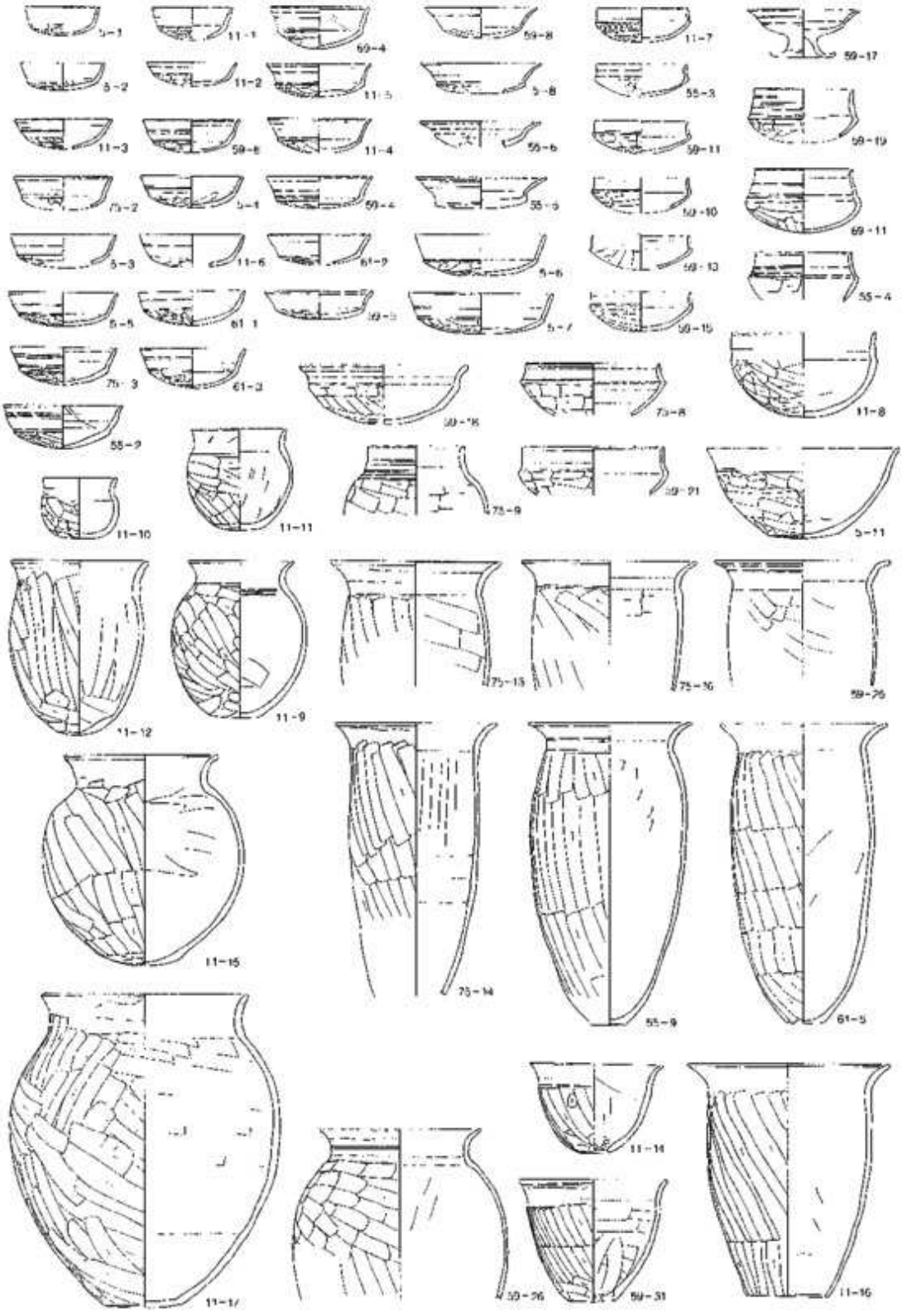
坏は、幾つかの形態が見られ、口縁部が直立或いはやや開き気味に立上がるもの。口縁部が内湾気味に立上がるもの。口縁部に数段の段を持ついわゆる有段口縁坏と呼ばれるもの。口縁部が大き



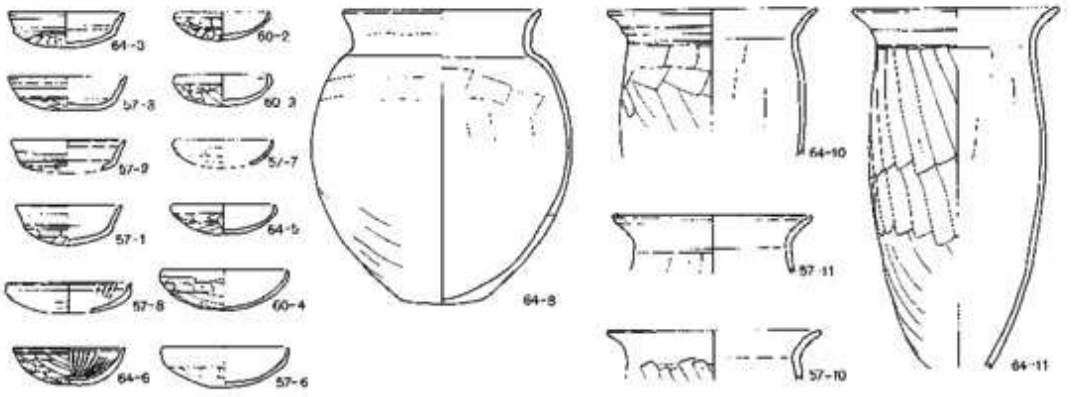
第388図　前・居立遺跡Ⅵ期の土器(1)



第389図　前・居立遺跡Ⅵ期の土器(2)



第390図　前・居立遺跡Ⅶ期の土器



第391図　前・居立遺跡Ⅷ期の土器

く開くものと、内屈口縁坏等である。内屈口縁坏以外の口径は13cm代後半から14cm代が主体となるが、一部第Ⅶ期に繋がる12cm代のものも見られる。高坏は、有段口縁坏に脚部を取り付けた形態である。鉢は、坏をそのまま大きくしたものと、胴部が丸く口縁部が僅かに開くものが見られる。甕は、胴部の長胴化が顕著で、口縁部径と胴部径がほとんど同じとなり、一部には口縁部径が上回るものも見られる。小形甕には前期同様様々な形態が見られるようである。壺は、胴部が長くなり楕円形に近くなるものと球形に近いものとが見られる。大形の甑は胴部の膨らみがより弱くなり、小形の甑には鉢型の他、小形甕の底部に孔を開けたような形態のものが見られる。

第Ⅶ期（第390図）

本期は居立遺跡第5・11・55・59・61号住居跡他の出土土器に代表される。出土土器には坏・高坏・鉢・甕・壺・甑等である。

坏は、基本的には第Ⅵ期とにているが、有段口縁坏が主体となるが、口縁部の段は鈍くなり、一部には痕跡程度となっているものも見受けられる。このことは口縁部が大きく開くタイプも同様である。内屈口縁坏は体部と口縁部の境の稜が鈍くなり、口縁は立ち気味になる。口径は総じて小さくなり、11cm代が中心となるようである。高坏は、第Ⅵ期同様有段口縁坏に脚部を付けたような形態だが、口縁部は大きく開いている。鉢は、坏を大形にしたものと底部からやや内湾気味に大きく開くものとが見られる。甕は、長胴化がより進み、胴部は細身で最大径は全てのものが口縁部へ移行する。小形の甕は依然多く見られる。壺は、第Ⅵ期同様胴部が楕円形のものと球形に近いものとが見られる。甑は第Ⅵ期とさほどの違いは見られないが、小形の鉢型甑の中に多孔のものが1点出土している。

第Ⅷ期（第391図）

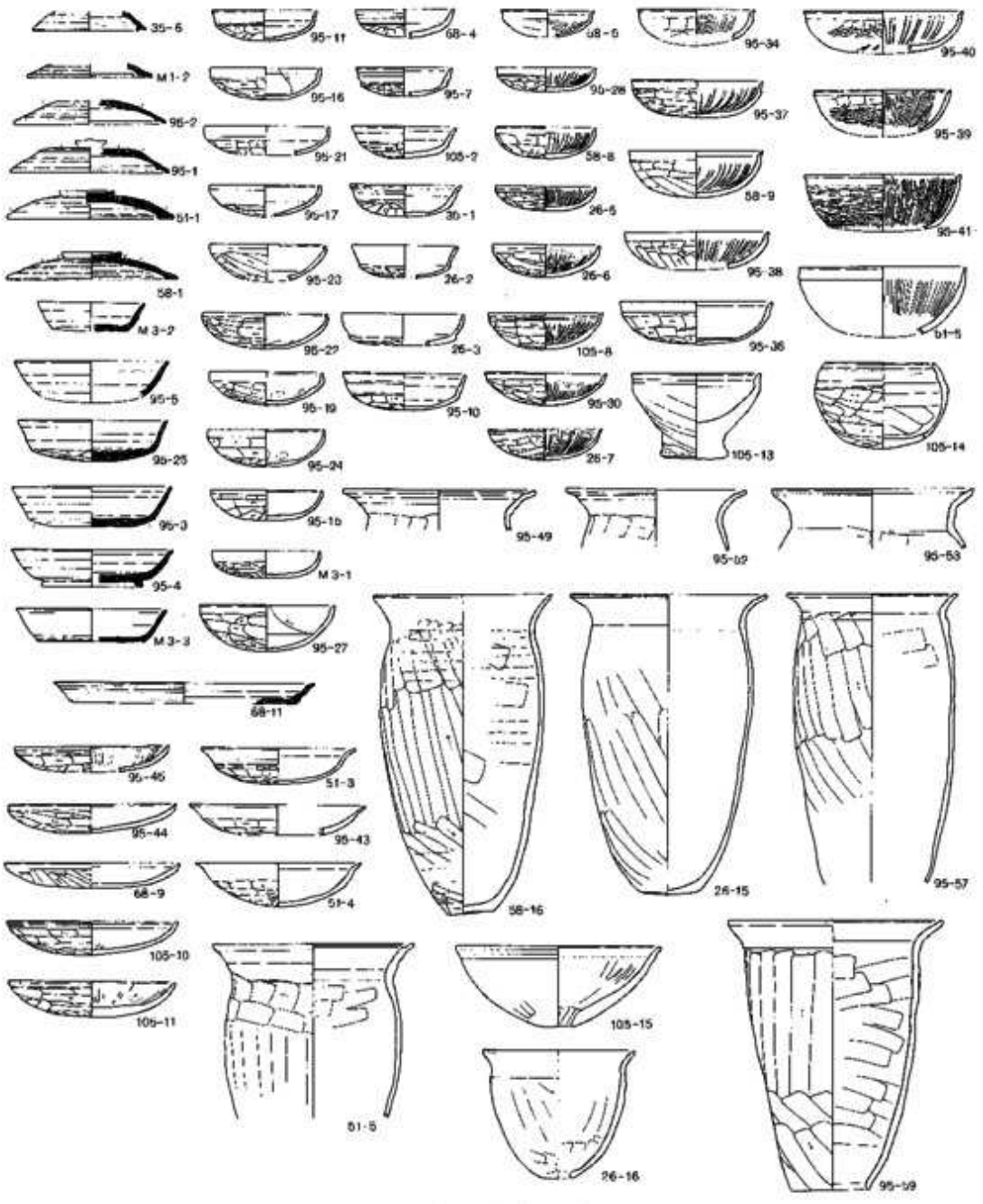
本期は居立遺跡第57・64・66号住居跡出土土器に代表される。出土土器には坏・甕・壺等が認められる。

坏は、有段口縁坏の系譜を引くものの他、本期から新たに口縁部端部が内屈するもの、底部からスムーズに立上がり、口縁部が弱く内側に屈曲した後さらに外反し、内面に放射状暗文が施されるもの、体部が僅かに内湾気味に立上がり口縁部は直立するもの等が見られる。口縁端部が内屈する

タイプは口径が10cm以下と小さい。甕は、胴部が長く、一部には外面口縁下を横方向のヘラケズリしたものが見られる。壺は、1点のみの出土で胴部は楕円形に近い。

第Ⅸ期（第392図）

本期は前遺跡第1・3号住居跡、居立遺跡第26・35・51・95号住居跡他の出土遺物に代表される。本期の特徴の一つとして須恵器の出土が多くなることがあげられる。須恵器には蓋・坏・高台坏・盤等が、土師器には坏・椀・皿・甕・甑等が認められる。



第392図　前・居立遺跡Ⅸ期の土器

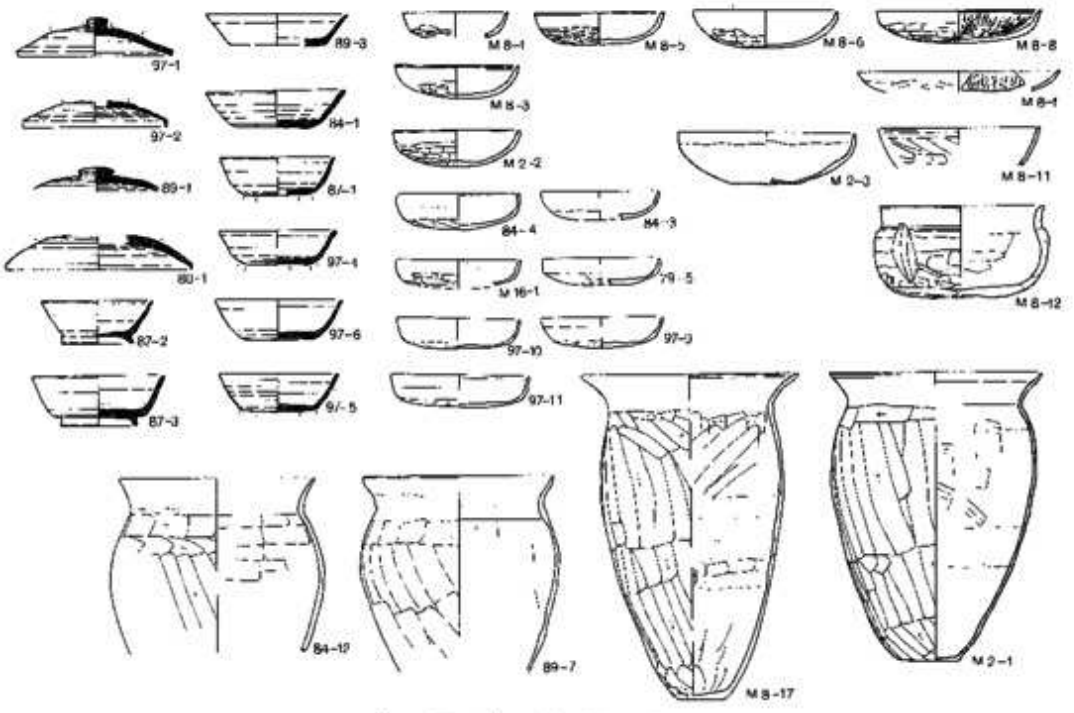
須恵器蓋は全てかえりを持ち、小形のものとやや大形のものの２種類が見られる。坏は蓋同様に２種類の大きさが見られ、高台坏には削りだし高台が１点見られる。

土師器坏は、模倣坏の系譜を引くもの、有段口縁坏の系譜を引くもの、第Ⅷ期に出現した３種類の坏の系譜を引くものが見られる。模倣坏や有段口縁坏の系譜を引くものは、何れも段が弱くなっている。口縁端部が内屈するタイプは屈曲の度合いが弱くなり、口径が大きくなってくる。放射状暗文の施されるタイプは器高が低くなり、やや大形のものが見られる。椀には底部から内湾しながら立上がり、口縁端部が短く外反するものが見られ、一部には外面をヘラケズリの後ヘラミガキがされているものもある。皿は、底部から大きく開き口縁端部が短く屈曲するものと口縁部が大きく開くものが見られ、前者は浅く、後者は深い傾向がある。口縁端部が屈曲するタイプには内面に放射状暗文が施されるものも見られる。甕は、口縁部の屈曲が強く、端部の内側に弱い凹みを持つものが見られる。また第Ⅷ期同様に外面を縦ヘラケズリのものと口縁下を横ヘラケズリされたものがある。大形甑は、胴部の膨らみが極めて弱く、小形甑には鉢型と小形甕型が見られる。

第Ⅹ期（第393図）

本期は前遺跡第２・８・16号住居跡、居立遺跡第79・84・89・97号住居跡他の出土遺物に代表されるが、時間的幅を大きく見たため同一期内での変化が大きい。出土土器には須恵器蓋・坏・高台坏、土師器坏・鉢・皿・甕等が認められる。

須恵器蓋にはかえりを持たず、小形と大形の２種類が見られる。坏は、底部から直線的に開くものとやや小振りで内湾気味に立上がるものが見られる。底部は回転糸切りの後周辺ヘラケズリがされている。高台坏は２点のみ出土しており、不明な点が多いが大きさは２種類あると思われる。



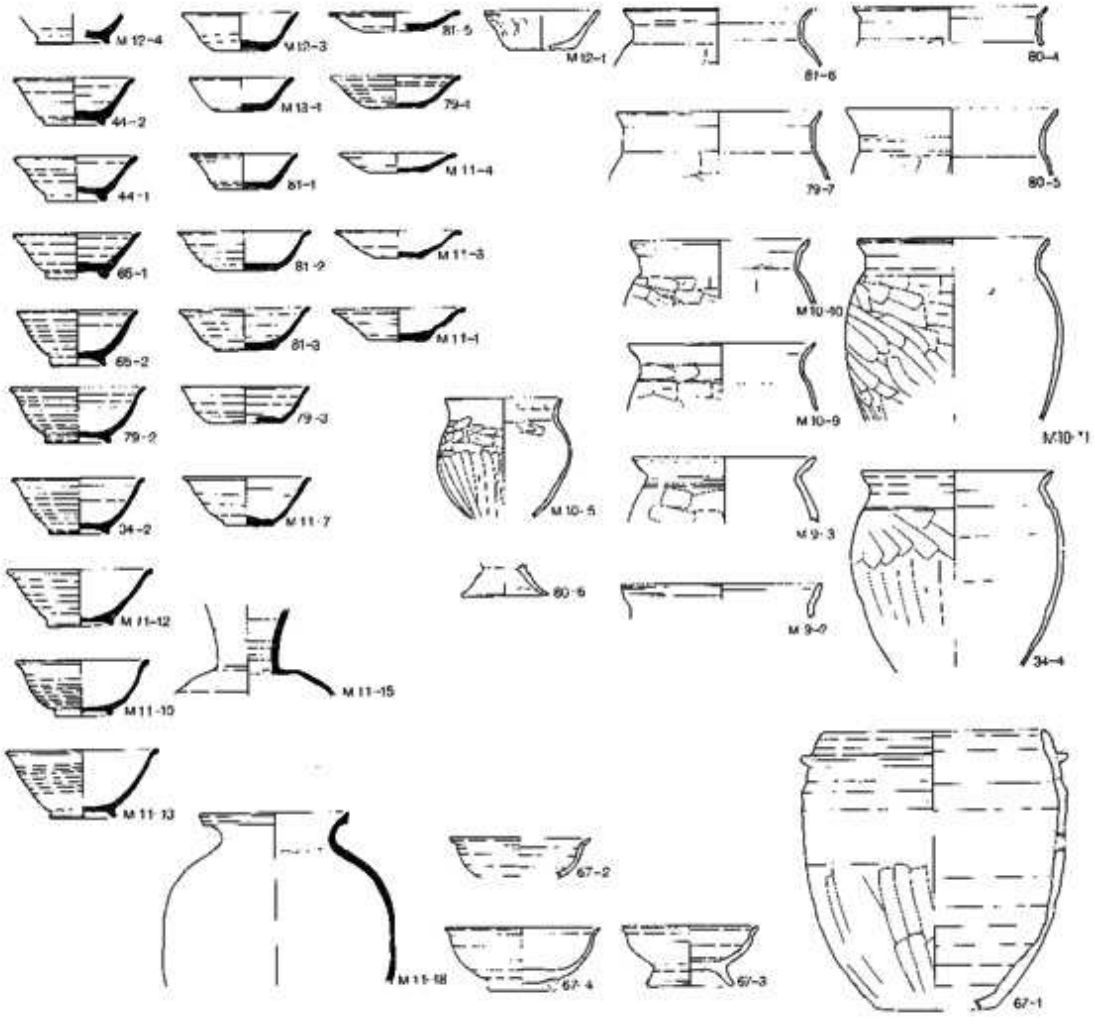
第393図　前・居立遺跡Ⅹ期の土器

土師器坏は、口縁部が直立するものが主体であり、底部が平底に近いものも見られるようになる。皿は1点のみの出土で詳細は不明だが、内面には放射状暗文が施されている。鉢は、体部が直線的に開くものと、平底から内湾して立上がり、口縁部が直立するもの2種類が見られる。甕は、口縁部が長く大きく開き、胴部の張りが弱く、外面は縦或いは横方向のヘラケズリがされたものから、胴部の肩の部分でやや張りだし、急激に窄まり底部に至る外面口縁部下を横ヘラケズリされるものまで含まれている。また、後者の甕には口縁端部が短く直立するものとそのまま開くものとが見られる。

第XI期（第394図）

本期は前遺跡第9～13号住居跡、居立遺跡第34・65・67・81号住居跡他の出土遺物に代表される。本期は第X期以上に時間的幅を多く見たため各器種にバラエティーが多く見られる。出土遺物には須恵器坏・高坏・皿・壺、土師器坏・甕・台付甕・高台椀・羽釜等が認められる。

須恵器坏は、口縁部が底部から直線的に開くものからやや内湾気味に開き端部が外反するものま



第394図　前・居立遺跡XI期の土器

で見られる。底部は全て糸切り離しに統一される。高台坏も坏同様であり、内湾や端部の外反の度合いが強くなり、高台椀と呼ぶべきものも多く見受けられる。底部は糸切り離しの後高台が貼り付けられている。皿は、前遺跡第11号住居跡から多く出土しており、口径は12.0から13.6cm、器高が2.1から3.3cmである。また、これらの器種の中には焼成の時点で還元化されず、体部の一部或いは全てが褐色又は橙色を示すものが現れる。

土師器の坏と呼べるものは前遺跡第12号住居跡からの１点だけである。口縁部は、平底から大きく開き外面に指押さえが見られる。甕はいわゆる「コ」の字甕が主体を占めるが、細部において差異が見られ、「コ」の字が崩れてしまったものもある。高台椀は、製作技法は須恵器のものであるが全て酸化焔焼成であり、口縁部は内湾し端部が短く外反する。高台が残っているのは１点だけだが高く大きく開く。辛うじて全体が判明する羽釜は１点だけで、胴部がやや膨らむようである。

出土土器のまとめ

以上が極めて大まかではあるが、前・居立遺跡から出土した第Ⅰ期から第ⅩⅠ期の土器の概要である。ここでは繰り返しとなるが各時期を分けた根拠を示し、その特徴としておきたい。

第Ⅰ期と第Ⅱ期は、それぞれの時期に該当する住居跡が１軒しか見当たらず、しかも第Ⅰ期の第107号住居跡の出土遺物の乏しさからは詳細は不明とした方が良いのかもしれない。しかし敢えて第Ⅱ期の第43号住居跡出土の坏の出現をもって分けてみた。坏の中にはいわゆる模倣坏と思われるものが含まれている。一方、第43号住居跡にはやや旧い要素を持つ土器が見られる点に疑問が残される。

第Ⅲ期には明らかに模倣坏が見られる。しかし量的にはまだ多くなく、体部と口縁部との境の段は明瞭なものとそうでないものとが見られる。甕は胴部が球形が主体であるが、同一住居跡の出土遺物の中でも胴部がやや長胴化するものも現れてきている。また、前２期においてもあったと考えられるが甑の出土が本期において確認された。

第Ⅳ期になると居立遺跡において住居跡の数が徐々に増すようで、遺物の出土量も増加する。この時期は圧倒的な量の模倣坏によって特徴づけられる。椀はほとんど見られなくなり、高坏は模倣坏に脚部を付けた形態が出現する。甕は長胴化が進むが、依然やや球形に近いものも残るようである。甑は小形の鉢型のものが見られてくる。

第Ⅴ期は甕の変化が最も顕著で、長胴化がより進み、ハケ調整は見られなくなる。模倣坏の器高がやや低くなり、口縁部が開き気味になるものが目立つようになる。また、やや大形のものや、口縁部が大きく開くなどのバリエーションが見られてくる。口縁部が内屈する須恵器坏身を模倣した坏は本期かどうかは疑問である。高坏は坏同様に口縁部が開くようになる。

第Ⅵ期は有段口縁坏の出現によって特徴づけられる。また、本期には須恵器坏身を模倣した坏が確実に見られ、高坏はいわゆる和泉期からの系譜のものは見られなくなる。甕はより長胴となり、最大径が口縁部へ移行するものも見られるようになる。土器の変化からすると本期と第Ⅴ期との間にはやや時間差があるのであろうか。

第Ⅶ期は有段口縁坏の段が緩やかになり、須恵器坏身模倣の坏の稜は鈍くなる。また、有段口縁坏は口径が小さくなり、11cm代が中心となる。甕は全てにおいて最大径が口縁部へ移っている。

第Ⅷ期の特徴は口縁端部が内屈する坏の出現である。同時に口縁部が内側に屈曲した後短く外反し、放射状暗文がつけられたものや、甕の外面口縁部下を横方向のヘラケズリするものも見られる。なお、本期に該当する住居跡は極めて少数と思われる。

第Ⅸ期は前遺跡においても住居跡が見られ、居立遺跡では再び住居跡が増してくる。出土土器では須恵器の出土が顕著となってくる。須恵器は末野産や群馬産と思われるものが見られ、削りだし高台が1点出土している。土師器には皿が出現している。坏は模倣坏や有段口縁坏の系譜を引くものは減少し、第Ⅷ期に見られるようになった坏が増してくる。

第Ⅹ期の須恵器には末野産、群馬産のほか、南比企産のものが見られるようになる。甕にはかえりは見られなくなっている。しかし、本期の中でも前遺跡第8号住居跡はやや旧い要素が見られるようである。

第XI期は須恵器の中に完全に還元化されないものが目立っている。また、本期は時間幅が大きいため出土土器の形態にも変化が大きい。特に甕の口縁部には顕著に現れている。居立遺跡第67号住居跡は、前・居立遺跡を通じて最も新しいと考えられる。なお、本期と第Ⅹ期との間にはかなりの時間差があると思われる。

年代的には各時期を明らかにする根拠を持たないが、第Ⅸ期に見られる須恵器高台坏の削りだし高台は、7世紀末から8世紀初頭に限定されている（酒井　1986）。また土師器は、出挙木簡が出土した小敷田遺跡第97号土壙と同様であり、やはり7世紀後半から8世紀初頭が与えられよう。

第Ⅹ期と第XI期との時間差だが、この時期は噴砂の時期にあたると考えられ、慎重に検討しなければいけないが、9世紀代とされた大地震による影響も考えなければならないだろう。

以上、前・居立遺跡出土の土器のついて記してみたが、土器に対しての認識不足を露呈する結果となってしまった。今後、周辺遺跡からの出土土器を含めた再検討の必要性を痛感した次第である。

引用・参考文献

飯持和夫　1993　『ウツギ内・砂田・柳町』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第126集

酒井清治　1986　「北武蔵における7･8世紀の須恵器の系譜について－立野遺跡の検討を通して－」『研究紀要』第8号

田中広明他　1992　『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集

富田和夫・赤熊浩一　1985　『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集

吉田　稔・宮瀧交二他　1991　『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集

富田和夫　1992　『稲荷前遺跡（A区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第120集

増田逸朗・立石盛司　1982　『後張』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集

増田逸朗・立石盛司　1983　『後張』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集

2　居立遺跡出土の鋏について

居立遺跡の第87号住居跡からは、鉄製の鋏が出土している。考古遺物としての鋏は少なく、集落遺跡からの出土は稀といってよい。管見の限りでは、埼玉県内では、神川町から上里町に立地する皂樹原・檜下遺跡にみられるのが唯一の例である（H—211号住居跡　篠崎1992）。ただし、この資料は片刃の部分的なものであり、居立遺跡のように、全体の形状がわかる鋏は県内で初めて出土したものと考えられる。

居立遺跡の鋏は、刃の元をまわして、バネの力を応用する構造である。刃は交差しているが、背を握ることによって使用する握り鋏の一種と考えられる。現在ではこうした構造の鋏を見ることはできない。日本における鋏の歴史の中で、編年学的にこの鋏がどのような位置を占めるのか、また、その用途はいかなるものであったのか、他の遺物や文献資料などから考えてみたい。

鋏は、その支点の位置によって３つに大別される（岡野1987）。さらに、元に支点をもつ鋏は、その構造からいくつかに分類することができる。

元支点式

Ｕ字式　共造りで、刃が相対するもの（第395図１）。

Ｕ字バネ式　共造りで、元が２重のバネになるもの（第395図２）。

８字式　共造りで、元が交差して８字形になるもの（第395図３）。

丸バネ式　共造りで、刃もしくは刃の根元で交差し、バネが丸くなるもの。関は刃側につく（第395図４）。

クロス式　共造りで、刃の部分で交差し、バネが扁円形となるもの。関は刃側が浅い両関のものと、背関のものとがある（第395図５）。

Ｖ字式　別造りで、２枚の刃を元で留めるもの（第395図６）。

中間支点式

Ｘ字式　別造りで、２枚の刃を交差させ、中間を留めるもの（第395図７・８）。

先支点式

逆Ｖ字式　別造りで、先端を留めるもの（第395図９）。

Ｕ字式の鋏は、茨城県土浦市烏山遺跡Ｂ地区１号壙穴（戸田　他1988）、東京都港区増上寺子院群埋葬施設ＡＭ61早稲（鈴木　他1988）、千葉県佐原市吉原三王遺跡501号土壙墓（栗田・石橋1990）、千葉県君津市外箕輪遺跡第53号溝（中能・笹生1994）、東京都日野市落川遺跡第116号住居跡（高林・福田1986）、長野県佐久市金井城跡Ｉ・Ｑピット20（小川　他1991）、新潟県三島郡和島村墳墓（石井1965）、大分県三光村佐知遺跡17号竪穴遺構（坂本1989）などに出土例がある。中世以降の墓の副葬品として出土することが多い。

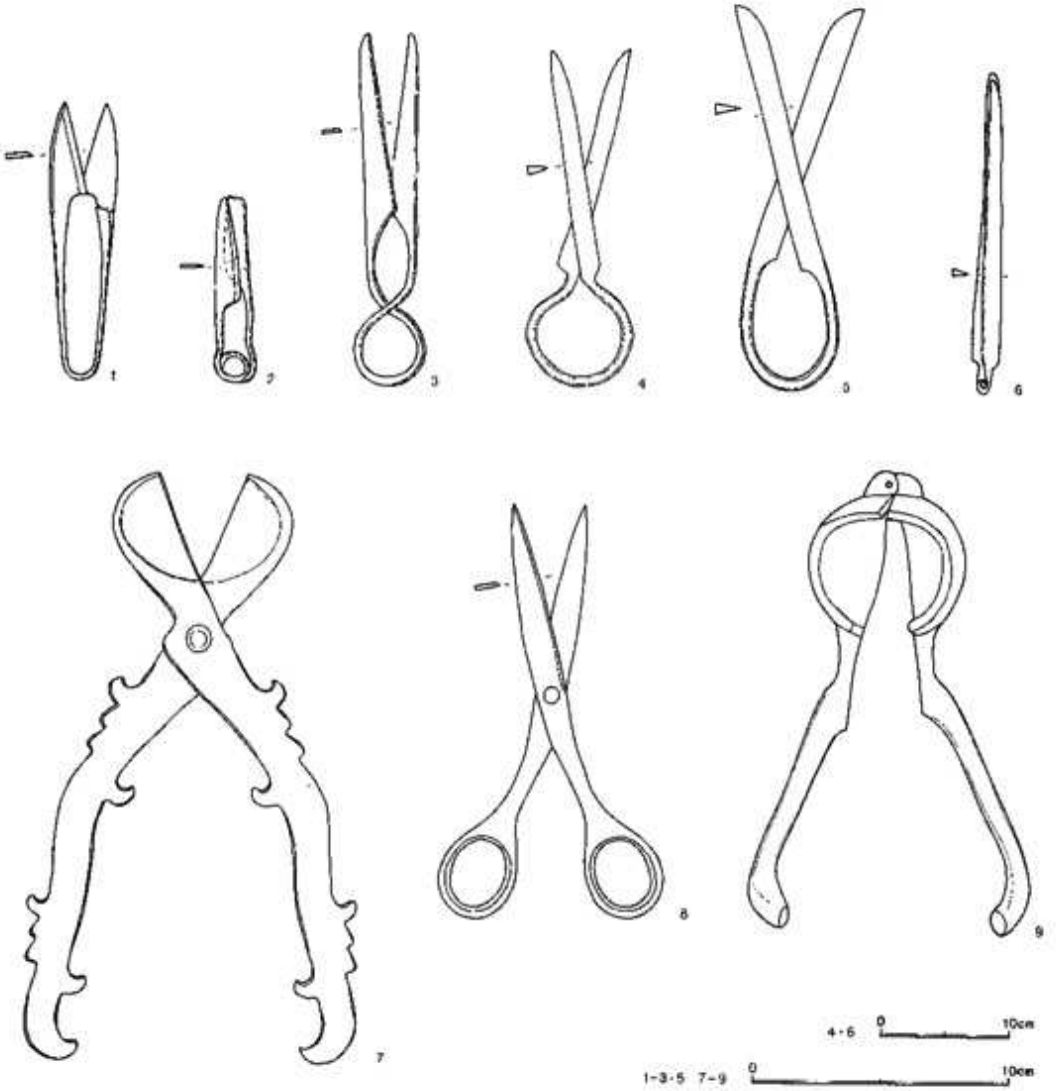
Ｕ字バネ式は、韓国慶州市の雁鴨池（674年築造）から出土した多くの鋏のなかに例がある（雁鴨池発掘調査団1993）。

８字式は、国内では、神奈川県平塚市山王Ｂ遺跡６号竪穴住居址（細野1987）から出土した鋏がある。ただし、環は非常に小さく、全体の形状はＵ字式に近い。中国では、漢から宋にいたるまで、

この型式の鋏が墳墓から出土している（岡本1979）。韓国では、慶州付近出土と伝える関西大学蔵の資料がこれにあたる（久野1973）。雁鴨池から出土した鋏は、ほとんどがこの型式に含まれている。

丸バネ式の鋏は、すべて古墳出土資料である。奈良県桜井市珠城山１号墳（伊達・小島1956）、奈良県橿原市新沢千塚272号墳（橿考研1981）、伝群馬県高崎市乗附町（東博1983）から出土している。破損した資料ではあるが、熊本県免田町才園古墳出土例（小田　他1993）もこれにあたると考えられる。韓国でも慶州金鈴塚（梅原1932）や梁山夫婦塚（馬場・小川1927）に出土例がある。

クロス式の鋏を出土した遺跡は、居立遺跡のほかにも、群馬県前橋市～群馬町鳥羽遺跡（Ⅰ区103号住居跡　唐澤　他1986）、群馬県吉井町神保富士塚遺跡（第166号住居跡　小野1993）などが



1　U字式（和鋏）　2　U字バネ式（雁鴨池）　3　8字式（雁鴨池）　4　丸バネ式（珠城山）
5　クロス式（居立）　6　V字式（金鳥塚）　7　X字式（正倉院）　8　X字式（事務鋏）
9　逆V字式（楊氏墓群）　（縮尺：４と６は1/6　他は1/3　復元図を含む）

第395図　鋏の型式

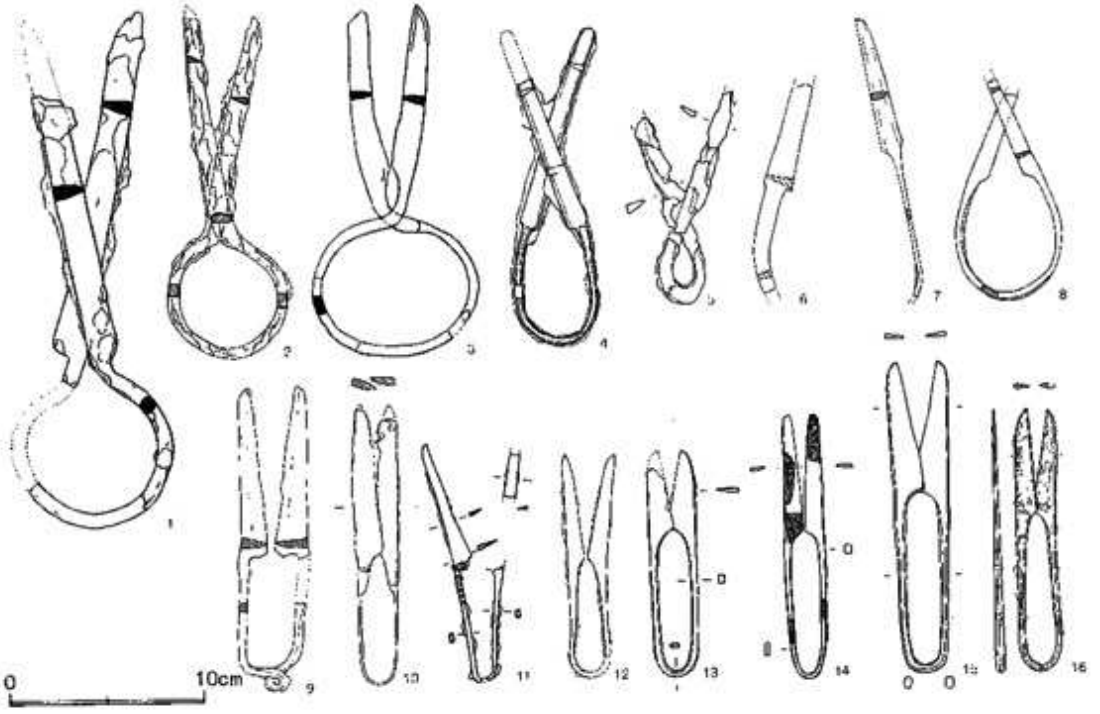
ある。神奈川県平塚市では、天神前遺跡第7地点6号竪穴住居址（明石1992）、高林寺遺跡第7地区14号竪穴住居址（小島・青地1988）、諏訪前A遺跡第2地区16号竪穴住居址（小島1989）と集中して出土している。古墳では慶州市の皇吾里4号墳（洪　他1964）に出土例がある。また、中国の六朝時代前半の墳墓からも1例出土している（岡本1979　原典未確認）。明器ではあるが、北周の李賢夫婦墓（569年没）から出土した銀製の鋏もこの型式である（寧夏回族自治区博物館・寧夏固原博物館1985）。

V字式の鋏は梁山金鳥塚（沈1991）の出土例が唯一のものである。

X字式は近代の遺物を除いて、出土例がない。特殊な例として、雁鴨池から出土した金銅製鋏と、正倉院の「金銅剪子」（正倉院事務所1976）がある。

逆V字式も特殊なものであり、前漢の楊氏墓群から出土した「銅製燭鋏」がある（陝西省文物管理委員会1961）。

東アジアでは、前漢の墓から発見された鋏（中国科学院考古研究所1959）が最も古いと考えられている。すなわち8字式の鋏である。岡本誠之氏によると、この8字式の鋏は、すでにギリシャで紀元前1000年頃に誕生していたU字式の鋏から進化したものであり、鉄の鍛造技術が未熟なため折れてしまうU字式の欠点を補い、バネの力を増大させるために、8字式の鋏が工夫されたという。さらに、弾力のある鉄をつくる技術が発達するにつれ、環の部分が消滅し、U字式の鋏へ進化したと推測されている（岡本1979）。このように、8字式からU字式へという鋏の型式学的変化は、大



1　珠城山1号墳　2　新沢千塚272号墳　3　金鈴塚　4　鳥羽遺跡　5　神保富士塚遺跡
6　諏訪前A遺跡　7　高林寺遺跡　8　天神前遺跡　9　山王B遺跡　10　落川遺跡
11　佐知遺跡　12　鳥山遺跡　13　外箕輪遺跡　14　吉原三王遺跡　15　金井城跡　16　増上寺子院群

第396図　鋏の出土例

きな流れとしてとらえられる。山王B遺跡出土例は、環がなくなる寸前の8字式鋏ということができる。バネU字式もその過渡期の型式として位置づけられよう。

丸バネ式は、関が8字式と同様に刃側につくことから、8字式から派生したと考えてよいだろう。クロス式のなかでもは背関のものは、流れるようなプロポーションをもつ。これを道具の完成された形としてとらえるならば、8字式→丸バネ式→クロス式（両関）→クロス式（背関）という変化が指摘できる。V字式はバネを応用しておらず、鋏としては特異例であろう。X字式及び逆V字式の鋏は燭台用の芯切り鋏ということが判明しており、用途に応じた鋏のバリエーションを示す一例といえる。

日本で最も古い鋏は丸バネ式のもので、古墳の副葬品として出現する。その時期は、共伴する遺物の年代観などから、6世紀中頃から後半と考えられる。韓国における出土例から、丸バネ式の鋏そのものの起源は5世紀後半に遡るであろう。クロス式の鋏は、日本では鳥羽遺跡における共伴土器の示す時期、すなわち8世紀後半頃にはすでに使われていたが、その起源はおそらく中国の六朝時代（220－589年）にあると考えられる。その後9世紀代から10世紀前半にかけてが、日本におけるクロス式の鋏の盛行年代と推定される。

8字式からU字式への移行は、雁鴨池の最盛期であった7世紀後半から9世紀頃までは、8字式の鋏が主流であったと考えられるから、それ以降のことと考えられる。その移行時期は明確におさえられないが、過渡期の鋏が出土した山王B遺跡における共伴土器の示す時期は、10世紀中葉と考えられている。日本国内におけるU字式の鋏の出土遺跡は、現在のところ、平安時代後半を遡るものはないので、少なくともその頃にはU字式の鋏がクロス式になりかわり、広く用いられるようになったと考えられる。

X字式の鋏は、燭台の芯切り鋏として唐から輸入されたものが初見といえる。芯切り鋏は後漢の時代には、逆V字式が用いられていたので、ある時期に先支点（逆V字式）から中間支点（X字式）のものに移行したのであろう。X字式の鋏は、当初から専用の特殊な鋏であったためか、その後の日本では一般化せず、明治以降の西洋鋏の普及を待たなければならなかった。

930年代に成立した『倭名類聚抄』では、鍛冶具と容飾具の項に「鉸刀」（波佐美）とあり、裁縫具には「剪刀」（毛能多知加太奈）と記載されている。裁縫用に使われるのは「ものたちかたな」すなわち刀子であって、鋏が使用されることはなかったようである。その理由を岡本氏は、当時の日本の服装が、直線の綜合になっているため、直線裁ちの場合には、小刀のような刃物のほうがはるかに重宝されていたと述べておられる（岡本1979）。このことは、X字式の鋏が普及しなかった理由としても考えることができる。鍛冶具としての「鉸刀」は、今いう「鉗」（かなはし）を指すと考えられるため、おのずから、平安時代において鋏は化粧道具であったことがわかる。具体的にはおもに髪などを切るために用いられていたと考えられる。

この利用法は、それ以前の鋏にもあてはめることができるだろうか。慶州金鈴塚では鋏は遺体の頭部上方付近から、梁山夫婦塚では婦人の肩付近から発見されている。こうした古墳からの出土状況をみると、容飾具とは断定できないが、少なくとも故人が身近に用いていた品であった可能性は高いと考えられる。

容飾具とはいっても、古代においては、庶民に必要な一般的な道具ではなく、貴族などの為政者によって愛用された品であったと考えられる。このことは、出土鋏そのものの稀少性や、出土した集落遺跡の内容をみても頷けるところである。平塚市の山王B・高林寺・諏訪前A・天神前遺跡は、四之宮下郷地区の平塚砂丘上に位置する相模国府の関連遺跡であり、鳥羽遺跡は、8世紀から9世紀にかけて上野国府付属の工房であった可能性が考えられている。さらに、鋏の一部が出土した長野県塩尻市吉田川西遺跡は、8世紀から12世紀前半を中心とした大集落遺跡で、9世紀後半にかけては官衙との結びつきが強い有力者が居住していたと考えられている（原　他1989）。落川遺跡や巳樹原・檜下遺跡もまた、その地域を代表する大規模遺跡といえよう。

居立遺跡も決して小さな集落遺跡ではないが、他の出土遺物からも官衙との関連性は薄いと言わざるを得ない。しかし、こうした状況を踏まえると、居立遺跡にも当時の有力者となんらかの結びつきを持った人間が居住していた可能性を、この出土した鋏は物語っているのではないだろうか。

（瀧瀬芳之）

引用・参考文献

明石　新　1992　『天神前遺跡―第7地点―』平塚市埋蔵文化財調査報告書第9集　平塚市教育委員会

石井昌国　1965　『蕨手刀　日本刀の始源に関する一考察』　雄山閣

梅原末治　1932　『慶州金鈴塚飾履塚発掘調査報告』大正十三年古蹟調査報告第一冊　朝鮮総督府

岡本誠之　1979　『鋏（はさみ）』ものと人間の文化史33　法政大学出版局

岡野和子　1987　「鋏」『日本大百科全書』　小学館

小川岳夫他　1991　『金井城跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書第1集　佐久市教育委員会

小田富士雄他　1993　『終末期古墳の世界―高松塚とその時代―』　北九州市立考古博物館

小野和之　1993　『神保富士塚遺跡』関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第18集　群馬県教育委員会　他

橿原考古学研究所　1981　『新沢千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第39冊　奈良県教育委員会

雁鴨池発掘調査団　1993　『雁鴨池発掘調査報告書』　学生社

唐澤至朗他　1986　『鳥羽遺跡　G・H・I区』関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第11集　群馬県教育委員会　他

京都大学文学部国語学国文学研究室編　1968　『諸本集成　倭名類聚抄』　臨川書店

久野邦雄　1973　「鋏」『考古学資料図鑑』　関西大学文学部

栗田則久・石橋宏克　1990　『佐原市吉原三王遺跡』千葉県文化財センター調査報告第178集

洪　思俊他　1964　『皇吾里4・5号墳　皇吾里破壊古墳発掘調査報告』国立博物館古蹟調査報告第5冊

小島弘義1989『諏訪前A遺跡第2地区』平塚市埋蔵文化財調査報告書第6集　平塚市教育委員会

小島弘義・青地俊朗　1988　『諏訪前B・高林寺』平塚市埋蔵文化財シリーズ6　平塚市教育委員会　他

坂本嘉弘　1989　『佐知遺跡』大分県文化財調査報告書第81輯　大分県教育委員会

篠崎　潔　1992　『巳樹原・檜下遺跡Ⅳ　奈良・平安時代編3』巳樹原・檜下遺跡調査会報告書第4集

正倉院事務所　1976　『正倉院の金工』　日本経済新聞社
鈴木公雄他　1988　『増上寺子院群　光学院・貞松院跡　源興院跡』　港区教育委員会
陝西省文物管理委員会　1961　「潼関吊橋漢代楊氏墓群発掘簡記」『文物』1961年第1期　文物出版社
孫机　1991　『漢代物質文化資料図説』　文物出版社
高林　均・福田健司　1986　『日野市落川遺跡調査概報』Ⅳ　日野市落川遺跡調査会
伊達宗泰・小島俊次　1956　『大和國磯部郡大三輪町穴師　珠城山古墳』　奈良県教育委員会
中国科学院考古研究所　1959　『洛陽焼溝漢墓』　科学出版社
沈奉謹　1991　『梁山金鳥塚・大婦塚』古蹟調査報告第19冊　東亞大學校博物館
東京国立博物館　1983　『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇（関東Ⅱ）
戸田有二他　1988　『烏山遺跡』　土浦市教育委員会
中能　隆・笹生　衛　1994　『外箕輪遺跡発掘調査報告書』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第98集
寧夏回族自治区博物館・寧夏固原博物館　1985　「寧夏固原北周李賢夫婦墓発掘簡報」『文物』1985年第11期　文物出版社
原　明芳他　1989　『吉田川西遺跡』中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3―塩尻市内その2―　長野県教育委員会　他
馬場是一郎・小川敬吉　1927『梁山夫婦塚と其遺物』古蹟調査特別報告第五冊　朝鮮総督府
細野高伯　1987　『四之宮山王B遺跡』平塚市埋蔵文化財シリーズ4　平塚市教育委員会　他

3　前・居立遺跡出土の土錘について

前・居立遺跡の土錘は346点あり、12点を除く334点は居立から出土している。土錘が出土したのは、住居跡・溝跡・井戸跡・周溝状遺構・表採・グリッド等で住居跡からの出土が267点と最も多かった。完形品だけではないが、91点を抜粋し並べてみた。

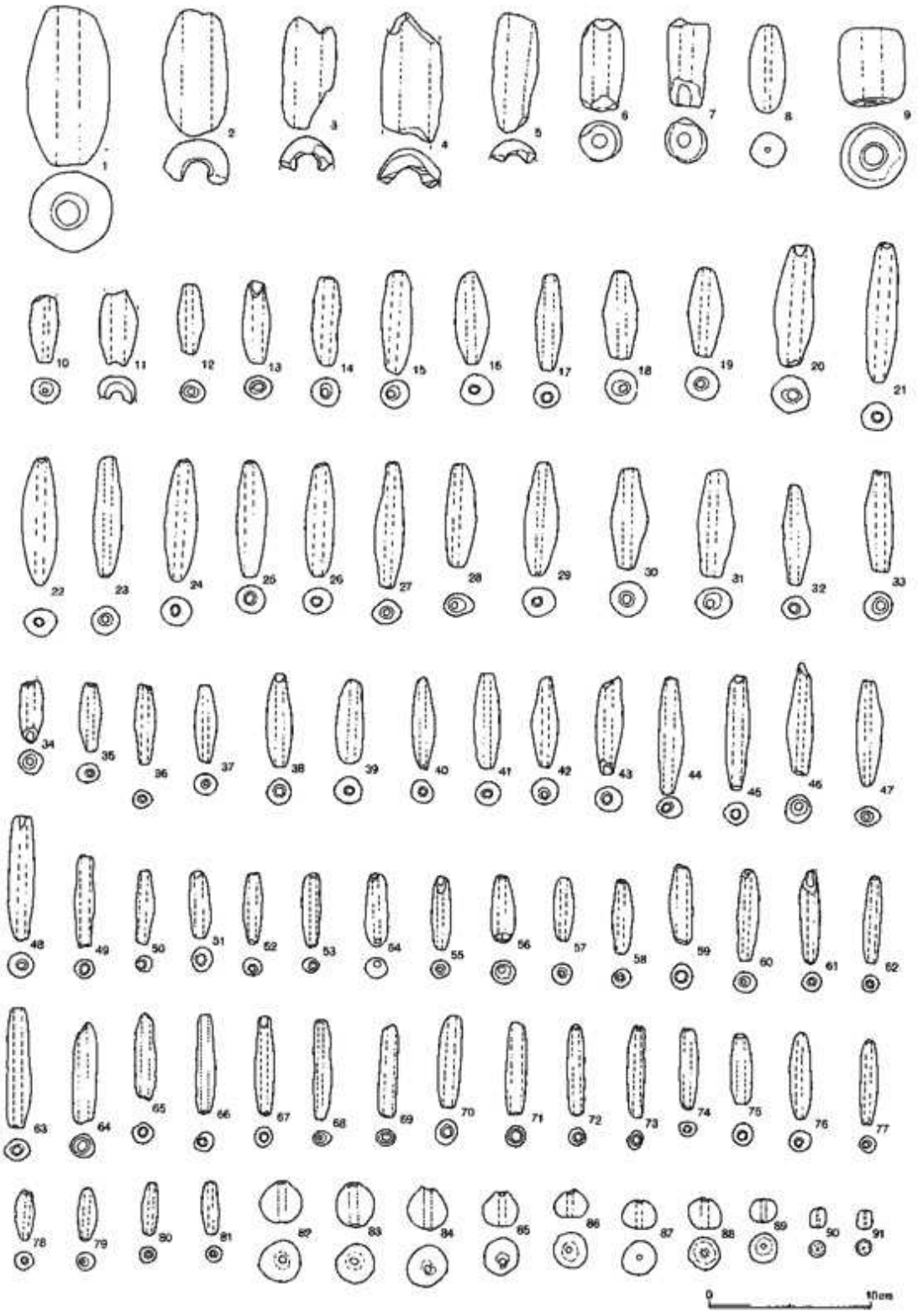
形態による分類では、A類を球状、B類を円筒状、C類を管状としたいと思う。残存率が低く重量では分類できないものもあるが、出土した土錘のほとんどが管状土錘であり、土錘の使用目的を考慮して以下のように重量で分類した。

1、10g以下　2、10―40g　3、40～90g　4、200g以上

A類（第397図-82～91）の球状土錘は、33点出土しており、全体の9.5％である。A類で小さいのは、長さ×幅が0.75cm×0.9cm、重さ0.57g、大きいのは、長さ×幅が3.1cm×4.1cm、重さ25.52gと幅があり、長さ1.5cm～2.5cm、重さ0.5～1.0g、A1類の出土が比較的多い。

B類は、グリッド出土の1点だけで側面が長方形を呈している。全長が4.81cmと短いわりに重さは83.77gと他の土錘に比べ重くなっている。

C類は側面の長方形の中央が膨らむものと、側面の両端が窄まるものの2種類に分けられる。管状土錘で特に大きいのは、長さ9.85cm、最大径5.05cm、重さ212.22gであり、大型土錘の多くは溝跡から出土している。大型のためか破損が著しく完形品は1点だけである。また、特に小さいのは、



第397図　前・居立遺跡出土土錘

No	分類	出土遺構	長さ	最大径	重さ	No	分類	出土遺構	長さ	最大径	重さ
1	C4	SJ106-12	9.85	5.05	212.12	33	C2	グリッド 4	6.20	1.70	16.09
2	C3	SD- 1	7.80	4.00	58.29	34	C1	グリッド48	4.20	0.95	3.65
3	C	SD- 2	6.70	3.35	29.92	35	C1	SJ68-22	4.30	1.35	5.64
4	C	SD- 3	7.90	3.90	46.64	36	C1	グリッド20	5.05	1.25	5.68
5	C	SD- 4	7.30	2.90	20.04	37	C1	SJ51- 8	4.75	1.40	6.96
6	C2	SJ64 -12	5.65	2.70	36.20	38	C2	SJ80-10	5.80	1.60	13.60
7	C2	SJ84 -17	5.40	2.70	33.14	39	C2	SJ91-13	5.20	1.70	15.53
8	C2	グリッド55	5.40	2.20	22.75	40	C1	SJ95-74	5.60	1.40	9.52
9	B3	グリッド56	4.81	4.00	83.77	41	C2	SJ58-34	5.85	1.60	14.55
10	C2	グリッド 7	4.25	1.80	9.66	42	C2	SJ95-70	5.50	1.60	11.97
11	C	グリッド 6	4.75	2.30	12.65	43	C2	SJ68-14	6.05	1.70	13.44
12	C1	グリッド23	4.40	1.50	7.23	44	C2	SJ65·66	7.25	1.60	13.11
13	C2	SJ73-21	5.05	1.71	11.83	45	C2	SJ59-36	7.05	1.50	10.36
14	C2	SJ101-14	5.55	5.55	14.55	46	C2	SE- 9	6.90	0.17	15.15
15	C2	SJ99-16	6.30	1.80	18.57	47	C2	SD- 7	6.50	1.65	12.24
16	C2	SJ95-67	5.50	2.00	21.11	48	C2	グリッド 2	7.85	1.60	18.63
17	C2	SJ65·66	5.95	1.60	13.35	49	C1	SJ69-14	5.70	1.20	6.18
18	C2	SJ58-36	5.40	2.01	20.64	50	C1	SJ57-18	4.55	1.05	4.16
19	C2	SJ58-35	5.40	2.10	20.02	51	C1	SJ59-44	4.15	1.30	6.37
20	C2	グリッド 1	7.55	2.40	33.14	52	C1	SJ60-12	4.45	1.15	4.20
21	C2	SJ108-44	8.60	1.90	23.51	53	C1	SJ95-78	4.55	1.10	4.16
22	C2	SJ108-46	7.85	2.00	24.40	54	C1	SJ68-21	4.45	1.35	7.77
23	C2	SJ109-19	7.55	1.75	19.90	55	C1	SJ95-80	4.50	1.20	6.07
24	C2	SJ108-49	7.50	1.90	20.84	56	C1	グリッド28	4.20	1.50	8.68
25	C2	SJ108-52	7.10	1.80	18.67	57	C1	グリッド27	4.05	1.30	6.04
26	C2	SJ108-54	6.95	1.80	17.04	58	C1	グリッド11	4.65	1.20	5.64
27	C2	グリッド 3	7.80	1.75	18.85	59	C1	グリッド19	5.00	1.50	9.35
28	C2	グリッド 5	6.45	1.90	17.67	60	C1	SJ57-16	5.60	1.40	7.28
29	C2	SJ58-28	6.85	2.05	24.74	61	C1	グリッド33	5.75	1.20	5.82
30	C2	SJ57-14	6.20	2.25	26.11	62	C1	SJ79-13	5.30	1.10	5.38
31	C2	SJ58-30	6.60	2.15	25.66	63	C2	SJ59-35	7.35	1.55	13.81
32	C2	SJ95-68	6.25	.1.75	12.13	64	C2	SJ112-16	6.15	1.45	12.36

No	分類	出土遺構	長さ	最大径	重さ	No	分類	出土遺構	長さ	最大径	重さ
65	C1	SJ109-21	5.45	1.35	7.14	79	C1	SJ65・66	3.25	1.15	3.76
66	C1	SJ75・76	6.15	1.20	7.86	80	C1	SJ80-12	3.20	1.00	3.14
67	C1	SJ57-15	6.10	1.15	6.57	81	C1	SJ73-22	3.25	1.00	3.43
68	C1	SJ95-71	6.20	1.15	5.83	82	A2	SJ12-20	2.60	2.60	16.03
69	C1	SJ58-37	5.60	1.20	6.18	83	A2	SJ12-21	2.70	2.40	13.76
70	C2	SJ55-13	6.80	1.40	11.14	84	A2	SJ12-22	2.70	2.50	14.40
71	C1	SJ59-37	5.75	1.20	7.68	85	A1	SJ 3-38	2.20	2.20	9.37
72	C1	SJ68-15	5.70	1.10	6.01	86	A1	SJ 3-40	1.60	2.10	6.49
73	C1	SJ64-13	5.75	1.00	6.08	87	A1	SJ58-46	1.70	2.10	6.72
74	C1	SJ57-17	5.00	1.10	4.49	88	A1	SJ14-98	1.90	2.00	6.84
75	C1	SJ109-23	4.40	1.35	6.33	89	A1	SJ25-48	1.40	1.70	4.22
76	C1	SJ22- 3	5.30	1.35	8.95	90	A1	SJ23-27	1.20	1.00	1.41
77	C1	SJ79-14	5.15	1.10	5.38	91	A1	SJ23-28	1.15	0.95	1.32
78	C1	SJ65・66	3.10	1.20	3.63						

遺跡名	形	遺構	長さ	最大径	重さ	遺跡名	形	遺構	長さ	最大径	重さ
砂田前	C	SK01	10.30	4.80	220.12	荒川附	C	SJ01	8.30	3.70	116.00
砂田前	C	SJ71	8.50	3.70	104.61	見田方	B	不明	10.00	3.90	不明
砂田前	C	SJ82	8.10	3.40	92.37	下 梅	C	SJ06	8.40	5.10	238.00
砂田前	C	SJ73	8.30	3.30	90.75	砂 田	B	SJ03	8.10	3.50	118.50
砂田前	C	SJ73	8.20	3.20	88.15	砂 田	B	SJ05	6.80	3.20	112.24
砂田前	C	SJ85	7.60	3.50	86.08	砂 田	B	SJ07	6.50	3.50	99.86
砂田前	C	SJ74	7.80	3.40	84.54	砂 田	C	SE06	7.60	3.40	87.50
砂田前	C	SJ74	8.10	3.50	83.69	村 後	C	グリッド	7.10	3.90	不明
砂田前	C	SJ74	8.10	3.30	83.60						

単位：長さ・最大径はcm、重さはg

長さ1.15cm、最大径0.95cm、重さ1.32gであり、側面の僅かな膨らみのため長方形に近く円筒状土錘の側面とよく似ている。(第397図-91)

居立遺跡では、A類、C類、共に大小の土錘が出土しており、C類が全体の90%占めている。C類でもC2類が38点とC1類に比べやや多い。

古墳時代の特徴的形態は、側面形が長方形のもの(田部井1991)で、居立遺跡出土のなかではB類にあたり、B3類(第397図-9)の83.77gとC4類(第397図-1)の212.22gの2点が特に重いものである。居立遺跡から出土したB類を基準とし、長さ4.5cm、重さ80g以上の土錘を埼玉県内に絞

り挙げてみたい。時期は出土遺構により確定出来ないものを除いてほぼ同時期で古墳時代に限った。

居立遺跡は、城北川と福川旧流路に挟まれた自然堤防上にあり、西を除く3方向を河川に囲まれている。居立遺跡からは334点の土錘が出土しているが、同じような立地条件の柳町遺跡では105点、砂田遺跡では137点と居立遺跡程多くないことがわかる。居立遺跡の土錘の出土傾向は前述したようにC類が多く、10g以下または10～40gの比較的小型が中心で大型土錘は僅かである。大野氏（1991）によるとC類の管状土錘は、1g未満～700g以上と幅広く、重さの調節が可能なため、万能な沈子として使われたという。

東京東部低地の場合、弥生時代後期から古墳時代後期にかけて管状土錘を使った網漁が行われており、古墳時代後期には盛行期を向かえている。しかし、新宿町遺跡の調査では、古墳時代後期には大型管状土錘は姿を消していくことがわかった。谷口氏の分類をみても明らかで、奈良時代以降は大きくても長さ5.0cm、重さ20～50gと、小型の管状土錘が主流となる。つまり、大型管状土錘を使う集団的漁法から小型管状土錘を使う個人単位の投網に変化したということである。同じような事例が東京湾岸の千葉県内の遺跡でも認められている。このような漁労形態の変化の背景には、稲作技術の発達が考えられる。古墳時代後期から奈良時代は律令国家形成期であり、それに伴う稲作技術の変化があったのではないだろうか。

群馬県黒井峰遺跡では集落施設の脂肪酸分析により、牛が飼育されていた可能性がでてきた。また、多数の家畜小屋も発見された。家畜小屋の総数からみても牛だけと決められないが、古墳時代後期にも大型家畜を保有していたことが明らかになった。

埼玉県内においては、小敷田遺跡（行田市・熊谷市）で古墳時代以降と思われる水田跡が発見されている。滝下遺跡（岡部町）でも水田跡が確認されているが、時代は不明である。奈良・平安時代になるが、光山遺跡群（川越市・日高市）では、轡や馬に関る施設と想定できる遺構が検出され、墨書土器からも馬の存在を確認することができる。また、今井条里遺跡（本庄市）では、古墳時代の水田と用水路が検出されているが、その上層には平安終末期の水田跡が確認されているため、詳細は不明である。平安終末期の水田跡には当時の人馬の足跡が残り、ここでも大型家畜の保有が認められる。律令国家の形成が稲作技術にどういう形で影響を及ぼしたかわからないが、大型家畜が生産力を高めたのは確かである。大型家畜の稲作技術への導入が、集団的漁法から個人単位の投網へと変化していった大きな要因の一つといえるのではないだろうか。（中島令子）

参考文献

井上尚明　1994　『光山遺跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第127集

岩瀬　譲　1991　『樋詰・砂田前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第102集

大野左千夫　1991　「漁労」『古墳時代の研究4　生産と流通1』

鈴持和夫　1993　『ウツギ内・砂田・柳町』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第126集

谷口　榮　1991　『竹橋門』東京国立近代美術館遺跡調査委員会

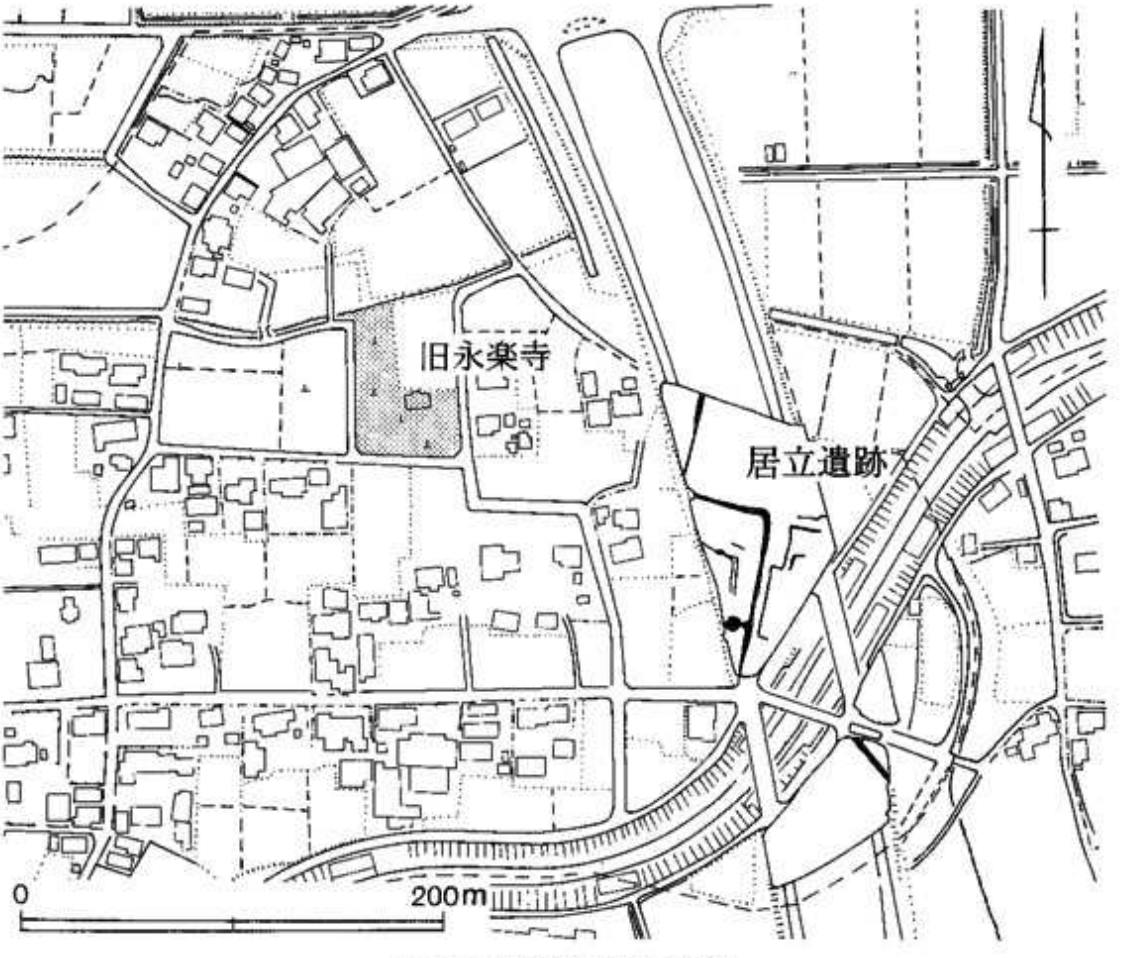
谷口　榮他　1993　『新宿町遺跡Ⅰ』葛飾区郷土と天文の博物館考古学調査報告書第3集

田部井功　1987　「荒川流域の土錘・石錘」『荒川　人文Ⅱ』埼玉県

宮田和夫他　1984　『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集
中村嘉男他　1984　『見田方遺跡発掘調査報告書』越谷市教育委員会
福田　聖　1993　「鍛冶谷・新田口遺跡の漁具」『戸田市郷土博物館研究紀要』第8号
町田　信　1981　『的場・八幡・荒川附遺跡』蕨市教育委員会
村田章人　1993　『原ケ谷戸・滝下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第127集
山田昌久　1991　「稲作技術」『古墳時代の研究4　生産と流通Ⅰ』
横川好富　1982　『下椿』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第18集
吉田　稔　1991　『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1994　今井川越田・今井条里遺跡遺跡説明会資料

4　居立遺跡の近世の溝と土壙について

居立遺跡では近世前半の陶磁器類や焙烙を出土した溝跡・土壙が検出されている。以下、既述したことの繰り返しになるがこれらについて簡単にまとめておきたい。なお、近世の所産と考えてい



第398図　近世遺構と周辺の地形

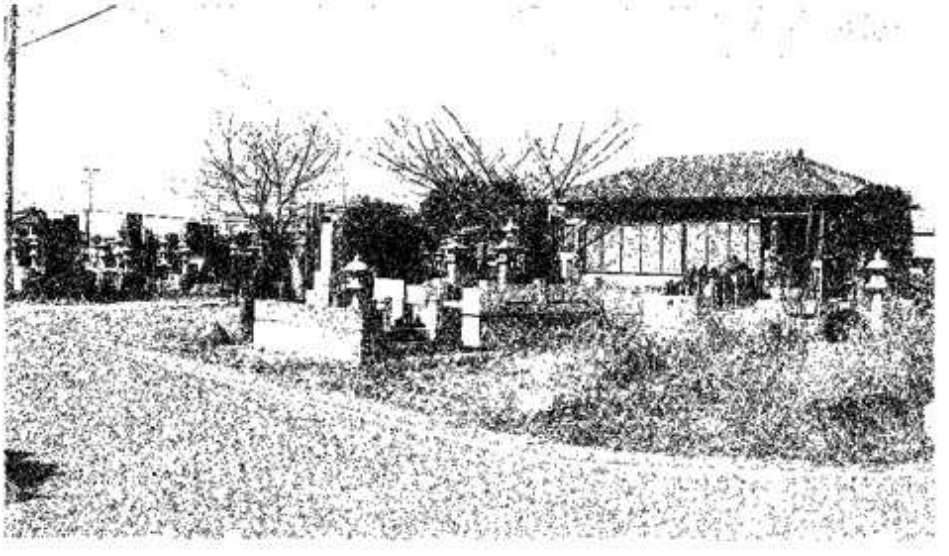
る遺構は、第３・７～10号・12～16号の10条の溝跡と第13・14号土壙である。

２基の土壙はそれぞれ近世の溝跡と重複しており、新旧関係はいずれも不明だが、出土遺物は溝跡のものとほぼ同時期と考えられる。遺物は概ね17世紀後半（註１）のもので、陶磁器類では瀬戸・美濃、唐津、伊万里、丹波等が認められ、他は、在地産と思われる多量の焙烙や火鉢などが見られる。

10条の溝跡のうち、第３号溝跡だけは方向が異なるが、他の溝跡はほぼ同一方向に走り、第７号溝跡を中心にして直角に曲がるものが多く見られる。第７号溝跡は検出された溝跡の中では最大の規模で、調査区外で第16号溝跡と繋がると考えられる。そして第７号溝跡を西に約150ｍ延長した所が永樂寺跡である。現在、永樂寺は寺院の姿は留めていないが、新編武蔵風土記稿によると寛永19年（1642）の起立とされている。

永樂寺と居立遺跡で検出された溝跡は、その位置や溝跡の出土遺物から密接な関わりを持っていたと思われ、近世を考える上で重要な位置を占めるものではないか。今後、周辺の調査を待って再考する必要が有る。

（註１）出土遺物に関しては、豊島区遺跡調査会　鈴木裕子氏に御指導いただいた。しかし、多くの御教示を頂いたにもかかわらず、それを生かし切れなかった。お礼と共にお詫びしたい。



旧永樂寺の現状

附篇

居立遺跡出土土器胎土分析鑑定報告

(株) 第四紀 地質研究所　井上　巌

X線回折試験及び電子顕微鏡観察

1　実験条件

1－1　試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示す通りである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、φ10m/m の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1－2　X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX－8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target : Cu, Filter : Ni, Voltage : 40KV, Current : 30mA, ステップ角度：0.02°

計数時間：0.5SEC。

1－3　電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製5300LV 型電子顕微鏡を用い、倍率は35、350、750、1500、5000の5段階で行い、写真を撮影した。

35～350倍は胎土の組織、750～5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

2　実験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示す通りである。

第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト（Mullite)、クリストバーライト（Cristobalite）等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2－1　組成分類

1）Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム

第１表胎土性状表

試料	タイプ	焼成	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物															
No	分類	ランク	Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au	ガラス	備考
居立-1	H	Ⅲ	7	9		106	105	142		3687	486	130								土師器坏、SJ3-1
居立-2	C	Ⅲ	1	16	179	130	94			3334	351	120								土師器坏、SJ3-6
居立-3	H	Ⅲ	7	9		104	64	117		3232	556	146								土師器坏、SJ3-2
居立-4	C	Ⅲ	1	16	167	141	86			3030	473	158								土師器坏、SJ3-7
居立-5	H	Ⅲ	7	9		106	76	174		2734	545	155								土師器坏、SJ3-3
居立-6	I	Ⅲ	7	20		119	89			3045	310	130								土師器坏、SJ3-5
居立-7	H	Ⅲ	7	9		143	89	153		3009	383									土師器坏、SJ3-4
居立-8	E	Ⅲ	5	20			89			4431	499									土師器坏、SJ3-9
居立-9	I	Ⅲ	7	20		104	82			3932	738									土師器坏、SJ3-11
居立-10	I	Ⅲ	7	20		90	67			3404	377	192								土師器坏、SJ3-10
居立-11	H	Ⅲ	7	9		122	96	162		3025	573	247								土師器坏、SJ14-18
居立-12	H	Ⅲ	7	9		136	82	188		2807	479	104				64				土師器坏、SJ14-6
居立-13	H	Ⅲ	7	9		103	74	134		2617	458									土師器坏、SJ14-54
居立-14	I	Ⅲ	7	20		107	69			2736	361	375								土師器坏、SJ14-40
居立-15	I	Ⅲ	7	20		129	90			3105	806	198								土師器坏、SJ14-64
居立-16	I	Ⅲ	7	20		120	83			2900	488	124								土師器坏、SJ14-66
居立-17	H	Ⅲ	7	9		126	83	167		3090	542	111								土師器坏、SJ14-63
居立-18	I	Ⅲ	7	20		119	74			3281	471	112								土師器坏、SJ14-36
居立-19	I	Ⅲ	7	20		117	79			3154	604	148								土師器坏、SJ14-59
居立-20	I	Ⅲ	7	20		121	83			3216	446	109								土師器坏、SJ14-60
居立-21	D	Ⅲ	4	16	210	116	82			3189	489	98								土玉、SJ3-38
居立-22	C	Ⅲ	1	16	194	112	85			3315	333									土玉、SJ3-39
居立-23	H	Ⅲ	7	9		137	105	209		2989	657	130								土玉、SJ3-40
居立-24	B	Ⅲ	1	15	134	88	160			2634	455	153			96	102				支脚、SJ3-26
居立-25	I	Ⅲ	7	20		82	77			1845	333	172								土錘、SJ14-95
居立-26	G	Ⅲ	6	20		114	165			1767	486	259								土錘、SJ14-94
居立-27	E	Ⅲ	5	20			120			2169	601									土錘、SJ14-93
居立-28	E	Ⅲ	5	20			224			1922	628									土錘、SJ14-92
居立-29	B	Ⅲ	1	15	164	116	144			1600	387	136								土錘、SJ14-96
居立-30	I	Ⅲ	7	20		128	85			3012	451									土玉、SJ14-98
居立-31	J	Ⅲ	8	8		120		149		2009	310	82								土師器、比企型坏
居立-32	J	Ⅲ	8	8		141		189		2177	316	116								土師器、比企型坏
居立-33	P	Ⅲ	14	20						2056	640	172								土師器、比企型坏
居立-34	H	Ⅲ	7	9		143	75	188		2104	368									土師器、比企型坏

第１図に示すように三角ダイヤグラムを１－13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo、Mi、Hb の三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイヤグラムはモンモリロナイト（Mont)、雲母類（Mica)、角閃石（Hb）のＸ線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント（%）で表示する。

モンモリロナイトは Mo/Mo＋Mi＋Hb＊100でパーセントとして求め、同様に Mi, Hb も計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の１～４は Mo, Mi, Hb の３成分を含み、各辺は２成分、各頂点は１成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第１図に示す通りである。

２）Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム

第２図に示すように菱形ダイヤグラムを１～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。記載不能は次の条件でおこる、モンモリロナイト（Mont)、雲母類（Mica)、角閃石（Hb)、緑泥石（Ch）のうち、ａ）３成分以上含まれない、ｂ）Mont, ch の２成分が含まれない、ｃ）Mi, Hb の２成分が含まれないの３例がある。

菱形ダイヤグラムは Mont-Ch, Mica-Hb の組合せを表示するものである。

Mont-Ch, Mica-Hb のそれぞれのＸ線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mo/Mo＋Ch＊100と計算し、Mi, Hb, Ch も各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイヤグラム内にある１～７の領域では Mo, Mi, Hb, Ch の４成分を含み、各辺は Mo, Mi, Hb, Ch のうち３成分、各頂点は２成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は第２図に示す通りである。

２－２　焼成ランク

焼成ランクの区分はＸ線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト（Mullite）は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト（Cristobalite）はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、Ｘ線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをⅠ～Ⅴの５段階に区分した。

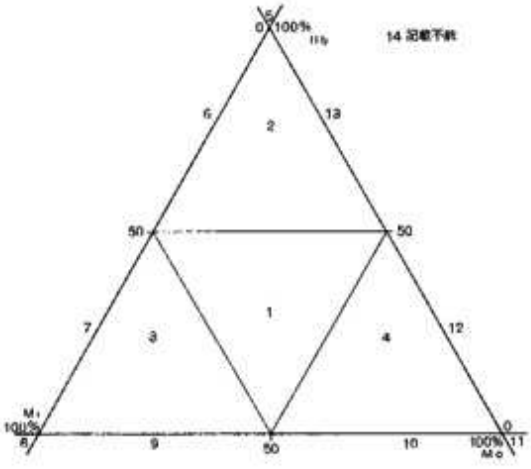
ａ）焼成ランクⅠ：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。

ｂ）焼成ランクⅡ：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。

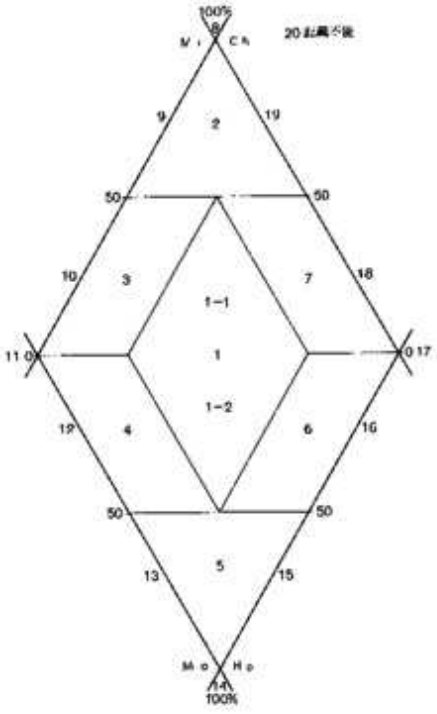
ｃ）焼成ランクⅢ：ガラスのなかにクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。

ｄ）焼成ランクⅣ：ガラスのみが生成し、原土（素地土）の組織をかなり残してる。ガラスは微小な葉状を呈する。

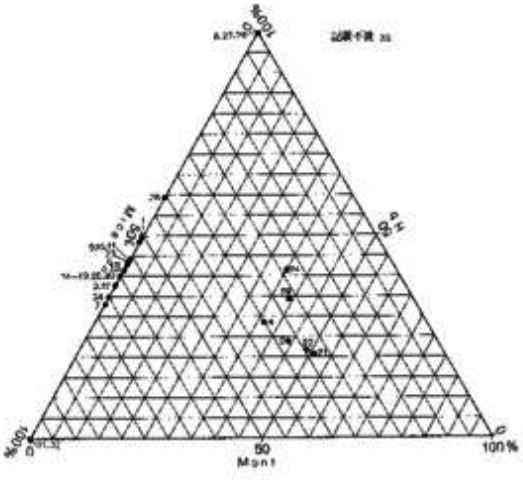
第1図　三角ダイヤグラム位置分類図



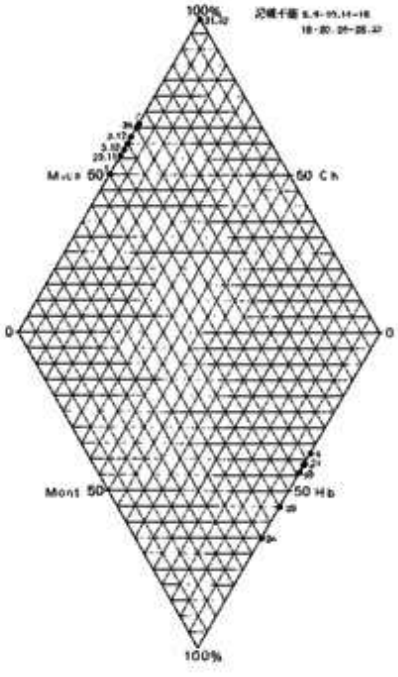
第2図　変形ダイヤグラム位置分類図



第3図　Mo－Mi－Hb 三角ダイヤグラム



第4図　Mo－Ch, Mi－Hb 菱形ダイヤグラム



e）焼成ランクⅤ：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のⅠ～Ⅴの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

3　X線回折試験結果

3－1　タイプ分類

今回のX線回折試験による分析は第1表胎土性状表に示すように、34個で、遺跡より出土した土師器坏、土玉、土錘、支脚である。

第1表の土器と既に分析済みの周辺の関連する遺跡の土器を対象としてタイプ分類を行った。その結果、これらはA～Pの15タイプに分類された。

居立遺跡の土器と土玉、土錘、支脚はB、C、D、E、G、H、I、J、Pの9タイプに分類された。

Bタイプ：Mont, Mica, Hbの3成分を含み、Ch 1成分に欠ける。24は支脚、29は土錘。

Cタイプ：Mont, Mica, Hbの3成分を含み、Ch 1成分に欠ける。組成的にはBタイプと類似するが検出強度が異なる為に位置分類が異なる。2と4は土師器坏、22は土玉。

Dタイプ：Mont, Mica, Hbの3成分を含み、Ch 1成分に欠ける。21は土玉。

Eタイプ：Hb 1成分を含み、Mont, Mica, Hbの3成分に欠ける。8は土師器坏、27と28は土錘。

Gタイプ：Mica, Hbの2成分を含み、Mona, Chの2成分に欠ける。26は土錘。

Hタイプ：Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。組成的にはEタイプと類似するが強度が異なる。居立遺跡の土師器坏が集中するタイプで、8個が該当する。23の土玉と34の比企型坏が共存する。

Iタイプ：Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。組成的にはGタイプと類似するが強度が異なる。居立遺跡の土師器坏が集中するタイプで、25の土錘と30の土玉が共存する。

Jタイプ：Mica, Chの2成分を含み、Mont, Hbの2成分に欠ける。31と32は居立遺跡の比企型坏。

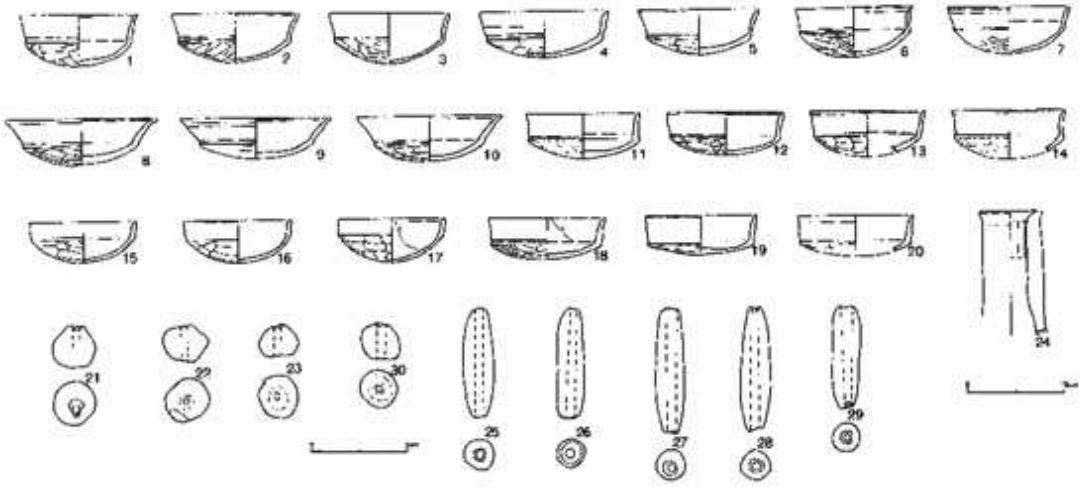
Pタイプ：Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。

主に、$nAl_2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot lH_2O$（アルミナゲル）で構成される。33は比企型坏。

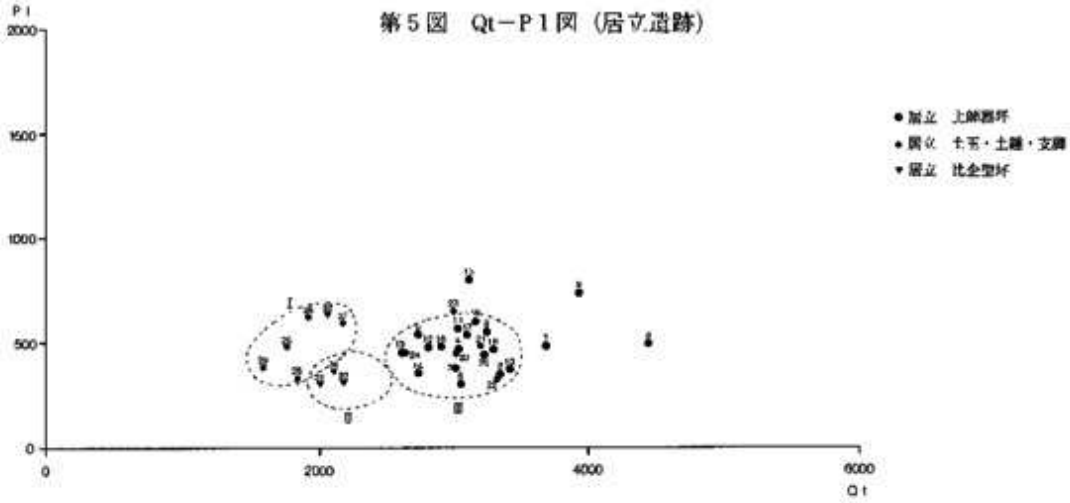
以上の結果から明らかな様に、居立遺跡の土器と土玉、土錘などは9タイプに分れるがそのほとんどはHタイプとIタイプである。この2タイプは城北、上敷免、新屋敷東、砂田前などの周辺遺跡の土器と組成的に同じもので、関連性が伺われた。

3－2　石英（Qt）－斜長石（Pl）の相関について

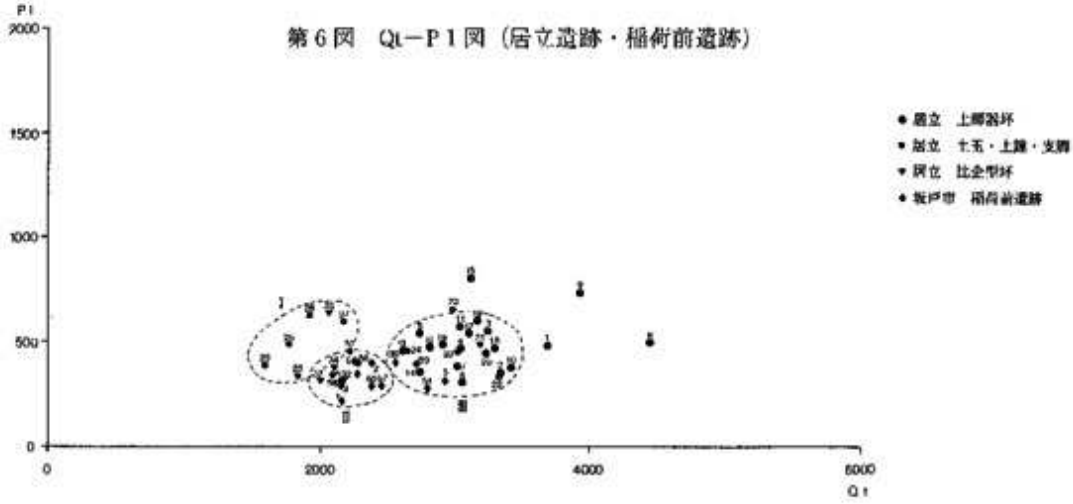
土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の



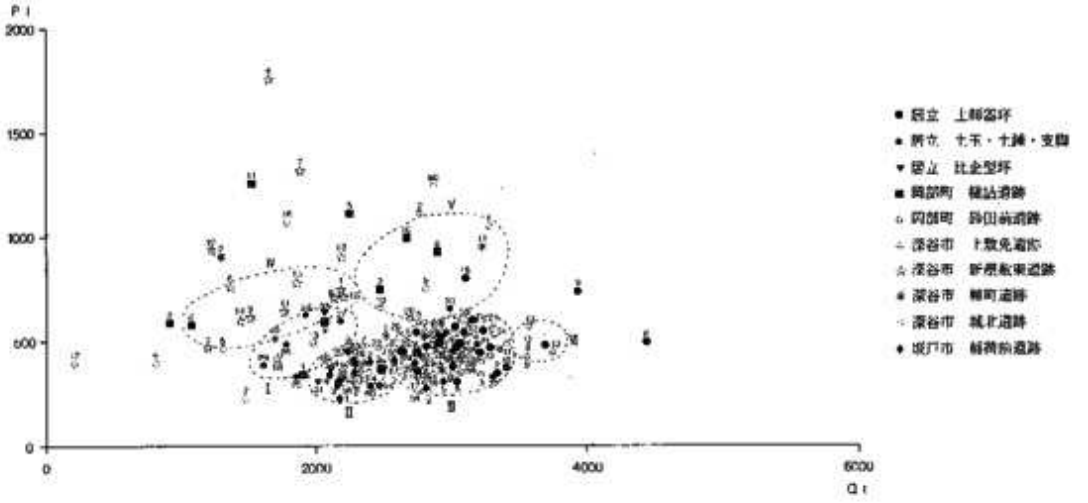
第5図　Qt－P1図（居立遺跡）



第6図　Qt－P1図（居立遺跡・稲荷前遺跡）



第7図　Qt－P1図（居立遺跡他）



集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各々の集団の有する固有の技術の一端と考えられる。

第5図 Qt－PI 図には居立遺跡の土器と土玉、土錘、支脚、第6図 Qt－PI 図には第5図に坂戸市稲荷前遺跡の土器を加えたもの、第7図 Qt－PI 図は居立遺跡の周辺で関連する遺跡の土器を加えたものである。

1）居立遺跡の土器と土玉、土錘などについて

第5図に示すようにⅠ－Ⅲの3グループに分類された。Ⅰグループには土錘が集中し、比企型坏1個が混在する。Ⅱグループには比企型坏が集中する。Ⅲグループには坏と土玉が集中し、支脚が混在する。

2）居立遺跡の土器と土玉、土錘等と稲荷前遺跡の土器との関連について

第6図に示すように稲荷前遺跡の土器はⅡグループとⅢグループに分れて分布する。Ⅱグループには比企型坏が集中し、居立・前遺跡の比企型坏と共存し、比企型坏グループを形成する。Ⅲグループには居立遺跡の鬼高の坏が集中し、このグループに稲荷前遺跡の坏が集中し、関連性が伺われる。

3）居立遺跡の土器と土玉、土錘等と周辺遺跡の土器との関連について

第7図に示すように土器等はⅠ～Ⅵの6グループとその他に分類された。

Ⅰグループ：居立遺跡の土錘が集中し、柳町、新屋敷東、樋詰等の土器が混在する。

Ⅱグループ：居立遺跡と稲荷前遺跡の比企型坏が集中する。城北、砂山前、新屋敷東などの坏が混

在する。

Ⅲグループ：居立遺跡の坏が集中し、稲荷前遺跡の坏も集中する。このグループには上敷免遺跡の坏、城北遺跡の坏も集中し、関連性が伺われる。

Ⅳグループ：新屋敷東遺跡の坏が集中する。斜長石の強度が高く異質である。

Ⅴグループ：砂田前と樋詰遺跡の坏で構成される。斜長石の強度が高く異質である。

Ⅴグループ：砂田前遺跡の坏が集中し、居立遺跡の坏が混在する。

以上1）～3）の結果から明らかな様に、各グループは遺跡として明瞭に分れているのが特徴である。

4　まとめ

1）居立遺跡の土器等と周辺の遺跡の土器の胎土を分析した結果、A～Pの15タイプに分類された。居立・前遺跡の土器はB、C、D、E、G、H、I、J、Pの9タイプに分類された。周辺遺跡で最も多く検出されたのはIとHタイプで、居立遺跡でもこれら2タイプが最も多く検出された。土器の胎土のタイプ分類の傾向は周辺遺跡とよく似ており、関連性が伺われる。

2）電子顕微鏡によるガラスの分析では土玉と土錘、及び、土器は共に中粒のガラスが生成し、焼成ランクはⅢと幾分低い。

3）石英（Qt）と斜長石（Pl）の相関では、土器は明瞭に分れてグループを形成する。居立遺跡とその周辺遺跡出土の坏はⅢグループに集中し、比企型の坏はⅡグループに集中するという具合にである。また、斜長石の強度の高い領域に新屋敷東の坏がⅣグループ、砂田前、樋詰の坏がⅤグループに集中する。また、居立遺跡の土玉と土錘は明瞭に分れ、土錘はⅠグループに、土玉はⅡグループに集中し、明らかに異なる。